沖縄県文化財調査報告書第53集

ぐすく

グスク分布調査報告（Ⅰ）
――沖縄本島及び周辺離島――

1983 年 3 月
沖 縄 県 教 育 委 員 会

糸満市南部のグスクの密集状況

序　　文

沖縄県内には、グスクと呼ばれる遺跡が数多く存在しています。グスクについては、沖縄の歴史を理解する上できわめて重要であり、且つ先人たちの遺した貴重な文化遺産の一つだといわれています。ところが最近における諸開発事業の進行等にも関連して、これらのグスクの保護が大きな問題となってきております。たとえば、グスクの多くが石灰岩丘陵上に立地することから骨材用の採石の憂き目にあったり、あるいは眺望のきく比較的高い場所に位置することから宅造によって破壊されたり、その問題の大きさがますます深刻になってきています。

これらの現状を踏まえ、当教育委員会では、文化庁の補助金を得て県内（今回は宮古・八重山等の先島地域を除いた）に所在するグスクの分布調査を実施してきましたが、今回その報告書を刊行して遺跡の保護に資することにしました。分布調査は当初、昭和52年度から継続４ヵ年事業として取り組み、昭和55年度に終了することになっていましたが、その間、県内埋蔵文化財緊急調査等の急増によって調査員の手不足を招き２ヵ年間事業を中断する結果となってしまいました。

このように当初の計画とは違って、厳しい状況の中での調査となりましたが、従来文献や口碑伝承などでまったく知ることの出来なかった新たなグスクの発見やグスクに伴う石垣遺構の発見、あるいはまた、遺跡の保存の上で必要な範囲の確認ができるなど大きな成果をあげることが出来ました。

最後に、報告書の刊行にあたり調査を担当された各調査員をはじめ、調査に協力された関係各位に対しまして、深く感謝の意を表します。

本報告書が広く県民の方々に利用され、グスクの保存、活用、研究に役立てれば幸いです。

昭和58年３月

沖縄県教育委員会

教育長　　新　垣　雄　久

例　　言

1. 本書は沖縄県教育委員会が国庫補助事業として計画し、文化課が担当実施した県内グスク分布調査事業の調査報告書である。
2. 調査は昭和52年度から昭和57年度まで断続的に３次に亘って行われ、調査対象地域は沖縄本島及び周辺離島に限った。なお、先島地域については今後あらためて計画実施される予定である。
3. 本書に収録した「グスク」は文献および地域住民の間で伝わっているグスクについて場所の確認を行い、その概要と位置を記述した。なお、場所の確認ができなかったグスクについては、未確認のグスクとして第３表に一括してまとめてある。
4. 現在、グスクについては「グスク」、「グシク」二つの呼び方で使われているが、当教育委員会では「おもろさうし」等の文献の表記に従い「グスク」に統一して表記してある。
5. 各グスク名の呼称については方言名をカタカナにし、別称を「　」内に入れた。
6. グスクの中で文化財に指定されているものは「———城跡」とし、指定されてないグスクについては「———グスク」と表記した。
7. 各グスク概説の文末に㊂として参考文献を載せてある。
8. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院発行の200,000分の１地形図を使用したものである。
9. 文献一覧表については、総括的なもの、個別地域に関する文献、調査報告書類などを列挙し、グスクについてさらに深く研究される方々の便に資することにした。
10. グスクの実測図については、旧琉球政府文化財保護委員会の頃の図面は山里銀造氏、又吉真三氏、新城徳祐氏などが作成した図を使用し、その他浦添グスク、北谷グスク、八重瀬グスク、屋良グスクの実測図については当該教育委員会から提供してもらった。その他の実測図については県文化課の当真と上原が主として作成したものである。
11. グスク概説における原稿執筆者の分担は、第一章第３節の２のなかに列記してある。文責は各項の文末に記した。

    なお、編集は比嘉春美氏の協力を得て当真が行った。
12. 地図や実測図のトレースは東美代子、大城明子が行い、図版作成及び第四章の表作成については主として比嘉春美が行った。
13. グスク一覧表の番号と、グスク分布図の番号、及び文中のグスクの番号については符合している。
14. 本書が沖縄県内におけるグスクの保存、あるいは学術的側面からの性格の把握に一抹でも寄与できれば本調査の意義の評価とともに幸いに存じます。
15. 表紙題字は城間雨邨氏揮毫による。

本　文　目　次

序
第一章　はじめに……1
第１節　調査の経過……1
第２節　調査の方法……3
第３節　調査の体制および成果の記録……3
１．調査の体制……3
２．報告書の執筆分担……4
第二章　総　論……6
第三章　各　説……18
第１節　北部地区概説……18
１．伊平屋村……21
田名城跡、ヤヘーグスク
２．伊是名村……22
伊是名城跡、アマグスク
３．伊 江 村……24
伊江城跡
４．国 頭 村……24
アマングスク、奥間グスク
５．大宜味村……25
根謝銘グスク、喜如嘉グスク、津波グスク、石グスク
６．今帰仁村……27
内グスク、今帰仁城跡、シイナグスク、ハナグスク、ターラグスク、見物グスク、古宇利グスク
７．本 部 町……32
瀬底グスク、備瀬グスク、本部具志川森グスク、山川チヂグスク、陣グスク、アメラグスク、富盛グスク
８．名 護 市……34
屋我グスク、アマグスク、ウチグスク、大グスク、上グスク、真喜屋グスク、親グスク、親川グスク、デーグスク、前田グスク、名護グスク、上里グスク、嘉陽グスク
９．宜野座村……39
漢那グスク

10．金 武 町 ……40
金武グスク
11．恩 納 村……40
恩納グスク、イチグスク、山田グスク、ガヂャグスク、アンナーグスク
第２節　中部地区概説……44
1．読 谷 村……47
カナグスク、瀬名波グスク、トウヤマグスク、宇座グスク、マテージグスク、座喜味城跡、タカヤマグスク、イットカグスク、ヤクミーグスク、トマイグスク、ウフグスク、メーダグスク
2．嘉手納町……53
嘉手納グスク、屋良グスク、国直グスク
3．石 川 市……54
伊波城跡
4．具志川市……55
天願グスク、安慶名城跡、兼箇段グスク、具志川グスク、江洲グスク
喜屋武グスク、クーグスク
5．与那城村……60
伊計グスク、泊グスク、平安座東グスク、平安座西グスク、ナチジングスク
6．勝 連 町……62
平安名上グスク、フニグスク、勝連城跡、浜グスク、比嘉グスク、クボウグスク、新川グスク
7．沖 縄 市……67
知花グスク、越来グスク、仲宗根グスク、インジングスク、アマグスク
8．北 谷 町……70
北谷グスク、イチグスク
9．宜野湾市……72
喜友名グスク、我如古グスク、黄金森グスク、嘉数グスク
10．北中城村……74
ヒニグスク、安谷屋グスク、大城グスク、マーシリグスク
11．中 城 村……77
中城城跡、台グスク、新垣グスク
12．西 原 町……80
イシグスク、棚原グスク、幸地グスク、津喜武多グスク、我謝遺跡

13. 浦 添 市……83
浦添城跡、伊祖城跡、親富祖グスク、内間グスク、沢岻グスク、ジングスク、コウグスク
第3節　南部地区概説……88
1. 那 覇 市……91
首里城跡、クンダグスク、石田グスク、三重グスク、屋良座森グスク、御物グスク、天久グスク、具志グスク、小禄グスク、硫黄グスク、天妃グスク、サキハラグスク
2. 豊見城村……98
豊見城グスク、瀬長グスク、長嶺グスク、平良グスク、保栄茂グスク、石原グスク、渡橋名グスク、ユダマグスク
3. 南風原町……102
ウチミグスク、仲間グスク
4. 東風平町……103
八重瀬グスク、世名城グスク、テミグラグスク、ジリグスク
5. 大 里 村……108
大城グスク、大里城跡、ミーグスク、稲福遺跡
6. 佐 敷 町……111
佐敷グスク、屋比久グスク
7. 知 念 村……113
知名グスク、ヰナグナーワンダー遺跡、安座真グスク、寒水グスク、古間グスク、ウフグスク、志喜屋グスク、知念城跡、テミィグスク
8. 玉 城 村……120
垣花城跡、ミントン城跡、仲栄真グスク、玉城城跡、糸数城跡、根石グスク、船越グスク、大城グスク
9. 具志頭村……126
具志頭上グスク、多々名グスク、具志頭グスク、ミドリグスク、新城グスク
10. 糸 満 市……130
武富グスク、阿波根グスク、賀数グスク、潮平グスク、大城森グスク、南山城跡、与座グスク、上座グスク、奥間グスク、兼城グスク、照屋グスク、国吉グスク、真栄里グスク、フェンサグスク、伊敷グスク、チチャマグスク、当間グスク、喜屋武古グスク、具志川城跡、カタハラグスク、東辺名グスク、山城グスク、上里グスク、佐慶グスク、糸洲グスク、波平グスク、石原グスク、米須グスク、ガーラグスク、オ

ドサトグスク、摩文仁グスク、真壁グスク、宇江城グスク、新垣グスク、真栄平グスク、ブリ原グスク、仲間グスク、チングスク、安里グスク
11．座間味村……153
メーグスク、シルグスク、グスク山
12．渡名喜村……154
スンジャグスク、アマグスク、里遺跡
13．具志川村……157
具志川城跡、伊敷索城跡、マカイグスク、クィングヮグスク
14．仲 里 村……160
宇江城城跡、登武那覇城跡、久根グスク、ウニシグスク、塩原城跡、与那嶺グスク、天宮グスク、ミンチャブナーグスク、小グスク
15．粟 国 村……167
八重川グスク
第四章　古文献にみるグスク……169
第1節　『おもろさうし』のなかの「———ぐすく」「———城」……169
第2節　『琉球国由来記』のなかの「———城」……171
〔付録〕
グスク時代の遺跡(「グスク」以外)……176
グスクに関する参考文献……182
索　　引……186

挿　図　目　次

第1図　北部地区グスク分布……19
第2図　田名城跡略図……21
第3図　ヤヘーグスク略図……22
第4図　伊是名城跡地籍図……23
第5図　根謝銘グスク付近図……25
第6図　今帰仁城跡地形図……28
第7図　今帰仁城跡志慶真門郭第2テラスの建物……29
第8図　屋我グスク付近図……34
第9図　親川グスク付近図……37
第10図　名護グスク付近図……38
第11図　山田グスク略測図……41
第12図　中部地区グスク分布……45
第13図　座喜味城跡実測図……48
第14図　座喜味城跡出土遺物……49
第15図　屋良グスク地形図……53
第16図　伊波城跡実測図……55
第17図　安慶名城跡実測図……56
第18図　勝連城跡地形図……63
第19図　浜グスク略図……65
第20図　比嘉グスク略図……66

第21図　クボウグスク略図……67
第22図　仲宗根グスク地形図……69
第23図　北谷グスク地形図……71
第24図　ヒニグスク概略図……74
第25図　安谷屋グスク実測図……75
第27図　中城城跡地形図……77
第27図　我謝遺跡……82
第28図　浦添城跡地形図……84
第29図　伊祖城跡実測図……85
第30図　南部地区グスク分布……89
第31図　首里城跡現況図……92
第32図　首里城跡配置図……92
第33図　屋良座森グスク実測図……94
第34図　御物グスク実測図……95
第35図　豊見城グスク地籍図……98
第36図　八重瀬グスク地形図……103
第37図　稲福遺跡地形図……110
第38図　佐敷グスク地形図……111
第39図　ヰナグナーワンダー実測図……114
第40図　安座真グスク実測図……115
第41図　志喜屋グスク実測図……117
第42図　知念城跡実測図……118
第43図　垣花城跡実測図……120
第44図　仲栄真グスク略測図……121
第45図　玉城城跡実測図……122
第46図　糸数城跡地形図……124
第47図　船越グスク実測図……125
第48図　具志頭上グスク略測図……127
第49図　多々名グスク縄張図……127
第50図　南山城跡実測図……132
第51図　南山城跡現況図……132
第52図　兼城グスク実測図……135
第53図　フェンサグスク概況図……138
第54図　伊敷グスク略図……139
第55図　当間グスク略図……140
第56図　具志川城跡実測図……142
第57図　糸洲グスク実測図……145
第58図　石原グスク付近図……147
第59図　米須グスク実測図……148
第60図　シルグスク略測図……153
第61図　スンジャグスク実測図……155
第62図　具志川城跡実測図……157
第64図　伊敷索城跡実測図……159
第64図　宇江城城跡実測図……161
第65図　ウニシグスク実測図……163
第66図　塩原城跡実測図……165
第67図　八重川グスク略測図……167

図　版　目　次

PL. 1　伊是名城跡遠景……23
PL. 2　津波グスク近景……26
PL. 3　今帰仁城跡の遺物……30
PL. 4　古宇利グスク近景……31
PL. 5　備瀬グスク近景……32
PL. 6　恩納グスク近景……40
PL. 7　山田グスク近景……42
PL. 8　瀬名波グスク近景……47
PL. 9　イットカグスク遠景……51
PL. 10　メーダグスク近景……52
PL. 11　安慶名城跡の石垣……56
PL. 12　兼箇段グスク近景……57
PL. 13　具志川グスク遠景……58
PL. 14　江洲グスク近景……58
PL. 15　伊計グスク近景……60
PL. 16　泊グスクの近景……60
PL. 17　ナチジングスク近景……62
PL. 18　平安名上グスク近景……62
PL. 19　勝連城跡の石垣……64
PL. 20　知花グスク近景……68

PL. 21　北谷グスク近景……71
PL. 22　北谷グスク石垣……71
PL. 23　嘉数グスク近景……73
PL. 24　マーシリグスク近景……76
PL. 25　中城城跡の石垣……78
PL. 26　台グスクの近景……79
PL. 27　棚原グスク近景……80
PL. 28　津喜武多グスク近景……81
PL. 29　我謝遺跡近景……82
PL. 30　我謝遺跡出土遺物……82
PL. 31　沢岻グスク遠景……86
PL. 32　小禄グスク近景……97
PL. 33　長嶺グスク遠景……99
PL. 34　保栄茂グスク近景……100
PL. 35　渡橋名グスク近景……101
PL. 36　八重瀬グスク遠景……104
PL. 37　八重瀬グスク遺構……104
PL. 38　テミィグラグスク近景……106
PL. 39　大城グスク近景……108
PL. 40　稲福遺跡の遺構……109
PL. 41　佐敷グスク出土遺物……112
PL. 42　知名グスク遠景……113
PL. 43　ヰナグナーワンダー遺跡石垣…113
PL. 44　安座真グスク近景……115
PL. 45　古間グスク近景……116
PL. 46　志喜屋グスク……117
PL. 47　糸数城跡城門跡……123
PL. 48　ミドリグスク近景……129
PL. 49　新城グスク近景……129
PL. 50　与座グスク近景……133
PL. 51　新垣グスク内……151
PL. 52　チングスク内……152
PL. 53　シルグスク近景……153
PL. 54　グスク山内部……154
PL. 55　スンジャグスク石垣……154
PL. 56　里遺跡遺構……156
PL. 57　里遺跡出土遺物……156
PL. 58　宇江城跡遠景……161
PL. 59　登武那覇城跡近景……162
PL. 60　塩原城跡石垣……164

表　目　次

第1表　グスクの標高分布　……9
第2表　グスクの調査年譜……10
第3表　沖縄本島及び周辺離島グスク一覧·12
第4表　『おもろさうし』の中のグスク一覧169
第5表　『琉球国由来記』の中のグスク一覧172
第6表　グスク時代の遺跡一覧……176

第一章　はじめに

第１節　調査の経過

昭和43年度、当時の琉球政府文化財保護委員会の監修による『全国遺跡地図（沖縄）』には67箇所（そのうち15箇所は文化財指定を受けている）のグスクが登載されている。昭和50年から昭和51年にかけて復帰後はじめて沖縄県内の大がかりな遺跡分布調査が実施され、その時点で沖縄本島とその周辺離島に分布するグスクの数は122箇所に増加した。しかし、従来からいわれているグスクの数は200箇所とも300箇所ともいわれており、今日までその明確な数は不明のままとなっている。

グスクと呼ばれる遺跡は北は奄美大島から南は宮古・八重山の先島に至るまで広く分布し、その性格や機能・内容等をめぐって現在学問上の大きな論争が展開されている。はたして、グスクとは何なのか。この論争は今や沖縄の歴史研究の中でも一大焦点の観を呈してきているが、グスク研究の最も基本とする現地踏査が思いのほか進展せず、そのことが研究の大きな障害となりつつある。

このような情勢の中で、復帰後諸開発が進むにつれ、おおむね見晴らしのよい石灰岩丘陵上に位置するこれらのグスクが破壊・消滅の危機に瀕するという新たな状況がおこってきた。それで何としても県内に所在するグスクの実態把握と同時にその分布図の作成作業が急務となってきたわけである。

かくして県文化課では、昭和52年度から４カ年計画で県内グスク分布調査を実施することになった。調査は沖縄県内を北部地区、中部地区、南部地区の３地区に分け、各１年間づつ北部地区から南の方に順に実施していくことになった。

第１年次の昭和52年度は、北部地区のグスク分布調査が取り組まれることになり文化庁から委保71号で国庫補助金の交付決定通知を受け、早速調査会議が開かれ本格的な分布調査が開始された。第２年次は昭和53年度予算で中部地区の調査が第１年次の要領で実施された。ところが昭和54年度と55年度は、諸開発に伴う埋蔵文化財の緊急調査が急増して、調査員の手不足を招き調査を中断せざるを得なくなった。その間、今まで遺跡が皆無とされていたジャーガル土壌地帯にもグスク時代の遺跡が発見され始め、この地域における調査の必要性が痛感されてきた。

第３年次は、昭和56年度南部地区の調査が再開され、いよいよ昭和57年度に至ってこれまで調査してきた３地区の成果をまとめて報告書を刊行することになった。このグスク分布調査はこれで完結したわけではない。今後は先島地区の調査が残されており、またこの成果もいずれ報告書として刊行されていくはずである。

沖縄県　　グスク分布調査カード　　No.

名　称		古絵図	
所在地			
築城者及び居城者		出土遺物	
築城年代及び居城期間			
占地状態			
形　状			
遺　構		文献資料	
面　積	国、公有地 ㎡　寺社有地 ㎡ 民有地 ㎡　その他 ㎡ 合　計 ㎡		
土地利用状況		伝説・口承等	
指　定	年　月　日		
破壊の程度			
測量図			

位置図（縮尺　：　）	写真
遺構略図	

第2節　調査の方法

この調査はまず、グスクについての所在確認を行い、それを記録することが第一の目的であった。そのため文献上に記載されたグスクについて、個々に現地踏査を実施しながら所在を確認し、あわせて新発見のグスクを追加していく方法を採った。調査の対象は、文献および地元の人びととの間でグスクと呼ばれているものは全て含むものとし、その他に例えば渡名喜島の里遺跡のような現在地元ではグスクと呼ばれてはいないが、高い所に位置していてグスク時代遺物が出土するグスク様の遺跡をもここに含めることにした。なお、この分布調査を実施する過程でグスク以外の同時代遺跡を多数発見することが出来た。この種の遺跡は、おおむねグスクが立地する小高い丘や丘陵の中腹から麓およびグスクの周辺に形成されており、これらの遺跡がグスクと対置される集落跡とも考えられることから注意を喚起する意味で本報告書ではこの遺跡を一覧表にまとめて研究の便に資することにした。

具体的な調査は、文化課の6人の史跡、埋蔵担当専門員が調査員となり、それに学校の先生をはじめ考古学研究者等15人の委嘱調査員に依頼して実施していった。

調査方法と調査カードについては次の通りである。

調査にあたっては現地踏査を主体とし、グスクの表面観察や遺物の表面採集等の考古学的な概観調査を行うと共に、グスクの所在地についてはきちんと確認した上で25,000分の1地形図にその地点を記入した。さらにグスクに関するオモロを拾いあげ、それをカード化することにした。

調査事項は、グスクの所在地、地目、指定の有無、立地、範囲、形態、遺構、古文献、口碑伝承、出土遺物、保存状況などであり、その他出来る限りグスクの簡易測量を実施し不可能な場合は見取図、略図などを作成することにした。また写真撮影はグスクの遠景や近景、あるいは特徴ある部分などを写し、保存することにした。なお、これらの成果は沖縄県教育委員会文化課で保管してある。

第3節　調査の体制および成果の記録

1．調査の体制

調査員

県文化課職員（史跡埋蔵文化財担当専門員）

安里嗣淳　上原　静　大城　慧　岸本義彦　金武正紀　当真嗣一

委嘱調査員

座間味　政　光（石川高等学校教諭）
嵩　元　政　秀（興南高等学校教諭）
宮　城　長　信（大平高等学校教諭）
吉　浜　　忍（知念高等学校教諭）

知　念　　勇（沖縄県立博物館）
長　嶺　　操（興南高等学校教諭）
玉城朝健（文化課嘱託調査員）
比嘉春美（　　〃　　）
大城秀子（　　〃　　）
島袋　　洋（　　〃　　）
金城亀信（　　〃　　）
宮城利旭（沖縄市教育委員会）
湖城　　清（糸満市教育委員会非常勤）
知　念　　聰（文化財保護指導員）
山　田　　正（佐賀県鳥栖市教育委員会）
盛　本　　勲（名古屋大学考古学研究生）　（五十音順）

2．報告書の執筆分担

本書のグスク分布概説は、次の通り分担して執筆した。

安里　嗣淳　アマグスク、伊是名城跡、伊江城跡、勝連城跡、知花グスク、越来グスク、仲宗根グスク、座喜味城跡、中城城跡、首里城跡、南山城跡、具志川城跡（糸満）

上原　　静　伊計グスク、伊祖城跡、仲間グスク、ジリグスク、石原グスク(豊見城)古間グスク、寒水グスク、垣花グスク、大城グスク、根石グスク、船越グスク、フェンサグスク、八重川グスク、宇江城グスク

大城　　慧　喜友名グスク、我如古グスク、黄金森グスク、嘉数グスク、我謝遺跡、稲福遺跡、大里城跡、三重グスク、大城グスク、玉城城跡

大城　秀子　ミントングスク

岸本　義彦　田名グスク、ヤヘーグスク、前田グスク、親富祖グスク、内間グスク、沢岻グスク、ジングスク、メーグスク、シルグスク、皇グスク

金城　亀信　兼城グスク、照屋グスク、与座グスク、武富グスク、カタハラグスク、糸洲グスク、安里グスク、大城森グスク、伊敷グスク、新垣グスク、チングスク、オドサトグスク、潮平グスク、上座グスク、波平グスク、当間グスク、奥間グスク

金武　正紀　内グスク、シイナグスク、ハナグスク、今帰仁城跡、屋我グスク、アマグスク、大グスク、上グスク、親グスク、親川グスク(羽地)、名護グスク、上里グスク、泊グスク

湖城　　清　米須グスク、ガーラグスク、佐慶グスク、上里グスク、真栄平グスク、

座間味政光　伊波城跡、喜屋武グスク、天願グスク、具志川グスク(具志川)、安慶名城跡、江洲グスク、安谷屋グスク、大城グスク

島袋　　洋　嘉手納グスク、マテージグスク、イットカグスク、ヤクミーグスク、国直グスク、カナグスク、仲間グスク、真壁グスク、ブリ原グスク、チチャマグスク、摩文仁グスク

嵩元　政秀　ヒニグスク、新垣グスク、フニグスク、平安名(上)グスク、ナチヂングク（ヤブチ）、平安座西グスク、平安座東グスク

玉城　朝健　瀬長グスク、国吉グスク、真栄里グスク、賀数グスク、阿波根グスク、喜屋武古グスク

知念　　勇　古宇利グスク、山川チヂグスク、ジングスク、三重グスク

当真　嗣一　イシグスク(大宜味)、ターラグスク、ミームングスク、瀬底グスク、備瀬グスク、本部具志川森グスク、ウチグスク、真喜屋グスク、デーグスク、嘉陽上グスク、漢那グスク、金武グスク、恩納グスク、イチグスク、屋良グスク、兼箇段グスク、喜屋武グスク、浜グスク、比嘉グスク、イシグスク（西原）、棚原グスク、幸地グスク、津喜武多グスク、我謝遺跡、浦添城跡、腓城、石田グスク、屋良座森グスク、御物グスク、硫黄グスク、天妃グスク、サキハラグスク、長嶺グスク、平良グスク、ユダマグスク、ウチミグスク、八重瀬グスク、佐敷グスク、ヰナグナーワンダー遺跡、安座間グスク、志喜屋グスク、ティミグスク、仲栄真グスク、糸数城跡、具志頭上グスク、多々名グスク、具志頭グスク、新城グスク、東辺名グスク、山城グスク、グスク山、スンジャグスク、アマグスク（渡名喜）、里遺跡、具志川城跡（久米島）、久根グスク、ウニシグスク、塩原城跡

中村　昌尚　小グスク、伊敷索城跡、マカイグスク、宇江城城跡、登武那覇城跡、クィングワグスク、与那嶺グスク、天宮グスク、ミンチャブナーグスク

中村　　愿　イチグスク

比嘉　春美　富盛グスク、アメラグスク、クボウグスク、新川グスク、台グスク、小禄グスク、具志グスク、保栄茂グスク、渡橋名グスク、テミグラグスク屋比久グスク、知名グスク、知念城跡、石原グスク（糸満）、世名城グスク、豊見城グスク

宮城　長信　アマングスク、奥間グスク、根謝銘グスク、喜如嘉グスク、津波グスク天久グスク

宮城　利旭　インジングスク、アマグスク、メーダグスク、ウフグスク、宇座グスク瀬名波グスク、トウヤマグスク、アンナーグスク、タカヤマグスク、マシリグスク、トマイグスク

なお、全体の総括・編集は比嘉春美氏の協力を得て当真嗣一が行った。

第二章　総　　論

近年、中世城館跡の分布調査や発掘調査などの考古学的調査が全国的に増え、その研究の進展も著しい。日本本土の中世城館跡に比定できる遺跡としてわが南島では、グスクの存在が広く知られており、この全国的な中世城館跡調査の気運に乗じて進められてきたのが今回のグスク分布調査である。

北は奄美大島から南は与那国島に至るまで広く南島に分布するこれらのグスクに対し、沖縄学の先人たちは「城」の字をあて按司と呼ばれる支配者の居城として理解してきた（注１）。ところが最近、グスクは「城」にあらずという疑問が提起されグスクをめぐる論議が俄に活発化してきた。その代表的なものとして一方では仲松弥秀氏の「聖域説」（注２）があり、他方では嵩元政秀氏の「集落説」（注３）をあげることができる。この両説は、これまでの「沖縄の城は按司や世の主の居城」だとしてほぼ定説化していたグスクに大胆な問題提起を行う結果となり、現在この二説を軸にして論争が展開されている。

ところでグスク＝城だと固く信じられていたのが、何故今になって否定的な意見が出されるようになったのか。その理由は帰するところ次の２点にしぼられる。その一つは、グスクの地形上の立地面からの疑問であり、それはグスクの地理学的観察結果によるものであった。二つには、考古学的な調査結果から導き出された結論であり、遺跡・遺物を通じて解釈された考え方からである。さて、われわれは今この論争に深く立ち入る余裕は与えられていないが、たしかに現状のグスクそのものは現象的に見る限り、種々異った視点からのアプローチが可能な遺跡であり、それゆえにこそ現在各人各様のグスク論がうまれてきているのである。

今回の調査で確認されたグスクの数は、総数223件である。その内訳は北部地区45件、中部地区　65件、南部地区113件となっていて、北部地区に薄く、南部地区に厚く分布している。グスクが立地する地形はすべてが一様でなく、１）石灰岩台地の先端部（多々名グスク、浦添城跡、伊祖城跡など）、２）独立丘（勝連城跡、安慶名城跡、フェンサグスクなど）、３）崖に面する台地の一部に半円形状に石垣を周らしたもの（サキグスク、スンジャグスクなど）、４）尾根続きの一峰を利用したもの（上里グスク、石原グスクなど）、５）一側が断崖に面し他方は緩傾斜を示して微高地となっているもの（米須グスク、今帰仁城跡など）、６）海に突出する断崖の上に築かれたもの（久米島具志川城跡、具志川市具志川グスクなど）、７）満潮時になると陸と分断される孤島に築かれたもの（伊平屋のヤヘーグスク、座間味村のシルグスクなど）などの形式がある。

これらのグスクは、城郭の立面的地形を標準とした分類法（地取三段）に従って区分すると平城、山城、平山城に分類されるのであるが、新城徳祐氏はこれに海城

を加えて四分類を試みている（注４）。次にグスクの規模であるが、大は中城城跡のごとき10万㎡以上もあるグスクから小は僅か10数㎡のグスクまであり、千差万別となっているのである。そこでいえることはどんなに小さなグスクでも１～２軒の建物が建つほどの平場が人為的に築成されているということであろう。例えば仲松弥秀氏が面積の小さいグスクの例としてあげてある恩納グスク（恩納村）や新川グスク(津堅島)にしてもやはりグスク内に人為的な平場を認めることが出来るのである。

ところで沖縄のグスクは、日本本土の中世城館跡と異なり土塁、濠、堀などの構築技術が見られず、もっぱら天険の要害の地を利用し、必要とあらば石垣を積み周らすというふうに築かれているというのが通常である。これらのグスクについて鳥羽正雄氏は、用途上の種別によって国主の城、按司の城、国主もしくは按司の支城、海防の城、貯蔵所の城の五種類に分け、これらの城は「本土の城に比すれば、武家時代における地方豪族の居城およびその支城に相当するものが大部分を占め、他にわずかに海防の砲台が存するのである」（注５）といっているがまさに窺った見解として注意しておきたい。

次にグスクの成立時期や時代概観について述べよう。高宮廣衛氏は、かつてグスクから出土する遺物のコンビネーションによって前期、中期、後期として城時代の編年を試みたことがある。この編年は、按司の出現と城の起源が一致するかどうかは不明だとしながらも、按司発生の母胎は少なくとも貝塚時代にさかのぼらせる必要があろう（注６）とする見解をベースにまとめられたものであった。また筆者はグスク時代を、成立期（初期）、発展期、成熟期、衰退期（終末期）の四期に区分し、グスクの生成発展過程を歴史的視座に入れて考えたことがある（注７）。成立期は按司あるいはアサが発生した時期でフェンサ城貝塚の第Ⅲ層の時期とした。発展期はフェンサ城貝塚第Ⅱ層期で、海外貿易がかなり活発化する時期として把え、グスクのほとんどがこの時期に築かれたと考えた。そしてこの時期を遺物の面からは、13世紀頃と考えられるとしたのである。成熟期は海外貿易が盛んに行われた14世紀から15世紀前半頃で、衰退期は沖縄全域が統一され、首里が中心となる15世紀後半から16世紀前半頃と考えた（注７）。

鳥羽正雄氏は沖縄史の時期区分を沖縄城郭史の上から

第一期　三山分立以前（天孫氏系統、舜天系統、英祖系統前期）（上古～鎌倉時代中期）

第二期　三山分立期（英祖系統後期、察度系統、尚思紹系統前期（鎌倉時代末期～室町時代初期）

第三期　中山一統前期（尚思紹系統中期と後期、尚円系統前期)(室町時代中期）

第四期　中山一統後期（尚円系統中期と後期）（室町時代後期～明治初期）

に分けている。

これまでのグスクの発掘成果によると初期のグスクから出土する輸入陶磁器のほとんどが13～14世紀に集中する傾向を示していることから考えると、グスク成立の時期を13世紀頃かあるいはそれより古くみてもせいぜい12世紀頃までにおいた方がより妥当な線のように思われる。

第2表にまとめてあるのは、これまで実施されたグスク調査の一覧表である。この一覧表からもわかるとおり、グスク研究の最も基本となる現地踏査についてはごく限られた研究者を中心に進められてきているというのが現状であり、グスクの本格的な調査研究はまだ緒についたばかりという状況である。

最後に、今後のグスク調査における基本的課題について若干述べておきたい。

グスクの調査は、グスクの考古学的調査はもちろんのことグスク平面図の作成、石垣の形態および技術論的復原、あるいはグスク立地の地形的復原と軍事学的な検討を行い、その中であらためて『おもろさうし』だとか、『琉球國由来記』『琉球國旧記』『家譜』などの古文書類による研究を合体させ、両者を歩みよらせる研究方法が必要だと考えるのである。このような研究を志向するがゆえに今回の報告書では、『おもろさうし』に出てくるグスクや『琉球國由来記』にでてくるグスクを抽出し研究の便に資することにした。なお、『おもろさうし』は、外間守善・西郷信綱校注「おもろさうし」『日本思想大系18』岩波書店刊により、『琉球國由来記』は、伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編の『琉球史料叢書二』井上書房刊によった。

（当　真　嗣　一）

注1　比嘉春潮『沖縄の歴史』沖縄タイムス　1959年4月

注2　仲松弥秀「グシク考」『沖縄文化』5　沖縄文化協会　昭和36年

注3　嵩元政秀「『グシク』についての試論」『琉大史学』創刊号　昭和44年

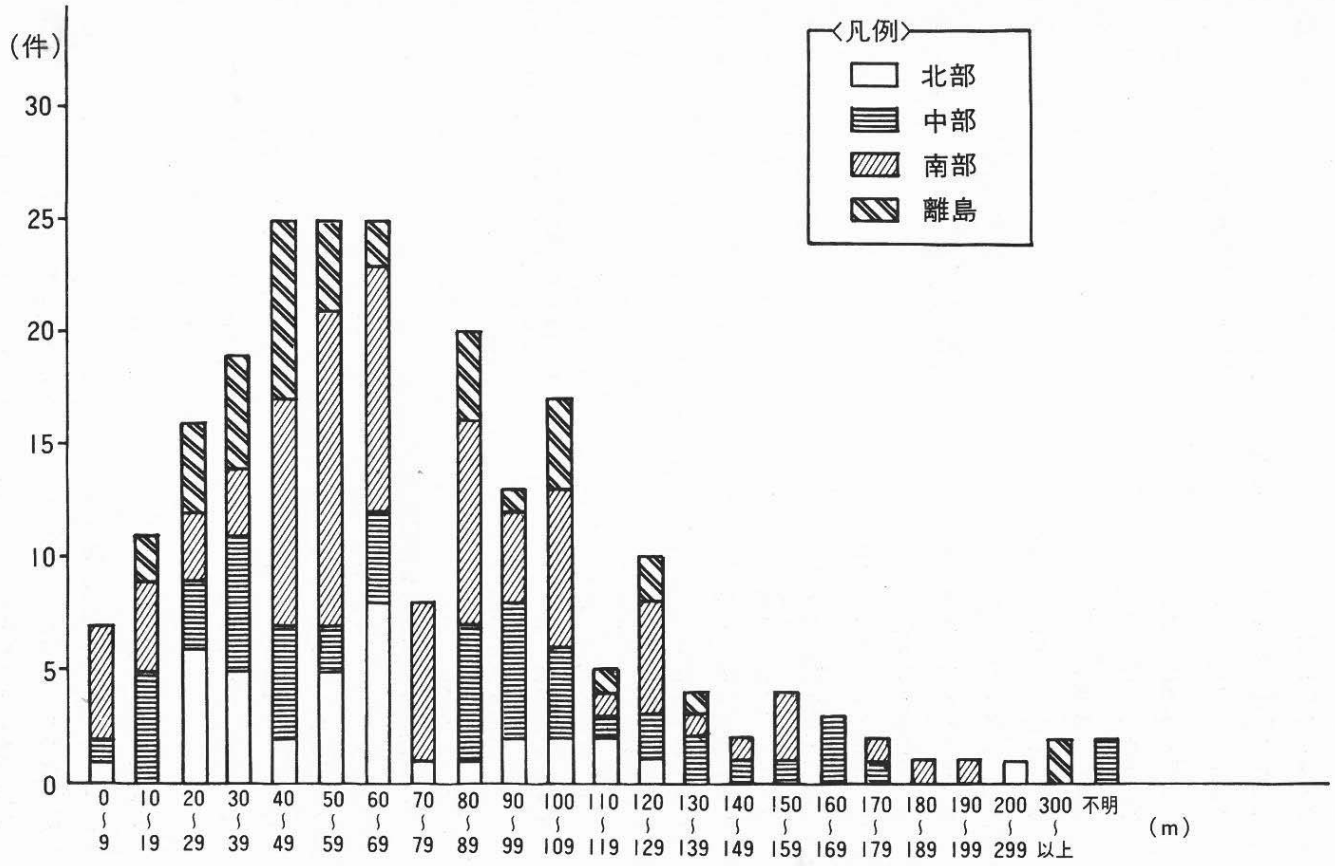
注4　鳥羽正雄『日本城郭史の再検討』名著出版　昭和55年

注5　注4に同じ

注6　高宮廣衛「沖縄」『日本考古学』古墳時代上　河出書房　昭和41年

注7　当真嗣一「沖縄のグシク」『考古資料の見方《遺跡編》』地方史マニュアル5　柏書房　昭和54年

注8　注4に同じ



第１表　沖縄本島及び周辺離島所在グスクの標高分布

第２表　グスク及びグスク時代の遺跡調査年譜

年　　月	調査遺跡名	調　査　者
1924年	首里城内の発掘調査	伊藤忠太　　鎌倉芳太郎
1936年	浦添城・首里城・照屋城・南山城の発掘調査	〃　　〃
1959年８月	糸満市具志川城の測量	琉球文化財保護委員会（新城徳祐、又吉真三、山里銀造）
〃　９月	知念村知念城跡の測量	〃　　〃
〃　〃月	糸満市南山城跡の測量	〃　　〃
〃　〃月	玉城村糸数城跡の測量	〃　　〃
〃　10月	今帰仁村今帰仁城跡の測量	〃　　〃
1960年	沖縄の古瓦について調査	大川　清
〃　１月	玉城村玉城城跡の測量	琉球文化財保護委員会（新城徳祐、又吉真三、山里銀造）
〃　１月	石川市伊波城跡の測量	〃　　〃
〃　２月	具志川市安ヶ名城跡の測量	〃　　〃
〃　２月	浦添市・伊祖城跡の測量	〃　　〃
〃　２月	糸満市米須城跡の測量	〃　　〃
〃　２月	玉城村垣花城跡の測量	〃　　〃
〃　５月	久米島伊敷索城跡の測量	〃　　〃
〃　５月	久米島具志川城跡の調査	〃　　〃
〃	屋部川川口古瓦出土地の調査	大川　清
1961年８月	中城村中城城跡の測量	琉球文化財保護委員会（新城徳祐、又吉真三、山里銀造）
1963年４月	久米島・塩原城跡の測量	〃　　〃
1964年５月	勝連町勝連城跡の測量	〃　　〃
〃	勝連城跡の発掘調査（第二次）	〃　　〃
〃	根謝銘グスクの発掘調査	宮城長信
〃	具志川市具志川城跡の発掘調査	高宮廣衛
1965～68年	勝連城跡の発掘調査（第三次）	琉球政府文化財保護委員会
1965年	ヒニグスクの発掘調査	嵩元政秀
1967年	フェンサグスク貝塚の発掘調査	琉球大学史学科
1968年	糸数城跡の発掘調査	安里　進
〃	平安座西グスクの発掘調査	友寄英一郎　　嵩元政秀
1969年	稲福遺跡の発掘調査（一次）	琉球大学考古学研究会
1970年	稲福遺跡Ｂ地点の発掘調査（二次）	琉球大学考古学研究会
〃	勝連城跡発掘調査（四次）	琉球政府文化財保護委員会
1971年	沢岻グスクの発掘調査	琉球政府文化財保護委員会

1971年	稲福上御願遺跡・A地点の発掘調査(三次)	沖縄考古学連合会	
〃	勝連村南風原古島遺跡の発掘調査	嵩　元　政　秀	嘉手苅　秀　子
〃	伊波後原遺跡の発掘調査	当　真　嗣　一	
1972年	新垣グスクの発掘調査	嵩　元　政　秀	嘉手苅　秀　子
1973年	座喜味城跡遺跡構調査	読谷村教育委員会	
1974年	座喜味城跡遺構調査	〃	
〃	稲福遺跡の試掘調査	琉球考古学研究会	
〃	勝連城跡管理策定	勝連町教育委員会	
1976年3月	糸数城跡の管理策定	玉城村教育委員会	
1977年3月	御物グスクの発掘調査	沖縄県教育委員会	
〃	里遺跡の発掘調査	渡名喜村教育委員会	
〃	今帰仁城跡管理策定	今帰仁村教育委員会	
1978年7月	八重瀬グスクの発掘調査	東風平村教育委員会	
〃	屋良グスクの発掘調査	嘉手納町教育委員会	
	座喜味城跡の遺構調査	読谷村教育委員会	
1979年7月	佐敷グスクの発掘調査	佐敷町教育委員会	
〃	座喜味城跡の遺構調査	読谷村教育委員会	
〃	久志貝塚・前田水田跡の試掘調査	名護市教育委員会	
1980年	安和貝塚の試掘調査	名護市教育委員会	
〃	今帰仁城跡の遺構調査(～82年)	今帰仁村教育委員会	
〃　7月	溝原貝塚の発掘調査調査	名護市教育委員会	
〃	インジングスクの試掘	沖縄市教育委員会	
1981年	我謝遺跡の発掘調査	西原町教育委員会	
〃	勝連城跡の遺構調査	勝連町教育委員会	
1982年6月	浦添城跡の発掘調査	浦添市教育委員会	
〃	中城城跡管理策定	中城教育委員会	

注　①　報告対象区である沖縄本島及び周辺離島にとどめた。

②　『文化財要覧』　1956年～1962年　琉球政府文化財保護委員会

③　当真嗣一「沖縄諸島の考古学研究」『琉球史学』第7号　1975年を参照した。

④　友寄英一郎　編『琉球考古学文献総目録・解題』東出版寧楽社　1977年　を参照した。

第3表　沖縄本島及び周辺離島グスク一覧

北　部　地　区

地図番号	グスク名	別名	所在地	備考	註
1	田名城跡		伊平屋村字田名	村指定	①
2	ヤヘーグスク		〃　〃		⑲
3	伊是名城跡		伊是名村字仲田	県指定	①
4	アマグスク		〃　字勢理客		①
5	伊江城跡		伊江村字東江上	県指定	①
6	アマングスク	辺土グスク	国頭村字辺土		㊹
7	奥間グスク	見里森グスク㊷	国頭村字奥間		①
8	根謝銘グスク	ウィグスク	大宜味村字謝名城	1964年発掘	①
9	喜如嘉グスク		〃　字喜如嘉		①
10	津波グスク		〃　字津波		①
11	石グスク		〃　〃		①
12	内グスク	玉グスク	今帰仁村字玉城		②
13	今帰仁城跡	北山グスク	〃　字今泊	国指定　環境整備実施中	③④⑤
14	シイナグスク		〃　字呉我山		㊷
15	ハナグスク	与那嶺グスク㉔	〃　字与那嶺		㊽
16	ターラグスク		〃　字今泊		⑲
17	ミームングスク		〃　〃		⑲
18	古宇利グスク	今帰仁グスク	〃　字古宇利		㊹
19	瀬底グスク	ウチグスク	本部町字瀬底		①
20	備瀬グスク		〃　字備瀬		〃
21	本部具志川森グスク		〃　字屋比久		〃
22	山川チヂグスク		〃　字山川		⑥
23	陣グスク	鼓グスク	〃　字伊豆味		㊹
24	アメラグスク		〃　字大浜		⑲㊹
25	富盛グスク		〃　字具志堅		〃〃
26	屋我グスク		名護市字屋我		⑦
27	アマグスク		〃　字〃		〃
28	ウチグスク		〃　字〃		〃
29	大グスク	源河グスク①	〃　字源河		〃
30	上グスク	仲尾次グスク	〃　字仲尾次		〃
31	真喜屋グスク		〃　字真喜屋		㉔
32	親グスク		〃　字川上		⑦
33	親川グスク	羽地グスク	〃　字親川		〃
34	デーグスク		〃　字田井等		⑧
35	前田グスク		〃　字屋部		
36	名護グスク	ナングスク	〃　字城		⑦
37	上里グスク	久志グスク	〃　字久志		⑦
38	嘉陽上グスク		〃　字嘉陽		①
39	漢那グスク		宜野座村字漢那		⑨⑩
40	金武グスク		金武町字金武		①

41	恩納グスク	大田グスク①	恩納村字大田		㊹
42	イチグスク		〃 字前兼久		〃
43	山田グスク		〃 字山田		①
44	ガヂャグスク		〃 字真栄田		㊹
45	アンナーグスク	ナーグスク	〃 字宇加地		㊾

中　部　地　区

46	カナグスク		読谷村字瀬名波	米軍基地建設による1部破壊	㊾
47	瀬名波グスク	カクリグスク	〃 字 〃		〃
48	宇座グスク		〃 字宇座		〃
49	トウヤマグスク		〃 字川平		〃
50	マテージグスク		〃 字長浜		㊾
51	座喜味城跡	読谷山グスク	〃 字座喜味	国指定	⑫⑬⑭
52	タカヤマグスク		〃 〃		⑫
53	イットカグスク		〃 字波平		㊾
54	ヤクミーグスク		〃 字大湾		
55	トマイグスク		〃 字渡具知		⑪
56	ウフグスク		〃 字大湾	国道58号線による一部破壊	⑪
57	メーダグスク		〃 字 〃	宅地造成による破壊	㊾
58	嘉手納グスク		嘉手納町字嘉手納		①
59	屋良グスク		〃 字屋良	1978年発掘	〃
60	国直グスク		〃 字国直（旧）	米軍基地内	
61	伊波城跡	美里グスク	石川市字伊波	県指定	①
62	天願グスク	つちグスク	具志川市字天願		⑮
63	安慶名城跡	大川グスク	〃 字安慶名	国指定	〃
64	兼箇段グスク		〃 字兼箇段		〃
65	具志川グスク		〃 字具志川		〃
66	江洲グスク	土グスク㊽	〃 字宮里		〃
67	喜屋武グスク	火打嶺グスク・喜屋武マーブ	〃 字仲嶺		〃
68	クーグスク		〃 字宇堅		㊽
69	伊計グスク		与那城村字伊計		①
70	泊グスク		〃 字宮城		〃
71	平安座東グスク		〃 字平安座		〃
72	平安座西グスク	西グスク	〃 字 〃	1968年発掘	〃
73	ナチジングスク		〃 字屋慶名		㊽
74	平安名上グスク	平安名グスク	勝連町字平安名		①
75	フニグスク		〃 字 〃		〃
76	勝連城跡		〃 字南風原	国指定　環境整備実施中	〃
77	浜グスク	イリグスク	〃 字浜		〃
78	比嘉グスク	アガリグスク	〃 字比嘉		〃
79	クボウグスク		〃 字津堅		〃
80	新川グスク		〃 〃		〃
81	知花グスク		沖縄市字知花	展望台建設のため一部破壊	〃
82	越来グスク		〃 字越来	1920年ごろ採石のため一部破壊	〃

83	仲宗根グスク	ウチグスク	沖縄市字仲宗根	1966、79年調査仲宗根貝塚、複合遺跡	㉑
84	インジングスク		〃 字嘉真良		⑱
85	アマグスク		〃 字大里		⑬
86	北谷グスク	大川グスク	北谷町字謝苅	米軍基地内	①
87	イチグスク		〃 〃		⑲
88	喜友名グスク		宜野湾市字喜友名	米軍基地内	①
89	我如古グスク		〃 字我如古	宅地造成による破壊	〃
90	黄金森グスク		〃 字大謝名		〃
91	嘉数グスク	ウチグスク	〃 字嘉数		⑲
92	ヒニグスク		北中城村字屋宜原	1965年発掘	①
93	安谷屋グスク		〃 字安谷屋		〃
94	大城グスク	ミーグスク	〃 字大城	採石・ゴルフ場建設による一部破壊	㉕
95	マーシリグスク		〃 字熱田		⑲
96	中城城跡		中城村字泊	国指定	①
97	台グスク		〃 字泊		⑱
98	新垣グスク		〃 字新垣	1972年発掘	①
99	イシグスク		西原町字千原		㉘
100	棚原グスク		〃 字棚原	採石により北側破壊	〃
101	幸地グスク		〃 字幸地		〃
102	津喜武多グスク		〃 字小波津	宅地造成による破壊	〃
103	我謝遺跡	ヨナグスク	〃 字与那城	1981、1982年発掘	
104	浦添城跡		浦添市字仲間	1982年発掘	㉙
105	伊祖城跡		〃 字伊祖	〃	〃
106	親富祖グスク		〃 字屋富祖		〃
107	内間グスク		〃 字内間		〃
108	沢岻グスク		〃 字沢岻	1972年発掘	〃
109	ジングスク		〃 字前田		〃
110	皇グスク		〃 字城間		㉙

南部地区

111	首里城跡		那覇市当之蔵町	国指定	①
112	クンダグスク		〃 〃		⑱
113	石田グスク		〃 字石田	宅地造成により全壊	①
114	三重グスク	新グスク・北砲台	〃 西三丁目		〃
115	屋良座森グスク		〃 住吉町	米軍基地内全壊	〃
116	御物グスク	看見グスク	〃 垣花町	米軍基地内	〃
117	天久グスク		〃 字天久	宅地造成による破壊	〃
118	具志グスク		〃 字具志		⑲⑭
119	小禄グスク		〃 字小禄		〃
120	硫黄グスク		〃 字通堂町	全壊	⑥
121	天妃グスク		〃 字久米町		⑭⑲
122	サキハラグスク		〃 字鏡水		⑱
123	豊見城グスク		豊見城村字豊見城		⑭
124	瀬長グスク		〃 字瀬長		①

125	長嶺グスク		豊見城村字長堂		①
126	平良グスク		〃 字平良		〃
127	保栄茂グスク		〃 字保栄茂		〃
128	石原グスク		〃 字翁長		⑲㊹
129	渡橋名グスク		〃 字渡橋名		〃
130	ユダマグスク		〃 字上田		㊽
131	ウチミグスク	内嶺グスク	南風原町字兼城		①
132	仲間グスク		〃 字津嘉山		⑲
133	八重瀬グスク		東風平町字富盛	1979年発掘	㉜
134	世名城グスク		〃 字世名城		㊹
135	テミグラグスク		〃 字当銘		〃
136	ジリグスク	富盛グスク	〃 字富盛		①
137	大城グスク		大里村字大城		〃
138	大里城跡		〃 字西原		〃
139	ミーグスク		〃 字 〃		〃
140	稲福遺跡	山グスク㊷	〃 字稲福	1969年～1974年、1982年発掘	〃
141	佐敷グスク	上グスク	佐敷町字佐敷	1979年発掘	〃
142	屋比久グスク	グスクダキ	〃 字屋比久		㊹
143	知名グスク		知念村字知名	採石による破壊	㉞
144	キナグワンダー遺跡		〃 字具志堅		①
145	安座真グスク		〃 字安座真		㉞
146	寒水グスク		〃 字吉富		⑲
147	古間グスク	カンチャグスク	〃 字志喜屋		㊽
148	ウフグスク		〃 字久手堅	口碑伝承	㊽
149	志喜屋グスク		〃 字志喜屋		①
150	知念城跡		〃 字知念	国指定	〃
151	テミィグスク		〃 字久高		㉞
152	垣花城跡		玉城村字垣花	県指定	㉟
153	ミントン城跡		〃 字仲村渠	県指定	〃
154	仲栄真グスク		〃 字富里		〃
155	玉城城跡	アマツズグスク	〃 字玉城	県指定	〃
156	糸数城跡		〃 字糸数	国指定	〃
157	根石グスク		〃 字 〃		〃
158	船越グスク		〃 字船越		〃
159	大城グスク		〃 字百名		㊹
160	上グスク		具志頭村字仲座		①
161	多々名グスク	多々良グスク	〃 字玻名城		〃
162	具志頭グスク		〃 字具志頭		〃
163	ミドリグスク		〃 字 〃		〃
164	新城グスク		〃 字新城	大部分破壊	〃
165	武富グスク		糸満市字武富		㊲
166	阿波根グスク		〃 字阿波根		〃

167	賀数グスク		糸満市字賀数	貯水タンク耕作による一部破壊	㊲
168	潮平グスク		〃 字潮平	採石による破壊	〃
169	大城森グスク	ニ又グスク	〃 字大里		〃
170	南山城跡	島尻大里グスク	〃 字 〃	1937年発掘学校建設による一部破壊	〃
171	与座グスク	ハジングスク	〃 字与座		〃
172	上座グスク	与座東グスク	〃 字 〃		⑨
173	奥間グスク		〃 字兼城		㊲
174	兼城グスク		〃 字 〃		〃
175	照屋グスク	宇地原グスク ディクグスク	〃 字照屋	貯水タンクで一部破壊	〃
176	国吉グスク		〃 字国吉		〃
177	真栄里グスク	先中グスク	〃 字真栄里		〃
178	フェンサグスク	名城グスク	〃 字名城	1969年発掘	〃
179	伊敷グスク		〃 字伊敷		〃
180	当間グスク		〃 字名城		〃
181	チチャマグスク		〃 字 〃		〃
182	喜屋武古グスク		〃 喜屋武		〃
183	具志川城跡	喜屋武グスク	〃 〃	国指定	〃
184	カタハラグスク		〃 東辺名		〃
185	東辺名グスク	ミーガーグスク	〃 字 〃		〃
186	山城グスク	イーグスク	〃 字山城		〃
187	上里グスク		〃 字東里		〃
188	佐慶グスク		〃 字 〃		〃
189	糸洲グスク		〃 字糸洲		〃
190	波平グスク		〃 字南波平		〃
191	石原グスク	伊原グスク㊲ 伊舎良グスク㊹	〃 字伊原		㊶㊲
192	米須グスク		〃 字米須		㊲
193	ガーラグスク		〃 字大渡	宅地造成による全壊	〃
194	オドサトグスク		〃 〃		⑨
195	摩文仁グスク		〃 字摩文仁		㊲
196	真壁グスク		〃 字真壁	慰霊の塔による一部破壊	〃
197	宇江城グスク		〃 字宇江城		〃
198	新垣グスク		〃 字新垣		〃
199	真栄平グスク		〃 字真栄平		〃
200	ブリ原グスク		〃 〃		〃
201	仲間グスク	小波蔵グスク	〃 字小波蔵		〃
202	チングスク		〃 字真栄里		㊶
203	安里グスク		〃 字糸洲		㊹
204	メーグスク		座間味村字座間味	口碑伝承	
205	シルグスク		〃 字阿真		㊾
206	グスク山		〃 字阿嘉		㊽
207	スンジャグスク		渡名喜村 渡名喜		㊳
208	アマグスク		〃 〃		㊽

209	里遺跡		渡名喜村　渡名喜	1977年発掘	㊳
210	具志川城跡		具志川村字仲村渠	国指定	①
211	伊敷索城跡	チナハグスク	〃　字嘉手苅	県指定	〃
212	マカイグスク		〃　字兼城		㊾
213	クィングワグスク		〃　字北原		㊸
214	宇江城城跡	中城・仲里城	仲里村字宇江城	県指定	①
215	登武那覇城跡	宇根グスク	〃　字宇根	村指定	〃
216	久根グスク		〃　字山城		〃
217	ウニシグスク		〃　字　〃		〃
218	塩原城跡	銭田グスク	〃　字銭田	村指定	〃
219	与那嶺グスク		〃　字島尻		〃
220	天宮グスク	アンマーグスク	〃　字宇江城		㊸
221	ミンチブナーグスク		〃　字　〃		㊾
222	小グスク		〃　字仲地		㊸
223	八重川グスク		粟国村字西		㊾

未確認のグスク一覧

1	伊平屋村	大城グスク	㊷
		諸見玉グスク	〃
		屋蔵グスク	㊾
2	伊江村	西江上グスク	㊶ ㊷
3	国頭村	見里中グスク	㊷
		イチフク森グスク	㊷ ㊾
		ヤギナハ森グスク	〃 〃
4	大宜味村	大宜味グスク	㊷
5	今帰仁村	仲尾次グスク	㊷ ㊾
6	本部町	ミタテ森グスク	〃 〃
7	宜野座村	マチグスク	㊽
8	恩納村	安富祖森グスク	㊷ ㊾
9	読谷村	大湾グスク	〃 〃
		読谷山グスク	㊷
10	与那城村	宮城グスク	㊷
11	沖縄市	山グスク	㊷
		嵩グスク	〃
		石グスク	〃
12	北谷町	大グスク	㊷
13	宜野湾市	宮グスク	〃
		前田グスク	〃
		安仁屋グスク	〃
14	北中城村	島袋グスク	㊾
15	中城村	宮グスク	㊷
		上金グスク	〃
		ブリミーグスク	㊾
		ウヨーグスク	〃
16	西原町	小波津グスク	㊷
17	浦添市	仲間グスク	㊶ ㊷
		城間グスク	㊶
		金グスク	㊷
		牧港グスク	㊾
18	那覇市	仲三重グスク	㊶
		城嶽グスク	㊶ ㊷
		識名グスク	㊶
		大嶺グスク	㊶ ㊷
19	豊見城村	真玉橋グスク	㊶
20	南風原町	兼グスク	㊶ ㊷
		宮グスク	㊶ ㊷
		仲間グスク	㊾
		与那覇グスク	㊷
21	東風平町	志多伯グスク	㊶ ㊷
		金グスク	㊷
22	具志頭村	与座グスク	㊷
23	糸満市	与座東グスク	㊶ ㊷
		名グスク	㊶
		里グスク	㊶ ㊷
		東里グスク	〃 〃
		小渡グスク	㊶ ㊷
		タケグスク	㊷
		中グスク	〃
		内城森グスク	〃
		屋古グスク	㊷
24	渡嘉敷村	安禰宜グスク	㊷
25	仲里村	仲里グスク	㊷

第三章　各　説

第1節　北部地区概説

恩納以北の１市、２町、９村をこの地域として取り扱った。この地域の地形は、沖縄島の島軸NE――SW方向に連なる小起伏山地とそれに交差する本部半島の山地を根幹に、この両者を囲む丘陵とで主に構成されている。

本地域は、沖縄本島の北半を占め、国頭の名の示す如く、島の頭部にあたる。大部分が山地または丘陵地で、山脚は急峻な地形を以って海岸に迫っており、海岸沿いにも平野の発達は乏しい。そのことからこの地域を山原とも称している。

農地の土壌は、岩屑土壌、乾性黄色土壌、暗赤色土、褐色低地土、グライ土、黒泥土および砂丘未熟土に区分されているが、耕地面積は比較的狭く、三地域中最も広い面積を有しながら人口密度は一番低い。

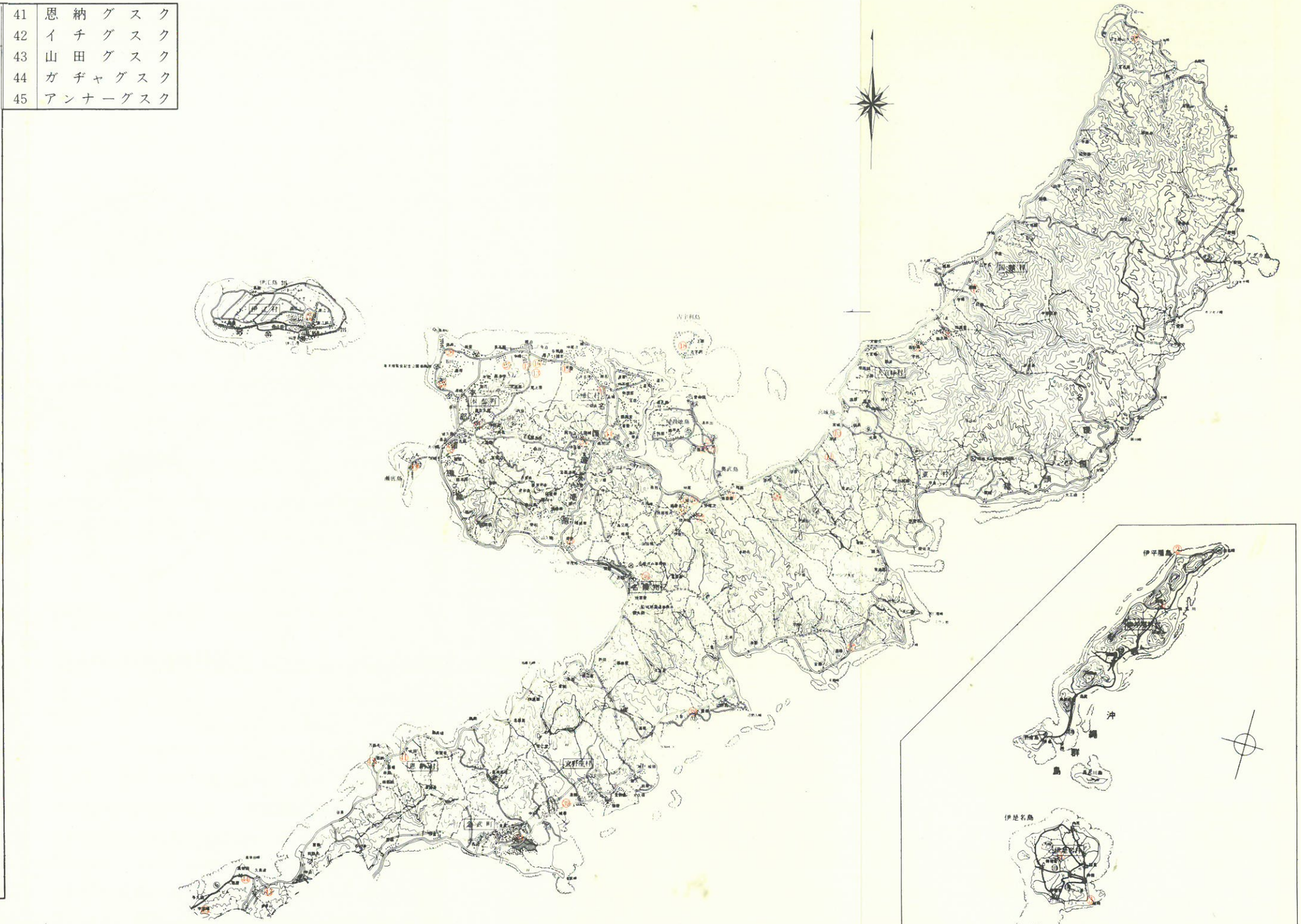
現在の中心地は名護市であり、名護町、屋部村、屋我地村、羽地村、久志村が合併し現在に至っている。この地域でのグスクの分布は旧名護町の名護グスクをはじめとして、旧羽地村の羽地グスク、旧屋我地村の屋我グスクなどが知られているが、いずれも著名なグスクとはいえず、石垣を張り周らし、堅固な遺構を有すというグスクは現在のところこの地域では確認されていない。この北部地区での著名なグスクは隣村今帰仁村に在る今帰仁城跡であり、過去から旧藩時代頃まではこの今帰仁村が北部の中心的な存在であった。

三山分立時代には、北山と称され今帰仁按司の権力範囲に属していたが、今帰仁城主の攀安知が1416年、中山の尚巴志に攻め滅ぼされて以後、この地域も中山の配下に入っていった。

現在この北部地区でのグスクの数は45件、東村以外の全市町村で大なり小なりのグスクが確認されている。グスクが最も多いのは名護市で13、今帰仁村７、本部町７、恩納村５、国頭村２・大宜味村４、伊平屋村２、伊是名村２、伊江村・宜野座村・金武町各１となっている。前述のとおり東村ではまだ１件も確認されてないが、今後詳細にわたって聞き取り調査を実施していくことによって発見される可能性は大きい。

（当　真　嗣　一）

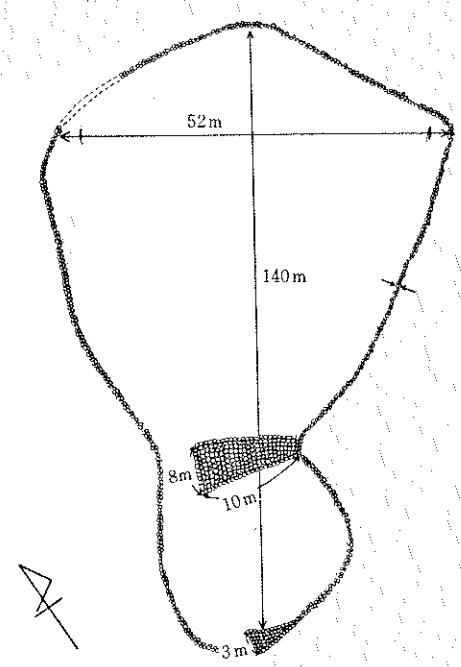
地図番号	グスク名
1	田名城跡
2	ヤヘーグスク
3	伊是名城跡
4	アマグスク
5	伊江城跡
6	アマングスク
7	奥間グスク
8	根謝銘グスク
9	喜如嘉グスク
10	津波グスク
11	石グスク
12	内グスク
13	今帰仁城跡
14	シイナグスク
15	ハナグスク
16	ターラグスク
17	ミームングスク
18	古宇利グスク
19	瀬底グスク
20	備瀬グスク
21	本部具志川森グスク
22	山川チヂグスク
23	陣グスク
24	アメラグスク
25	富盛グスク
26	屋我グスク
27	アマグスク
28	ウチグスク
29	大グスク
30	上グスク
31	真喜屋グスク
32	親グスク
33	親川グスク
34	デーグスク
35	前田グスク
36	名護グスク
37	上里グスク
38	嘉陽上グスク
39	漢那グスク
40	金武グスク
41	恩納グスク
42	イチグスク
43	山田グスク
44	ガヂャグスク
45	アンナーグスク



第１図　北部地区グスク分布

伊　平　屋　村

1　田名城跡（だなグスク）

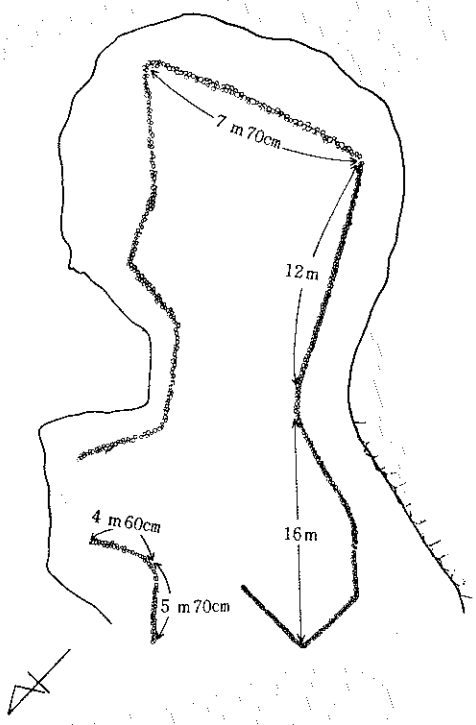


第２図　田名城跡略図

本グスクは伊平屋村田名部落の北方に位置する後岳の頂部（標高約180ｍ)に立地しており、いわゆる山城形式をなす。グスク内は灌木が生い茂り、見通しは悪いが人頭大のチャートを野面積みした石垣が確認できる。第２図に示したように、縄張りのプランは細長いヒョウタン形をなし、長軸で約140ｍ、最大幅で約52ｍを測る。石垣の内部は比較的平坦に形成されているが、外側は険しい崖になり、天然の要害となっている。石垣のくびれた部分の内側に石積みの仕切りがあり、それによって郭が２つに区分され、多郭構造をなす。南西方向に幅３ｍの開口部があり、入口とみられている。石積み以外の遺構が確認されてなく、遺物も現時点で採集されてないことより、グスクの時期的なことや性格等の詳細は不明である。

現在はグスク内に２ヵ所の拝所があり、麓には御通し御嶽が設けられ、地元の人々の精神的な拠り所となっている。㊂謝花寿他「伊平屋田名部落調査報告」『郷土』第15号　沖縄学生文化協会　1976年　　（岸　本　義　彦）

2　ヤヘーグスク



第３図　ヤヘーグスク略図

本グスクは伊平屋村田名部落の北側海岸から100ｍ沖合に屹立した大岩（標高約46ｍ）の頂部に占地している。頂部の比較的平坦部には岩の上端に沿った形で長軸約15m、最大幅約７ｍ の小規模な石積みをはりめぐらしているが、自然崩壊が著しい。石垣以外に遺構は認められず、遺物も見られない。グスクの構造上、座間味島のシルグスクなどと類似した点が見出せるが、時期的位置づけや性格等の詳細は不明である。なお、沖縄学生文化協会の『郷土』には「弥兵衛の大石」と記されている。㊂謝花寿他「伊平屋田名部落調査報告」『郷土』第15号　沖縄学生文化協会　1976年　　（岸　本　義　彦）

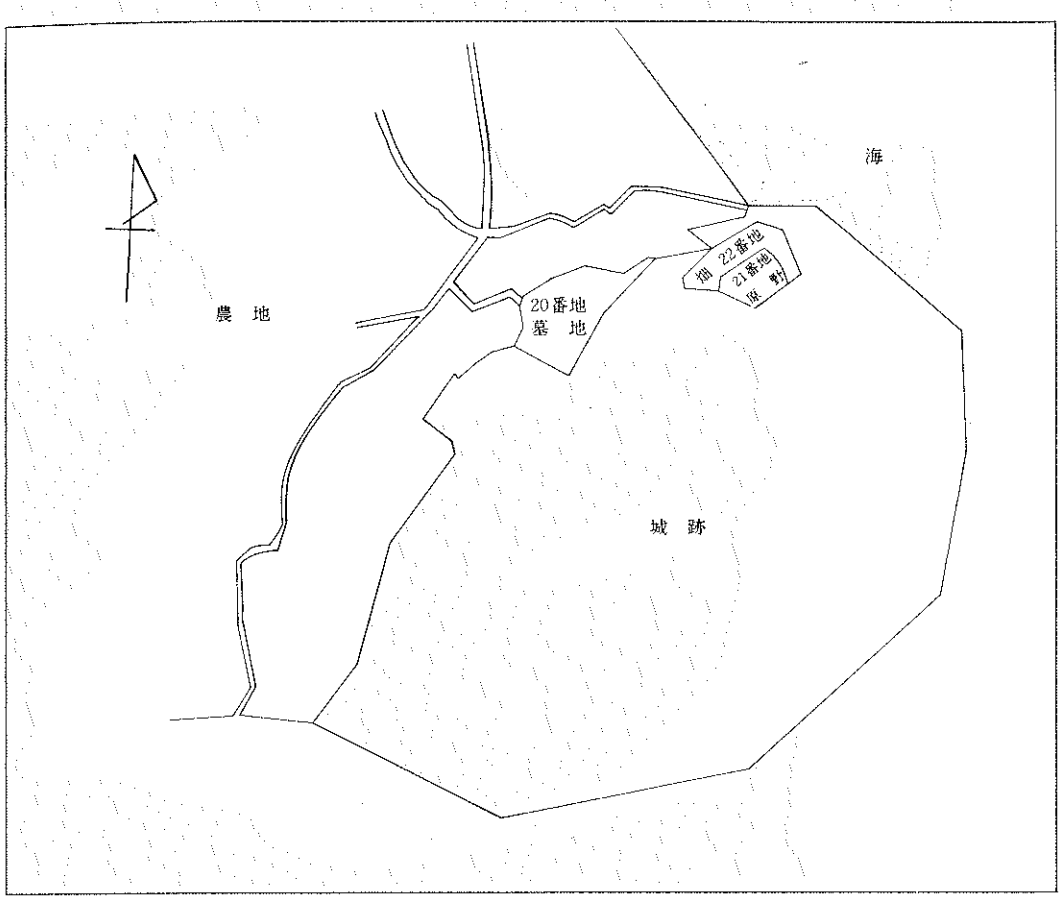
伊　是　名　村

3　伊是名城跡（いぜなじょうせき）

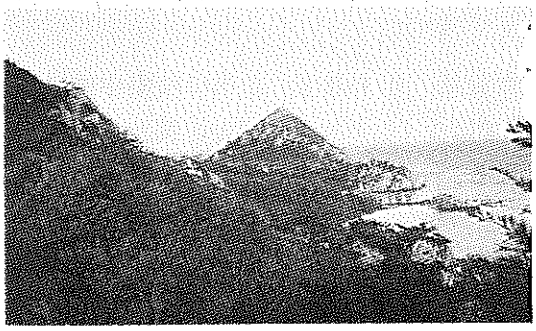
伊是名村伊是名にある。仲田部落の南方、島の一角をなして海へ突き出た円錐状のチャートの岩山である。その独得の景観は、遠くから望んでもそれとわかる。

ほとんどが絶壁をなし、北方より辛うじて登ることができる。東側で一段低くなってわずかに平坦面もみられる。その一角にチャートの岩盤の大きな凹みがあり、常に水が溜っている。

北側中腹にはチャートとサンゴ石灰岩とによって積まれた城壁の一部が残っている。



第4図　伊是名城跡地籍図



PL.1　伊是名城跡遠景

中腹から麓部にかけては遺物包含層が形成され、とくに麓部には海産貝の多量の堆積がめだつ。青磁、陶器なども多量に得られる。高麗青磁片が採集されたこともある。

伝説によれば伊平屋の屋蔵大主が伊是名島を統治していた頃、その子「佐銘川大主」を伊是名へ派遣して治めさせたという。このときに佐銘川大主は伊是名グスクを修築したという。

『伊平屋島旧記』には、今帰仁（北山）グスクの軍勢が伊是名グスクを攻めたことがあったが、水攻めにも屈しなかったので引きあげたという伝え話が記されてい

る。馬に水を浴びせて水の豊富さを誇示したという泉は、さきのチャートの岩盤の凹みであるが、この「泉（ガー）」のことは古記録や古謡にも美味な水としてあらわれる。このグスクは旱ばつの際の雨乞いの公儀祈願所ともなった。

このグスクの中腹に「伊是名玉御殿」がある。第二尚氏尚円王妃と、尚円の姉および尚円の父母が葬られている。尚真王代に瓦屋が建立され、さらに1688年には石造へと改修された。（安　里　嗣　淳）

4　アマグスク

伊是名村勢理客部落の東方大野山の東隣の山をアマグスクと称している。遺物・遺構は確認できない。とくに記録にもなく、また伝承も存在しないようである。

（安　里　嗣　淳）

伊　江　村

5　伊江城跡（いえじょうせき）

伊江村東江上グスク原にある。伊江島は比較的低平な石灰岩段丘の地形をもつが、チャートから成るこのグスクの岩山は大きく突出しており、その美しく印象的な景観は遠くの他の島や洋上からでもそれと識別できる。古来より西海島伝い交通路の目印となったことであろう。

中腹に小さな平坦地があり拝所となっている。この一帯に遺物包含層があり、須恵器、中国製陶磁器が得られる。石垣囲いは見あたらない。岩山の崖面に石積みがわずかにみられるが、墓かとみられる。

西側麓部の畑との境目付近で、江戸時代の貨銭「寛永通宝」が840枚集中的に出土したことがあるが、「グスク時代」の所属ではなく、グスク信仰との関わりで近世またはそれ以降にもちこまれたものと解される。（安　里　嗣　淳）

国　頭　村

6　アマングスク「辺土グスク」

国頭、大宜味地方ではグスクはグシクと呼ぶ。アマングシクは、国頭村字辺戸のムラ入口の左側谷間に形成される小丘で、道路をへだてた向かいの中腹に、義本王

の墓と呼ばれている古墓がある。

アマングシクの小丘一帯は、赤土の国頭マージ層で、石垣もなく、遺物もない。

（宮　城　長　信）

7　奥間グスク（おくまグスク）

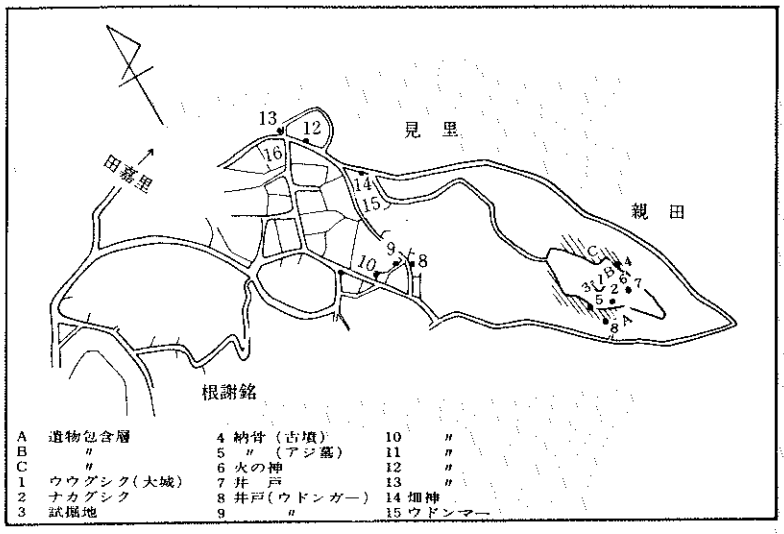
国頭村字奥間にある。奥間小学校の背後に迫る丘陵の先端部が奥間グスクである。地元では奥間グシクと呼ぶ。頂上部には南北にそれぞれ僅かな平坦部があり、南（フェ）の御殿と北（ニシ）の御殿の二つの拝所がある。祭事は南の御殿は若ノ口、北の御殿はノ口が司どる。奥間・浜・比地・桃原の4ヵ村共同の拝所であり、北の御殿のことをアマングシクと呼んでいる。奥間小学校の背面、奥間グシクの中腹には土帝君を祭る拝所もある。

頂上拝所の四方は急傾斜をなし、人工的石垣はない。また、遺物もなく、遺構も確認されていない。

（宮　城　長　信）

大　宜　味　村

8　根謝銘グスク（ねじゃめグスク）「ウイグスク」



第5図　根謝銘グスク付近図

大宜味村字謝名城の小字城（グシク）の背面、丘陵の頂上部を占め、標高約110mである。遺物の出土するグスクとしては、沖縄本島では最北にあり、現海岸線より約1kmも奥に位置する。頂上部の平坦部には大城（ウフグシク）の御嶽があり、一段下がった平坦部には神ア

シヤギと中城（ナカグシク）の御嶽がある。1964年に頂上平坦部を試掘し、黒色土の遺物包含層の存在が確認された。土器・須恵器・青磁器・南蛮系陶器・鉄製角釘・着色された木製玉・獣骨などの遺物が出土している。遺物は中城の御嶽周辺や崖下にも散布しているが、特に大城の御嶽の北方崖下では貝殻の分布が密である。城壁の一部とみられる野面積みの石垣が僅かに北側に残り、その延長に遠見台の跡とおもわせる突帯部がある。

根謝銘城は、地元では単にグシクと呼び、上グシクとも言われている。中山英祖王の後裔大宜味按司の居城跡との伝えもあるが、国頭村史や大宜味村史では、尚巴志の三山統一のころ、国頭地方の支配者であった国頭按司の居城跡であったであろうと述べている。

現在も、グシクの神アシャギの広場において、謝名城・大宜味・大兼久の三ヵ村のノロ・神人達によって、旧暦７月の初亥の日に古式な祭事がおこなわれている。

（宮　城　長　信）

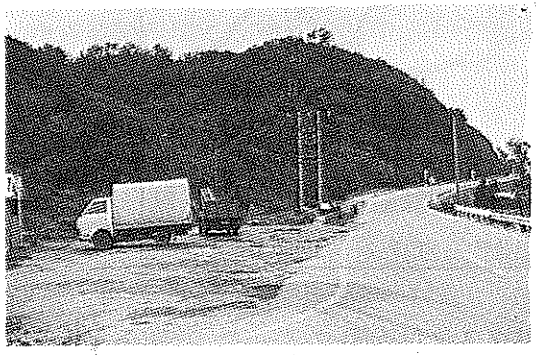
9　喜如嘉グスク（きじょかグスク）

地元では「喜如嘉グシク」と呼び、標高約89ｍに位置する。七滝から延びる幸地川の西側に沿う丘陵に形成されるコブ状の小山で、頂上には僅かに平坦部がある。

グシクと呼ばれる一帯は、赤土マージ層で石塁もなく遺物も全く見当たらない。喜如嘉グシクを語る文献史料もなく、古き時代から「グシク」と呼んでいたのか明らかでない。

（宮　城　長　信）

10　津波グスク（つはグスク）



ＰＬ．２　津波グスク

大宜味村字津波の南西側を区切る丘陵の先端部に位置し、地元では津波グシクと呼ぶ。国道58号に沿っている。石塁もなく遺物も採集されていない。58号より10ｍほど離れた地点から上方にのぼる小道があり、20ｍほど上がった位置に、漁民が豊漁を祈願したといわれる拝所がある。個人的には、現在も参拝する者もいるようだが、津波部落の年中行事には、この拝所と関係する祭儀はない。

（宮　城　長　信）

11　イシグスク

大宜味村字津波平南川上流にあり、標高120ｍの石灰岩からできた独立小丘である。国道58号線から約５分位林道を登った内陸部の方に形成されているが、現在の国道が開けない前まで近くに旧道が通っていたということである。規模は小さく、石灰岩が屹立する岩山となっている。遠くから見る形状は茶碗をふせたようになっており、その東側に半洞穴が確認される。洞穴内には珊瑚砂利が敷かれ信仰の対象となっている。　（当　真　嗣　一）

今　帰　仁　村

12　内グスク（うちグスク）「玉グスク」

今帰仁村字玉城に所在する。玉城部落の南の丘上で、現在、畑や山林になっている。以前は石垣もあったようであるが、現在は石垣は確認できない。畑には中国陶磁・須恵器・グスク土器などが散布している。「……12世紀頃の須恵器、宋代の白磁、明代の青磁、染付、南中国の陶器類、片岩層からなる砂の混入の多い南中国の土器片などが出土する」（今帰仁村史）と多和田真淳氏は述べている。㊂『今帰仁村史』　今帰仁村　1975年　（金　武　正　紀）

13　今帰仁城跡（なきじんじょうせき）「北山グスク」

今帰仁村字今泊ハンタ原に所在する。標高約90～ 100ｍの古生期石灰岩の丘陵上に築かれた古城である。城跡の東は、約70～80ｍの深い渓谷になっていて、南の山々に源を発する志慶真川が流れている。1948年に国の史跡に指定され、指定面積が78,868.5㎡である。

城内は、俗称、本丸、御内原、大庭、大隅、志慶真門などの郭から成る連郭式の城である。石垣は、高さ約３～７ｍ、幅約1.5～３ｍ、全長約1,500ｍに及ぶ。石垣の石は古生期石灰岩で、城壁外に石切り場がある。

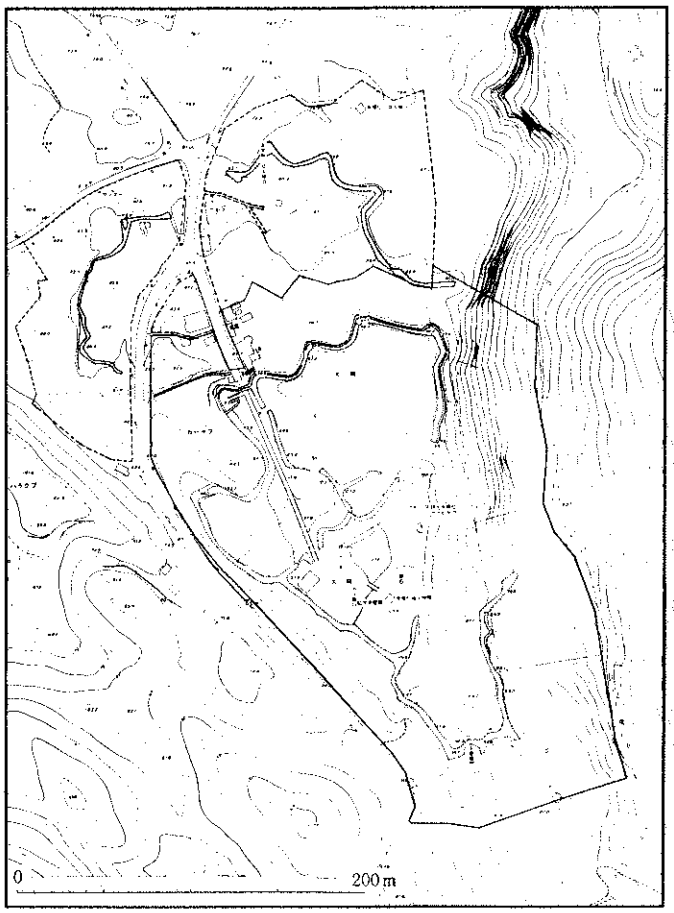
今帰仁城跡は北山城跡とも言われているが、中国の記録には「山北」とある。明実録によると、1383年12月に今帰仁城主怕尼芝は、明国へ初めて使者模結習を派遣し、「貢方物、賜衣一襲」とある。このあと怕尼芝王が５回、怕尼芝の子珉王が１回、攀安知王が11回使者を派遣した。北山王攀安知の最後の進貢は1415年４月で、

「琉球国中山王思紹、並山北王攀安知、其遣使貢馬及方物」とある。この明実録によって、今帰仁城跡が14世紀後半頃に築城されたと考えられる。そして1416年（または1422年、和田説）に中山王尚巴志の連合軍の攻撃をうけて落城し、それ以後は1665年まで、中山から監守が派遣され、いわゆる監守制度の時代になる。

1980年から今帰仁村教育委員会は、国、県の指導のもとに、「今帰仁城跡環境整備事業」に着手された。この広大な城跡を解明し、活用をはかるためには長期の年月が必要であり、現在15年の長期計画のもとに事業が進められている。事業の一端として毎年発掘調査が実施されている。

1980年から1982年まで志慶真門郭の発掘調査が実施され多くの成果を上げている。

志慶真門郭はテラス状に宅地造成され、第１テラスは本丸へ通ずる石敷き道で、第２、第３、第４テラスが家敷跡である。建物は約23～40m²で方形、ほぼ中央に掘り込んだ円形の炉跡をもつ掘立柱の建物と考えられる。多くの柱穴群の中から建物としてプランがおさえられたのは、第２テラスで１棟、第３テラスで２棟、第４テラスで１棟の計４棟である。そして建物間は石敷きや石段の道で結ばれている。



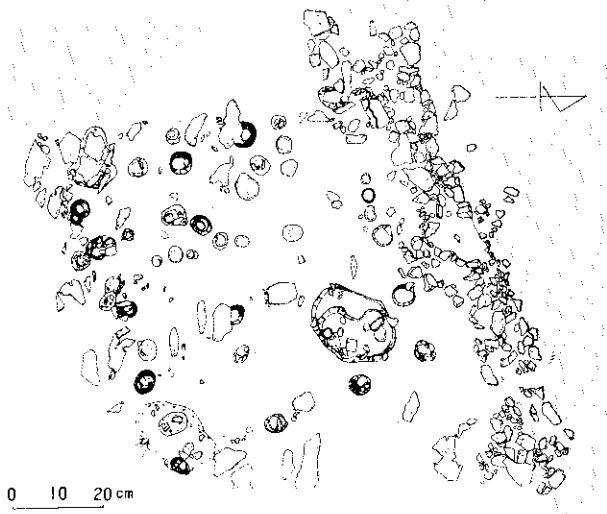
第６図　今帰仁城跡地形

遺物は中国陶磁器が多量に検出される。中国陶磁器は14～15世紀のものが圧倒的に多く、明実録の年代と符合する。青磁では、碗、皿、盤、盃、酒会壺、瓶、香炉、仏像などがあり、白磁では碗、皿類が多い。染付では元様式の大壺、小壺、碗、盤などと明代の碗、皿類がある。黒褐釉の天目茶碗、茶入れなどの茶道具も検出されている。また、中国以外の焼物では高麗青磁、タイのスワンクローク窯、安南、備前のすり鉢などが検出されている。陶磁器のほかに、鉄鏃、短刀、刀子、切羽、鞆、鉄砲の弾丸などの武具類、貨泉、五銖、洪武通宝などの古銭類、勾玉、ガラス小玉、管玉などの祭祀具類、おはじきなどの遊具、炭化米、麦、魚骨などの食料残滓などが検出されている。

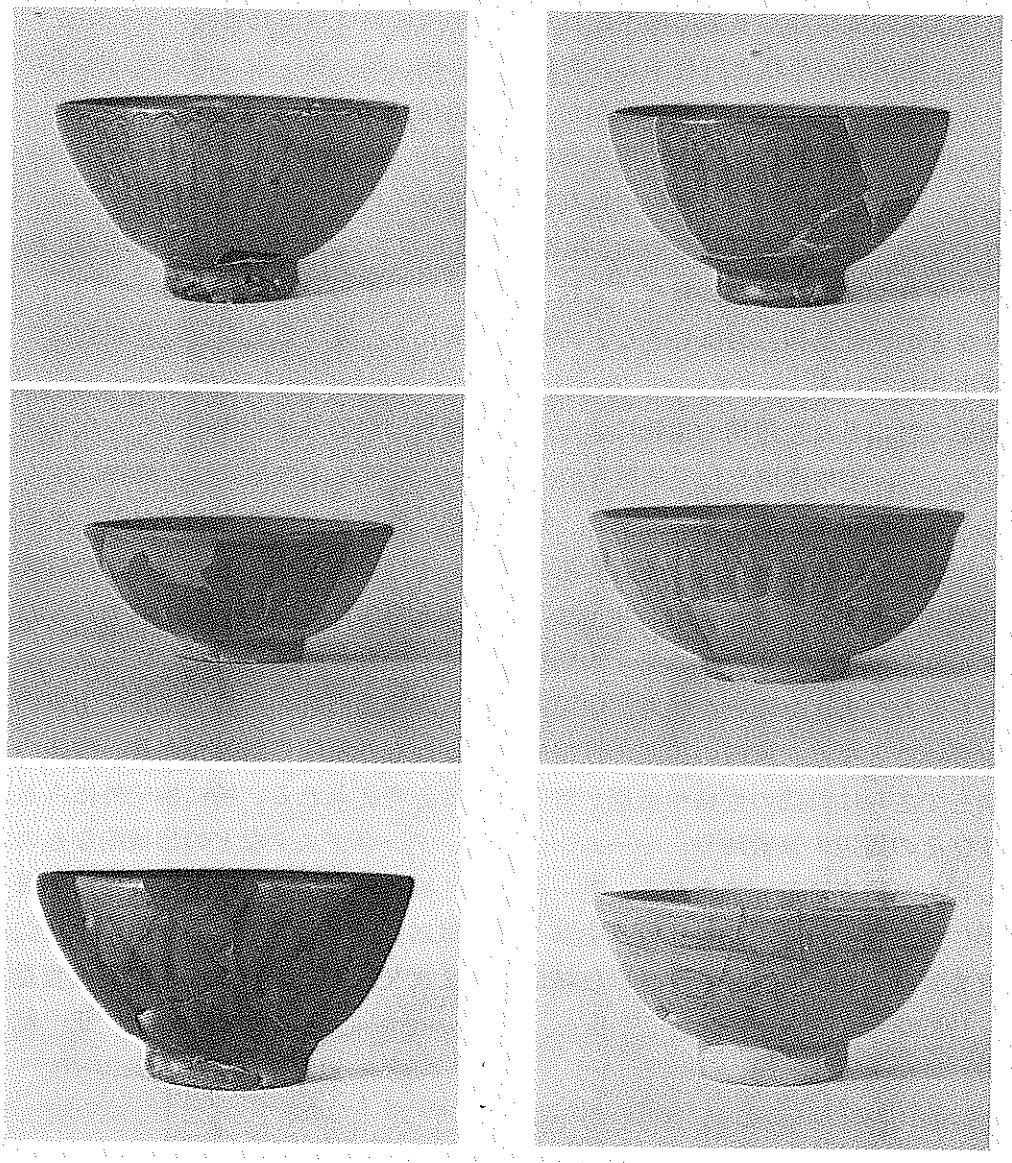
発掘で検出された遺構や遺物によって、志慶真門郭の性格や機能等がかなり明らかになった。宅地造成をして屋敷をつくり、中に炉跡をもつ掘立柱の建物に住んでいたと考えられる。武具類のほかに、祭祀用具、遊具などがあることから、家族単位の生活をしていたと考えられる。そこに住んでいた人々は、第1テラスの石敷き道を通って本丸へと結ばれており、城主をささえる側近の「武士」たちであったと考えられる。なお、1982年の第4次発掘調査で、本丸の一部を発掘した結果、本丸は礎石をもつ大きな建物が建ち、中国陶磁器も志慶真門郭のものに比して上質のものが多いことなど、城内の郭間の性格や機能がかなり解明されつつある。今後の発掘調査でさらに郭間の性格や機能が解明されると考えられる。特に指定外にある旧道及びその周辺の家敷跡や、ミームングスク、ターラグスクなどの出城的なものなども含めた調査研究が俟たれる。㊂

『今帰仁城跡』国指定史跡保存管理計画書　今帰仁村教育委員会　1978年、『史跡今帰仁城跡』第1次発掘調査概報　今帰仁村教育委員会　1981年、『史跡今帰仁城跡』第2次発掘調査概報　今帰仁村教育委員会　1982年

（金　武　正　紀）



第7図　今帰仁城跡志慶真門郭第2テラスの建物遺構



PL.3　今帰仁城跡出土遺物

14　シイナグスク

今帰仁村字呉我山三謝原に所在する。湧川部落の西はずれから呉我山へ通ずる道路の右側の台地に形成されている。今帰仁城跡ができる前に、ここに城を築いて按司が住んでいたが、水の便が悪かったので、今帰仁城に移ったという伝承がある。高さ約1～2m、幅約1～1.5mの石垣が全長約150m残っている。石垣の石は古生期石灰岩で、今帰仁城跡の石垣とよく似ている。遺物は須恵器や中国陶磁器が若干表面採集できる。㊂『沖縄の城跡』　新城徳祐　1982年　　（金　武　正　紀）

15　ハナグスク

今帰仁村字仲尾次に所在する。北山高等学校の西南約 200 mの所で、仲尾次部落の南側にあたる。丘陵上に高さ約50cm、長さ約 100 mの石積みが残っているが、グスクの石垣であるかは明らかでない。表面調査では遺物は採集できなかった。

（金　武　正　紀）

16　ターラグスク

今帰仁城跡の北北西約450 mの距離にあり、標高60 mを測る台地の先端部に位置している。このグスクは今帰仁城の出城としてみたてられるミームングスクの西側約400 mに位置して、結局今帰仁城跡を中心に３つのグスクは三角形の位置関係を描く形をとっている。地形・位置・距離等の関係で見た場合、ミームングスクと同様今帰仁城の出城としての可能性が強いグスクとなっている。　（当　真　嗣　一）

17　ミームングスク（みものグスク）

今帰仁村字今泊にあり、今帰仁城跡の北約 400 mの距離に位置している。グスクは、今帰仁城跡から北に張り出す山裾の先端部にあたり、標高60～70 mの所に占地している。グスクに立てば、視界は広く、現在の今泊集落を足下に、東に志慶真川をはじめとして兼次、諸志、与那嶺などの各集落を望み、北西方向には本部町具志堅や新里を見、北には遠く海をへだてて伊平屋、伊是名等の離島を眺望する位置にある。背後に控える形をとる今帰仁城との関係を地形・位置・距離等から見た場合、今帰仁城の出城としての性格を有していたグスクではなかったかと思われる。

（当　真　嗣　一）

18　古宇利グスク（こうりグスク）「今帰仁グスク」

今帰仁村古宇利島西海岸、標高20 mの琉球石灰岩台地に立地する。グスク内には雑木繁茂し、全体の形を把握することはできなかったが、断続的に南から東にかけて石積みらしきものが確認できた。石積みは30cm～50cm大の石灰岩塊を自然のまま使用しているが、崩れているため、その

ＰＬ.4　古宇利グスク近景

高さや幅等については不明である。また、古老の話によれば、グスクの石垣を崩して、道路敷設の際に利用したということであった。地元では、本グスクを「今帰仁グスク」と呼び、口碑によると「親泊にある今帰仁グスクと城のつくり勝負をし、負けたのでこの城は廃城になった。」といわれ、前述の呼称もこれに由来するものである。現在でも島外から拝みに来る人もいるという。　　（知　念　　勇）

本　部　町

19　瀬底グスク（せそこグスク）「ウチグスク」

本部町字瀬底前原にあり、住民によってウチグスク山と称されている標高65～70mの山を中心に、その中腹から南麓にかけて形成されている。グスクの本体は南側緩斜面部に展開する数箇所の平場で、そこの地形はテラス状に築成されており、ところどころで黒色土の遺物包含層が確認されることから建物跡の存在が予想される。グスク内に部分的に貝殻の堆積層が認められ、多和田真淳氏によって瀬底貝塚と命名されたことがある（注１）。現況は御嶽となっており、祠等がみられる。本格的な発掘調査は行なわれたことが無く、表面踏査ではグスク系土器、輸入陶磁器等が採集される。注１ 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布とその編年の概念」琉球政府文化財要覧　1956年度版　　（当　真　嗣　一）

20　備瀬グスク（びせグスク）

PL．5　備瀬グスク近景

本部町字備瀬歯毛端原1793番地にあり、標高25mを測り熱帯樹の繁茂する森である。現在の備瀬集落から南方約500mの距離に位置し、石灰岩地帯に立地している。表面踏査の結果では石垣等の遺構や遺物の確認はできなかった。グスクは嶽として字民に信仰されており、グスク内には拝殿や祠がみられる。

（当　真　嗣　一）

21　本部具志川森グスク（もとぶぐしかわもいグスク）

県立本部高等学校の東方約50ｍに位置している。標高60ｍの茶腕を伏せたような石灰岩からできた岩山である。雑木が繁茂しているため踏査は困難であり精査するには至ってない。岩山の南斜面は現在畑地となっているが、ここからグスク系土器や輸入陶磁器、須恵器片等が採集される。名称の由来や伝承等については不明である。本部町史所収の本部町遺跡一覧表によれば、本グスクの所在地は本部町字渡久地屋比久原328番地となっており、所有者が字有地、現況は御嶽となっている。

（当　真　嗣　一）

22　山川チジグスク（やまがわちぢグスク）

本部町字山川にあるグスク、仲松弥秀氏は、山川部落北側・県道をへだてた琉球石灰岩台地の南側崖面にあるイタ墓をチジグスクと称している。しかし、最近の本部町文化財調査委員等の現地調査によると、この墓は備瀬部落の一部の人によって拝まれておりウフシヌメーにある「ウフシグンジョウバカ」と呼ばれ、明確にグスクと呼ばれていないという見解もある。「ウフシグンジョウバカ」がグスクと称されているかは確定できない。

（知　念　　勇）

23　陣グスク（じんグスク）

本部町字伊豆味ナカンカー原にある。伊豆味部落の北東はずれにある桃原農園入口東側の本部石灰岩上に立地する。グスクの西側を小川が流れており、その崖下にある岩陰には按司墓「鼓グスク」墓がある。

新城徳祐氏の『沖縄の城跡』には、「中北山時代の今帰仁世の主が羽地按司であった後、北山王の怕尼芝（ハクニシーパニジ）に亡ぼされたとき（1332年）であったか、あるいは後北山王の攀安知（ハンアンチ）が、中山王の尚巴志軍と、中北山系の諸按司たちとの連合軍によって亡ぼされたとき（1416年）であったか、そのいずれの時代であったかは、今のところ判然とはしないが、そのころ北山城主に仕えて今帰仁城内に居古というマーミ按司は、北山城が戦い負けたので、ひそかに家族を引きつれ、今帰仁城からここへ逃げ込んだといわれ、暫くは隣りの神石原の洞穴にかくれていたそうであるが、時がたって世の中が平和になってから、不便な洞穴生活から抜け出して、じん城へ移り、ここを居城としていたと伝えられている。」

また兼次佐一著の「伊豆味誌」（1965年）には「陣城」が当てられ、陣城については「尚巴志軍と、北山の残兵による決戦城説」等諸説がある。

グスクと称されるところには石積み等の遺構はみられない。（知　念　　勇）

24　アメラグスク

本部町大小堀の集落の東方約 500 m、標高50～60m前後の丘陵に位置する。雑木が繁茂し、調査は困難である。聞き取りによれば中には石垣等の遺構は認められないとのことである。ただ、グスクに向う道沿いには、拝所、井泉等があり、聖地的様相を呈する。以下詳細については不明である。　（比　嘉　春　美）

25　富盛グスク（トゥムイグスク）

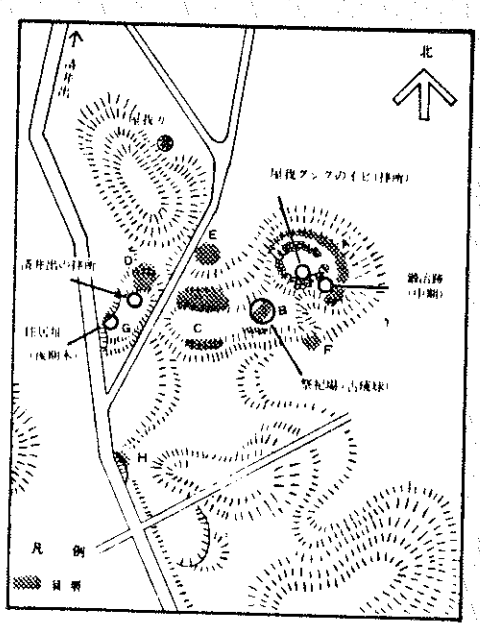
新城徳祐氏によると本部町具志堅に所在するグスクである。聞き取りによると具志堅部落南方 300 m、標高50mの小丘を「トムイ」と呼称するが、部落で拝んだこともないとのことである。近くに「具志堅御願」という拝所もあるが、本グスクを確認するにはいたらなかった。　（比　嘉　春　美）

名　護　市

26　屋我グスク（やがグスク）

名護市字屋我阿太伊原に所在する。標高約36mの琉球石灰岩丘上に形成されたグスクである。築城年代については明らかでないが、13～14世紀の中国陶磁器が出土することから築城もその頃と考えられる。なお、グスク周辺は近世まで集落が続いていたようで、屋我部落が現在の所に移動したのは1858年とされている（『球陽』）。

1980年に名護市教育委員会によって、小規模な発掘調査が実施され、その成果が『名護市の遺跡』に報告されている。それによると、丘陵頂上部は直径約10mの平坦地で、石垣が残っている。そこの発



第８図　屋我グスク付近図

掘では、13～14世紀の鎬蓮弁文碗などの中国陶器や中国古銭などとともに鉄滓が多量に出土することから鍛冶場があったとされている。また、中腹の平坦地は約500年前の祭り場の跡であるとされている。だんだん丘上から下へと集落は移動し、丘陵のふもとでは1858年まで集落があったとされている。

グスク内には拝所があり、グスク北西側には屋我が一（井戸）がある。このグスクと井戸を柱にして、長期にわたって集落があったようである。㊂名護市教育委員会『名護市の遺跡』　1982年　（金　武　正　紀）

27　アマグスク

名護市字屋我墨屋原の西端にある森を地元ではアマグスクと呼んでいる。屋我グスクの南方約1㎞のところで、標高40ｍである。伝承もなく、石垣や遺物も見られない。　（金　武　正　紀）

28　ウチグスク

名護市字屋我にあり、屋我グスクの南西約600ｍの距離に位置する標高17ｍの独立小丘である。このグスクについて『沖縄県の遺跡分布』は、「屋我グスクの南方約1㎞のところに屋我地内海に面した独立小丘がある。地元の人はそこをウチグスクと呼んでいる」(注1)と記してある。今回さらに詳しく調査をしたところ、その位置については「南西約600ｍ」に訂正しておきたい。さらにグスクの呼称についてもいい伝えがまちまちであり判然としない。今後、詳細な聞き取り調査の必要がある。　注1『沖縄県の遺跡分布』　沖縄県教育委員会　1977年3月

（当　真　嗣　一）

29　大グスク（ウーグスク）「源河グスク」

名護市字源河桃原に所在する。源河平野の南側にある丘陵の北側斜面で、標高約20～40ｍ付近に立地する。グスク内には2ヵ所の拝所があり、上方の拝所を大（ウー）グシク、下方をギンカンスーまたはギンカンシュウ（源河の主）と呼んでいる。大グシクでは石垣も遺物も確認できなかったが、ギンカンシュウでは若干の中国陶磁器が採集された。名護市の分布調査では、大グスク、ギンカンシュウを含め、さらに下方の源河公民館近くまで近世、近代の陶磁器が散布しており、その範囲を源河部落が成立する前の「ムラ」の一つだとしている。㊂名護市教育委員会『名護市の遺跡(2)』　1982年　（金　武　正　紀）

30　上グスク（ウィグスク）「仲尾次グスク」

名護市字仲尾次仲尾次原に所在する。羽地中学校の北側の森で、現在、畑や森になっている。標高約46mの頂上から南側はゆるやかな傾斜面で、そこには仲尾次部落が拝む拝所が2ヵ所と拝泉が1ヵ所ある。伝承では、現在の仲尾次部落はそこから移動したとされている。『名護市の遺跡』では、「森の中にウィグシク、ナカグシクの2ヵ所の拝所があるが、どちらがどの名称であるかは、部落でも2つの意見があり、現状では決定できない」としている。

石垣もなく、遺物もグスク時代の遺物は見られない。ただ、上記報告書によると、「南蛮陶器や沖縄陶器と判然としない土器に類似するものが採集された」とある。

㊂名護市教育委員会　『名護市の遺跡(2)』1982年　　（金　武　正　紀）

31　真喜屋グスク（まきやグスク）

名護市字真喜屋拝原にあり、真喜屋小学校の南約500mの距離に位置している。このグスクは多野岳（標高383.2m）北側の山裾にあたり、標高約57mを測る舌状台地で、真喜屋集落を眼下に見おろすところに位置している。グスクの南と東は山岳に拠り、北と西は真喜屋田袋・仲尾次田袋を越えて羽地内海に臨み、近くを真喜屋大川が蛇行しながら流れている。

地元の人びとは、グスク一帯を上之御嶽と称し信仰している。

『羽地村誌』には、このグスクの「城主がどんな按司であったかはっきりした文献もないが、尚巴志の三山統一以前のことで、源河城や親城（川上）、または羽地城（親川）と並んで割居しているであろうか」と記載されている（注1）。

名護市教育委員会が実施した遺跡分布調査の際、「上之御嶽」の広場一帯でグスク時代の遺物が採集され、上之御嶽遺跡と命名されている（注2）㊂（注1）羽地村誌編集委員会『羽地村誌』　羽地村役場　1962年7月　（注2）『名護市の遺跡(2)』分布調査報告書　名護市教育委員会　1982年3月　　（当　真　嗣　一）

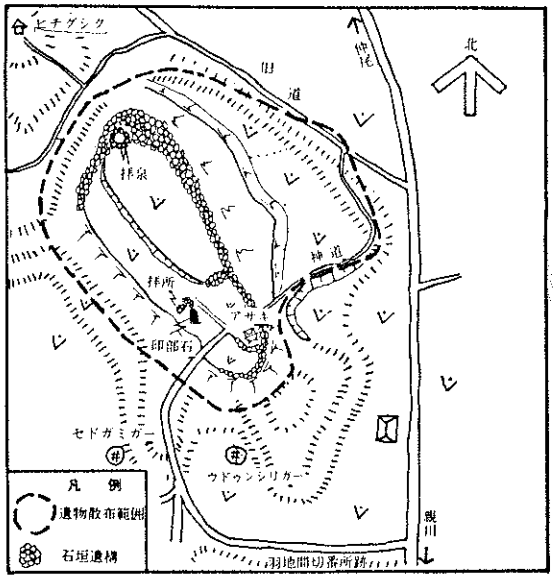
32　親グスク（ウェグスク）

名護市字川上マガク原に所在する。川上部落の南側山地の中腹、多野岳へ登る道路の右側で、標高約100mの尾根上に立地する。親（ウェー）グシクと呼ばれている所はほぼ平坦で、北側は急斜面になっている。この北側斜面に石垣遺構と考えられる石列が残っている。石列遺構はテラス状の地形の土留め石積みのように見える。これがグスクの土留め石積みであるか、石垣が崩れて斜面をおおっているのかは発掘調査を俟たねばならない。島袋源一郎氏は開墾中に青磁皿を採集されたようであるが、表面

調査では遺物は採集できなかった。グスク内には拝所もないが、船を見送る場所として利用されたようである。㊂『名護市の遺跡(2)』名護市教育委員会　1982年『沖縄県国頭郡志』島袋源一郎　1919年　　（金　武　正　紀）

33　親川グスク（おやかわグスク）「羽地グスク」

名護市字親川イパザス(イパシャス)に所在する。羽地間切番所跡の北方、標高約50ｍの丘陵上で、グスクの立地するところが、丘陵の中央部にあたる。このグスクの築城年代については不明であるが、羽地按司が築かせたもので、工事途中で、今帰仁グスクに移動したために使用されなかったという伝承がある。



第９図　親川グスク付近図

発掘調査は実施されたことがないが、表面調査で石垣や若干の遺物が見られる。『名護市の遺跡(2)』では、「丘陵頂上に連続する３ヵ所の石垣囲いがあるが、石垣の石が根石部分を除いてとり去られた部分が多く、平面プラン以外の当時の石垣の状況を知ることは困難である。石垣の石は直径30cm程の石が多く使われており、野面積みである……。遺物はグスク土器、中国製青磁、染付、南蛮陶器などが多い」とされている。㊂『名護市の遺跡(2)』　名護市教育委員会　1982年、『沖縄の城跡』　新城徳祐　1982年
（金　武　正　紀）

34　デーグスク

名護市田井等にあり、現在の田井等集落の西側約 200 ｍに位置している。グスクは標高40ｍを測る丘陵上に位置し、小規模のグスクとなっている。グスクと呼ばれる丘陵の頂部には拳大の石灰岩塊を不整円形状に配した拝所が二ヵ所確認されるが、その民俗的な性格については今回調査をしていない。グスクの三囲は自然崩壊のために急傾斜を示し切立った形となっている。石垣等の遺構は確認されなかった。グ

スクが立地する丘陵上や斜面、および斜面下の平坦な畑地にはグスク時代遺物の散布が確認されている。㊂『名護市の遺跡(2)――分布調査報告――』名護市教育委員会　1982年3月

（当　真　嗣　一）

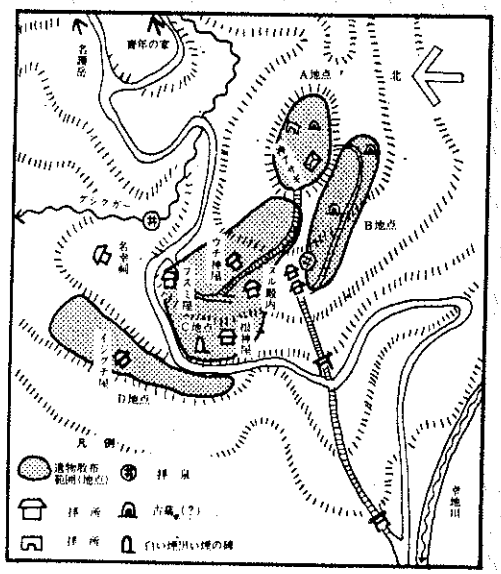
35　前田グスク（メーダグスク）

名護市屋部兼久の前田原に所在する。西屋部川の中流域に突き出した舌状台地の先端部に位置し、現在はサトウキビ畑として利用されている。兼久から旭川へ通ずる道路によって掘り割され、独立小丘の感を呈する。遺構・遺物とも確認できないが、丘陵斜面下に骨（種不明）が散乱していたとのことである。口碑伝承もなく詳細は不明である。また、川を挟んで対峙した場所に屋部の御嶽（クシヌウタキ）があるが、それとの関係も判然としない。

（岸　本　義　彦）

36　名護グスク（ナングスク）

名護市字名護城原、以上原に所在する。名護市街地の東側背後の標高約103ｍの丘陵上に位置し、ナングスクと呼ばれている。ナングスクは、中北山の「今帰仁世の主」の二男がここに派遣されて、名護按司と名乗り、この「名護按司」によって初めて築かれたと伝えられている。石垣は確認できないが、青磁や須恵器などの遺物が採集できる。『名護市の遺跡(2)』の報告を要約すると、「遺物はＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ地点に分布する。Ａ地点は神アサギのある頂上平坦部で、14～15世紀の中国陶磁器、グスク土器などが検出される。Ｂ地点は南側斜面で、本遺跡中もっとも遺物が多く採集される地点である。とくに、グスク土器、須恵器が目立つ。Ｃ地点は東側斜面で、グスク土器や中国製青磁、近世の遺物などが採集される。Ｄ地点は白い煙、黒い煙の碑の下方にあるイジグチという神屋の建っている畑一帯で、グスク土器、中国製青磁、近世～近代の沖縄陶器などが採集される。



第10図　名護グスク付近図

ナングスクはカンヒザクラの名所で、毎年1月下旬には花見でにぎわう。㊂『名護市の遺跡(2)』名護市教育委員会　1982年、『沖縄の城跡』新城徳祐　1982年

（金　武　正　紀）

37　上里グスク（うえざとグスク）「久志グスク」

名護市字久志前田原に所在する。久志部落の北東約1㎞の丘上に位置する。丘の東、西、南は谷になっており、北側は国道329号によって切り取られている。数十年前までは石垣が残っていたというが、現在は削平されており、石垣らしいのは確認できない。このグスクは、久志若按司の居城であったという伝承が残っている。遺物は、中国青磁片が数点採集されただけで、明確な遺物包含層は確認できない。㊂『名護市の遺跡(2)』名護市教育委員会　1982年　（金　武　正　紀）

38　嘉陽上グスク（かようウィグスク）

名護市字嘉陽小字嘉陽原にあり、嘉陽集落の北北東約400ｍの地点にある。グスクは国道329号線の左側国道沿いにあって標高70ｍの三角錐状の山頂に占地している。グスクは「御嶽」として信仰されており、現在コンクリート製の祠が建立されている。この祠の前には「御嶽」への参拝道として数拾段のコンクリート製階段が取り付けられている。グスクからは嘉陽集落が眼下に俯瞰できる。石積みの遺構やグスク時代遺物は未確認であるが、このグスクの西側平地にはグスク時代から近世にかけての嘉陽原遺跡の分布が知られている。なお、伝承によると、嘉陽の集落はもともと本グスクの後方から移住してできた部落といわれており、その始祖は嘉陽大主だとされている。㊂『久志村誌』久志村役場発行　1967年10月　『名護市の遺跡(2)――分布調査報告――』名護市教育委員会　1982年3月　（当　真　嗣　一）

宜　野　座　村

39　漢那グスク（かんなグスク）

宜野座村字漢那グスク原にあり、福地川の川口に平行して走る石灰岩丘陵の先端部に位置する。この石灰岩丘陵は略南北に約500ｍの長さでのびていて標高30～40ｍを測る。

m丘陵の東側すなわち福地川に沿う面が断崖をなしているのに比べ北側と西側は緩やかに傾斜しながら平地部へと続いている。グスク内からは石垣等の遺構及び遺物もまだ確認されてないが、同一丘陵上の北西側では、「グスク原陶磁器出土地」と呼ばれるグスク時代包含地が知られている。グスクの中枢を占める丘陵先端部は深い草木におおわれていて歩行すら困難な状態であるため精査するのにいたってない。今後丘陵上の入念な調査が必要である。なお、グスクに由来する伝承については不明である。

（当　真　嗣　一）

金　武　町

40　金武グスク（きんグスク）

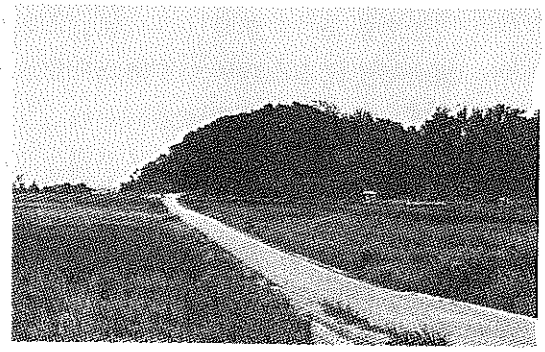
金武町字金武の金武郵便局西方にあり、標高70mを測る石灰岩小丘に立地している。石垣等の遺構は確認されてないが、小丘の南側緩斜面には黒色土の遺物包含層が僅かに確認でき、そこよりグスク系土器、輸入陶磁器、鉄滓などが採集される。グスクと称される小丘は石灰岩の露頭岩によって大部分が覆われており、平場はあまり見い出せない。

グスクの面積は数100m²程で小さいグスクであり、現在では亜熱帯樹が繁茂している。

（当　真　嗣　一）

恩　納　村

41　恩納グスク（おんなグスク）「大田グスク」



PL.6　恩納グスク近景

別名大田グスクとも云う。恩納村大田部落の南、国道58号線際にある。グスクは標高20～25mの石灰岩独立丘に占地し、南に数ヘクタールの広さの水田地帯、北と西に東シナ海を擁し、東は恩納連山へと続いている。グスク内は深い草木におおわれ精査するのに困難な状態にあり、内部の遺構や状況等についてはよく知られ

てない。現在、グスク内にはコンクリート製の「城内之殿」がある。グスク内およびグスク下方からグスク系土器や輸入陶磁器が採集されることから地中にはなんらかの居住遺構が存在することは確実である。国道沿いのグスクの一部は採石によって破壊されている。　（当　真　嗣　一）

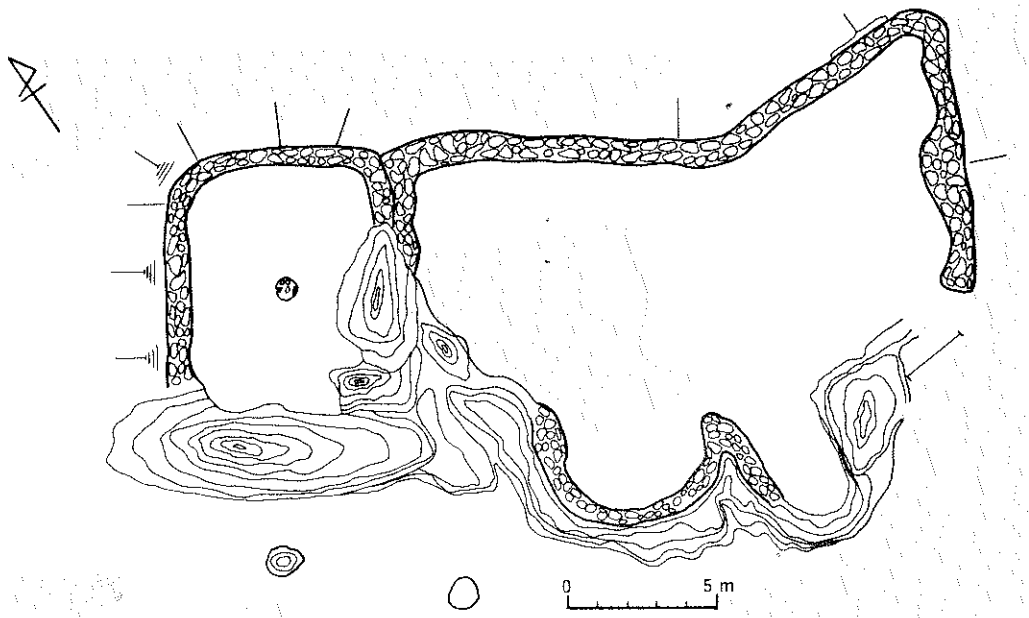
42　イチグスク

恩納村字前兼久にあり、前兼久漁港の港口に突出する石灰岩台地に位置している。標高10mを測る。このグスクについてはあまり知られてなく、その由来についても定かでない。

仲松弥秀氏は、「その漁港の沿岸崖沿いをイチグスクといっている。この崖下沿いは古墓が多く、村として拝しているようである」と『恩納村誌』の中で記述している。㊂仲松弥秀『恩納村誌』恩納村役場　1980年3月　（当　真　嗣　一）

43　山田グスク（やまだグスク）

恩納村字山田の東南にあり、国道58号線から南に約200m程入った山林内にある。グスクは石灰岩台地の先端部に位置し、標高95mを測る要害の地に築かれている。



第11図　山田グスク略測図

PL.7 山田グスク近景

グスクが占地するこの台地は、東西に細長くのびており西面は断崖をなして台形状の景観を呈している。北面する崖下には護佐丸先祖の墓といわれる洞穴があり、その前庭部に護佐丸先祖墓碑が建立されている(1740年建立)。台形状の丘陵頂部を主郭に取り込み、石灰岩台地の地形を巧みに利用して築かれたこのグスクは、伝承によると、護佐丸が座喜味グスクに移る以前の居城であったと伝えられている。座喜味城跡は山田グスクから直線距離にして約4km四方に位置している。『沖縄県国頭郡志』(大正8年刊)には、山田グスクについて次のように記されている。「山田城跡あり琉球の楠木公と称せらるる護佐丸公父祖以来の居城にして今より四百七八十年前迄代々此に在りて北の勁敵を監視せしが三山統一後盛春公に至り城を座喜味に遷するに及びて廃墟に帰せり、其移転に際するや公の徳望を追慕せる者遠く鬼界、大島等よりも来りて夫役に服し、為めに山田座喜味間夫蟻群の如く忽ち城廓を毀ち手渡しにして運搬せりと伝えられる。今は壁塁僅かに遺存して古への面影を留むるのみ」

城内は深い草木に覆われているため精査に至らず、グスクの構造や縄張り、遺構の有無等についてははっきりしないが、グスクの東側や西側には野面積みが存在する。グスク内や北側断崖面には黒褐色土遺物包含層が確認され、グスク系土器や輸入陶磁器等が出土する。なお、グスクの北側谷間には、山田の古島があったといわれており、屋敷跡や古井戸が僅かに現存する。　(当　真　嗣　一)

44　ガジャグスク

恩納村字真栄田にあり、真栄田公民館の西約100mに位置している。グスクは標高約26mの小丘状を呈し、現在は山林となっている。このグスクは、現在地元の人びとからも忘れられ、その位置や由来について聞き取り調査は困難であった。『恩納村誌』の中では仲松弥秀氏によって字真栄田の現御嶽として考察され「由来記時代の御嶽はこのグスクはなかったかと思われる」と述べている(注1)。

本グスクについては、内部の測量をはじめとしてもう少しつっ込んだ調査が必要であり、今後、グスク内の詳細調査が望まれる。㊂注1仲松弥秀『恩納村誌』恩納村役場1980年　(当　真　嗣　一)

45　アンナーグスク「ナーグスク」

アンナーグスクは、一名ナーグスクとも言い、恩納村宇加地宇加地原に所在する。部落東方約200ｍの石灰岩丘陵に立地し、ススキ・雑木等が茂る原野で、周辺には多数の掘り込み墓と洞穴が一ヶ所ある。宇加地、長浜の人々によって拝まれ、次のような伝承がある。

昔、北山で戦争があり、そこの按司であるカニマチは船で難を逃がれ、残波岬付近に上陸することが出来た。しかし長い船旅で疲れ、のどが乾き、水さえあれば一命をとりとめることが出来るがと思って当りを見廻して見ると思いがけなく、そこには、きれいな泉があった。思った通り願いがかなったのでウムイヌカーと称した。今日ではなまってムイヌカーと称している。それからカニマチは宇加地のソーチガマに移り住んだ。まもなく、妹のウトゥチルは兄の安否を気づかって浜づたいを探し廻ったが、どこの浜にも兄の死体は上がってなく、とうとう与久田ビーチ付近まで来た。そこはクージバマと称し砂が深い所で、そこに人間の足跡を発見することが出きた。もしかすると兄のではないかと思いたどって行くと、ソーチガマの前には、おびただしい足跡があり、中をのぞいて見た、すると兄の方は敵が来たと思って奥の方へ逃げて行った。妹はウトゥチルですと兄の方に呼びかけ二人は無事を喜びあった。そして、ふたりは宇加地の丘の方（オカチと称した)、即ちアンナーグシクに移り住んだ。アンナーグシクとは、こんなにすばらしいグシクだという意味から来ているという。それから長浜に移動した。その時には、ウフドンチ、メーヌトンチ、ナカヌトンチ、ニガン、タマイ、イーフの６軒の家が出来ていた、この６軒が長浜の先占開拓者であるという。

㊂　読谷村立歴史民俗資料館「館報」No.1　1976年　　（宮　城　利　旭）

第2節　中部地区概説

中部地区に含めた地域は5市、4町、4村でである。この地域は、北部地区の国頭に対し中頭と呼ばれ、沖縄本島の中央部を占める地域となっている。地形的には北部と大きく異なり、山地がほとんどみられず、琉球石灰岩に覆われた低い丘陵、台地状緩斜面が広く分布し、東海岸に面する低位置地帯には泥灰岩が広く露呈している。この地区の勝連半島や与勝諸島および宜野湾・浦添地域では島尻層群を基盤に広く石灰岩がのるメサ状の台地をつくっているが、この石灰岩台地のへりでは急崖をつくっているために、この天険を巧みに取り込む形でグスクが築かれている。勝連城跡、中城城跡、浦添城跡、喜友名グスクなどはそのいい例である。

現在この地区は、政治・経済・文化の中心地であり、全沖縄の約38%の人口がこの地区に集中している。

三山分立以前の舜天・英祖・察度の三王統をはじめ、後の第一尚氏、第二尚氏王統ともこの地区を基盤としており、過去から現在に至るまで中部地区は沖縄の中枢部となったところである。この地区におけるグスク分布の状況は、首里遷都以前の王宮であった浦添城、護佐丸が居城とした中城城や座喜味城、阿摩和利の勝連城など著名なグスクが集中的に分布している。

この地区では、今度の調査で、合計65のグスクが確認されている。各市町村の内訳は次の通りとなっている。

具志川市　7、沖縄市　5、宜野湾市　4、浦添市 7、勝連町7、嘉手納町　3、北谷町　2、西原町　5、読谷村　12、北中城村4　、中城村3、与那城村5、石川市1。

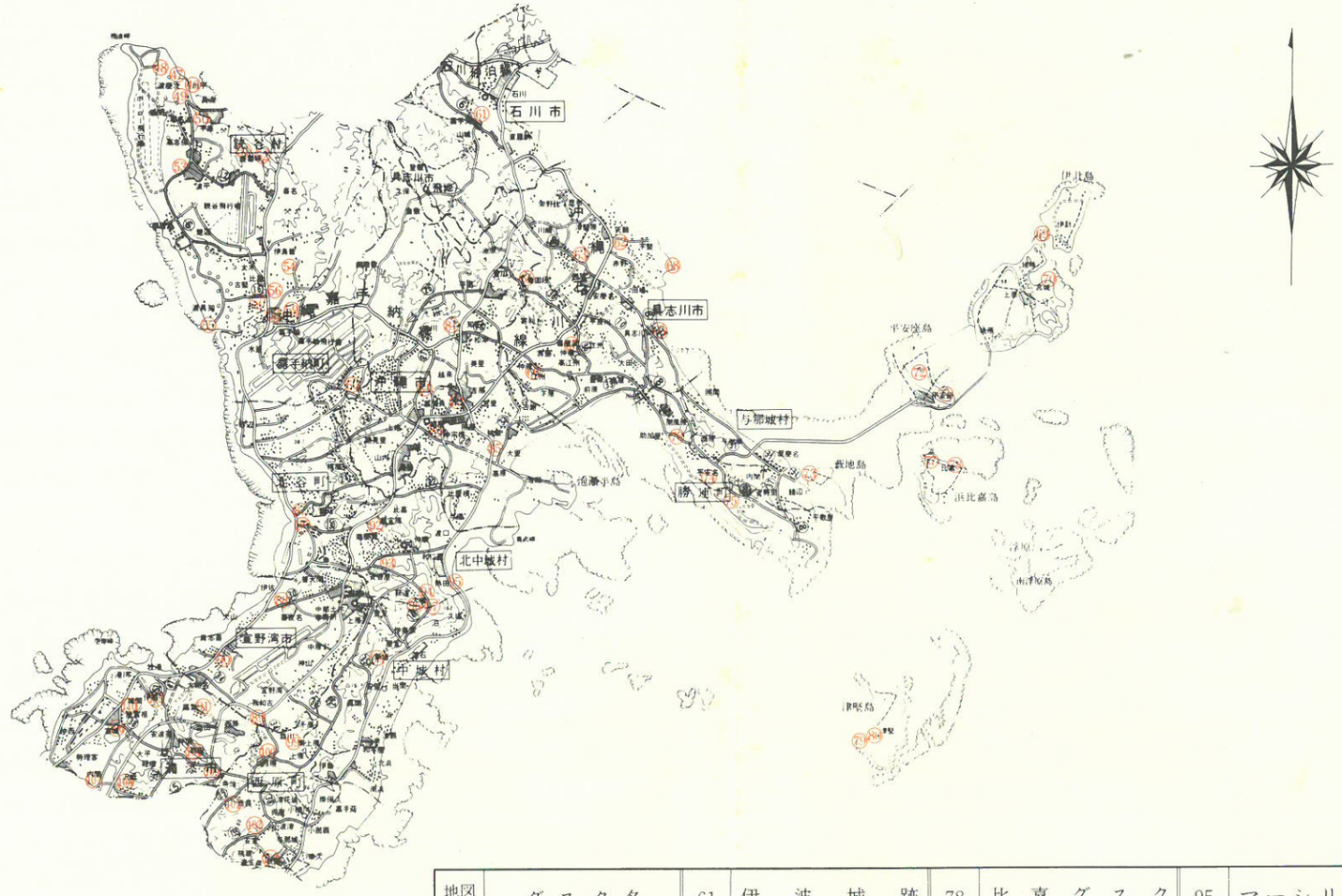
（当　真　嗣　一）

部地区概説

町、4村でである。この地域は、北部地区の国
中央部を占める地域となっている。地形的には
どみられず、琉球石灰岩に覆われた低い丘陵、
に面する低位置地帯には泥灰岩が広く露呈して
島および宜野湾・浦添地域では島尻層群を基盤に
くっているが、この石灰岩台地のへりでは急崖
を巧みに取り込む形でグスクが築かれている。
友名グスクなどはそのいい例である。
化の中心地であり、全沖縄の約38%の人口がこ

の三王統をはじめ、後の第一尚氏、第二尚氏王
過去から現在に至るまで中部地区は沖縄の中枢
におけるグスク分布の状況は、首里遷都以前の
とした中城城や座喜味城、阿摩和利の勝連城な
る。
計65のグスクが確認されている。各市町村の内

市　4、浦添市 7、勝連町7、嘉手納町 3、
2、北中城村4 、中城村3、与那城村5、石川
（当 真 嗣 一）



第12図　中部地区グスク分布

地図番号	グスク名	地図番号	グスク名	地図番号	グスク名	地図番号	グスク名
46	カナグスク	61	伊波城跡	78	比嘉グスク	95	マーシリグスク
47	瀬名波グスク	62	天願グスク	79	クボウグスク	96	中城城跡
48	宇座グスク	63	安慶名城跡	80	新川グスク	97	台グスク
49	トウヤマグスク	64	兼箇段グスク	81	知花グスク	98	新垣グスク
50	マテージグスク	65	具志川グスク	82	越来グスク	99	イシグスク
51	座喜味城跡	66	江洲グスク	83	仲宗根グスク	100	棚原グスク
52	タカヤマグスク	67	喜屋武グスク	84	インジングスク	101	幸地グスク
53	イットカグスク	68	クーグスク	85	アマグスク	102	津喜武多グスク
54	ヤクミーグスク	69	伊計グスク	86	北谷グスク	103	我謝遺跡
55	トマイグスク	70	泊グスク	87	イチグスク	104	浦添城跡
56	ウフグスク	71	平安座東グスク	88	喜友名グスク	105	伊祖城跡
57	メーダグスク	72	平安座西グスク	89	我如古グスク	106	親富祖グスク
58	嘉手納グスク	73	ナチジングスク	90	黄金森グスク	107	内間グスク
59	屋良グスク	74	平安名上グスク	91	嘉数グスク	108	沢岻グスク
60	国直グスク	75	フニグスク	92	ヒニグスク	109	ジングスク
		76	勝連城跡	93	安谷屋グスク	110	皇グスク
		77	浜グスク	94	大城グスク		

読　谷　村

46　カナグスク

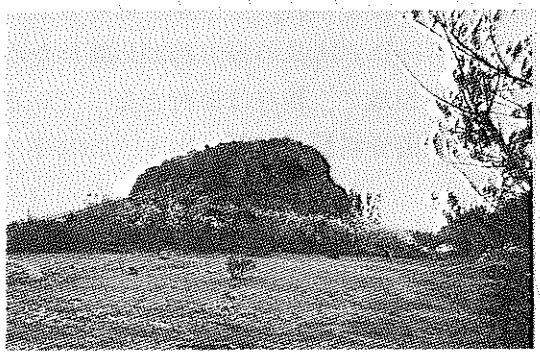
瀬名波部落の北方、残波岬へ通ずる道路の右側、通称境地原にある。元米軍基地内の海にせり出し絶壁となっている崖側にあったが、完全に破壊され旧地形を留めていない。

伝え話に「王のヘージュリングワ（私生児）がタキダキをさがしてそこに住みついた。しかし、そこは水がなく西方のウーザグスクに移り住んだという。石垣もあったが、瀬名波の墓をつくるために持ち去った」という。

崖下に古墓があり、カナグスクの門中が拝んでいる。㊂『読谷村のグスクについて』読谷村立歴史民俗資料館　館報　No.1　1976年　　（島　袋　　洋）

47　瀬名波グスク（せなはグスク）「カクリグスク」

読谷村字瀬名波拝之前原に所在し、川平から残波岬に至る道路沿いに立地する。石灰岩が突出する小丘陵で、丘陵北西の岩陰に厨子甕の破片が散乱する。『神と村』（仲松弥秀著）では「カクレグスク」と紹介されているが、座喜味では瀬名波グシク（シナハグシク）と称し、拝んでいる。丘陵南東には、ミナハウグワン、またはシーシウグワンと呼ぶ拝所がある。㊂読谷村立歴史民俗資料館「館報」No.1・1976年（宮　城　利　旭）



PL.8　瀬名波グスク近景

48　宇座グスク（うざグスク）

読谷村字宇座平川原に所在し、旧宇座部落の北方約1kmの石灰岩小丘陵に立地する。ススキ・雑木等が茂る原野で、丘陵中腹には石灰岩を掘り込んだ、鍋之甲（ナービナクー）、山内（ヤマチ）、宇座イェーキー等の由緒ある墓が見られる。墓は、宇座区民によって清明祭の時、拝まれている。部落からグスクに至る途中には、シマミンと称されるところがあり、そこは葬式の時、死者が最後に島（部落）を見るところであると言う。㊂読谷村立歴史民俗資料館「館報」No.1　1976年、宇座区公民

館「残波の里」(宇座誌) 1974年　　(宮　城　利　旭)

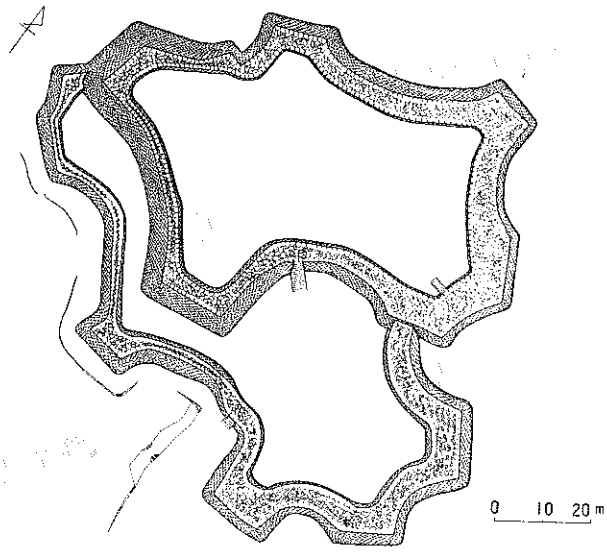
49　トウヤマグスク

読谷村字長浜の後背地を、地元の古老（金城太郎・明治19年生）は「トウヤマグシク」と称し、そこには無縁仏の遺骨があるという。この一帯は、長浜前原付近に属し、標高約70m前後の石灰岩丘陵が東西に走行する。ススキ・雑木等が茂る原野とサトウキビ畑からなり、位置・性格等詳細は不明である。㊂読谷村立歴史民俗資料館「館報」No.1　1976年　　(宮　城　利　旭)

50　マテージグスク

長浜部落の南方にある岩山で、現在タンクが設置されている付近を呼んでいるという。しかし、マテージという地名はあるものの、グスクと称しているのはそこを拝んでいる座喜味部落の1部の人たちであるという。石垣等の遺構や考古学的な遺物等はみられない。ただ古墓があるらしいが確認されてなく、詳細は不明である。又、マテージグスクの南方約30m離れた吹出原にはグスクヌウチと称する所があり、そこは平坦地で、現在は原野となっている。㊂「読谷村のグスクについて」読谷村立歴史民俗資料館「館報」No.1　1976年　　(島　袋　　洋)

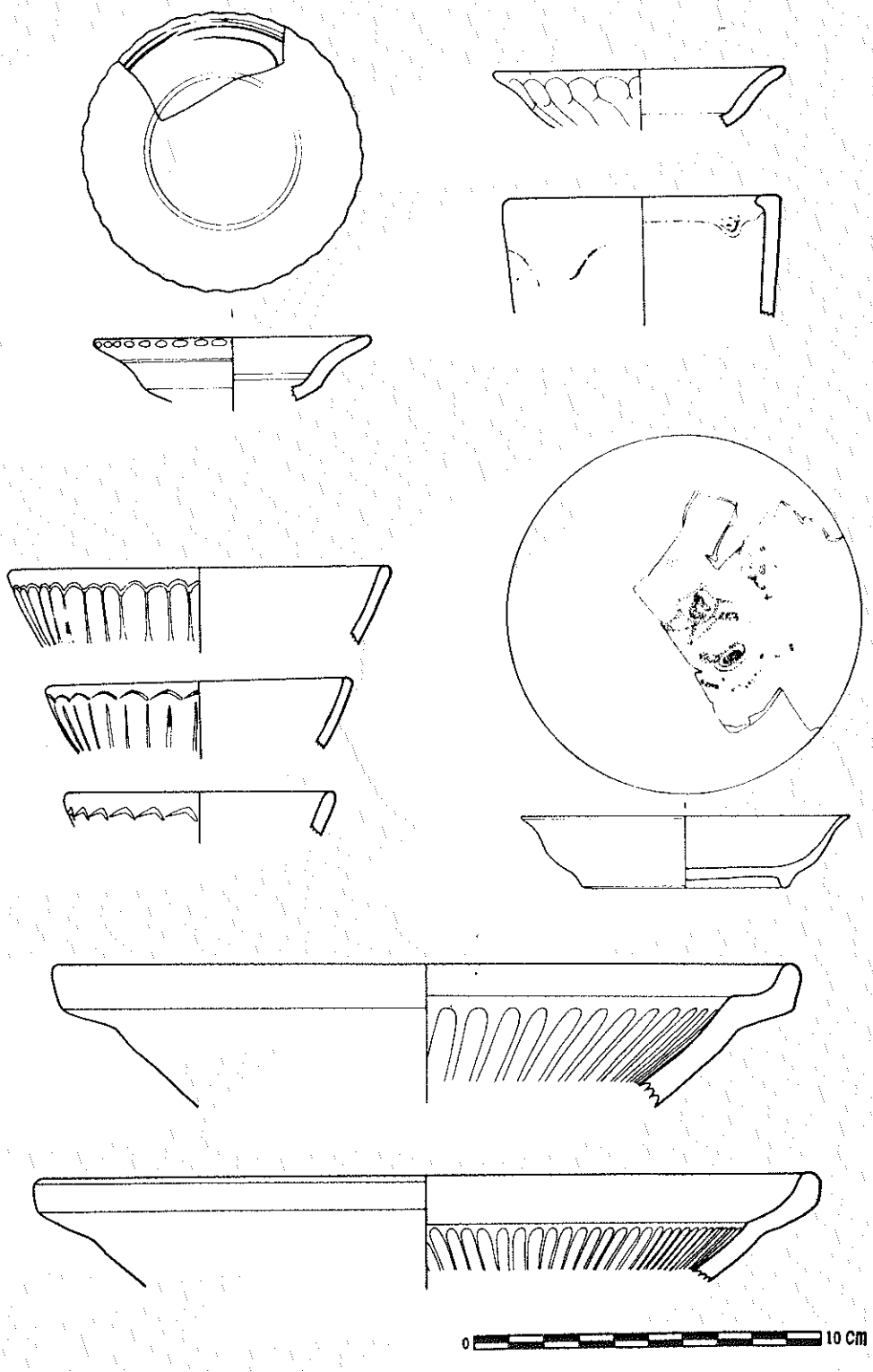
51　座喜味城跡（ざきみじょうせき)「読谷山グスク」



第13図座喜味城跡実側図

読谷村座喜味部落の北方、読谷村で最も高位置の国頭マージの丘の上に形成される。眺望がよく、本島のかなりの地形と周辺の島々をも望見できる。1420年代の頃に護佐丸が築かせた城であると伝えられる。彼の父は山田グスクの城主であり、彼自身は第一尚氏王朝を築いた尚巴志の北山城攻略軍に加わり、統一王朝形成への大きな役割を果たしている。

座喜味グスクは北山攻略の後、



第14図座喜味城跡出土遺物

護佐丸が読谷山按司となり、要衝をおさえるために築いたものだと伝えられる。

城の造営は赤土の丘の斜面の中途に石垣を築き、凹地は石塊を大量に詰めて平坦地を造成した。石積みは大部分が切石積みで琉球石灰岩を利用している。胸壁があった跡がうかがえるが、高さは不明である。城壁は平面台形の突出部をつくりながら展開する沖縄独得の配置で、戦略上の配慮とみられる。郭は二つある。当初は上段の郭がつくられ、次いで下段の郭がつけ足されたようである。いずれの郭も南側に石造拱門、内側には中央に扉の取付孔がみられる。

城壁の積み方は亀甲乱れ積みが殆んどで、下段の郭の西内壁で野面積みがみられる。コーナーは丸味をもたして積みあげている・石垣を貫いて水抜き孔を数ヶ所、地形にあわせて設けてある。

遺物からみるとこのグスクはグスク土器は出土せず、伝承にほぼ近い15世紀頃に属するものが古く、護佐丸が中城城へ移った後の16世紀に属するものまである。比較的短期間に限って使用されたグスクであり、グスク時代後半期を代表するグスクのひとつである。

斜面は石塊を詰めて造成したことは前述したが、上段の郭ではこの石塊下の斜面にも遺物包含層があり、また赤土には柱穴群のあることが確認された。すなわち、城壁積み上げ前に掘立柱の構造をもつ建物があり、わずか5cm程度ではあるが遺物包含層を形成した時期があったのである。しかし出土した青磁などからすると、石塊上の上層との時期差はなく、同時代における近い期間内の相違かとみられる。上段の郭には上層東側平坦地に館跡が検出されている。微粒砂岩（ニービ）の礎石を配し、軒下には切石列を並べた南西向きの建物である。瓦の出土はみられないことから、板葺きの屋根ではなかったかとみられる。

出土遺物はきわめて少量の土器、須恵器のほか、舶載の陶器、青磁、白磁、染付、古銭、炭化麦、貝類などである。刻画石版もみつかっているが、所属時期は不明である。これらの遺物の中には16世紀に及ぶものもあり、15世紀半ばに護佐丸が中城城へうつった後も、ひきつづき何らかの形で使用されていたことがうかがえる。

昭和48年以来、遺構調査と修復工事が行われている。　（安　里　嗣　淳）

52　タカヤマグスク

読谷村字座喜味部落北東に所在し、木がこんもり茂った石灰岩丘陵。グスク西側の岩陰に岩窟墓が3ヶ所ある。ここは伝承によると、国頭方面から移動せられた按司墓であるといい、現在、門中が清明祭の時に拝んでいる。㊂読谷村立歴史民俗資料館「館報」No.1　1976年

（宮　城　利　旭）

53　イットカグスク

読谷村波平のバス停西側、OK給油所の裏にある赤土の丘で松林になっている。

PL.9　イットカグスク遠景

このグスクに関して二つの伝説がある。一つは「護佐丸が山田城から座喜味城へ移る際の工事の間、一時的に居住していたのでイットカグスク（一時的な城の意味）と称した。」もう一つは「昔、波平部落の頭（波平大主）が西の部落に住んでいたが東の部落に移るため仮りの住いとして、いっときそこに住んでいたのでイットカグスクと後の人が命名したものだそうです。」

グスク内には遺物、遺構などはみられない。南側に波平のガン屋がある。㊂名嘉真宜勝「読谷村のグスクについて」読谷村立歴史民俗資料館「館報」No.1　1976年

（島　袋　　洋）

54　ヤクミーグスク

読谷村大湾部落の東北深迫原にあるアジウファカと称するガマ墓がそれである。

本グスクに関するいい伝えがある。「昔、兄にはヤクミーと称し、兄のグスクであった。兄は憶病者で遠く山の中へ隠れていたという。」

ガマ墓にはクチタマ（遺骨）も納っていて、現在も部落で拝んでいる。㊂名嘉真宜勝「読谷村のグスクについて」読谷村立歴史民俗資料館「館報」No.1　1976年

（島　袋　　洋）

55　トマイグスク「渡具知グスク」

トマイグスクは、一名クマイグシクと言い、読谷村字渡具知置原に所在する。比謝川河口北岸、標高約22mの石灰岩丘陵に立地する。河口側は切り立った断崖をなし、中腹に古墓がある。現在、この墓は清明祭の時に拝まれており、また、次のような墓にまつわる伝承がある。「昔、北山のワカアヂが難を逃がれて、一時そこに身を隠していた。しばらくして北山がおちて、金武の並里へ移動していった。金武のナンカバアで殺されたという。」

丘陵上には、サンスクリット文字（サンスクットとは、古代のインド語でインド・

ド・ヨーロッパ語に属する）で「ア・ヴィ・ラ・ウン・ケン（漢字では、阿毘羅吽欠と書く）」と彫られた石碑（45cm×24cm・材質はニービ）が、碑面を河口に向けて立っている。㊂読谷村立歴史民俗資料館「館報」No.1　1976年、小学館「国語辞典」金田一京助・佐伯梅友、大石初太郎編1969年　（宮　城　利　旭）

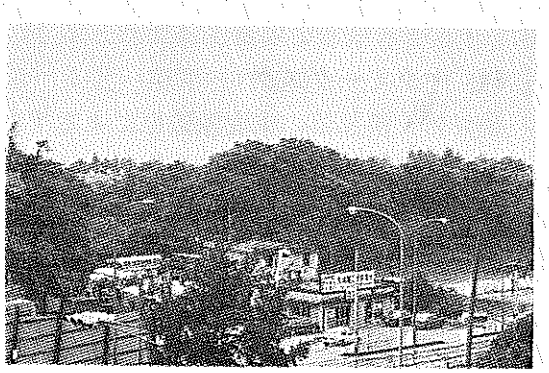
56　ウフグスク

読谷村字大湾牧原に所在する。メーダグスクの東側、国道58号線を距てた道路沿いに立地し、南側を比謝川支流の長田川が流れている。この一帯は終戦後、米軍が県道１号線（現・国道58号線）の建設を行なっており、さらに復帰後は、国道の拡張工事が行なわれたため、地形は大部変貌してしまった。かろうじて、片すみにウミナイとウミキーの墓が残っているが、しかし両墓とも後世に墓慌しの被害にあっており、また直接グスクに関連するかどうかは不明である。㊂読谷村立歴史民俗資料館「館報」No.1　1976年　（宮　城　利　旭）

57　メーダグスク

読谷村字大湾原に所在し、比謝橋の橋の北西、標高約30ｍの石灰岩丘陵に立地する。拝所と按司墓が４ヶ所あり、拝所からはグスク系土器、須恵器、外国製陶磁器、青磁等が出土する。他に比謝川河川には、トウマイグシク・ウフグスク・屋良グシク等が分布する。㊂読谷村立歴史民俗資料館『読谷村の埋蔵文化財』遺跡分布調査報告書1979

（宮　城　利　旭）



PL.10　メーダグスク近景

嘉　手　納　町

58　嘉手納グスク（かでなグスク）

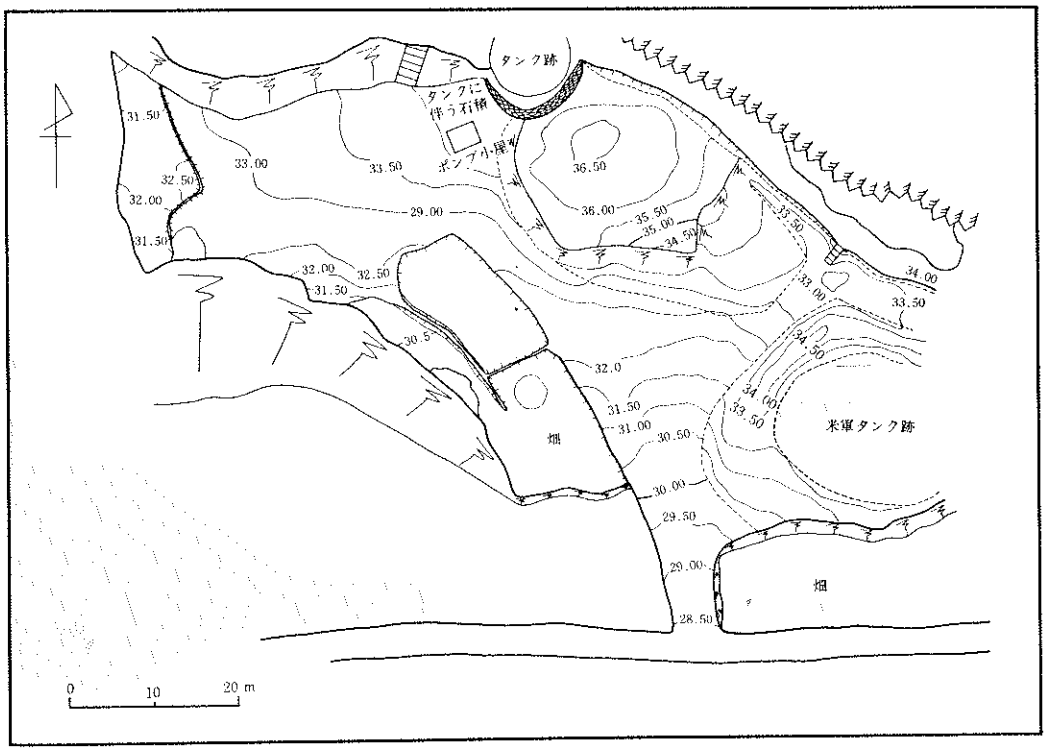
嘉手納町の北側にある比謝川沿いに延びる石灰岩丘陵上、国道58号線沿いに位置する。

現在、町中央公民館が建設されており跡形もない。

グスクが存した丘陵下にはウブガーと称するカーがあり、子供が産まれた時などそこから水を汲んだということである。今では、井戸の形だけを国道沿いにつくり、そこを拝んでいる。　（島　袋　　洋）

59　屋良グスク（やらグスク）

嘉手納町字屋良にある13－14世紀のグスク跡で、現在は屋良城跡公園となっている。比謝川の中流沿い、河口から約３km上流にいったところに立地し、グスクの北側は比謝川河岸に接して比高６ｍの絶壁をなし、東と西は谷間によって台地と分断され独立丘的な様相を呈している。このグスクについての古記録や文献は皆無で、



第15図屋良グスク地形図（1978年測量）

築城の来歴については詳らかでない。古老のいい伝えによれば、阿麻和利の出生地とされるが、出土遺物で見た限り時代的に符号しない。1978年発掘調査が実施された。一の郭相当の部分は戦後米軍による燃料タンク設置の際旧地形が損われており、二の郭は保存がよくそこでは掘建柱建物跡・敷石建物跡などが検出された。出土遺物は、グスク系の土器と輸入陶磁器を主体として瓦も出土している。

（当　真　嗣　一）

60　国直グスク（クンノーグスク）

嘉手納ロータリーの南東約2km、嘉手納飛行場敷地内にあり、旧北谷村字国直の南方に位置する。標高94mの琉球石灰岩から成る岩山で、頂上と北部が削り取られてレーダーが設置されており、原形を留めていない。1979年の米軍基地内文化財調査によると、グスクに係る遺物は採集されてなく、葬所としての性格を有するグスクであるが、高御墓は確認されていない。㊂『昭和54年度文化行政要覧』沖縄県教育委員会　1980年3月

（島　袋　　洋）

石　川　市

61　伊波城跡「美里グスク」

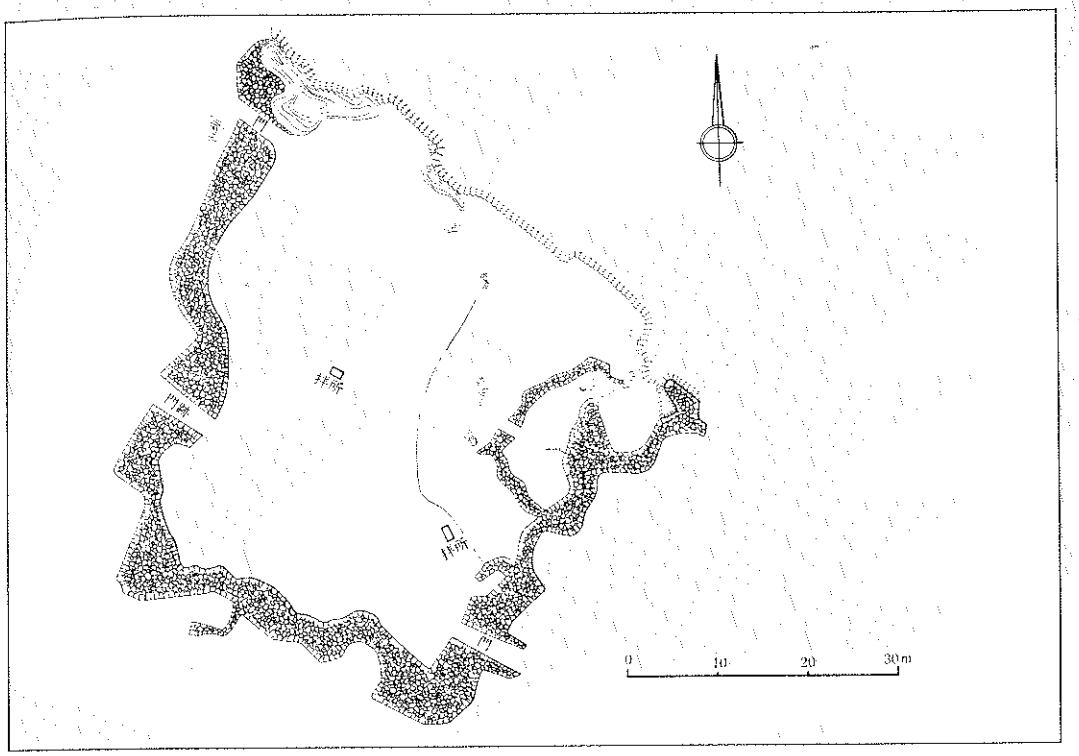
石川市字伊波、後原に所在する。石川の町を見おろすように、琉球石灰岩の断崖が続く。その中間部の微高地、ここに築かれたのが、伊波城跡である。標高約87m、断崖となった所で約80m、全体として南側に傾斜してゆくここが約60m、南北へややひし型に近い形をなす。

グシクは単郭式で、石垣は野面式である。南側正面の階段だけで切石が見られるが、後で改築されたものだと考えられる。

築城の時代については、1332年怕尼芝に亡ぼされた今帰仁城主の子孫が逃れ来て嘉手苅部落の山中洞穴にかくれていたのを、住民が推戴して伊波按司としたという。そして16世紀尚真王によって各地の按司が首里に居住せしめられるまで4代続いた。城跡の南北の石垣付近の断面には、グスク時代の土器を中心とした貝層がみられこれらは更に内部へと続きそうである。また南外側の畑地一帯でも、陶器、磁器、グシク土器がみられる。

伊波城跡は、昭和36年（1961年）史跡として指定されている。　㊂『文化財要覧』文化財保護委員会

（座間味　政　光）



第16図伊波城跡実測図（1960年1月19日実測）

具志川市

62　天願グスク（てんがんグスク）「つちグスク」

具志川市字天願小字町原に位置し、『つちグスク』とも呼ばれている。

天願の部落からは南東方向になり、南北に約70m、東西に約40m、標高およそ35m、石垣等も確認できず、樹々の茂った森である。西側では、沖縄貝塚時代前期の天願貝塚と接している。

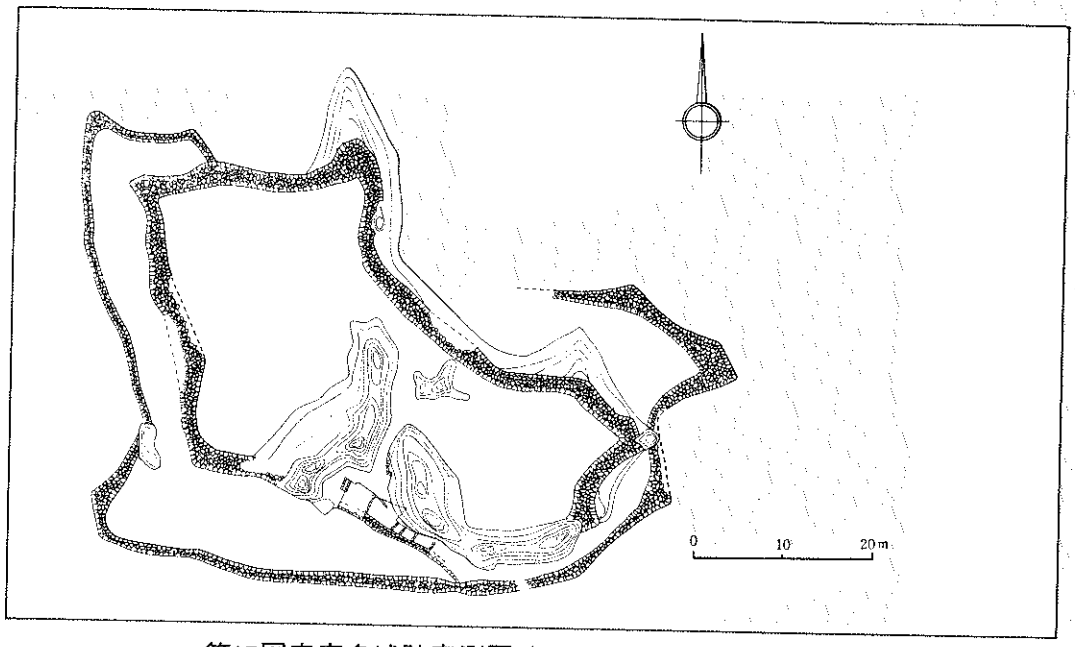
築城年代については、史料がなく詳らかでないが伝説では今帰仁城で伯尼芝に討たれた仲昔今帰仁王統の子孫が、この地に逃げてき、御嶽にグシクを築いたが、その後台頭としてきた安慶名大川按司一族の手に移ったという。

天願グスクの発掘調査は未だだが、踏査でも遺物は採集されてない、遺構も確認されてない。㊂『具志川市誌』具志川市1970年、『具志川市遺跡』具志川市教育委員会・1978年3月

（座間味　政　光）

63　安慶名城跡（あげなじょうせき）「大川グスク」

具志川市字安慶名亀甲原に所在し、一名大川グスクという。城跡はこの北側を流れる天願川の河畔に聳え立つ約49ｍの岩山の断崖と急傾斜を巧みに利用して築いた山城で自然の岩々の間にも見事な石垣をみせている。



第17図安慶名城跡実測図（1960年２月９・10日実測）

PL.11　安慶名城跡（石垣）

城跡は石灰岩を中心とした内郭と、それを抱護する外郭からなる輪郭式である。外郭の石垣は、前面の中腹から左右に包みまわし、背面で石積の線は下っていく。途中で消え未完成である。内外郭に城門があったといわれるが、内郭だけが現存する。この城門は自然の岩盤を約2.50ｍ穿つかって造られている。ここでも細かく岩の間に切石がはめ込まれている。敷居とまぐさをはめこんだ跡も、両壁に残っている。この城門の岩壁の上には、伊波城、今帰仁城への遙拝所があり、一の郭の前には安慶名城の守護神クニツカの御イベが祀られている。

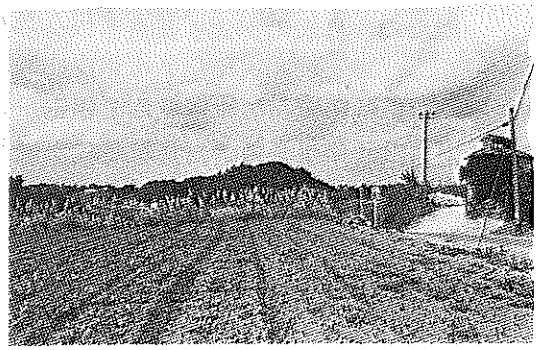
伝説では、城の歴史は三山分立時代、1322年伯尼芝に亡ぼされた仲昔今帰仁按司の子孫、安慶名大川按司に始まるという。初代安慶名按司は、三男を具志川グシクへ、四男を喜屋武グシクに配し、三代70年余にわたって具志川地域を支配した。尚

真王の頃廃せられたとのことである。

安慶名城跡の発掘調査は未だないが、グスク時代の土器片、須恵器片、中国明の16世紀前後の青磁が採集されている。

昭和36年（1961年）史跡に指定されている。㊂『具志川市遺跡』具志川市教育委員会1978年3月、『具志川市誌』具志川市1970年　（座間味　政　光）

64　兼箇段グスク（かねかだんグスク）



PL.12　兼箇段グスク近景

具志川市字兼箇段にあり、標高34mの石灰岩からなる独立丘に形成されている。この独立丘は周辺の平坦地に比べ台形状にひときわ高く聳え立っており、遠くからでもすぐにその位置が確認できる。グスクと呼ばれる岩山の頂上は約25m²の平場となっている。この平場には黒褐色土の遺物包含層が堆積しており、そこからグスク系土器、輸入陶磁器、自然遺物などが発見される。また、平場の東側よりには「イビ」石と思われる人工的に加工された円箇状の石灰岩が見られる。

伝承によれば、安慶名グスクの築城以前に、伊波按司は、この地を候補地として検討したが、規模狭少との理由で築城を断念したと云われている。このグスクは安慶名城跡の西南西約1.8kmの近距離に位置している。グスクの周辺には拝所などがあり、グスクそれ自体兼箇段のお嶽とも呼ばれている。現在、正月、2月、5月、6月、8月15夜、9月に部落でお祭りをおこなっている。㊂『具志川市誌』具志川市誌編集委員会1970年　（当　真　嗣　一）

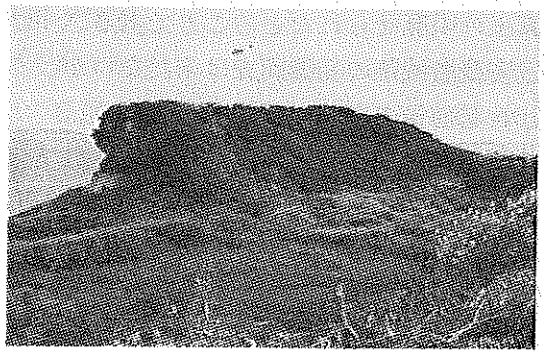
65　具志川グスク（ぐしかわグスク）

具志川市字具志川は、海岸方向に緩やかな傾斜をし、海岸手前で標高18m程の断崖線をつくる。東側では海岸線までしばらく湿地帯となる。その湿地帯の北西隅、海に突出するように独立した琉球石灰岩がある。この丘陵上に築かれたのが、具志川グスクである。周囲はすべて絶壁となっており、グスクの西側、県道37号線との間に土を盛った細い道があるのみである。

グスクの規模は海岸線と県道に狭まれるように細長く180m、奥ゆき60m、標高30

mで、石垣は取り壊され残ってない。

築城の時期は、15世紀初めごろ、具志川地域で一大勢力をきずいた安慶名大川按司の三男、後天願按司に、始るというが詳らかではない。



PL.13　具志川グスク遠景

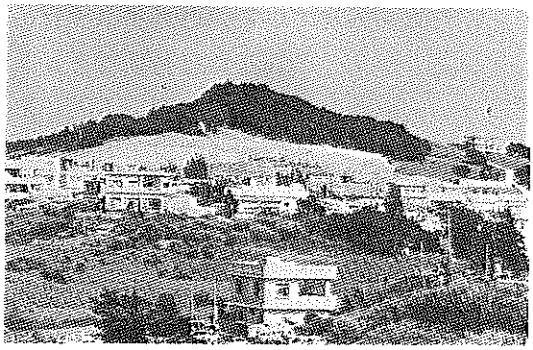
グスクの海岸側は、風潮による侵食が激しく海岸にはかなりの転石がある。そこでは遺物の採集も可能で、沖縄グスク時代のフェンサ上層式土器、沖縄貝塚時代後期の技法をうけついだ、フェンサ下層式土器、沖縄産陶器、海外貿易で持ちこまれた磁器が報告されている。フェンサ式の上層そして下層の土器が出土することで、今後グスク、貝塚時代を解明する貴重な遺跡となる。琉大による発掘が行われ報告書も刊行される予定。㊂

『具志川市遺跡』具志川市教育委員会1978年3月、『具志川市誌』具志川市1970年、藤本英夫・名嘉正八郎編『日本城郭大系―北海道・沖縄編―』昭和55年5月

（座間味　政　光）

66　江洲グスク（えすグスク）

県立中部病院のある赤道十字路を東・勝連半島方向へ約300m、右手100m奥に緑の丘陵が見える。ここ字宮里、小字宮城原に築かれたのが、「えすのつちグスク」、「江洲グスク」である。



PL.14　江洲グスク近景

築城の時期は不明だが、尚巴志の6男布里、尚泰久の5男宗和から三代が居城し、首里における尚一族の没落とともに廃城になったといわれる。この尚一族以前にも安谷屋グスク系の江洲按司が居城したと伝えられている。

発掘調査は未だ実施されてないが、グスクの南西中腹には、江洲按司、祝女の墓があり、前庭部には黒褐色の包含層が残っている。グスク時代の土器片、輸入された須恵器、磁器そして獣骨が表採された。また炭化米粒も採集されている。

グスクは南北に約150m、東西に約60mの石灰岩を利用した一種の山城である。グスクの特徴である石垣は全く見つからず、その痕跡さえも見つけることができな

い。つちグスクの別称の通り、土塁のグスク、石垣のないグスクではなかったろうか。グスク周辺の字宮里、字江洲はいずれも石を産してない。㊂具志川市『具志川市誌』、具志川市教育委員会『具志川市遺跡』、名嘉正八郎藤本英夫編『日本城郭大系』昭和55年5月　（座間味　政　光）

67　喜屋武グスク（きゃんグスク）「喜屋武マーブ」「火打嶺グスク」

喜屋武グスクは、チャンマーブあるいはフィータチモー（火打嶺）とも呼ばれ、具志川市字仲嶺、仲嶺原に所在する。フィータチモーは烽火台として使用された事に由来するという。

伝承では、14～15世紀の始めにかけて安ゲ名大川按司は四男を、喜屋武に配した。この子の喜屋武按司、,孫栄野比按司、三代のグスクだという。のち勝連阿麻和利征伐の中心鬼大城は、栄野比按司の長男にあたる。

昭和6年頃地元の道路工事でグスクの石は、すべて持ち去られたために現在石垣等はなく、グスクとしての形態をのこしてなく、東南側で按司墓を残すのみである。

中城湾の低地から除々に傾斜を増して来たクチャ層は、海岸線と並行するように標高100m前後の断崖線を形成する。江洲グスク、喜屋武グスクは、その淵に立つ琉球石灰岩の丘陵に建設されたものである。

尚グスク周辺には、いくつかの転石が見られる。グシク内側でも南北に走る大きな亀裂を見る。グスク全体として危険な状況である。按司墓付近では、その亀裂から流れ出たと思われる、グスク時代の土器片、磁器、すり石が採集されている。

（座間味　政　光）

68　クーグスク

具志川市大字宇堅小字岩地原にあり、金武湾に舌状に突出した標高16m前後の岩山を云う。クーグスクと呼ばれるこの岩山は標高4～5mの砂丘で連結されているがこの砂丘上には弥生式土器と鉄斧を出土した宇堅貝塚群B地点が立地している。

グスクは碗をふせたような景観を呈し、その頂部は幅6m、長さ28m程の長楕円状を呈している。表面踏査の結果では石垣遺構などは認められなかった。三方は海に囲まれ、北西側一方のみが前述の砂丘を通じて陸と繋がっている。このグスクの南約1kmの海をへだてた対岸には具志川グスクが立地している。

このグスクは徴すべき遺構がなく、地元の人びとの間でもよく知られていない。

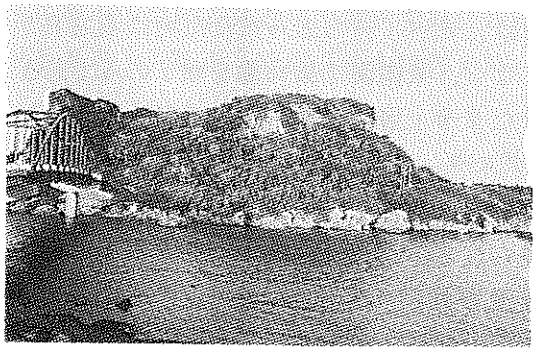
（当　真　嗣　一）

与 那 城 村

69 伊計グスク（いけいグスク）

伊計島の西南端に隣接して海中にある標高48.8mの岩山がグスクである。グスクの北側は、現在伊計島と砂洲によってつながり陸けい島となり、また宮城島からも同グスクの西側へ大橋がわたされ景観がかわりつつある。

伊計グスクは島で最も高い地域にあたりしたがって眺望がきくところにある。グスク内部は中央部が低平な台地を呈し、西側のグスク先端付近は段々状にやや高くなっているが、そこでも約100m²程の平坦地が存在する。グスク内の石垣は、東側縁端の比較的傾斜がある一帯にみられ、岩の上にわずかにのる形で現在残されている。出土する遺物は東側の石垣崖下部一帯と海岸側に多くみられ、これまで輸入陶磁器、グスク土器、須恵器、石斧転用石器、凹石、磨り石等がある。転用石器、凹石、磨り石等がある。

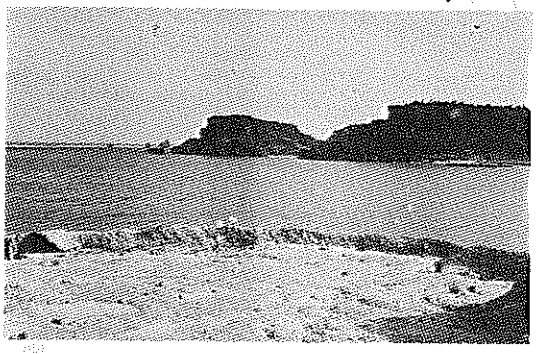


PL.15 伊計グスク近景

伊計グスクは今日、拝所として祭られ、グスク内部に「伊計島城之殿」、「タキキョの御神」、「大形貝を奉納した祠」の計三つのブロックコンクリートで施された祠が存在する。㊂沖縄県教育委員会「伊計島の遺跡」1981年3月

（上　原　　静）

70 泊グスク（トウマイグスク）



PL.16 泊グスク近景

与那城村字宮城泊原に所在する。標高約15m、面積約2500m²で、独立した琉球石灰岩丘上に形成されている。四面とも断崖絶壁で、北側は海に切り立っている。東側には城内へ登る小さな道があり、城門の跡らしいのが残っている。野面積みの石垣が、北側を中心によく残っており、2つの郭が確認できる。伝承では、泊グスクは川端イッパーの居城で、対岸の伊計グスクと勢力争いをしていたと言われている。

遺物は土器や中国陶磁器が検出できる。城内には遺物包含層がよく残っている。

崖下でも遺物が採集できる。㊂『郷土』第2号・沖縄大学学生文化協会・1965年

（金　武　正　紀）

71　平安座東グスク（ヘンザアガリグスク）

与那城村字平安座の東ハンタ原にあるグスク。平安座島の脊梁部台地の東南方、標高80m余の琉球石灰岩からなる小さな雑木に覆われた森で、グスクの頂上部は岩上墓となり、現在拝所となっている。岩上墓の石積み以外、石垣などの遺構もなく、原始・古代の遺物も採集できなかった。グスクにまつわる伝承などほとんど残っていない。東グスクは首里王府時代に火立の場所であったとも言われている（具志川市誌編纂委員会「具志川市誌」1970年）。このグスクに接しその南西側に東ハンタ原貝塚があったが、石油貯蔵タンク建設でほとんど破壊されてしまった。

（嵩　元　政　秀）

72　平安座西グスク（ヘンザイリグスク）「西グスク」

115-63m

与那城村字平安座にあるグスク。島のほぼ中央部に位置し、島で最も高い所（標高115m余）の琉球石灰岩上にあり、南西側は断崖となっている。野面積みの石垣がめぐらされ、面積は30000m²余ある。築城年代は不明であるが、勝連城の浜川按司の次男高花按司の居城と伝えられるが定かでない。

グスクの南西側崖下から土器、石斧、石棒、凹石、石弾、鉄製刀子などを確認したのは多和田真淳氏で「平安座貝塚」と名づけている（文化財要覧・1956年）。1968年、友寄英一郎教授らによって崖下の4地点の発掘調査が行なわれた。A地点をみると、包含層は岩壁のところが厚く約40cmあり、単一文化層であった。フェンサ上層式土器を主体に中国製青磁、南蛮陶器、鉄製の刀子：鏃・鎌・石斧、凹石、砥石、貝錘、貝さじ、炭化米、麦粒などが出土している。岩陰の包含層から二次的に埋葬された人頭骨も出土した。

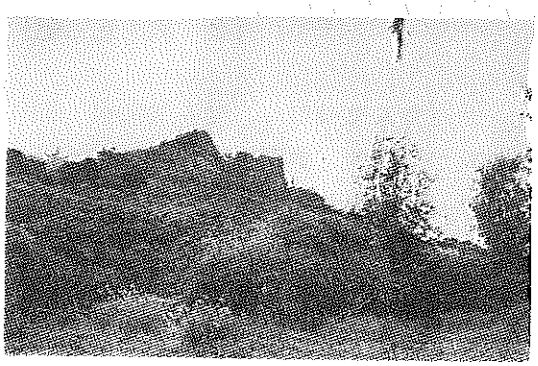
グスク内には祠があり、村の重要な拝所となっている。「琉球国由来記」の平安座村にある森城はこのグスクであり、「神名・島添大神之御イベ」が鎮座している。

「おもろさうし」（第16―22）に

一　ひやむざ、かなもりに、
　　いちへき、かみしらたる、
　　しつらいす、ことなおし、かみやれ、
　又ねたて、かなもりに

と歌われている平安座金森も、この西グスクであろうと言われる。（嵩　元　政　秀）

73　ナチジングスク



PL.17　ナチジングスク近景

与那城村字屋慶名にある無人の島、藪地島にあるグスク。ヤブチ城とも称している（新城徳祐「沖縄の城跡」1982年）。島の西北端の琉球石灰岩上、標高42.4mの島でもっとも高い所に位置している。北から西側は断崖、南東側に大きく傾斜している。頂上部には平坦面もなく、石垣などの遺構や拝所も見当らない。一帯は草木に覆われている。頂上部より20数m南側に降りたところに目立たぬ小さな拝所がある。

昭和53年グスクの頂上部一帯や断崖下を表面調査をしたが、原始・古代の遺物は採集することができなかった。ナチジンを「今帰仁」と書き、今帰仁城（北山城）と関連づける研究者もいるが、確証は何一つない。ヴェールに覆われた幻のグスクである。

（嵩　元　政　秀）

勝　連　町

74　平安名上グスク（へんなういグスク）「平安名グスク」

勝連町字平安名にあるグスク。平安名部落の南西方、標高100m余の琉球石灰岩上にあり、宇江城とも書く（福田恒禎編「勝連村誌」）。築城者や築城年代は全く不明。グスク内には拝所も石垣などの遺構も見当らないが、南西側崖下から土器や青磁などが採集されている。グスクの東北端に坊主墓と呼ばれ、拝む人もなく墓の庭（ナー）はあるが墓穴のない奇妙な墓が一基ある。

（嵩　元　政　秀）

PL.18　平安名上グスク近景

75　フニグスク

勝連町字平安名にあるグスク。平安名部落の南方、与勝高校の西側にある琉球石灰岩の丘陵で、南西側は断崖となっている。10数年前からの採石工事によってそのほとんどが破壊されてしまった。破壊前にも拝所はなく、原始・古代の遺物、遺構も確認できなかった。その名称の由来について『勝連村誌』の編者福田恒禎氏は「船(フニ)の形をした丘陵からきたのでは…」との御教示があった。その性格が解明されないまま破壊されてしまった。　（嵩　元　政　秀）

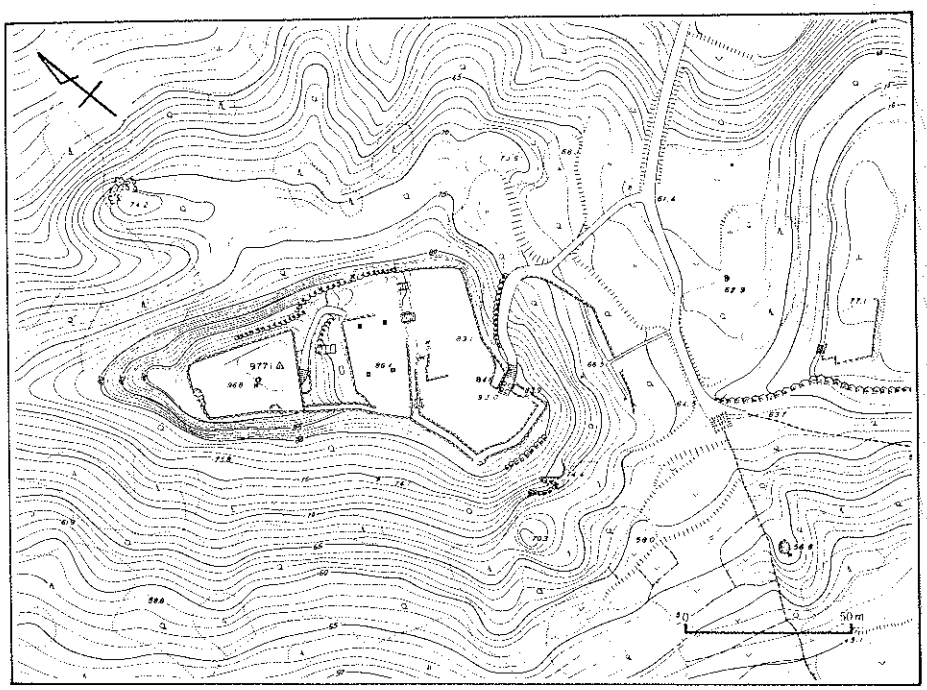
76　勝連城跡（かつれんじょうせき）

勝連半島の南風原部落の東方丘陵に形成された東西に細長いグスクである。眺望がよく、周辺の海洋、島々、中城城などが遠望できる。

グスクはこの半島の南側に面する長大な石灰岩丘陵崖線の西端を占める。城門のある郭（四の郭）で一段低くなるが、西方へ一段ずつ高くなり、頂上部では約98mとなる。

段状の丘陵の、東の丘の端を区切り、周縁に石垣をめぐらしている。各段は平坦な広場が造成されている。

「南風原門（はえばるじょう）」と称される城門が四の郭の南側にあり、その反



第18図勝連城跡地形図

対側には「西原門（にしばるじょう）」があったといわれる。この四の郭には５ヶ所の井戸がある。

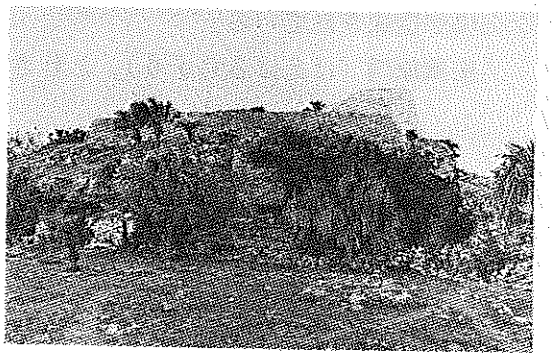
南風原門から上段の三の郭へ石畳道がとりつけられている。石畳道を登りつめたところに三の郭の門跡がある。４個の礎石が据えられているので、木造の四脚門があったと考えられている。三の郭は広い平坦地であるが、拝所として後世につくった石列以外には内部への建造物はみられない。三の郭と二の郭は約２ｍの段差があり、石積みによって仕切られている。

二の郭と三の郭は一見別々の独立した区画の如くみえるが、二の郭が館の基壇部であり、三の郭はその前庭部である。基壇の館跡は７間６間の比較的大きな建物である。微粒砂岩の礎石を配し、壁下石列および軒下の雨落溝をとりつける。また、三の郭の前庭には石段をとりつけてある。

この館の基壇は緩斜面に石灰岩塊の石粉を詰めて平坦面を造成してつくってある。この基壇造成前にもこの段に生活面があり、陶磁器や炭化米などを出土する遺物包含層がある。

二の郭の館跡の隅から石畳がとりつけられ、頂上の一の郭へと続く。途中から石段となり、一の郭の門へとつながる。この門は拱門であったが、現在は失われている。

一の郭はもともと巨大な岩山の突出部であった。当初は沖縄貝塚時代後期後半の人々の居住も行われた。その後、岩の裂け目に石塊が詰められ、さらに凹地や傾斜したところにも石塊が敷かれ、平坦面が造成された。岩盤は平坦に削られ、柱穴が穿たれ、掘立柱の建物のつくられた時期もあった。また礎石もみつかっていることから、礎石式の建物もあったようである。このときの建物の屋根は瓦葺きであったと考えられる。この郭からは大量の古瓦が出土する。



PL.19　勝連城跡石垣

城壁は比較的小ぶりの長方形主体の積石によるものが多い。胸壁の存在ははっきりしない。二の郭基壇の仕切りの石垣はかなり大きな積石を布積によって積んでいる。しかも二つの異なる時期の石積垣がみられる。

一方、城壁外の崖下には貝塚の形成がみられる。上層は城内からの落下堆積物であるが、下層はグスク時代への移行、展開を示す沖縄貝塚時代後期後半の土器文化層である。

勝連城のうつりかわりについては一の郭の発掘成果から次のように考えられている。

Ⅰ期―貝塚時代の終末期

Ⅱ期―グスクの体裁が整いはじめた時期、グスク土器、須恵器、中国宋元代の磁器出土。

Ⅲ期―グスクの大規模な造成が行われる。土器、須恵器のほか、中国陶磁、鉄器、古銭、玉などが目立つ。

Ⅳ期―勝連城の最盛期、瓦屋根をもつ建物が現わる。刀、ガラス玉、瓦器、よろいなどが出土する。中国だけでなく、日本との交渉の活発化がうかがえる。

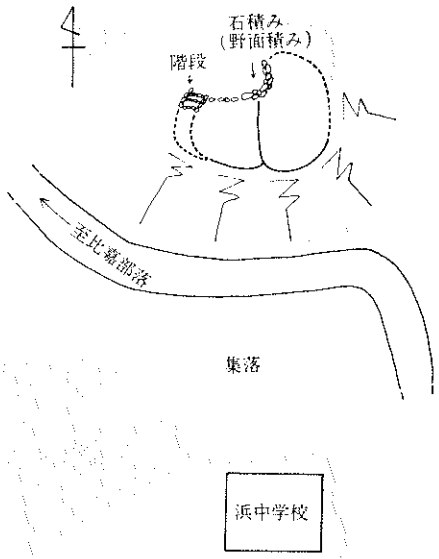
Ⅴ期―阿麻和利没後の15世紀後半～16世紀の時期。何らかの形でこのグスクが使用されており、明らかに16世紀に属する中国青磁がもちこまれている。

勝連城は一般に阿麻和利の居城として名高い。その前は茂知附（望月）按司が城主であったが、その家臣となった阿麻和利が計略によって奪ったと伝えられる。阿麻和利は勢力を増し、やがて琉球国王の娘を妻とするほどの力をもつに至るが、1458年王府軍に攻められ滅ぼされてしまう。

勝連城は「おもろ」にもよまれているグスクである。　　（安　里　嗣　淳）

77　浜グスク（はまグスク）「イリズスク」

勝連町字浜の東南にあり、標高60ｍの石灰岩台地の先端部に占地している。グスクの周囲は天然の崖をつくり、ただ一ヵ所のみ北側東側に緩斜面が見られここからグスク内への出入が可能である。現在、グスクの南西側の一角に野面積みの石垣が認められるが崩壊が著しく保存状況は極めて悪い。グスク内の構造は北側が南側より一段と低く、比高１ｍ前後となっている。南側は三つの郭からなり、この三つの郭はそれぞれ段状に築成たれていて平場を作っている。それぞれ郭の縁端部には黒褐色土の遺物包合層が形成されていてグスク系土器や輸入陶磁器が採集できる。グスクの規模は少さく、水場は郭内にとり込まれてない。グスクにのぼれば視界は180度展開し、足下に浜部落、遠く知念半島を望むことができる。



第19図浜グスク略図

浜比嘉島は東の方に比嘉、西に浜部落を擁し、現在二つの行政区からな

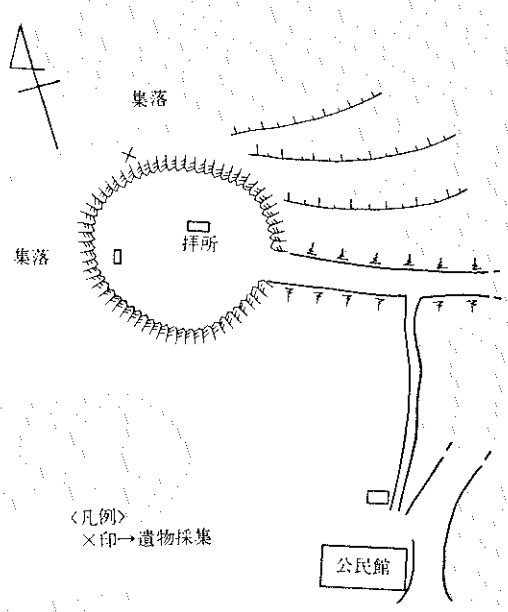
っており、比嘉部落に対応するグスクが比嘉グスク（別名：東（あがり）グスク）、浜部落に対応するグスクが浜グスク（別名：西（イリ）グスク）という形をとる。

（当　真　嗣　一）

78　比嘉グスク（ひがグスク）「アガリグスク」

勝連町浜比嘉島の比嘉部落西南にあり標高　mの丘陵上先端部に位置している。周囲は断崖となっており天然の要塞的なところに占地して築城にさいしては明らかに地形的な配慮がなされたことがうかがえる。グスクの北側には城門らしきところがあって、グスク内への出入口となっている。

この出入口をはさんで左右に野面積みの石垣がめぐっており、城壁の機能を有した遺構として理解される。グスク内にはススキ等が繁茂し精査するのに困難を伴うが、表面観察によれば東西方向にのびる石垣によって二分される形をとっているように思われる。グスク内最東端の隅には御嶽があり、旧２月と５月のウマチーには神人たちによって、神事が行なわれるようである。グスクの規模は小さく、グスク頂部の平場は約150坪位を測る。水場はグスク内にはなく、グスク下方に上の井戸（ウイヌカー）という泉井があり、グスクに最も近い水場となっている。グスクの南側崖下からグスク系土器や輸入陶磁器が採集されるが、上方のグスク内平場から投棄された遺物と思われる。



第20図比嘉グスク略図

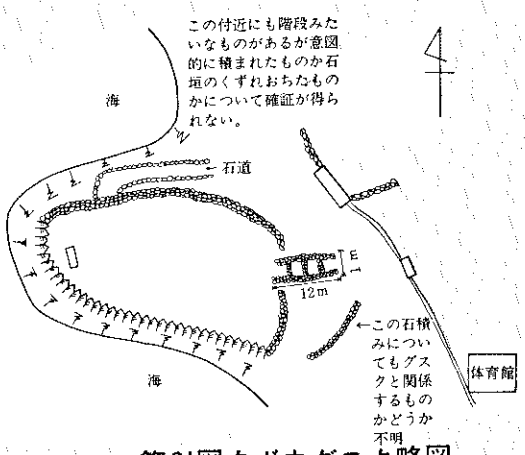
（当　真　嗣　一）

79　クボウグスク

津堅小中学校の北西約150ｍ、標高25ｍの海岸に突出した石灰岩丘陵である。第２次大戦に日本軍の陣地がつくられた跡がある。頂上部にはコバウノ嶽（オヅカサノ御イベ）があり、そこに登るには、幅１ｍ、、長さ12ｍ程の石段があるが、グスクと関連のものかは不明である。石垣は20cm～50cm大の石灰岩礫を利用した野面積みで、北側から西側に向けて、除々に少なくなり、断崖となる。出土遺物は現在のと

ころ確認されてない。

仲松氏によれば、「石垣中に入るのが困難なことから下に遙拝所がある。石垣囲内にあった幾多の人骨は、戦争時日本軍によって村共同墓に移葬されたといわれ、その一部が神骨の代表として現公民館西裏に祠をつくって祀られている。この御嶽は安谷屋根人が管理している。」とある。㊂仲松弥秀「村落形成と祭祀民俗」『津堅島地割調査報告書』1977年3月　（比　嘉　春　美）



第21図クボウグスク略図

80　新川グスク（あらかわグスク）

勝連町津堅島の津堅小中学校の北東約50ｍの琉球石灰岩の小丘、標高35ｍに所在する。グスク全体が破壊され、現在はグスクと思われる一帯にはセメントを固めて慰霊の塔が建立されている。採集遺物は褐釉陶器、グスク系土器、青磁片等の細片である。採集場所は先述の慰霊の塔付近及び後方の燈台東側の畑地である。近くに部落の人が産井とする「アラカワガー」という古泉がある。

（比　嘉　春　美）

沖　縄　市

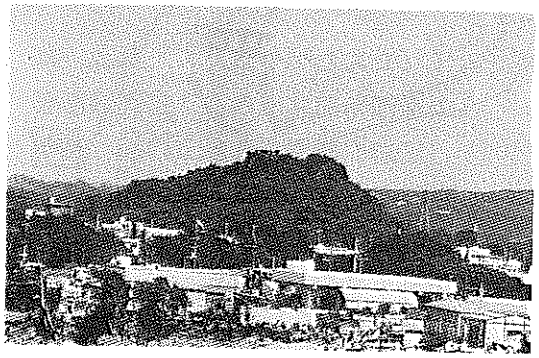
81　知花グスク（ちばなグスク）

沖縄市知花部落の西北にある。沖縄地域では最も内陸部に位置するもののひとつで、標高87ｍの比較的急峻な独立丘から成る。頂上からは東西の海洋、勝連城、安慶名城、越来城などが遠望できる。麓には比謝川の上流が流れ、その前面はかって水田であった。

中腹には野面積みの石垣囲いがあったと伝えられるが、現在は失われている。頂上には二つの巨大な岩塊が載っており、そのうち南側の岩塊は狭少ながらも広場があり、遺物包含層が形成されている。この岩塊下にも広場があり、遺物包含層が確認できる。またその周囲の急峻な斜面にも遺物包含層は及んでいる。投棄による堆積であろう。海産貝が多く堆積している。

斜面の一部には積石程度の大きさの岩塊が散在する。かっての石積みの一部かとも考えられる。

西北方の麓部は今日でも神事の行われる神あしゃぎが存在するが、この広場にも遺物包含層がみられる。この地点で石斧が採集された。



PL.20　知花グスク近景

これまで知花グスクの発掘調査例はないが、表面採集では舶載の陶器、青磁のほか、須恵器なども得られている。

「おもろ」には、「ちばなかなぐすく、ちばないしぐすく」と称されている。また、15世紀中頃には、鬼大城という異名のある大城賢勇が首里王府軍によってこの地に追いつめられ、自決したとの伝承もある。彼はかって首里王府の命を受け、勝連城主阿麻利を攻略し、その功によって越来城主となり、一帯を領有していたが、第二尚氏尚円王代に彼もまた排除される運命をたどったのだという。東面する中腹には「鬼大城の墓」と伝えられる墓所があり、かなり後世の1853年、その子孫がこの墓の由来を碑に記して傍に建立している。

（安　里　嗣　淳）

82　越来グスク（ごえくグスク）

沖縄市越来、越来小学校の南、台地の縁辺部が一段と小丘をなしたところにある。公共施設や個人住宅などの建設によってかなりの地域が原地形を削られ破壊を受けている。石垣などの遺構を確認することはきわめて困難である。かっては切石積みおよび野面積みの城壁がめぐり、グスクの範囲は越来小学校一帯にまで及ぶものであった。

北側の道路沿いの断面には遺物包含層が確認できるので、基盤層の掘削を受けてない地域には、なお包含層が残存することが予想される。断面からみると二つの異なる層があるようであり、このグスクのうつりかわりや時代幅を考える上で貴重なものである。

発掘調査の事例はないが、表面採集ではグスク土器、舶載の陶器、磁器、鉄製の刀子などが得られている。

このグスクはかって第一尚氏の尚泰久が、国王となって首里城へ赴く前まで居城としていた。また第二尚氏尚円の弟尚宣威も一時居城にしたことがある。「おもろ」にもうたわれているグスクである。

なお、この地域は「越来ウガン」として尊崇されてきた。　（安　里　嗣　淳）

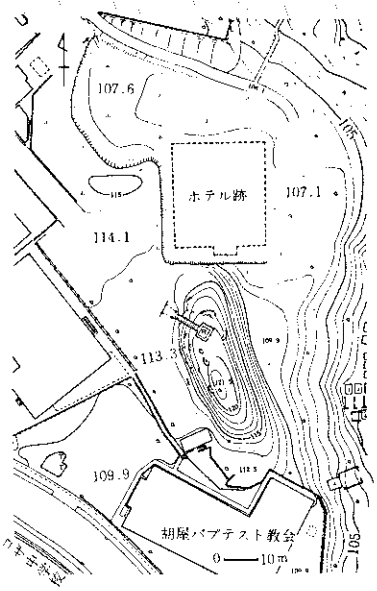
83　仲宗根グスク（なかそねグスク）「ウチグスク」

正確には仲宗根グスクの呼称はない。この一帯は沖縄市仲宗根、バプテスト教会の裏手にあって、台地の東縁辺で小高くなったところに形成されている。

沖縄貝塚時代の前期、中期の遺跡と重なっており、上層がグスク時代に属する。グスク土器、舶載の陶器、青磁白磁、玉、鉄製の鎌、須恵器、炭化米ウシの骨などが出土している。発掘は1966年、1979年の二度にわたり実施された。

一帯はウチグスクという呼称があり、グスク遺跡のある現在の「仲宗根ウガン」は「アマミヤ嶽」とのことである。

（安　里　嗣　淳）



第22図仲宗根グスク地形図

84　インジングスク

沖縄市嘉真良八重島川原581番地に所在し、沖縄市民会館の北東約50ｍの石灰岩小丘に立地する。昭和56年（1981年）10月に本市の公園工事整備に伴ない、事前に当市教育委員会が丘陵南側と中央部付近で、埋蔵文化財・有無の調査を実施した。表面調査と数地点で試掘を行なったが、グスク時代の遺構と遺物を確認する事はできなかった。㊂沖縄市教育委員会『沖縄市の埋蔵文化財』（遺跡分布調査報告書）1982年３月　（宮　城　利　旭）

85　アマグスク

沖縄市字大里後原に所在し、一名アマムイと呼ぶ。現在、この一帯は終戦後の道路建設と宅地化で全壊しているが、以前は第三紀層の小丘陵があったという。次にアマムイにまつわる伝承を、地元の古老（沖縄市大里169番地仲宗根マズル明治40

年10月10日生）から採集したので、紹介する。

古老によると「15世紀の阿真和利の乱の時、鬼大城が百十踏揚を連れて首里に逃げる際、アマムイ付近で追っ手がすぐ近くまで来たので、天を仰いで拝むと追っ手の方へこぶし大の石の雨が降り、二人は無事、首里城まで逃げのびたという。」以た伝承は、「古代マキヨの研究)「稲村賢敷著）でも詳しく紹介されているが、それは省略する。

アマムイに隣接して、ウガンガワァームイ(アマムイ同様、第三紀層の小丘陵があった。現在、一部、面影が残っている）と称する拝所があり、ここは戦前まで干ばつの時、大里部落の雨ごいの祈願を行なう拝所であったという。

（宮　城　利　旭）

北　谷　町

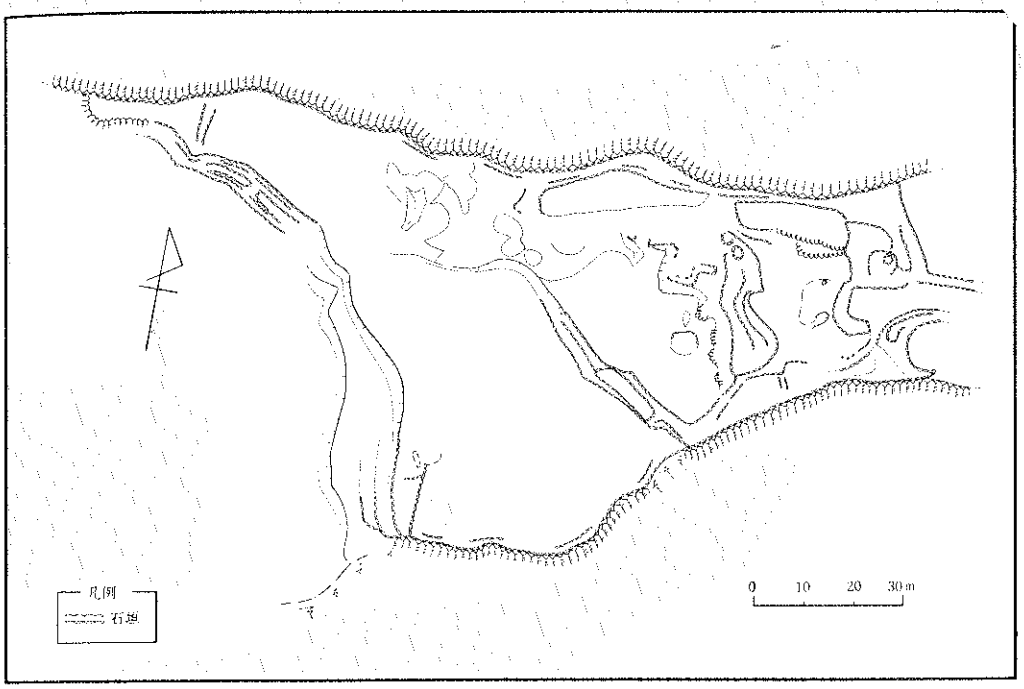
86　北谷グスク（ちゃたんグスク)「大川グスク」

北谷町大村グスク原の東シナ海に注ぐ白比川に沿って舌状に伸びる標高30m前後の琉球石灰岩丘陵の先端部に立地。グスクの西側崖下を国道58号が横切っており、一部国道によって削平されている。

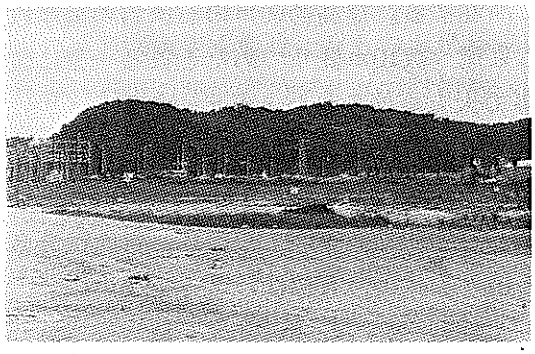
北谷グスクは、一名大川グスクとも、池グスクともよばれている。築城等については、明確な史料はない。伝承には金満と称する按司の居城と伝えられ、グスクの北側中腹に金満お墓と呼ばれている洞穴墓がある。金満按司は大川按司に滅ぼされ谷茶大主に滅ぼされたと伝わっている。また、尚寧王時代、慶長14年（1609年）薩軍が進攻するに当り、雍肇豊佐敷筑登之興道が、このグスクの主将として派遣されたが、興道は４月１日、首里城が陥落したと聞いてこの地で自害したと伝うる。

『おもろそうし』には、「きたたんのてた」(北谷のてだ・15・55・56）や「きたたんの世のぬし」(北谷の世の主・15―57・58）などがある。

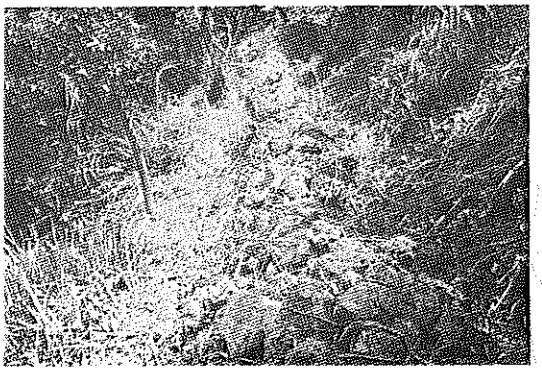
また『琉球国由来記』には〈北谷城之殿〉や〈ヨシノ嶽〉・〈城内安室崎之嶽〉があるが現在米軍用地となっており、グスク内への立入はできないため、拝所はグスク外に移すなどして拝まれている。



第23図北谷グスク地形図（北谷町教育委員会1982年８月）



PL.21　北谷グスク遠景



PL.22　北谷グスク石垣

1982年９月約１ヶ月間、北谷町教育委員会によって、約１ヶ月間、遺構測量を主とした調査が行なわれた。その結果グスクは、長さ約160ｍ、幅約50ｍ、面積8,000㎡であることが がわかった。グスクは、人頭大の野面積みの石垣が高い所で約150cm低い所でも10数cmもあり、根石の残っている所を含めると70～80cm残っていることが確認されている。

ここからは、青磁等の中国陶磁、グスク系土器、須恵器が採集されている。　（知　念　勇）

87　池グスク（イチグスク）

池グスクは北谷城の北、約500ｍ白比川をはさむ川向こう、東西に細長くのびる尾根状の石灰岩台地にあたる。西隅が一段高く、老松が林立し、その近くに祠があったという。

この地は南側の真栄城(『北谷村誌』では前城からの転用であろうとされる。)とならび、北谷城の要害の地となったと伝えられ、北谷城成立期や慶長の役の攻防の伝承が残る。街道の発達に伴い、明治38年には〝北谷トンネル〟が掘られ、戦後は軍道として削滅し時代の風雨にさらされ、昔のおもかげはない，祠はビジルの性格をもつとも伝えられ、現在は同台地の東側に移転されている。池城の名称や、その由来の詳細については不明な点が多い。

（中　村　愿）

宜野湾市

88　喜友名グスク（きゅうなグスク）

沖縄本島中部、宜野湾市字喜友名地番に所在する。標高約60ｍの石灰岩の海岸段丘上に形成されている。喜友名バス停から東側へ数10ｍ登りつめたところ一帯に位置するとされるが、喜友名バス停道路工事で大方破壊されたと考えられる。

現在、アスファルト道路下と米軍基地内で遺物の採集は困難であるが、破壊前に多和田真淳氏が、グスク系土器、須恵器、輸入陶磁器を採集している。

青磁では明初の竜泉系と南宋～元の浙江系の２片である。また加藤三吾氏はグスク付近から石斧の破片を採集している。石積みの状況の有無はわかってない。

（大　城　　慧）

89　我如古グスク（がねこグスク）

本島中部、宜野湾市字我如古に所在する。現在の我如古公民館の石灰岩付近高地に位置しグシクと称されている。大部分宅地造成により過去の地形をしのぶものはない。遺物の採集は出来ない。石積みの確認は出来ない。

（大　城　　慧）

90　黄金森グスク（くがにもいグスク）

宜野湾市字大謝名部落の南よりになる。標高30ｍで周辺は墓地や空地が建ち並ぶ

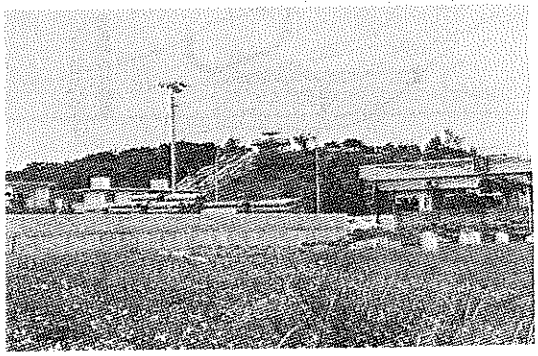
宅地造成で従来の地形が大幅に変化した。大謝名公民館より数m西側に寄った場所に現在碑が残されている。グスク系土器、輸入陶磁器、高麗瓦が採集されている。口碑伝承の中に察度王の居城ではなかったかとされている。

（大　城　　慧）

91　嘉数グスク（かかずグスク）「ウチグスク」

宜野湾市嘉数部落の北東方に位置する。嘉数高台の北側後背には比屋良川が流れており大謝名部落の旧水田地帯を貫通し牧港の河口へ注いでいる。嘉数杜グスクとも呼ばれ、『おもろ』の中にも古くから登場してくるグスクの一つである。標高93.2mの東西に延びる琉球石灰岩の丘陵地の南面の畑地や原野一帯から、わずかながらではあるが過去に青磁片が採集されている。グスクは嘉数高台の丘陵地に形成されていたと思われるが、詳細なことはわからない。

第二次大戦の際、激戦地の一つで昼夜の別なく攻防戦が展開された場所であったとされている。旧来の山地、河川の地形は大きく変貌したものと思われる。石垣の跡などのグスクの様相を物語る資料の存在がとぼしい。現在付近一帯は嘉数高台公園として利用されている。㊂『沖縄の城跡』新城徳祐・1982年



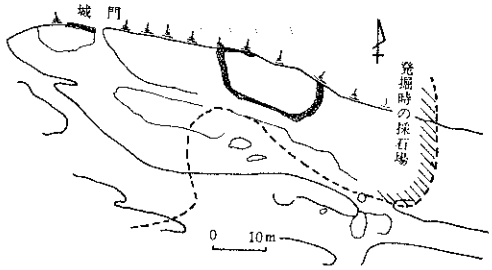
PL.23　嘉数グスク近景

北 中 城 村

92 ヒニグスク

北中城村字喜舎場の嶽根原にあるグスク。屋宜原村の背後の標高110ｍの琉球石灰岩の丘陵にある。30ｍ×100ｍ余のグスクであったが、昭和35年頃から採石場となり、40年に緊急発掘調査したときには石垣や石段状の遺構はすでに採石作業で撤去され、グスクの大部分は基盤ごと破壊された後であった。このグスクに関する文献史料や伝承もほとんどなく、その興亡はまったく不明である。

破壊から免れた六カ所に小さなピットを設けて発掘調査を行なったが、いづれも単一文化層であった。出土遺物は土器片がもっとも多く、それに青磁器、須恵器、南蛮陶器、石斧、凹石、貝製品、古銭（熙寧元宝）などで、土器はフェンサ上層式土器である。自然遺物では牛骨・魚骨・貝殻などが出土したグスク内には拝所はみられなかった。



第24図ヒニグスク略測図
（原図：新城徳祐『ヒニ城の調査報告』1966年11月）

㊂嵩元政秀「ヒニ城の調査報告」『琉球文化財調査報告書』所収 1966年 琉球政府（嵩 元 政 秀）

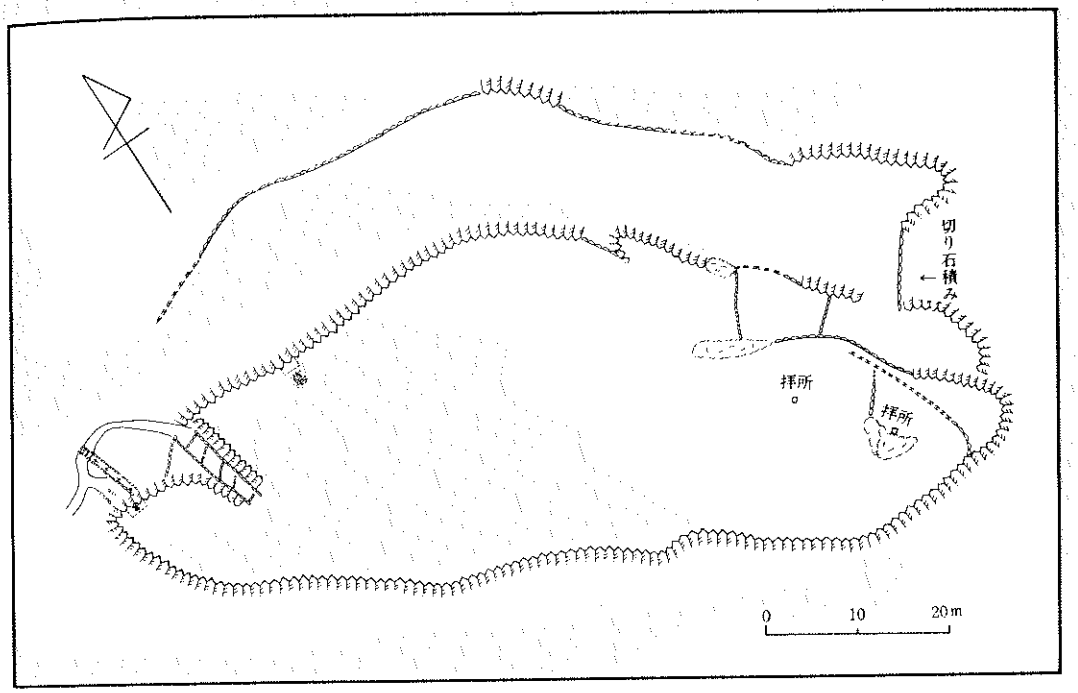
93 安谷屋グスク（あだにやグスク）

北中城村字安谷屋に所在する。安谷屋から荻堂方向へ断崖丘陵が続くが、この丘陵を利用した細長い連郭式のグスクである。南北に約130ｍ、東西に約60ｍ、標高およそ90ｍの規模である。

石垣は丘陵石灰岩の岩盤を巧みに利用した野面積みで、北東側では一部切石積みも見られる。北西側には階段跡がある。その右手下に井泉があり、ここがグスクへの入口付近と考えられる。

北側が城門になると、一番奥まったところとなる南側台地上部のフラット面には、三カ所の御嶽がある。井戸も含めグスク全体が拝所として生きている。

1468年首里では金丸が尚円王として王位に就いた。その転覆活動が安谷屋按司等を中心に進められたが、途中で発覚し、安谷屋按司は隠棲した。その後配置されたのが、尚円の子若松だといわれる。グスクの西側丘陵には、その墓がある。築城時期について詳らかでない。発掘調査も未だであるが、グスク南側崖下では、グスク



第25図　安谷屋グスク実測図（実測：1978年７月）

系土器片、輸入青磁器片、白磁片、須恵器片、陶器等が採集されている。これらについては、14－15世紀の遺物と考えられる。㊂北中城村『北中城村史』1970年

（座間味　政　光）

94　大城グスク「ミーグスク」

北中城村字大城にあり、ミーグスクとも呼ばれている。

近年開発が進み、グスクの東側は整地がなされゴルフ場の一部となり、北側は採石がなされ、石垣等の遺構もなく、グスクとしての形態をとどめてない。

グスクについては、伝説によると、英祖王の三子中城王子（中城按司）の居城であったということで詳らかでない。

ゴルフ場の芝生に突き出た石灰岩の周辺からは、フェンサ上層式の土器片、青磁片、石器片が採集され、14世紀頃のものと考えられる。㊂北中城村『北中城村史』1970年

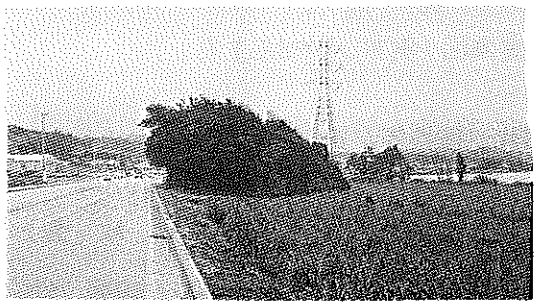
（座間味　政　光）

95　マーシリグスク

北中城村熱田真志礼原に所在し、熱田部落南側の海岸線（国道329号線沿い）に立地する石灰岩小丘陵。雑木が茂る小さな森で、一名、熱田マーシリ(地元ではマーシリグシクとは言わない）とも称する。そこにまつわる伝承は『北中城村史』(北中城村役所発行）に紹介されており、次のように要約される。

「具志頭間切の容姿端麗な美男子、白川桃樽金という若者と、勝連間切浜村の美人浜川真鍋樽の恋物語である。昔、勝連間切に真鍋樽という評判高い絶世の美人がいた。その噂は人から人へ、また旅人から旅人へ伝えられていった。たまたまその噂を旅人から聞いた樽金は、早速、真鍋樽に会い、やはり噂にたがわない美人だと思った。

真鍋樽に惚れた彼は、直ちに結婚を申しこんだ。一方、彼女も彼に一目惚れをしたが、しかし気品と知性に富んだ彼女はすぐに承諾せず、むつかしい謎をかけ彼を帰した。例えば、その謎とは「今度来るときは二頭の馬に鞍一つかけて一人で乗ってくるように……。」このような謎が再三続き、最後に彼は結局、謎解がとけず追い返された。失敗した彼は、彼女への思いを諦めきれずとうとう、病床に伏し、「おれが死んだら真鍋樽の村がよく見える場所に葬ってくれ」と遺言を残して死んだ。一方彼女もまた、来なくなった彼に思い焦れ、同じ遺言を残して死んだ。それぞれの死体は二人の思いを遂げさすため、樽金の死体は勝連間切へ、真鍋樽の方は島尻間切へ向って担いで運ばれた。途中、はからずも両者は熱田の海岸でばったり出会ったので、その背後地にあるマーシリを最適の地と定め、ここに死体を合葬し、この地を比翼塚とした。」㊂北中城村役所『北中城村史』1970年　　（宮　城　利　旭）



PL. 24 マーシリグスク

中　城　村

96　中城城跡（なかぐすくじょうせき）

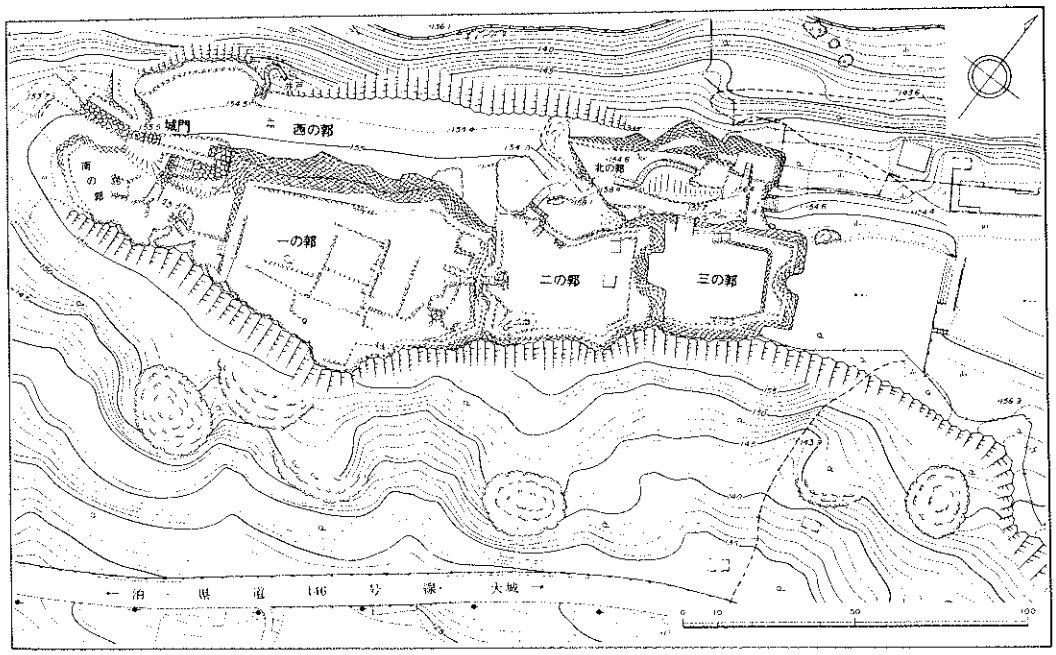
中城村の山手丘陵にある。崖縁でひときわ盛りあがった地形をとりこんでつくった城で東西に石垣で区画された六つの郭が連らなる。

城門は西南にあり、その内部は西の郭の広場が展開する。同一平坦面を直進すると石門をはさんで井戸のある北の郭へつづく。正門を入り内に向かって右側には石段の道があって上の南の郭に続く。登りつめたところにアーチの石門があり、中へ入ると木々が茂り、石造の拝所が三基ある。自然の石灰岩の突出もいくつかみられ、平坦面はあまりない。

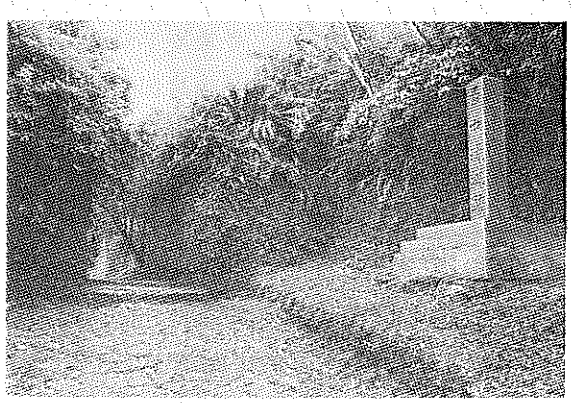
この郭の城壁の南西側（大手に面したところ）には二つの狭間（いわゆる銃眼）がとりつけられている。

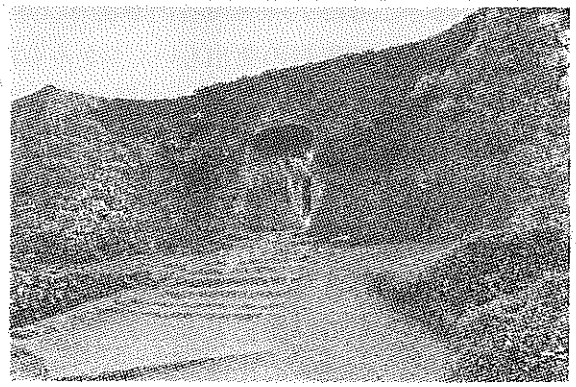
東へ進むとアーチの石門があり、かなり広い一の郭へと至る。一の郭は西南側は一段低い前庭様の広場で、東北側は一段高くなった館基壇跡である。この郭がこの城の中心部であり、基壇には館が建っていたといわれる。歴史上著名な護佐丸の滅亡後（1458年以後）は首里王府から、王の一族あるいはその代理者がここに拠って、一帯を統括したようである。

その頃にこの基壇上の建物は何度か建て替えられ、のちに「間切番所」として使



第26図 中城城跡地形図（『中城城跡』中城村教育委員会1982年３月）





PL、25　中　城　城　跡

左上：正　門
左下：一の郭（本丸）北門
右　：三の郭通路石段

われるようになった。1897年には「間切役場」と改称し、1945年で焼失するまで存在した。

この一の郭を東北方へさらに進むと一段下がって二の郭となる。この郭は元来一の郭とのみアーチ門でつながっていたようである。さらにその東北側隣には三の郭が連結する。この郭は井戸のある北の郭から間口の広い石段によってつながる。

北の郭の井戸は元来、岩陰の自然湧水であり、この前面を高い石垣で囲いこんだものである。井戸（湧水）の施設は大手門のある西の郭の城壁下方にもある。石段によってこの郭とつらなる。

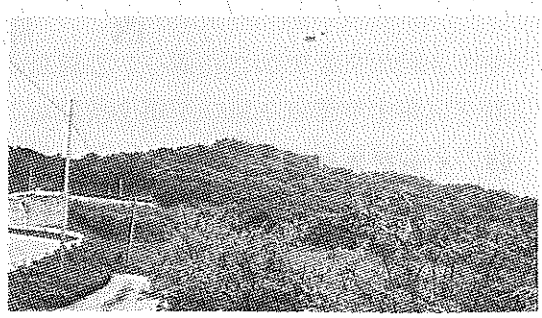
この城の考古学的な調査はない。表面採集品でみると中国製陶器の他にグスク土器もあり、有名な護佐丸が城主であった時期よりもかなり前から、この地にはグスクが存在していたことが推定される。しかし、文献上は護佐丸以前の城主の正確な記録は今のところない。

郭によって城壁の積み方に相異があり、また郭の連結の仕方などから、この城は護佐丸の時代に増築または改修工事をした可能性もある。石垣は大部分が切石積であり、一部に野面積みもある。切石積の中にはあいかた積を主体とする郭と、布積みを主体とする郭とがある。両者は時期のちがいをもあらわしているという見方もある。

城壁は多くの部分に胸壁をもつ。　　（安　里　嗣　淳）

97　台グスク（デーグスク）

中城村字久場部落の北北西500 m、標高約170 mの琉球石灰岩台地の東端部に位置する。グスクは北側から西側にかけては緩やかな斜面部地へつながり、南側は断崖となり、頂部にフラットな面を残しているがグスク内には石積み等は確認できなかった。南側の斜面中腹には、崖を利用したりっぱな亀甲墓があり、護佐丸一族が葬られているとのことである。㊂新城徳祐『沖縄の城跡』1982年8月　　（比　嘉　春　美）



PL. 26　台グスク近景

98　新垣グスク（あらかきグスク）

中城村字新垣にあるグスク。村落の北方、標高170 m前後の琉球石灰岩の丘陵にある。築城年代は不明で、殿舎などの地上遺構はないが、ところどころに石垣の根石が残っている。「おもろさうし」の巻2－21に

一　あらかきの、ねたか、もりくすく
　　てたか、ふさよわる、くすく
又　てにつきの、ねたか、もり

と新垣根高森ぐすくの繁栄が歌われている。また、城内にある拝所にまつわる伝承なども残っている。1973年発掘調査が行なわれた。出土遺物はフェンサ上層式土器を主に中国製青磁、染付、須恵器、鉄鏃、刀子、刀剣の鍔、鞘（こはぜ）、凹石、獣骨、貝類などが出土している。

現在新垣村の重要な拝所で、『琉球国由来記』に新垣ノ嶽とあり、神名は「天次アマタカノ御イベ」である。　　（嵩　元　政　秀）

西　原　町

99　イシグスク

西原町森川にあり、琉球大学農業工学ビルの西約300ｍの距離で、標高136ｍの石灰岩台地上にある。規模が小さく、小丘陵の中間部に位置し周辺には古い墓が多い。表面踏査では磨石１個とグスク系土器片が数片採集されただけであり、石積などの遺構は確認されなかった。このグスクは、地元の古老によれば「イシグスクモー」と呼ばれ、棚原グスク築城以前、棚原按司はこの地にグスク普請を行なおうとしたが地形が定まらず後で棚原の地に移ったと云われている。棚原グスクはイシグスクの西方約400ｍの石灰岩丘陵の先端部にあってイシグスクと相対峙している。

（当　真　嗣　一）

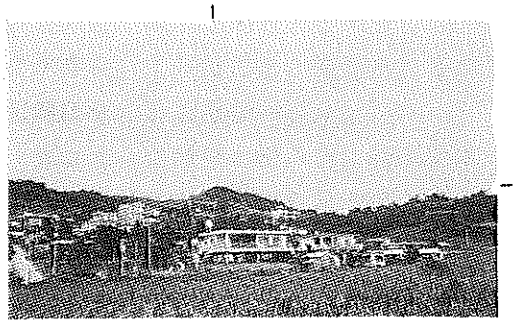
100　棚原グスク（たなはらグスク）

西原町字棚原にあり、現在の棚原集落の北北西約300ｍの距離にある。このグスクは浦添市西原から断続的にのびる石灰岩丘陵の先端部に占地して標高130ｍを測る。グスクの北側には比屋定が－（川）が蛇行し、その下流は牧港に至る。グスク北東側は採石のために大きく破壊を受け旧地形が損なわれているが、丘陵頂部や南側傾斜面には遺物の散布が認められる。また東側崖下に按司墓と称す崖葬墓があり信仰されている。グスク内、とくに北西側に一枚の平場があって現在そこに祠があって拝所となっている。伝承によれば、グスクは、はじめ安慶名大川按司の弟が棚原按司となって築城したものであったが、やがて初代の棚原按司が幸地グスクの幸地按司との戦いに敗れ、その後は南部地方の先中城按司の子が跡目を継いで二代目棚原按司となったと云われている。棚原のことについて次のオモロがある。

一　聞ゑ棚原に　ゑいにせや　十百度
　按司添い巣せ　又鳴響む棚原に

一　聞ゑ棚原に　夏冬太判らず　歓へ
　てしけちぢょ盛り居る。又、鳴
　響む棚原に　冬夏も判らず

一　棚原のてだの　思い子は生しょわ
　ちへ　島よ移けわちへ　又下の
　世の主の思い子は　生しょわち
　へ　　（当　真　嗣　一）



ＰＬ．27　棚原グスク

101　幸地グスク（こうちグスク）

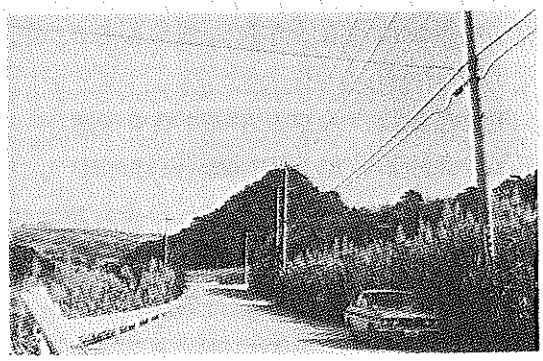
西原町幸地にあり、標高115ｍの丘上に位置している。このグスクは現在の幸地集落の東側の高台にあって、グスクに立てば集落を眼下に遠く首里や中城湾を眺望する位置にある。現在の幸地の古島は古幸地と呼ばれ、グスクの南側斜面の起伏に富む山あいにある。現在そこはキビ畑となっているが、段々状に築成された平場や古井戸等があって古島らしい雰囲気をかもし出している。グスクには石垣などの遺構は認められず、あるのは拝所としての祠だけである。表面踏査では遺物の確認はできなかったが、グスク近くで採土があった際に貝殻が多量に出土したという土建業者のはなしがあり、今後遺物包含層が確認される可能性は強い。『遺老説伝』には幸地グスクの城主といわれる幸地按司の伝説が収録されている。

（当　真　嗣　一）

102　津喜武多グスク（チキンタグスク）

西原町字小波津、小波津団地の西方に屹立する第三紀砂岩（ニービ）からなる山をいう。ここは、標高約60ｍの三角錐状の山であるが、かってこの山に接続して標高50ｍの丘陵が略東西に走っていた。ところが近年の団地造成により削平されて現在では小波津団地ができている。チキンタグスクは、おそらくこの丘陵の一部をも含んでいたものと思われる。伝承によれば、このグスクの石垣は首里城普請の際に手渡しで持ち運ばれたと云われている。グスクには、石垣等の遺構は認められず遺物も採集されない。

（当　真　嗣　一）



ＰＬ．28　津喜武多グスク近景

103　我謝遺跡（がじゃいせき）「ヨナグスク」

西原町字我謝および与那城地番に位置する。遺跡が形成されている地域は、通称「我謝モー」と呼ばれ、かって字我謝の「殿」が存在していたところである。10数年前のエッソ社宅工事による削平をうける以前、この一帯は標高50ｍ前後の台形状

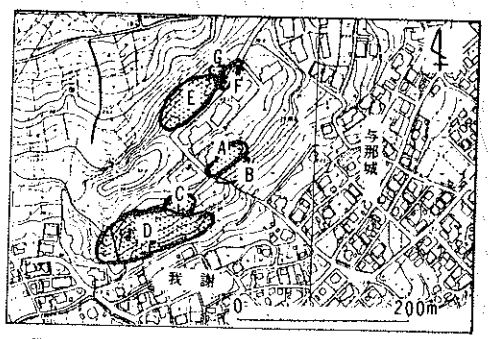
の低丘陵が舌状に張り出した地形をなしていたようである。

1981年から1982年にかけて宅地造成に伴う緊急発掘調査が行なわれ、膨大な量の遺物が出土した。調査の結果この遺跡は、A～I地点の9地点によって構成された遺跡であり、時期的にフェンサ下層期からグスク時代、および近世におよぶ時代幅のある遺跡であることが確認された。各地点の遺物包含層は主として台地斜面部の凹地に集中して発見されている。この状況は頂部の平坦面から投棄されたものが流れ込んで堆積したものとして理解でき、そのことから当然生活面であったと思われる平場の存在が予想されるが、上述のような削平を受けたために平場に相当する部分は現在不幸にも失なわれてしまっている。

出土遺物は、くびれ平底を有す土器、グスク系土器、輸入陶磁器(天目茶碗・酒会壺・蓮弁文碗・稜花皿・口禿白磁皿・玉縁白磁碗)、須恵器、滑石製石鍋、鉄製品、青銅製品、銭貨、石器、骨製品丸玉、土錘、鉄滓、羽口等があり、その他、魚骨、牛の遺存骨、炭化米・麦等の自然遺物が含まれている。

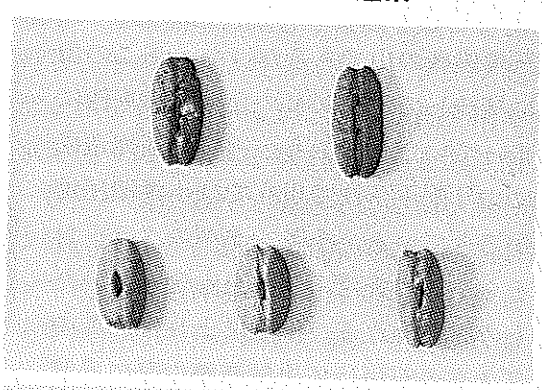
検出された遺構は、近世古島のピット群、グスク時代に属す溝状遺構等である。

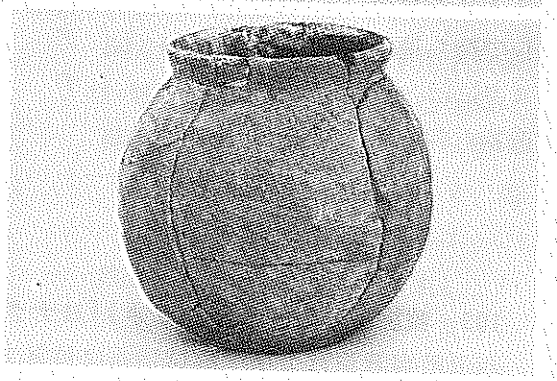
この遺跡のE・F・G地点は、石垣遺構を有さず独立した低丘陵地に形成されており、グスク形成期における初期のグスクとして理解されると、『沖縄の歴史』で比嘉春潮氏があげている「与那城」に比定されるグスクではないかと思われる。(大　城　慧・当真嗣一)



第27図　我謝遺跡(「南島考古だより」No.26)

PL. 29　我謝遺跡近景




PL. 30　我謝遺跡出土遺物

浦　添　市

104 浦添城跡（うらそえじょうせき）

浦添市役所の南東約500ｍの地点、浦添市字仲間城原地内にある。グスクの本体は石灰岩台地の先端部に位置し、標高130ｍから144ｍを測る要害の地に築かれている。グスクが立地するこの台地は、南北に1.7㎞の長さで細長く発達しており、台地の東側が断崖面を形成し平地との比高が20ｍであるのに対し、西側は比較的緩かな傾斜面をなしている。台地の東側崖下には英祖王と尚寧王の墓、浦添ユウドレがあり、西側には字仲間、南側には字前田の古くからの集落が展開している。また、台地北側先端部には英祖王の城館址といわれる伊祖グスクが占地している。

このグスクは、石灰岩台地の地形を巧みに利用して築かれた山城であって古くからの伝承によればコグスク、ミーグスクと呼ばれる新・旧二つのグスクで構成されていると云われている。グスクの縄張りは、南北380ｍ、東西60－80ｍの長楕円形状をとり、石灰岩の絶壁をもつ独得な台地の天端に沿って石垣を囲繞して攻めるに難しいグスクとなっている。城郭の構造は、中央部が採石によって著しく削り取られて旧地形を損ってはいるものの全体の形からみると連郭式の城構えをしていたものと判断される。

このグスクは、舜天王が浦添按司であったと記されていることから舜天の居城とも見立てられているが確証はない。記録によれば舜天王統に続く英祖王統や察度王統はいずれも浦添の出であるとされており、これら三王統のうちいずれの時代に築かれたことはほぼ間違いないであろう。東恩納寛惇は「英祖の居城は別に伊祖に在れば、察度以後のものか」（『南島風土記』東恩納寛惇著）と述べている。その後浦添グスクのことが記録ではっきりするのは16世紀に入ってからで、第二尚氏尚真王の長子尚維衡が父王の不興をかい浦添城に遷されている。その時には城郭が荒廃し住居に耐えられなかったために我那覇家の邸宅が移築されたといわれている。「喜安日記」によれば、慶長14年（1609）の島津侵攻の際、城下の龍福寺とともに浦添城も戦火にあったことが記録されていることから、その時に炎上した建物がそれであろう。島津侵攻から８年後の万暦45年（1617）の冬、島津氏のとらわれの身となっていた尚寧の帰国により改めて浦添城が修復されたと記録は伝えている。浦添城に関するその後の記録は無く現在に至っているが、古老のはなしによると城内にはごく近い頃まで番所があったとのことである。

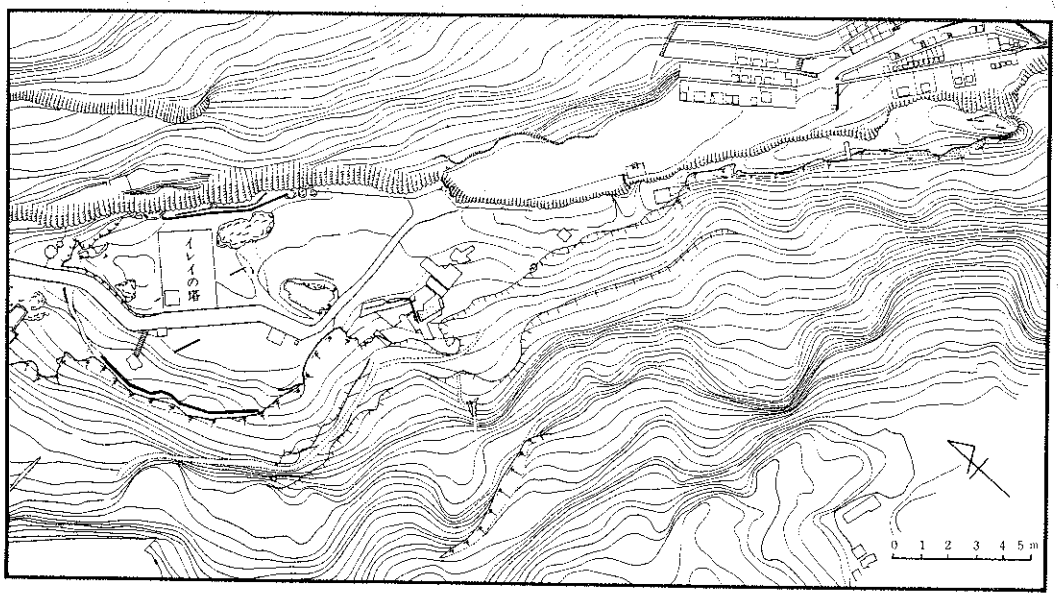
本グスクの調査は、これまで伊東忠太・鎌倉芳太郎、大川　清の諸氏や旧琉球政府文化財保護委員会、浦添高等学校郷土研究クラブの機関などによって実施されてきたが、いずれも短期間の試掘調査にとどまるものであり、本格的な発掘調査が実

施されたのは昨年（1982年６月）の浦添市教育委員会によるものが最初である。その時の調査で、城壁に相当する切石積みの石垣１、浦添グスク最下層に伴う野面積みの石垣１、基壇２、基壇に取り付けられた階段１、建物に伴う石塁２、掘立柱建物跡１、コーラル敷きの広場１、石列２、柱穴群３、人骨１を発掘し、さらにまたグスク普請の様子を知る土木事業の痕跡が随所で確認された。この中で興味を引くものの一つに人骨の出土がある。人骨が出土した所は、城壁に相当する石垣の地ごしらえの部分で、石垣のえ面から約３ｍ内側に入った所の地表下３ｍのレベルからであった。人骨の周囲には拳大の石灰岩塊が配置され、その上を黒褐土のグスクの遺物包含層が覆い、上から黄褐色の粘土で封土されている状態であった。人骨の保存は良く、発掘時に頭蓋の一部をヘラで引っ欠いた以外は全骨格が完全に確認された。人骨の頭位はＮ60°Ｗ、仰臥屈葬であるが顔面は横向き、極端な屈葬姿勢をとり、副葬品は認められなかった。20才過ぎの女性である。

出土する遺物は、グスク時代から現代におよぶものであり、中でも灰色瓦の出土量は多い。瓦以外には土器、輸入陶磁器、武器や武具、古銭、玉類、牛の遺存骨、炭化米・麦などである。輸入陶磁器は宋・元代の青磁や白磁、明代の青磁・白磁等であり、古瓦には「癸酉年高麗瓦匠造」「大天」等の在銘瓦が多量に含まれている。

㊂伊東忠太・鎌倉芳太郎『南海古陶瓷』宝雲舎 1937年、大川清「琉球古瓦調査抄報」『沖縄文化財調査報告　1962年度版』琉球政府文化財保護委員会　1962年、当真嗣一・下地安広・前津政広『今姿を見せる古琉球の浦添城跡』浦添市教育委員会 1983年１月

（当　真　嗣　一）



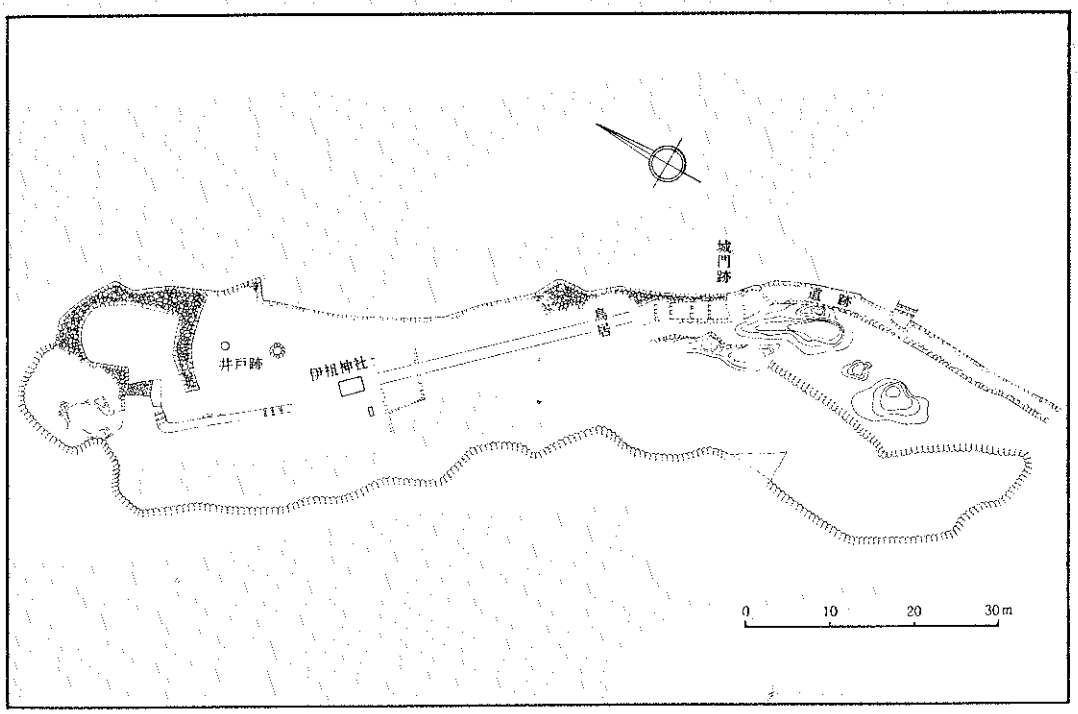
第28図　浦添城跡（浦添市教育委員会作製 1982年）

105　伊祖城跡（いそじょうせき）

浦添市伊祖部落北東、標高50～70mの南東に伸びた琉球石灰岩丘陵上に築かれた城である。同丘陵の南東約1500mには浦添城が存し、北方には牧港が望見できる地にある。伝説では英祖王父祖代々の居城で、英祖王もここで生まれたと伝えられている。

城壁は、すべて琉球石灰岩を用いて東北の城門の下から本丸までの城壁が切石積み、北の見張所と南側の石垣は野面積みになっている。グスク東側にある展望台一帯と南側入口の斜面緑地帯に遺物は多く、また見張所の下方に存する古墓地域にも分布している。グスク遺物は土器をはじめ、須恵器・青磁・白磁・染付・黒褐釉陶器・高麗瓦等が採集されている。

伊祖城跡は、昭和36年6月15日に県指定文化財として指定され、現在城跡一帯が公園として利用され市民の憩の場になっている。城の総面積が4,881㎡（1,479坪）を測る。㊂浦添市教育委員会『うらそえの文化財―遺跡分布調査報告―』1980年3月、新城徳祐『沖縄の城跡』1982年　（上　原　　静）



第29図　伊祖城跡実測図（実測：1960年2月2日）

106　親富祖グスク（おやふそグスク）

浦添市屋富祖に所在する本グスクは、勢理客から港川まで続く標高50m前後の琉球石灰岩台地東端に位置していたが、仲西中学校の校舎建設工事や上水道タンクの設置工事などによって大半が破壊されている。沢岻グスク同様、グスクの規模や性格が判らないままに壊されたのは残念である。

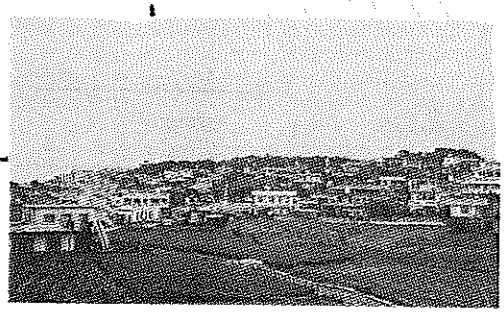
昭和57年（1982）3月から4月にかけて、市道改修工事に係る緊急発掘調査を浦添市教育委員会が実施した。その結果、上部は以前の工事でかなり攪乱を受けているが、下部に厚さ40～50cmの遺物包含層が確められた。そこからグスク系土器や青磁・白磁などが出土したが、遺構は確認できなかった。発掘調査の詳細については昭和58年（1983）3月に調査報告書として刊行される予定である。㊂浦添市教育委員会『うらそえの文化財―遺跡分布調査報告―』1980年　　（岸　本　義　彦）

107　内間グスク（うちまグスク）

浦添市内間の公民館を中心とした標高30m余の丘陵一帯に立地していたが、宅地造成が急速に進み、遺跡の規模はもとより遺構、性格等も不明のまま破壊された。公民館北側の丘陵頂部には御嶽があったといわれているが、現在では公民館敷地に合祀されている。

昭和54年（1979）10月、公民館南側の道路で下水道布設工事が実施された際に地表下1m余の箇所で層厚40cmの包含層が確認でき、そこからグスク系土器や青磁などが出土している。また、公民館の西方200mの地点にはカンジャーガマと称される小洞穴があり、その洞穴から鉄滓が表採された。㊂浦添市教育委員会『うらそえの文化財―遺跡分布調査報告―』1980年　　（岸　本　義　彦）

108　沢岻グスク（たくしグスク）



PL. 31 沢岻グスク遠景

浦添市字沢岻に所在する本グスクは、沢岻公民館の西方350m、標高70m余の琉球石灰岩台地に立地していたが、一帯における宅地造成が急速に進み、今では痕形もない。ただ、西側の崖下に井泉（沢岻ハンタガー）が残っている。

昭和46年（1971）には琉球政府文化財保護委員会で発掘調査を実施してい

るが、調査報告書が未刊行で詳細は不明である。また、昭和54年（1979）には浦添市教育委員会による分布調査が実施されたが、遺物も採集できなかったほどであったという。以前に、嵩元政秀氏等によって採集された遺物にはグスク系土器、青磁、須恵器、高麗瓦などがある。

本グスクは北西に浦添城跡、南東に首里城跡を控え、重要な位置に占めていたと思われるが、その関連性はもとより性格も不明のまま壊滅したことは残念である。

㊂浦添市教育委員会『うらそえの文化財―遺跡分布調査報告』1980年

（岸　本　義　彦）

109　ジングスク

浦添市字前田の東側丘陵上に位置し、大岩の部落側崖下には墓があったといわれている。しかし、今では丘陵が削られ公務員住宅が立並び、一帯の地形は著しく変貌している。そのために遺構はもとより遺物も確認されてなく、詳細は全く不明である。ただ、伝承によると、ジングスクは銭グスクの意味で「金蔵」のあった場所といわれている。

（岸　本　義　彦）

110　皇グスク（コウグスク）

浦添市城間の公民館所在地にあったことが伝えられているが、公民館建設などで地形が著しく変貌し、詳細は不明である。ただ、口碑伝承によれば、尚円王統の17代世主である尚灝王の側女とその子の居館があって、尚灝王が坊主大主とも呼ばれていたことより皇グスクと称されたということである。また、鳥羽正雄編著『日本城郭史の再検討』と比嘉春潮著『沖縄の歴史』に城間在の城間城が記載されているが、両書とも明確な所在地や性格等については触れてなく、それが皇グスクと同一のものであるのか判然としない。

（岸　本　義　彦）

第3節　南部地区概説

この地区は沖縄本島の南に位置する各市町村と久米島をはじめとする周辺離島に所在する各村を含む地域であり、2市3町13村である。沖縄本島の最南端に位置することから北部の国頭、中部の中頭に対して島尻と称されている。

離島群を除くこの地域は、新第三紀のシルト質泥岩を主体とした島尻層群が広く覆い、この島尻層群を基盤に広く石灰岩がのる場合には、メサ状の台地をつくっている。中部とはほぼ同じ地形的特徴を示しているが、大里村・南風原町のような内陸部では青灰色～灰色のシルト質泥岩が全域を覆い、起伏に富む小丘陵を形成している。このような地形に大方のグスクは形成されている。

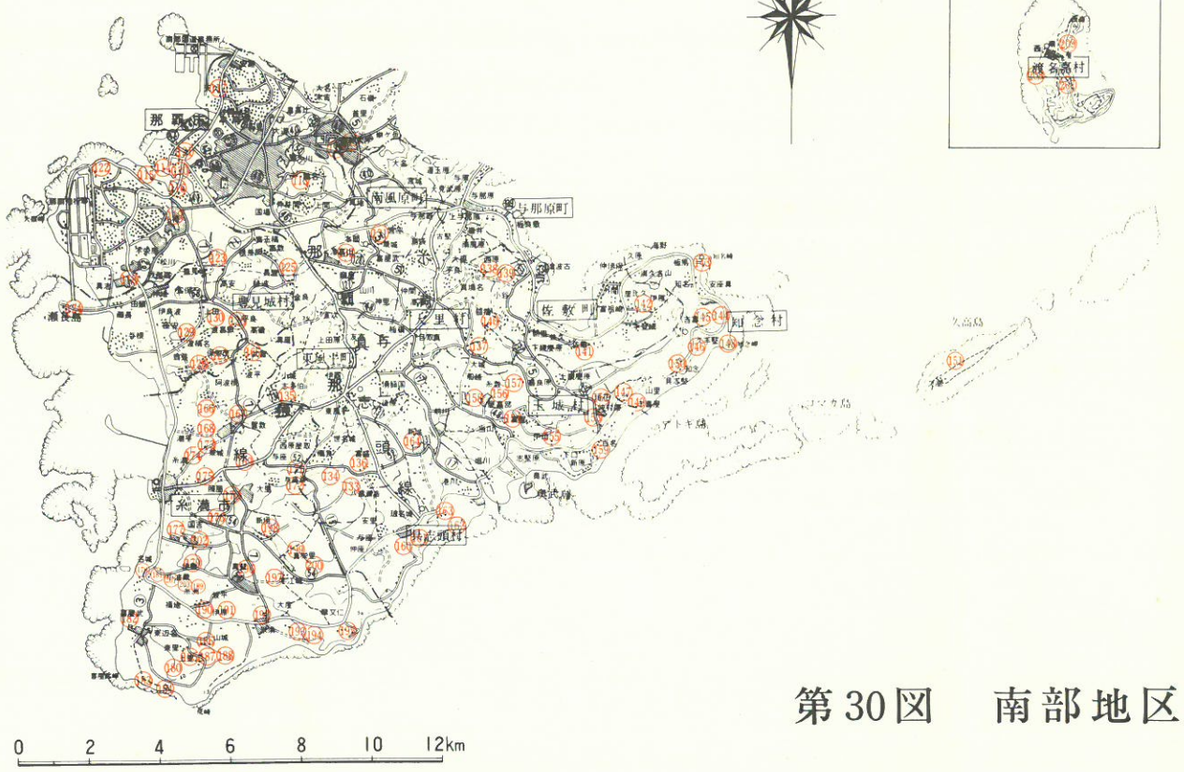
久米島は、面積は小さいが、地形的に変化に富み、第三紀安山岩からなる大岳と阿良岳を中心とする山岳地に二分されており、その縁辺には台地や段丘が付いている。グスクは、島の中央を占める山岳地には宇江城グスクが、その縁辺の台地・段丘上には登武那覇グスク・伊敷索グスクが占地している。

三山分立時代には、島尻大里に城をかまえていた山南王の権力支配下に属していたが、1429年に、山南王他魯毎が尚巴志に滅ぼされたことで統一王朝に組み込まれていった。尚真王20年（1492年）に建立された「官松嶺記下ミヤキジナハの碑文」の中にみえている「南山府」がおおよそこの地域である。なお、現在は糸満市に合併されているが、兼城、高嶺、真壁を下尻、南風原、島添大里、佐敷、知念を東方四間切と称した。

この南部地域は三地域中最もグスクが密集する地域となっており、中でも糸満市は極端に多く、今度の調査で合計39のグスクが確認され濃密な分布状況を示していることがわかった。これらのグスクを立地条件別に分類すると、市内を略東西に走る石灰岩丘陵上にあるものが35件で最も多く、その次に独立丘たる岩山の上にあるものが2、海岸に突出する断崖の上に築かれたもの1、その他平地に立地しているものは南山城跡ただ1件のみである。

この南部地区でのグスクの分布状況は、全体で113、その内訳は糸満市で39で一番多く、次いで那覇市12、知念村、仲里村9、豊見城村8、玉城村8、具志頭村5、大里村4、渡名喜村3、座間味村3、粟国村1、南風原町2、東風平町4、佐敷町2、具志川村4となっている。渡嘉敷にはグスクは現在までのところ発見されていないが、渡嘉敷の湾口にあるグスク島がグスクかどうかまだ詳しく調査されてないので判然としないけれどもこの島がグスクということになれば、いよいよ南北両大東だけにのみグスクは存在しないということになる。

（当　真　嗣　一）



地図番号	グスク名
111	首里城跡
112	クンダグスク
113	石田グスク
114	三重グスク
115	屋良座森グスク
116	御物グスク
117	天久グスク
118	具志グスク
119	小禄グスク
120	硫黄グスク
121	天妃グスク
122	サキハラグスク
123	豊見城グスク
124	瀬長グスク
125	長嶺グスク
126	平良グスク
127	保栄茂グスク
128	石原グスク
129	渡橋名グスク
130	ユダマグスク
131	ウチミグスク
132	仲間グスク
133	八重瀬グスク
134	世名城グスク
135	テミグラグスク
136	ジリグスク
137	大城グスク
138	大里城跡
139	ミーグスク
140	稲福遺跡
141	佐敷グスク
142	屋比久グスク
143	知名グスク
144	ヰナグワンダー遺跡
145	安座真グスク
146	寒水グスク
147	古間グスク
148	ウフグスク
149	志喜屋グスク
150	知念城跡
151	テミィグスク
152	垣花城跡
153	ミントン城跡
154	仲栄真グスク
155	玉城城跡
156	糸数城跡
157	根石グスク
158	船越グスク
159	大城グスク
160	上グスク
161	多々名グスク
162	具志頭グスク
163	ミドリグスク
164	新城グスク
165	武富グスク
166	阿波根グスク
167	賀数グスク
168	潮平グスク
169	大城森グスク
170	南山城跡
171	与座グスク
172	上座グスク
173	奥間グスク
174	兼城グスク
175	照屋グスク
176	国吉グスク
177	真栄里グスク
178	フェンサグスク
179	伊敷グスク
180	当間グスク
181	チチャマグスク
182	喜屋武古グスク
183	具志川城跡
184	カタハラグスク
185	東辺名グスク
186	山城グスク
187	上里グスク
188	佐慶グスク
189	糸洲グスク
190	波平グスク
191	石原グスク
192	米須グスク
193	ガーラグスク
194	オドサトグスク
195	摩文仁グスク
196	真壁グスク
197	宇江城グスク
198	新垣グスク
199	真栄平グスク
200	ブリ原グスク
201	仲間グスク
202	チングスク
203	安里グスク
204	メーグスク
205	シルグスク
206	グスク山
207	スンジャグスク
208	アマグスク
209	里遺跡
210	具志川城跡
211	伊敷索城跡
212	マカイグスク
213	クィングワグスク
214	宇江城城跡
215	登武那覇城跡
216	久根グスク
217	ウニシグスク
218	塩原城跡
219	与那嶺グスク
220	天宮グスク
221	ミンチブナーグスク
222	小グスク
223	八重川グスク

第30図　南部地区グスク分布

那　覇　市

111　首里城跡（しゅりじょうせき）

那覇市首里の琉球石灰岩丘陵にある。第一尚氏、第二尚氏代の琉球王朝の城として名高い。独立丘の大部分をとりこみ、その地形にあわせて崖縁に城壁をめぐらす東西に長いほぼ楕円形の大規模な城である。急崖をなす西南部は一重であるが、斜面を有する他の地域は下端部と上端部に二重の石垣をめぐらし、その間にも平坦面を造成してある。石垣はすべて琉球石灰岩を用材としている。

外郭の城門は歓会門、久慶門、木曳門、継世門があり、内郭には瑞泉門、漏刻門広福門、奉神門、右掖門、淑順門、美福門、白銀門がある。門はほとんど石拱門であるが、上部に櫓をもつものや、屋根のみをもつものもある。

主要な施設は内郭東半分地域にある。正殿は造成された基壇に建てられ、内部は三層、外観は二重屋根である。正面は唐破風造り、石段と欄干を備える。

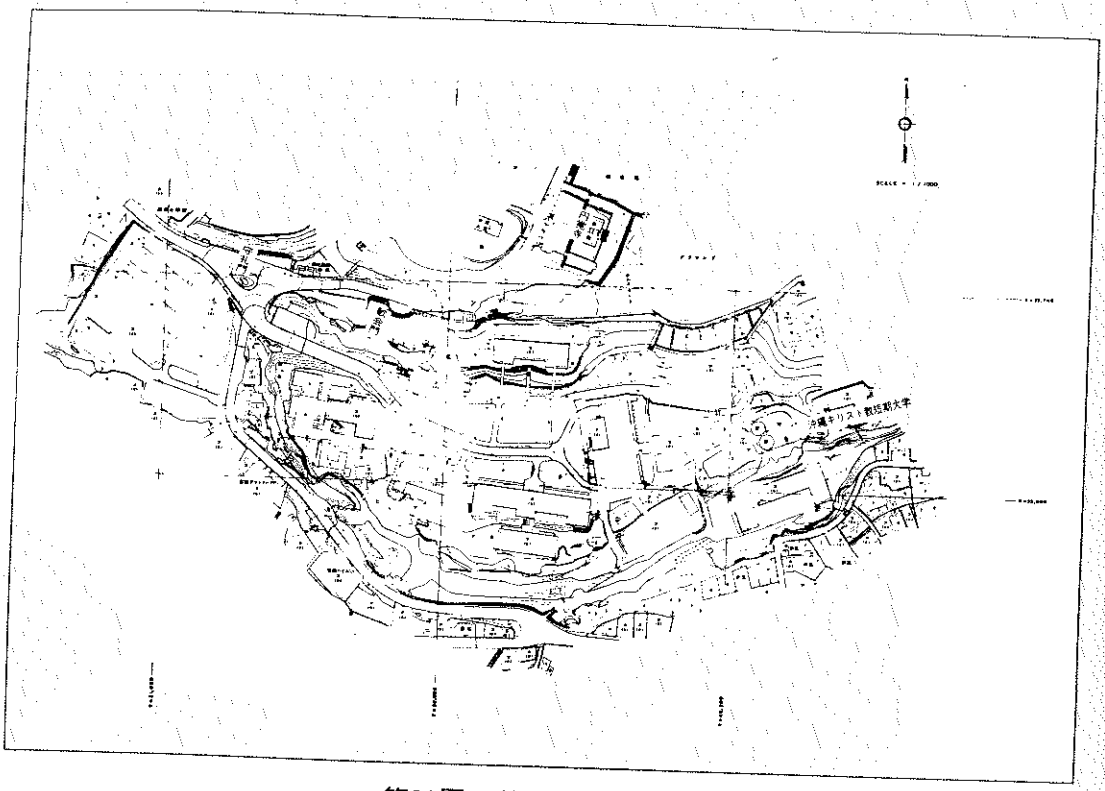
正殿の前に広い庭があり、これをはさんで北殿、南殿が配される。正殿より西側地域の施設は行政関係、東側地域には主として王家関係の施設が配された。

郭外にも城と一体のものとして種々の施設が設けられた。第二門としての守礼門、遠く離れて第一門としての中山門が西方に建てられ、拝所の園比屋武御嶽、円覚寺、弁財天堂と円鑑池、龍潭なども造営されている。

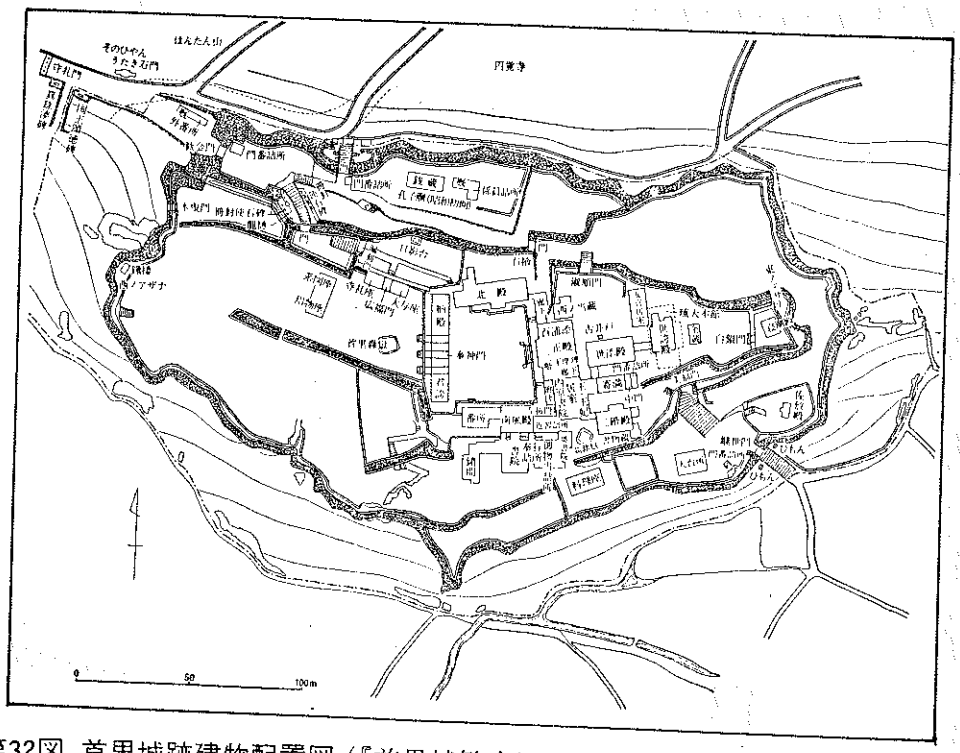
首里城跡の考古学的調査はほとんど行われていない。城跡内からは、中国陶磁、古瓦、古銭、鉄釘などが出土する。

首里城の創建は不明である。尚巴志の代1427年に城門前に碑が建てられているのが最も古い確実な資料であるが、察度王統のある時期（14世紀後半）には王都となっていたとする考え方もある。首里城は1660年、1709年、1945年の3回焼けている。第二次世界大戦前までは、石垣だけでなく木造建物もよく残されていたが、戦争で破壊され、さらに戦後の琉球大学の建設によって地形まで抉り、大きく変容されてしまった。

（安　里　嗣　淳）



第31図　首里城跡現況図



第32図 首里城跡建物配置図（『首里城歓会門復元工事報告書』より

112　腓　城（クンダグスク）

首里城跡内にある。旧琉球大学美術工芸ビル付近にあった岩陰をさして腓城と称している。『琉球国由来記』に次のように見えている。

尚徳王世子ノ屍也。王薨時、群臣癈世子、立御鎖側、欲為君。乳母欲救世子性命、抱逃テ、隠干眞玉城。兵卒追テ、殺之。

後其屍甚霊験アリ。島尻眞壁人、夾盗其屍。一時不及盗取、遺其一腓。因テ謂腓城。　（当　真　嗣　一）

113　石田グスク（いしだグスク）

那覇市識名にあり、石田中学校の東南部に位置している。この付近は現在都市化が進み旧地形が著しく損なわれているもののもともと識名台地の北縁部にあたる所であり、西に張り出す小丘をなしていたのである。グスクはこの小丘の頂部に占地する形をとっていたが、都市化のあおりを受けて現在では著しく変貌してしまった。

グスクの由来やその来歴については不明で、誰の居城であったか定かでない。グスクと呼ばれている付近からはグスク系土器が僅かに採集されているが、具体的なグスクの規模や形状については詳しく調査されてなく、そのため遺構等の有無、グスク内の様子等についてはあまり知られていない。　（当　真　嗣　一）

114　三重グスク（ミーグスク）「新グスク」「北砲台」

三重グスクは、屋良座森グスクとともに、那覇港口に設けられた辺防堡塁である。三重グスクは那覇港北口に位置し、北の砲台といい、それに対し、南口の屋良座森グスクは南の砲台と呼ばれていた。

三重グスクは海中に突出した琉球石灰岩からなる独立した小丘を石積みによってとりかこんで築かれている。このグスクは、大橋・中橋・沖橋と称する三つの橋によって陸地とつながっていたようである。

築造年代は明らかではないが「屋良座森城碑文」によると、南砲台の屋良座森城が、天文20年（1551）から22年にわたって、築造されたことが記されており、三重グスクもほぼ同時期に築造されたものと推定される。三重グスクは新城（ミーグスク）の意味であると考えられることから、屋良座森グスクの後に築造されたと考えられている。

これらの砲台の築造は外敵に備える国防の意義をもつと考えられ、尚真王の中央集権確立によって、国内は安定したとみられるが、次の尚清王代になって、倭寇などの外敵に対する必要性が強まり、これらの砲台を築造したとみられる。

前述「屋良座森城碑文」には築城後三年後の尚元王代に和寇が襲来したが撃退さ

れたと記されている。

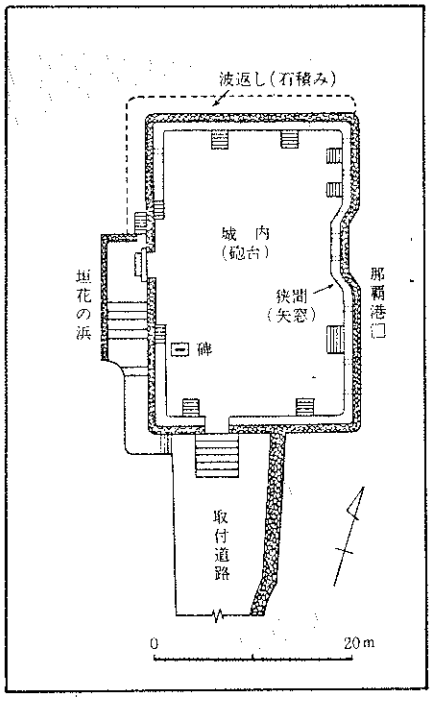
1694年（清国康熙33年）7月13日、台風の来襲によって、橋が壊され、流失し、琉球王府は、板橋であったのを2年がかりで石造橋につくり改えた。その後1713年にもこの石橋の大修理を行ない、現在絵図などにみられる、三重グスクが完成した。

琉球国旧記には「住昔那覇邑。有二王農大親者一。常遊　此。以観二光景一。亦恐下為二賊兵一見中掠却上。高築二雉堞一。以備二防禦一。」とあり、これについて、東恩納寛惇は「王農大親（ワウノ大比屋）は、王之大比屋に作り奥武山、王樋川等に索引される伝説の人で之の詳伝は知り得ない」と述べている。

三重グスクは、戦前燈台が設けられていたが現在は、那覇港出入船舶の監視所になっており、中に拝所が2ヶ所あり、南側と北側には石垣が一部残っている。

三重城と沖ノ寺（臨海寺）との中間に至る小台場を仲三重グスクというが本来は中グスクと称した。正徳三年編集の由来記に「前二人中城ト云ケルが、近頃ヨリ中重城ト云也」とある。㊂『琉球国由来記』（巻之一）昭和17年5月30日発行（伊波普猷、東恩納寛惇編）名取書店発行、田辺泰『琉球建築』、名嘉正八郎・藤本英夫編『日本城郭大系』（第1巻）昭和55年5月　　（知　念　　勇）

115　屋良座森グスク（やらざむいグスク）



第33図　屋良座森グスク

このグスクは那覇港口西側に三重グスクと相対峙した形で立地していたが、現在では米軍港建設と那覇港拡張のため破壊され存在しない。もと小禄村垣花町所在であるが、今は那覇市山下町に属している。

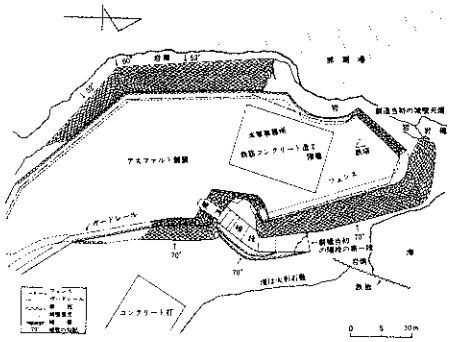
天文22年（1553）、当時の琉球国王尚清によって海賊（主として倭寇）を防ぐための海上防備の城として築かれたものであり、南砲台などと称されている。その翌年天文23年（1554）に城内に建立された「やらさもりくすくの碑」には城の創建の目的や城普譜のことおよび当時の軍備の配置などが詳細に記されている。

屋良座森グスクの姿は今日みることはできないが、昭和9年から10年にかけて現地調査を実施した田辺泰氏は

「屋良座森城は那覇港の所謂屋良座森の外で、海中に突出した自然岸壁を利用し其上に高さ約５尺、厚さ５尺９寸で長方形に城壁を廻し、郭内は東西57尺、南北96尺である。然して四方共に各々内側から城壁上に上る石段二ヶ所宛を設けてゐる云々」とその形状を説明している（注１）。また鳥羽正雄氏は、「一条の長隄道で陸地と連絡していた。平面形は方形で、さんご礁上に、方形の切石材で築き上げ、上に凹凸の雉堞を設け、これに銃眼があけてあった。漢土の楼台風の様式であった」（注２）と、ありし日の屋良座森グスクについて記述している。㊂東恩納寛惇『南島風土記』沖縄文化協会沖縄財団　昭和25年、（注１）田辺泰、巌谷不二雄『琉球建築』座右宝刊行会　昭和12年、（注２）鳥羽正雄『日本城郭事典』東京堂出版　昭和46年

（当　真　嗣　一）

116　御物グスク（おものグスク）「看見グスク」



第34図　御物グスク遺構図
（『昭和55年文化財要覧』昭和56年３月　沖縄県教育委員会）実測：1977年１月11日

那覇市通堂町にあり、現在の米軍基地那覇軍港内にある。このグスクが立地している地域は、過去から現在に至るまで幾度か地形的変貌をくりかえしたところであり、東恩納寛惇の『南島風土記』には「奥武山の西端、……。古へは海中に孤立し、細長の地頸を以て山と連絡し、一坐の石橋を架して海水を通じてゐたが、今はこの辺を埋め立て、明治橋此處を通過して…云々」とある。

創築年代については未詳であるが、古文献によると、貿易品公倉として、1456年には既に存在していたようである。琉球王国第二尚氏の祖、尚円は天順３年(1459)御物城御鎖側官に任ぜられている（『中山世譜』）。

『琉球国旧記』（編集1731年）に、「昔、諸国船の本国に致来し、また、琉船も亦諸に列るあり、貿易に便するを以て建てて此の城を創築し、公倉を其中に建て以て貨物を貯う而して御鎖側官ありて、其の事を掌管す、亦属官に御物城大屋子、鎖大屋子あり、然り而して倉屋已に廃れ、遺此猶存す」（島尻勝太郎氏訳）とあることから18世紀の初め頃には廃城となっていたことが知られる。

グスクの現況は、前述のとおり、米軍の基地内にあり、城内にはコンクリート製の施設が建立されているが、城壁や城門等はよく保存されている。城壁の石垣は、琉球石灰岩を主とし、ところどころに珊瑚石灰岩（海石）が混用されている。城門

は拱門で、間口幅1.68m、拱頂部までの高さ2.75m、城門の壁外勾配85度を測る。城門両袖の石垣は約10cm程の高さで現在しているが、老木の根により亀列およびゆるみが生じてきている。城壁の天端部の内周は155m、城内約933m²で、比較的小規模のグスクである。

グスク内の周縁部や城壁の周囲には、輸入陶磁器の破片が多量に散布している。これまでに採集され輸入陶磁器の破片はぼう大な量となっているが、そのすべてが明代のものとなっている。また、輸入陶磁器と一緒に宝貝も多量に得られる。

㊂『文化財要覧』沖縄県教育委員会　1976年　　（当　真　嗣　一）

117　天久グスク（あめくグスク）

那覇市の字古島から天久にかけて延びる丘陵の西端部は、東支那海（現安謝新港）に面する地点で海岸段丘を形成し、崖壁がほぼ南北方向に走る。その崖壁に沿うて北からギリチ原貝塚、崎樋川貝塚、天久グスク、天久遺跡が点在する。

天久グスクは崖壁上に形成される小丘で、天久台地では最も高く、標高約47mある。グスクは南側で天久遺跡と隣接する。グスクの南西側（宅地造成）と東側（天久マンションがある）で、基盤の石灰岩が削られ、天久遺跡からグスクへ通ずる道の両側は狭くなっている。頂上の平坦部には、コンクリートづくりの拝所が四ヶ所にあり、一帯は基盤の石灰岩が露呈していて、堆積土がなく遺物もみられない。また石垣も存在しない。

天久遺跡に接する傾斜面では、青磁片、グスク系土器片が僅かに散布するとの報告があるが、ほとんど見当らないのが現状である。西側の断崖上斜面は破壊されていない様子であるので、堆積土が残っている可能性もあるが、踏査していない。

（宮　城　長　信）

118　具志グスク（ぐしグスク）

那覇市字具志部落の北東に所在する小禄砂岩の小丘陵である。この付近は宅地が密集し、グスクも四方八方を宅地にとられ、現在は3つの拝所のみが残っている状態である。標高30m前後の小丘陵の東側に、10数段の階段を有するコンクリート製の拝所がある。昭和32年6月建立と刻まれている。また、西側15mのところに1m前後の小禄砂岩を組み合せて造った拝所があり、中に三つ石が配石されている。さらに10m程西に150m程低くなったところに、小禄砂岩（ニービ）の石碑があり、文字は不明瞭である。いずれも、北方に向って拝まれている。出土遺物、及び石積み等の遺構はない。ただし、先述したごとく、宅地により大部分が破壊されている

ため、それ以前については不明である。地元の人は「具志ウガン」と呼称している。

（比　嘉　春　美）

119　小禄グスク（おろくグスク）

ＰＬ．32　小禄グスク近景

那覇市字小禄、森口原にあり、小禄小学校東側の標高42～50ｍの石灰岩小丘陵である。ここはカニマン御嶽と称し、アヂシーと呼ばれる古墓が10数基みられる。また、北西端には慰霊の塔が建立されている。西側斜面には拝泉と拝所がある。グスク内からは、グスク系土器、貝殻が採集される。

伝承によると、城主は泰期金満按司であり、彼は察度王の弟であったといわれている。また、石積みについては、明治時代に城壁が崩され、那覇港を前にしている垣花部落付近にその石が運ばれていったとのことである。㊂『那覇市の遺跡』那覇市教育委員会　1982年３月

（比　嘉　春　美）

120　硫黄グスク（ユーワーグスク）

那覇市通堂町にあり、現在の沖縄製粉所がある一帯に位置していたという。東恩納寛惇の『南東風土記』には「渡地東海岸に聳つ居然たる岸塊であったが、近年それを切崩して整地、その跡に農工倉庫が建った」と書かれている。この辺の土地は、埋立改変が行なわれ、現在では全く旧地形が損なわれてしまっている。

このグスクは、屋良座森城の防塁がつくられた時、その後に詰として硫黄を格納したところだと云われている。硫黄は、「琉球王国」時代の対外貿易品の一つであり、その硫黄を一時的に収納確保しておく場所がこの硫黄城であった。『琉球国旧記』（1731年編集）には、享保前後まで、倉庫の礎石が残っていたと記されている。

㊂東恩納寛惇『南島風土記』沖縄文化協会沖縄財団　1950年　（当　真　嗣　一）

121　天妃グスク（てんぴグスク）

現在の天妃小学校付近にあったと思われるグスクであるが、現在は地形が変貌し、

その位置は全くわからない。又吉真三氏は上天妃宮の跡を天妃グスクと称すのではないかといっている。　（当　真　嗣　一）

122　サキハラグスク

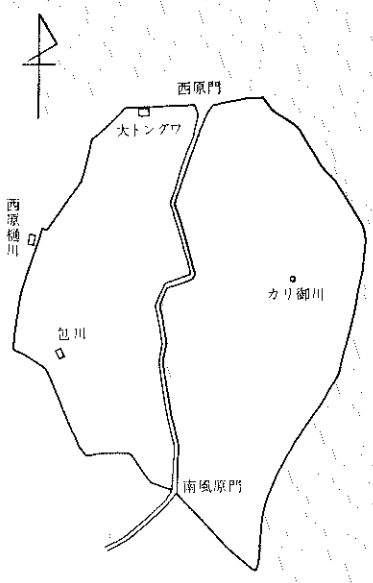
那覇市字鏡原にあり、那覇港を望む石灰岩小丘陵上に位置している。那覇市小禄のガジャンビラと呼ばれる坂を右手に折れて国道332号線を那覇空港に向ってしばらく走ると、熱帯樹が繁茂する小丘陵が道路左手に見える。グスクはこの小丘陵のさらに小高くなったところにあり、現在は拝所として信仰されている。一帯が米軍基地となっているために詳しい調査はなされてない。グスクの存在についてはあまり知られてなく、その由来等については定かでない。また、この地についてグスクとは呼ばれてないという研究者もあって「サキハラグスク」という呼称自体判然とせず、今後の詳しい調査が望まれている。　（当　真　嗣　一）

豊　見　城　村

123　豊見城グスク（とみぐすくグスク）

豊見城村字豊見城部落の北東約400m、標高54mの琉球石灰岩丘陵上に位置する。グスクは南北に長く、東から北にかけては断崖となり、それぞれ、漫湖、饒波川に面し、南はゆるやかに平地につながり、西はやや急斜面を呈し、低地となり、琉生団地に続く。

『豊見城村史』によると、南には南風門、北には西原門があり、城壁は小さな石で野面積みになっていたというが、明治時代には当時の刑務所（在那覇垣花）の囚人の農場になっており、戦後は米軍の採石場になったため原形を失っている。また、城主については、のちの山南王、汪応祖の居城であった



第35図　豊見城グスク地籍図
（『豊見城村史』豊見城村　1964年11月）

ともいわれ、李録に「南則近水如湖、遠山如岸、豊見城巍特出、山南王旧迹、猶有存者」（東恩納寛惇著『南島風土記』）と記されている。

落城の由来があり、尚巴志の女間者、与那原美人が物売りに化けて、城内をさぐり、城に水のないところをみて、火攻めにされ、落城したとのことである。そのため、「ひのえ」の日には嶽上りは厳禁だったとのことである。㊂『豊見城村史』豊見城村　1964年12月

（比　嘉　春　美）

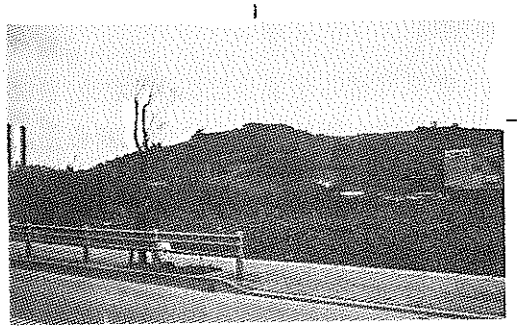
124　瀬長グスク（せながグスク）

豊見城村の瀬長島に所在する。瀬長島は周囲が1.5㎞程のほぼだ円形の小島で、島の南側に最頂部が標高約33ｍを測る石灰岩丘陵がある。その頂上附近には「瀬長の御嶽」または「公芳の御嶽」と呼ばれる拝所があり、瀬長グスクはその一帯に立地し石積み遺構も良く残っていたという。しかし、瀬長島は戦後すぐに軍用地に収用され、その為地形も大きく変貌し、現在ではグスク遺構の一端も見ることはできないが、青磁陶器、グスク系土器等の遺物は採集できる。また、丘陵の南側斜面の10ｍ下位には約40㎡程のフラット面があり、そこには波平井（ハンジャガー）と呼ばれる拝所が有り、その一帯では陶質土器や鉄滓、沖縄製陶磁器などが散見される。

（玉　城　朝　健）

125　長嶺グスク（ながみねグスク）

豊見城村字嘉数の東南東にあり、標高約98ｍの独立した小丘上に形成されている。このグスクが立地する付近は平地との比高差50―60ｍの高台地域となっており、この高台の中でも一段高くなった丘が本グスクである。グスクの北側や東側に展開する国場や長堂からの景観は、ひときわ高くそびえあたかも自然の要塞という感をうける。グスクに至る道は、嘉数集落の西側の尾根沿いにあいている。



PL. 33　長嶺グスク遠景

グスクは約1,044坪の面積を有し、地目は拝所、山林、原野となっている（『豊見城村史』）。現在の嘉数部落と長堂部落の境界山垣原に位置している。グスクの内部は幅１ｍの裂け目を挟んで２つの平場からなり、それぞれの平場が郭の役割をもっていたものと思われる。城内跡と想定される北側脇には地元の人たちに井戸跡だとして信仰されている円形状の遺構があり、そこか

ら南にまわった崖下にアヂシー（按司墓）と呼ばれる墓がある。遺物はグスク下方の崖下にグスク系土器や輸入陶磁器の散布が認められるが、グスクの東方崖下にも黒色土の遺物包含層の堆積が確認される。黒色土の遺物包含層からはフェンサ下層式に属すくびれ平底が出土している。

『豊見城村史』には「長嶺城は長嶺按司の居城であり、その支配下に金良、長堂、嘉数、真玉橋、根差部があったことは各部落の御嶽を拝む外にこの長嶺城の御嶽を拝むことでも知れるのである」と記載されている。㊂『豊見城村史』豊見城村役所 1964年11月

（当　真　嗣　一）

126　平良グスク（たいらグスク）

豊見城村字平良の西に隣接する石灰岩台地に占地している。現在の平良集落は、このグスクの東の傾斜面に展開す格好となっている。グスクの標高は98mを測り、付近の山よりひときわ高くなっている。グスク内は草木が繁茂して縄張りについて詳しく知ることはできないが、表面踏査の結果では小規模のグスクと思われる。グスク内には城壁の一部である野面積みの石積が確認される。グスクの由来については、文献はおろか口碑伝承すらなく不明となっている。『豊見城村史』には、「この城は小面積であるので按司時代には岩の山を見張所にして城が小さく構えられていたのだろう」とあり、また「三山時代になっては保栄茂城と同様南山の監視所、連絡所となっていて、豊見城、長嶺城との連絡中継をしたと考えられる」と記載されている。

グスク内やグスク入口付近でグスク時代遺物が採集される。

グスクの行政上の位置は、豊見城村字平良赤幸原　70番地となっている。㊂『豊見城村史』豊見城村役所　1964年11月

（当　真　嗣　一）

127　保栄茂グスク（ビングスク）

PL. 34 保栄茂グスク

豊見城村字保栄茂部落の北北東約100mの琉球石灰岩丘陵上に位置する。北側に狭い岩盤台地があり、「城内之殿」と称する拝所がある。そこは、北方の渡嘉敷部落に面したところに小さい石で野面積みにしてあるのが残っている南側の崖下には数基の古墓が認められ、現在でも部落で拝んでいるとのことで

ある。出土遺物は、青磁、陶器等が得られた。㊂『豊見城村史』豊見城村　1964年12月

（比　嘉　春　美）

128　石原グスク（いしはらグスク）

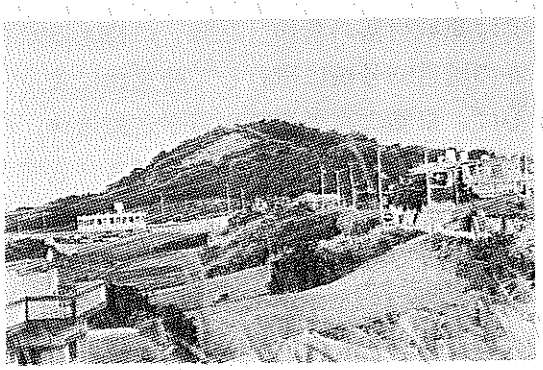
豊見城村保栄茂部落の西端、翁長集落に通ずる道路の北西側をさす。そこは道路から西へ舌状の小台地になり、その下が谷状に低地が広がっている。この一帯をユビ原と称され台地斜面中腹には、アカ木の大木とその根元に香炉が設置され、祭りに拝されている。口碑伝承によれば検地の際に当台地がひとつの目印になったとのことである。

現在、小台地部及び一帯はキビ畑となっていて、石垣遺構はみられず、また遺物もグスク期に属するものは発見されず、近世の陶磁器が散在しているのみである。隣接するグスクとして、東方約500ｍの丘陵に保栄茂グスクが存する。

（上　原　　静）

129　渡橋名グスク（とばしなグスク）

豊見城村字渡橋名部落の北東約80ｍ、標高60ｍ前後の北西から南東に連なる丘陵の南東端に位置する。南の最頂部には、10×20ｍの平場があり、イリの御嶽、アガリの御嶽が５ｍ程離れ、北に向って配されている。『豊見城村史』によれば、前者は「６月15日玉城へ御通しをする所」、後者は「３月のアマガシの時供える。志礼の東、道をへだてた森にある。」として遙拝所とのことである。北北東に10ｍ程下ると岩陰や木根等に口径20cmの荒焼の厨子甕が１個～10数個置かれた所が３カ所に認められる。さらに西に５ｍ程下ると、高さ４ｍ、幅３ｍのブロック造り（1982年７月４日建立）の殿があり、その後には高さ40cm、幅50cmのブロック造りの拝所の中に前述と同様の厨子甕が一個置かれている。



PL. 35 渡橋名グスク

ここは、渡橋名と座安の両部落で拝み、地元では「渡橋名御願」と呼称する。

㊂『豊見城村史』豊見城村　1964年12月

（比　嘉　春　美）

130　ユダマグスク

豊見城村字上田の東方約500ｍにあり、標高102ｍの丘陵台地にある。グスクが立地するこの台地は、標高約100ｍの高さで南北に走っており、台地の縁辺には平良グスク、保栄茂グスク、ユダマグスクがこの台地を取りまくように占地している。

グスクからの見晴らしはよく、眼下に饒波、高安、上田、宜保などの各集落を見おろすことができる。グスクの下方には、俗称「赤御墓」と呼ばれる古い墓があって、ここに葬られている人は、上田・渡嘉敷の先占開拓者であったといういい伝えもあるが真偽のほどはさだかでない。㊂豊見城村編集委員会『豊見城村史』豊見城村役所　1964年12月　（当　真　嗣　一）

南　風　原　町

131　ウチミグスク　「内嶺グスク」

南風原町字兼城にあり、標高約43ｍの泥灰岩の丘陵頂部に形成されている。グスクは兼城村落の背後（北側）に控える形をとっている。グスクが立地する丘陵は現在の国道58号線に平行して略東西に走っており、この丘陵上にはウチミグスクを中心に、東側に宮平遺跡、宮平之殿遺跡。西側に兼城之殿遺跡が知られ、グスク時代遺跡が点在している。ウチミグスクを城と見れば他の３つの遺跡はグスク時代の小集落の跡として認識できるものである。この一帯の土地は耐水性の強いジャーガル土壌地帯であって、グスク時代に至ってはじめて水田経営が可能となった地域である。そのことはグスク時代以前の遺跡が皆無であることでもうなづけよう。ウチミグスクや他３遺跡から出土する輸入陶磁器は、沖縄出土の輸入陶磁器の中でも古式に属し、グスク時代では比較的古い時期に属すものであると考えられる。なお、石垣や石積等の遺構は確認されない。近年、採土や土地造成等による諸開発によって著しく旧地形が損なわれ、遺跡群の破壊が進行している。　（当　真　嗣　一）

132　仲間グスク（なかまグスク）

新城徳祐氏により南風原町津嘉山に存するとされるグスクである。現在その所在は不明である。確認調査は津嘉山集落の東側にある津嘉山森に続く丘陵一帯と集落側に舌状に延びた小丘を対象に行なった。調査結果、前者の丘陵に於いては遺構、遺物の発見はなく、後者の小丘は仲間之殿が存在することが確認された。殿内には

樹木の根元に香炉を配した拝所が3カ所にみられたが、石積遺構及びグスク系統の遺物は発見することができなかった。

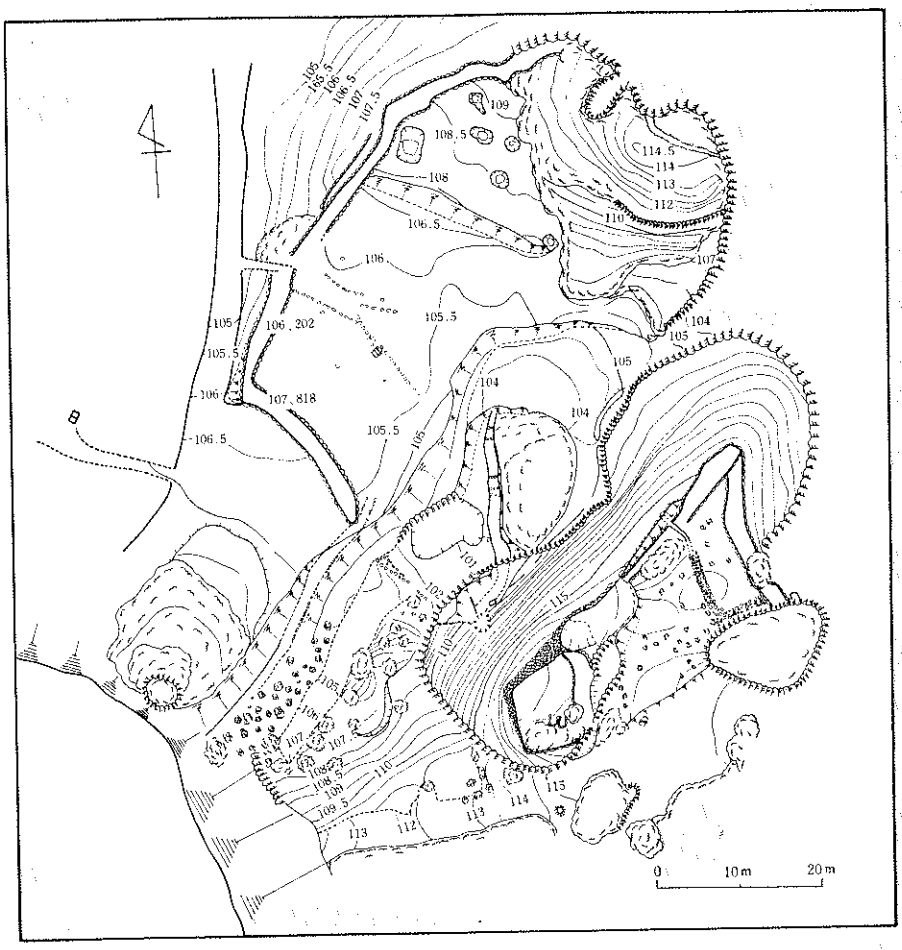
なお、当該小丘の東方部は村道の改修工事がなされ地形の現状変更がなされつつある。

（上　原　　静）

東　風　平　町

133　八重瀬グスク（やえせグスク）「富盛グスク」

東風平町字富盛の部落より南へ約1km程離れた八重瀬岳の北側崖下にあり、起伏



第36図　八重瀬グスク地形図（『八重瀬グスク調査略報」東風平村教育委員会 1979年3月）

PL. 36 八重瀬グスク遠景

PL. 37 八重瀬グスク遺構

に富んだ石灰岩地形を巧みに利用して築かれたグスクである。別名富盛グスクとも呼ばれている。

グスクの背後（東側）には標高163 mの八重瀬岳を控え、前方には字東風平字世名城などの集落を望む位置にある。現在の字富盛の集落はグスクの北側にあたっているが、石灰岩の丘陵地帯にはばまれグスクからの眺望はきかない。なお、同じ富盛地内に所在するジリグスクは、本グスクの北北西約500 mの至近距離に立地している。また当該グスクの麓には富盛の「殿」があり、そこは部落でも重要な聖域となっている。

グスクの来歴については文献が無く詳びらかでないが、口碑伝承によれば島尻世の主八重瀬按司の居城跡といゝ伝えられている。『東風平村誌』の記載ではグスク域の総面積4231m²となっている。グスクは石垣で囲まれた本殿跡および蔵当と称される上・下二つの郭から構成されている。本殿跡と称される所は、グスク内のうち最も低くなったところに位置し、標高105mで約600m²の面積を有する広場となっている。この広場の南側から西側にかけては幅2 m、高さ1～1.5mの野面積みの石垣がグスクの周囲を取り囲むようにL字状にめぐっている。石垣が認められる所はあくまでも緩傾斜面のみに限られ、岩山が屹立する北西側にはのびてない。此々は下の平地との比高差が7～8 mもある絶壁をなしている。なお、この絶壁の天端は標高114 mを測り、約5 m²の広さで平坦地となっている。そこからは村内が一望のもとに見渡せるばかりでなく、西に東シナ海、南に太平洋、北に琉球王統の地、首里一帯を眺望することができる。古老たちは、この高所を物見跡として伝承している。本殿跡の広場中央には、「ナカジク火の神」と称される祠があり、現在アダンナ門中によって祭祀が行われている。この辺の地理に詳しい地元民の話しでは、かってこの広場では建物の礎石らしい石が散見されたということであり、このことからすると、祠を中心に礎石を有す建物が存在していた可能性は強い。発掘調査の結果では、それらしい遺構は確認されてないが、広場を覆う遺物包

含層が存在することからすると、人間の居住域であったことは十分予想されることである。現在のグスク入口付近では城門跡が発掘調査で確認されている。この城門はN60°Wに開けられ、門に向って右側には門柱の礎石が残存していた。形状は37cm×40cmの長方形状の平たい石灰岩塊であった。左側の礎石は抜き取られてしまっていたが、掘り方のみは残存していた。広場の西縁に沿って幅1mの城道とも思われる小道が南にのび、この道は上部に位置している蔵当と呼ぶ郭に達することがわかった。

蔵当は、本殿跡より一段高くなった標高116mを測る小広場となっている。ここでは北側と東側がゆるやかな斜面をなしていて、その縁辺には野面積みの石垣が約2mの高さまで積まれている。石垣は人頭大よりやゝ大きい自然石を積みあげたものであるが、平面観は曲線を描き、角は丸くなっている。石は直接露頭岩の上に積み上げられており、傾斜角は80～85°でやゝ垂直である。当該小広場では平均桁行き間9m、梁行き間5m、桁行き方位105°Wをとる掘立柱建物のほか、排水溝の機能を有していたと思われる溝も確認されている。掘立柱建物の中には地炉がおかれていたとみえて調査では柱穴群の中に炉址が検出されている。この炉穴は上端で長径100m、短径75cmの楕円形を呈し、鍋底状を呈していた。炉を有す掘立柱建物跡は今帰仁城跡の志慶間門地区でも確認されている。

グスクの水場はグスクガー（井泉）と称され、本殿跡と蔵当との中間部凹地となった岩山の真下に位置して郭内にうまく取り込まれている。

グスク内からはグスク時代の遺物が発見される。とくに蔵当地区は豊富であり、黒色土の遺物包含層からは発掘によって多量のグスク時代遺物が出土した。出土する遺物はグスク系土器、輸入陶磁器、鉄釘、貨銭、玉類、牛の遺存骨などである。輸入陶磁器は元代のものを若干含み、明代の製品が大半を占めている。㊂『八重瀬グスク―調査略報―』東風平村教育委員会　1979年3月　　（当　真　嗣　一）

134　世名城グスク（よなぐすくグスク）

世名城部落の南南東約600m、標高80m前後の石灰岩段丘の中腹に位置する。グスクは北側は急傾斜で平地につながり、南側はゆるやかに石灰岩段上となる。

グスクは約80m×50m程の平場をなし、高良ヌ殿（コンクリート造り）、世名城ヌ殿（石灰岩造り）、を中心に玉城グスクへの遙拝所、「上世名城ガー」、2つの拝所、2基の古墓が配されている。東側はヤブになっていて、その間隔部に高さ80m、長さ2m程の切り石積みがみられるが、雑木が繁茂しているため詳細な性格をつかむことはできなかった。『東風平村史』によれば、この一帯を「ウィユナグシク」と記載してある。

また、北側の急斜面を約200ｍ程下ると、標高30ｍの緩やかな傾斜地となる。この付近はノン殿内、志伊良アタリ之殿、イビス前等の拝所が集まり、部落民の信仰の対象となっている。この一帯からグスク時代の遺物も散見でき、古島、イリ古島、アガリ古島と呼称していることから、上世名城を中心とした集落跡が考えられる。
㊂『東風平村史』東風平村　1981年１月　　（比　嘉　春　美）

135　テミグラグスク

PL. 38 テミグラグスク遠景

東風平町字当銘部落の北方、標高約80ｍの石灰岩丘陵に位置する。グスクは最高所に30ｍ×40ｍ程のフラット面があり、石垣等の遺構は認められない。ただし、フラット面には、火の神、拝所、拝泉等があり、南斜面の二つの石灰岩塊の南面には崖葬墓が６基確認できた。その１つには「城金満大殿内、仲が間拝所」と記されている。また、北東約50ｍ斜め下方に遺物は、グスク系土器、青磁、須恵器、褐釉陶器等が採集できる。

伝承によると、本グスクは小城、志多伯、当銘を治めていた「テミグラ按司」の居城でまた、北方約500ｍのアタンジャー山に高さ５尺、幅５尺程の石門の格構の入口があったと伝えられる。なお、本グスクの由来については稲村賢敷氏の見解がある。㊂『東風平村史』東風平町1976年１月、稲村賢敷『古代部落マキヨの研究』1977年７月　　（比　嘉　春　美）

136　ジリグスク

東風平村字富盛部落の西方の小丘陵上に形成されている。石垣は見あたらない。築城年代については不明であるがグスク上部の平地には、県指定民俗文化財の石彫大獅子が存在し、これが尚真王21年（1689年）に設置されたことが知られている。近年まで石獅子に隣接しコンクリート製大型水タンクがあったが今は撤去されて旧地形をみせている。ただタンクの設置下部は建設当時に破壊され攪乱を受けている。またグスクの東側は基盤の石灰岩が露呈しているが風水のため大きなフィッシャーがあき、石獅子部分の基盤のフラット面が年々南方向に傾斜している。

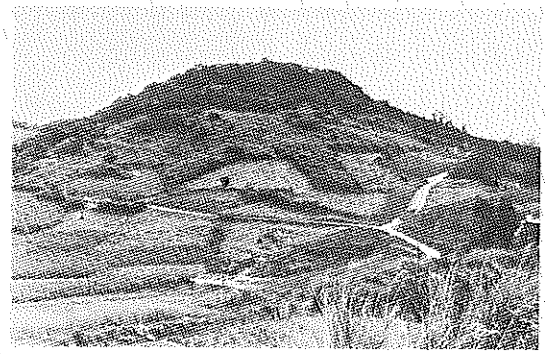
グスク遺物は北側と東側の畑地から採集され、グスク系土器、青磁、須恵器、石器等が確認されている。尚、近年縄文系統の土器が本グスク内から採集されている。

（上　原　　静）

大　里　村

137　大城グスク

大里村字大城に所在する。大城部落の北方よりに位置する。標高 143 mの独立丘的な小丘状をなし内部にフラットな面が形成されている。平山城的で城門に礎石が残されているが縄張りや石垣等の構築は確認できない。城内は黒土層が拡がり遺物が散在している。採集される遺物は、土器、輸入陶磁器、鉄刀子、鉄剣等である。時代は14世紀頃とされている。口碑伝承では大城按司真武（玉城按司の次男）の居城だったと伝えられており、島添按司に亡ぼされ廃城になったとされている。名嘉正八郎氏の口碑伝承からは大城グスクと大里グスクとの間に戦争があったとされ、次のようなくだりがある。「両軍は長堂原で大合戦を演じたが決着がつかず戦場は稲福遺跡群のある台地に移った。大城グスク軍優勢のうちに戦局は進んでいったが、大城グスク軍の旗手が誤って旗を倒したため、城中からこれを眺めていた妃や若按司らはてっきり敗北したものと思い城に放火し自害した。今度は城のこの有様をみて、大城軍は勢い落ちて結局、敗北したというのである。」　（大　城　　慧）



PL.39　大城グスク近景

138　大里城跡（おおざとじょうせき）「島添大里グスク」

別称島添大里グスク、あるいはウブザトグスクとも呼ばれている。

沖縄本島南部、大里村西原地番に所在する。西原部落の北方に位置し、標高 150 mの琉球石灰岩上に築城されている。連郭式の山城で、部分的に野面積みの石垣が残っている。グスク内面積が 6.5 haで城内には井泉の降り井（が）がある。島添大里按司が築城したと伝えられ、近海の馬天港を利用した海外貿易が実施されたものとされている。未調査で城内の形態や遺物の手がかりがつかめないが、採集される遺物からは土器、須恵器、輸入陶磁器などがあり城内から西原部落までかなり採集できる。採集される陶磁器から推して大体14世紀頃に形成されたグスクとされる。塀内には、２基の墓があり、それぞれ島添大里按司の墓、王妃ウミナイ御墓とされている㊂『中山世鑑』、『蔡温本中山世譜』、「琉球国の三山統一について新考察」、「山南王の系譜」　（大　城　　慧）

139　ミーグスク

大里村西原に所在する。大里城跡のある石灰岩丘陵の北東先端部にある遺跡でグスク系土器、青磁などが散布している。

遺構、石碑伝承についての内容はつかめない。　　（大　城　　慧）

140　稲福遺跡（いなふくいせき）「山グスク」

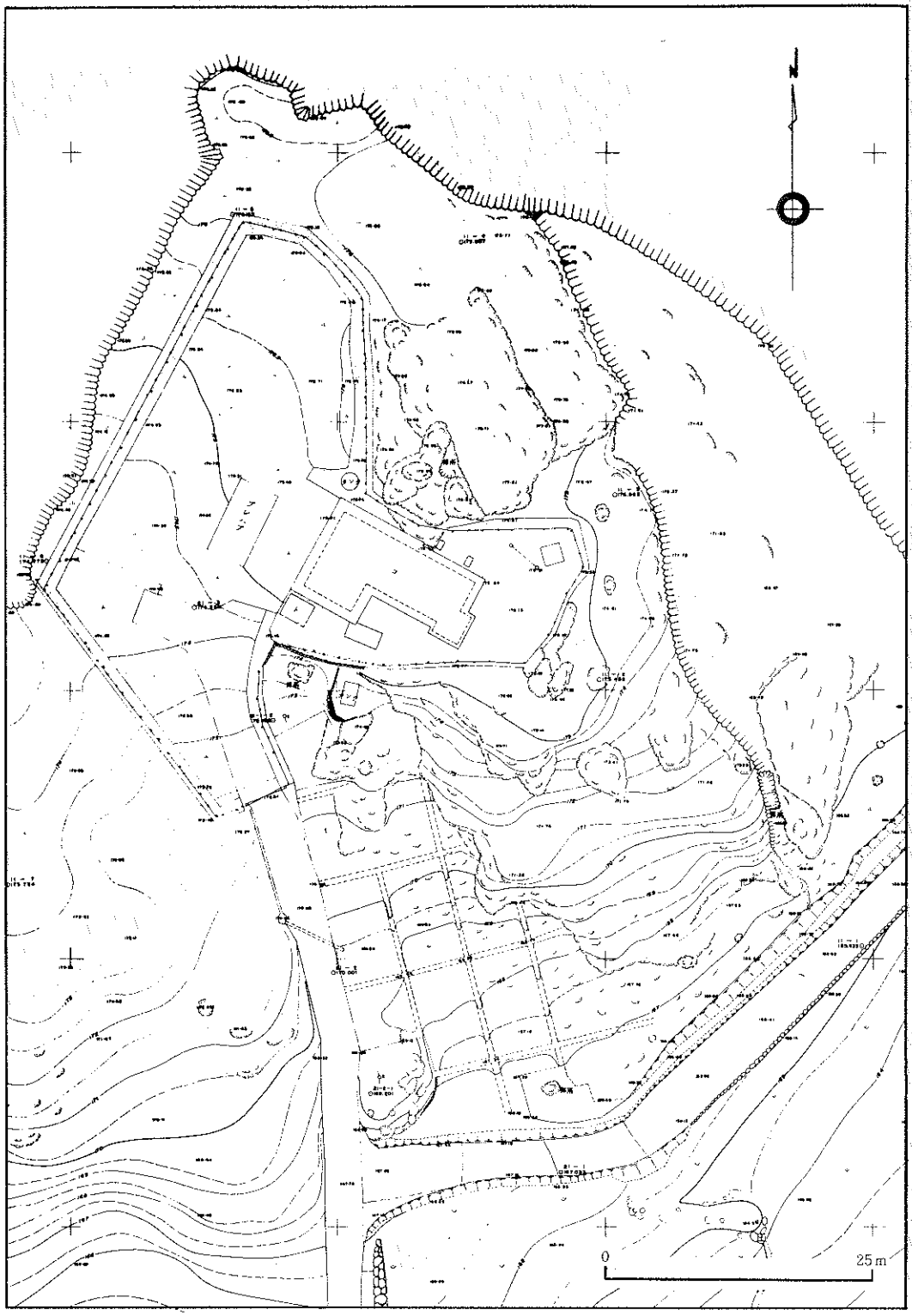
沖縄本島南部、大里村字大城稲福原に所在し、稲福部落の北東方に位置する。遺跡一帯の土地は知念半島の背骨にあたり、南北に延びる琉球石灰岩兵陵台地が形成されている。遺跡地は標高 180 m で、三方は崖に囲まれ南は緩傾斜を示しながらかつて稲福部落が立地していた上稲福にいたる。遺跡の北と西側は石灰岩の露頭岩が目立ち、現在は山林となっている。遺跡の範囲は広く、上御願から南方向の中森御嶽や東方向の仲村御嶽および殿その他旧村落内をも含め稲福遺跡群として総称されている。

稲福遺跡群の中でもひときわ高い所に立地する稲福上御願遺跡は、石塁こそ確認されないものの天険の要塞としての地の利を得、グスク様の地形的景観を呈している。1981年に大阪航空局所管の無線中継所の老朽化整備から施設内の埋蔵文化財の緊急発掘調査が実施された。調査面積 800 m²であった調査は 3 ヶ月という長期間を費やした。その成果は膨大にのぼっており特に遺構では建物跡を残すと見られる柱穴群 3 ヶ所や土壙 5 ヶ所、石組遺構 1 ヶ所が検出、青銅製品、骨製品、玉類、勾玉、土錘などの土製品、鉄製品、炭化米、麦、牛、魚の遺存骨等が出土した。

輸入陶磁は器形、焼成から13世紀～14世紀頃を盛期として形成されたグスクの一つと判断される。この遺跡は、過去に1969年から1974年にかけて琉球大学考古学研究会によって調査されたことがあるが、詳細な調査報告書は未刊のままである。地元の人は「山グスク」と呼んでいたとのことである。㊂『大里村史』－資料編』－昭和57年 3 月刊大里村史編集委員会・琉球大学考古学研究会「稲福村落」

（大　城　　慧）

PL. 40　稲福遺跡の遺構

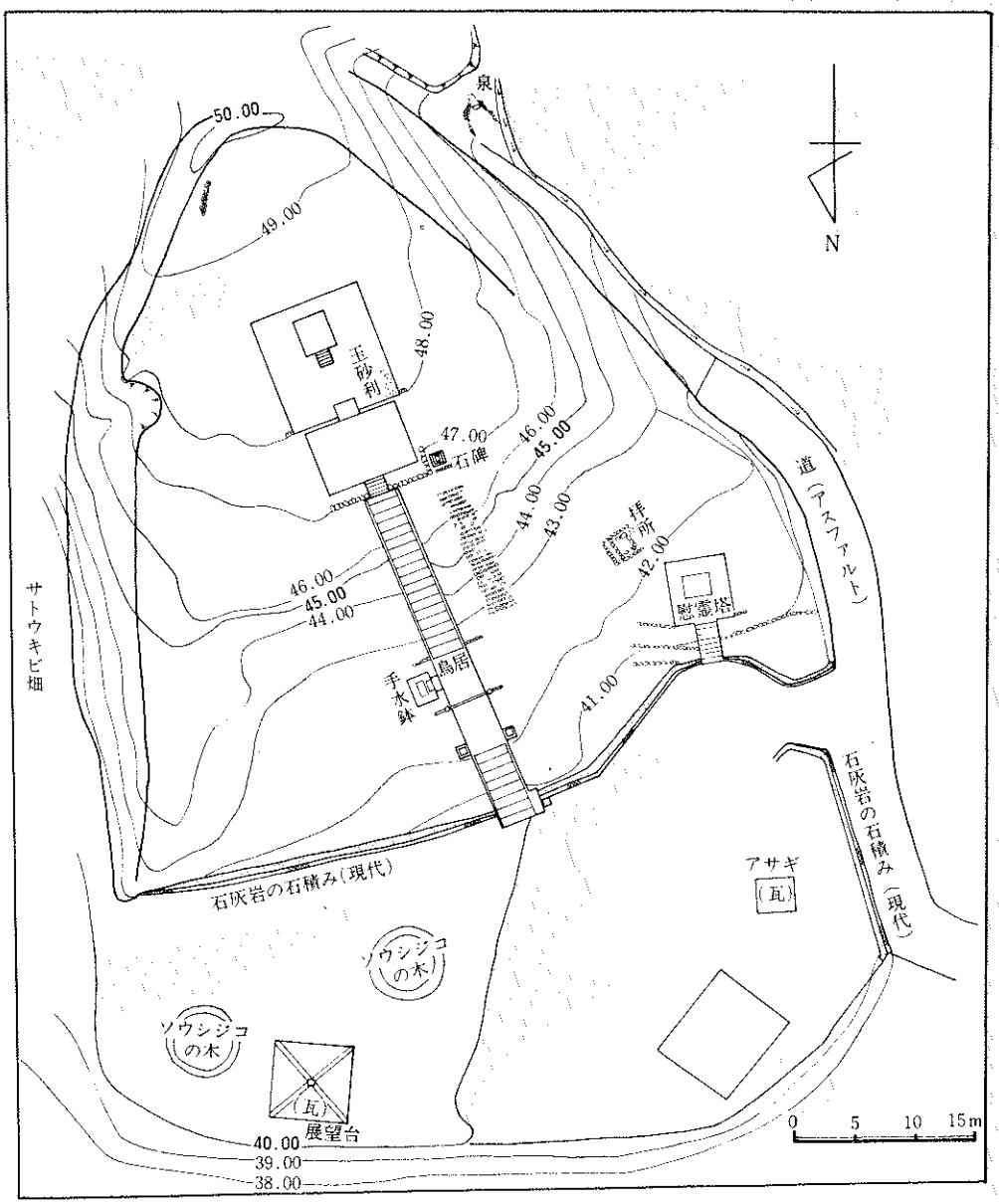


第37図稲福遺跡地形図（実測：1982年２月）

佐　敷　町

141　佐敷グスク（さしきグスク）「上グスク」

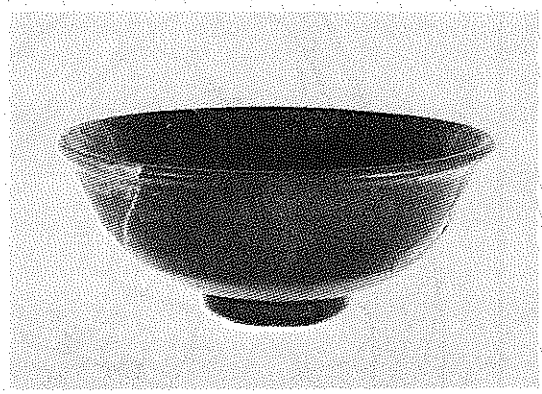
佐敷町字佐敷にあり別名上グスクとも呼ばれ、町役場の裏山に位置する。標高45～50m。14世紀のグスク跡である。このグスクは、琉球第一尚氏王朝の祖尚思紹・尚



第38図　佐敷グスク地形図（「佐敷グスク」佐敷村教育委員会1980年３月）

巴志父子によって築かれたグスクとして著名である。グスクの構造は単純で、四段の平場によって構成されている。一番上段のフラット面は標高49mを測り、一番下のフラット面との比高は9mである。1979年に教育委員会によって発掘調査が行われた。発掘では三段の築成面で多数の柱穴群を検出し、重複する掘立柱建物跡の存在が確認された。遺物は築成面の縁端部において最も多く出土したが、とくにST02と呼ぶ青磁だまりでは復元可能な青磁碗が一括して拾数個出土した。その他の出土遺物は、グスク系の土器、鉄製品、書銅製品、滑石製品、古銭、炭化米・麦、牛の遺存骨などである。なお、鉄製や鉄鏃や鞆のような武器、武具の類も出土した。㊂佐敷村教育委員会『佐敷グスク』1980年3月

（当　真　嗣　一）



PL. 41 佐敷グスク出土遺物

142　屋比久グスク（やびくグスク）

佐敷町字屋比久部落の東側にある「上ヌ毛」と称するところである。この小丘には2ヵ所の拝所があり、中段に「フトゥキ」というコンクリート製の拝所、上段の東側に「グスクダキ」と称する幅2m×長さ4m程にコンクリートを敷いた所がある。前者は、古戦場で死んだ人を祀ったところで、後者は、5、6月のウマチーのとき部落で「今帰仁グスク」を遙拝するとのことである。現在、部落では「グスク」と呼称していない。新城徳祐氏『沖縄の城跡』の「屋比久グスク」はおそらくここをさしているのではなかろうか。㊂新城徳祐『沖縄の城跡』1982年12月

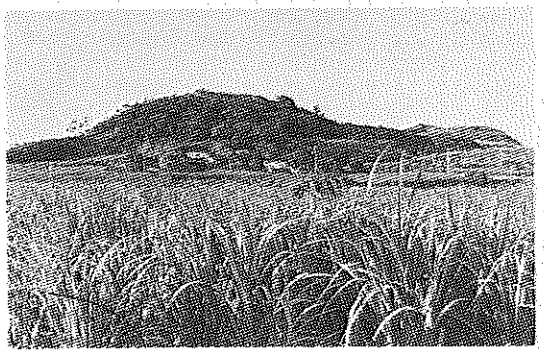
（比　嘉　春　美）

知　念　村

143　知名グスク（ちなグスク）

知名部落の北東 300 mにある知名崎に隣接する標高40mの石灰岩の丘陵で戦前は大きな岩山であったが、採石のためそのおもかげはなくなった。

グスク北側には、数基の崖葬跡があり、沖縄製陶器の厨子甕の破片が散乱していた。グスク内には「知名ヌヒヤー」の墓があり、「清明祭」や「16日」の際には部落の区長、班長が拝みにいくとのことである。



PL.42　知名グスク遠景（南から）

『遺老説伝』によると、のちに知念城主の養子となった内間大親の居城であったという。また、グスクの近くには「ウティダウッカー」という、「東御廻り」のときに拝む拝泉がある。㊂『知念村の文化財』知念村教育委員会　1981年４月

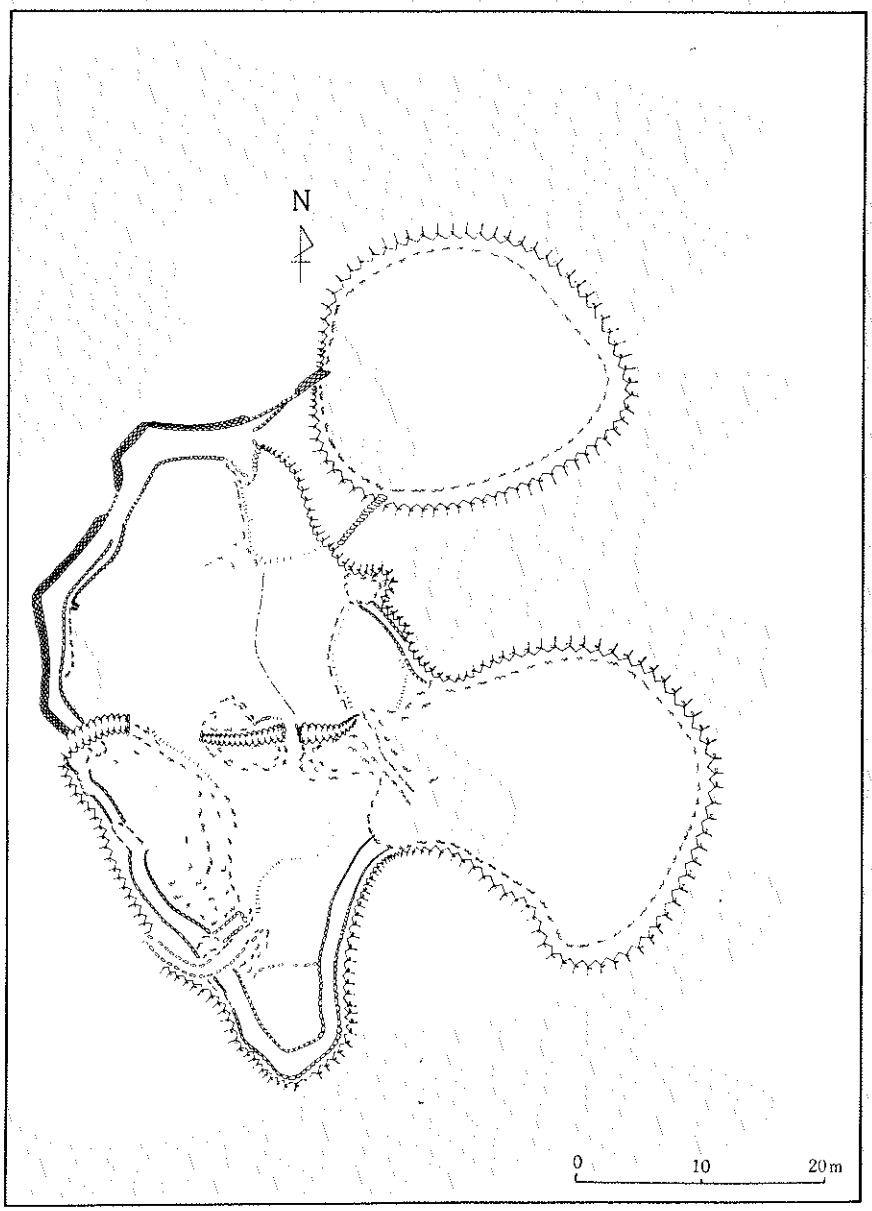
（比　嘉　春　美）

144　ヰナグナーワンダー遺跡

知念村字久手堅にあり、斎場御嶽の西方 150 mの距離にある。ヰナグ（女）ナーワンターと呼ばれる屹立した石灰岩の岩山に接して築城されている。このヰナグナーワンダーに相対して北にキノコ状のヰキガ（男）ナーワンダーが屹立している。久手堅部落でも古くから謡われている「チッチン・チララン・ナーワンダー・ヤーチン・ヤカラン・ナーワンダ」というのはこの屹立した二つの岩山のことである。二つの岩山のことである。

PL.43　ヰナグナーワンダー遺跡石垣

ヰナグナーワンダーに隣接して築かれたグスクは、保存状態はきわめて良好で城壁の石垣がよく残っている。石垣は人頭大の石灰岩塊を野面積みにしたもので、高い所で４ m、厚さが１ m 50を測る。グスク内のほぼ中間程に２ m前後のフィッシャー（割れ目）が横



第39図　ヰナグナーワンダー遺跡実測図（1981年５月）

断しグスクが二分された形となっているが、そこには大きい石灰岩の橋が架されている。

グスク内は２面の平場からなりほぼ平坦に造成されている。城壁の石垣は険阻なところは低く、緩傾斜面は高く積まれ、その平面形態は曲線を描く。グスク時代の遺物が僅かに分布し、部分的に黒褐色土の遺物包含層が確認できる。

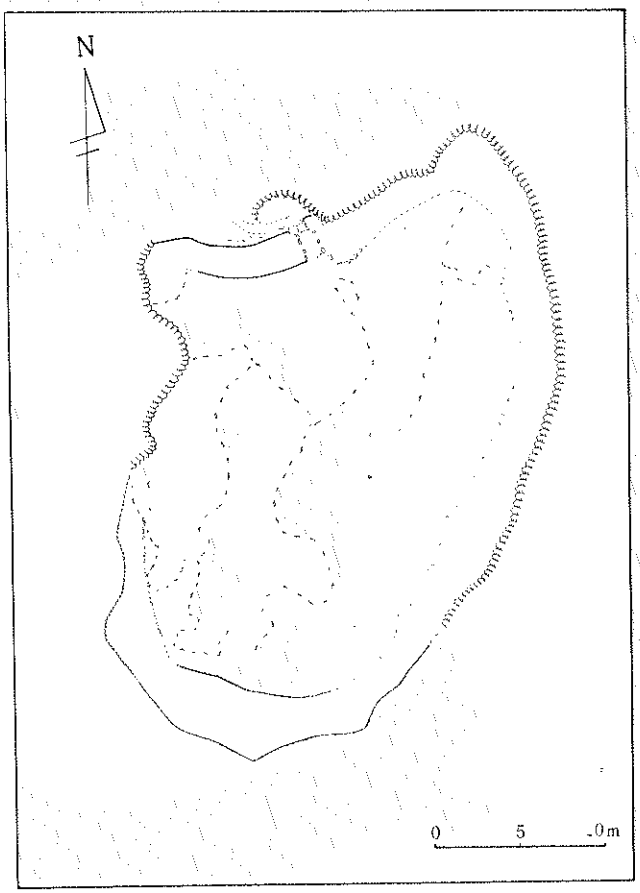
（当　真　嗣　一）

145　安座真グスク（あざまグスク）

知念村字安座真の南にあり標高120ｍの石灰岩独立丘に形成されている。グスクの四方は断崖をなし、要害堅固なグスクとなっている。頂上に約700 ㎡程の広場が一面に確認できた。城門に相当するところは北側にあって、約60～70cm幅の細長い坂道をよじ登ればまもなくグスクの平場に至る。断崖縁辺部には石垣が確認されるが、とくに崖が険しいところは石垣が厚く高く積みあげてある。グスク内では遺物はまだ確認してない。なお、近くには安座真の古島があったと伝承されている。

（当　真　嗣　一）

PL.44 安座真グスク近景



第40図　安座真グスク実測図（1981年３月）

146　寒水グスク（そうず(じ)グスク）

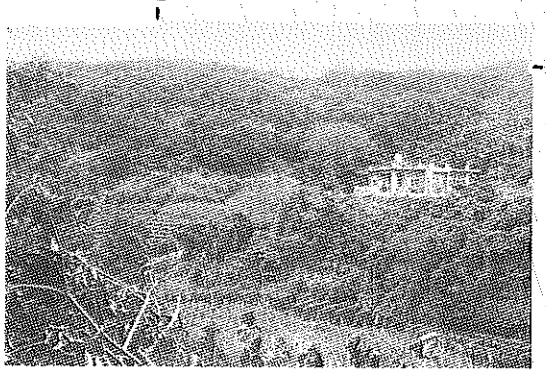
知念村字寒水に所在し、現知念村役場の南方約350ｍの距離にある小丘陵一帯を称してソーズ(ジ)グスクと呼んでいる。丘陵の一部は県道拡張工事により削りとられ、同丘陵の東側にある岩山が突出し特徴的である。麓には寒水部落があり、西方の吉富丘陵からはソーズ川が通り、部落東方に広がる低地に流れている。寒水部落は北の久手堅部落からの屋取部落として伝承されている。

グスクと称されている丘陵一帯は石垣遺構はみられず、又拝所も認められない。ただ現在のところ資料の発見数は少ないが、一部県道拡張工事で破壊された丘陵斜面下部からフェンサ上層式土器が採集されている。　（上　原　　静）

147　古間グスク（ふるまグスク）「カンチャグスク」

知念村志喜屋にあり、別名カンチャグスクとも呼ばれる。集落の西端部つまり西方の崖斜面部に位置し、大岩と竹林からなる。石垣遺構は認められないが、１ｍ方形の石囲い井戸を３基(深さは30～50cmと浅い）と、拝所をみることができる。現在、当拝所に関わる祭り行事や御願も消え、忘れられている。文献『球陽』には、当地に竹を植えたことが記載されている。表面調査の結果、遺物は発見されていない。

（上　原　　静）



PL.45　古間グスク近景

148　ウフグスク

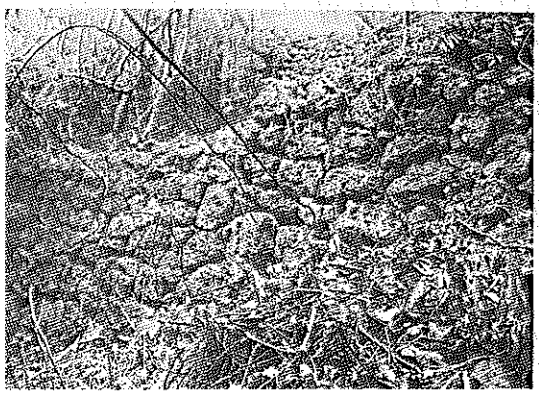
知念村字久手堅にあり、標高70ｍの小高い丘に位置している。このグスクは、国道329号線脇にある斎場御嶽入口の南東約200ｍにある。碗をふせたような何の変哲もない雑木林の独立丘であったが、近年、土地造成工事で破壊されてしまった。

（当　真　嗣　一）

149　志喜屋グスク（しきやグスク）

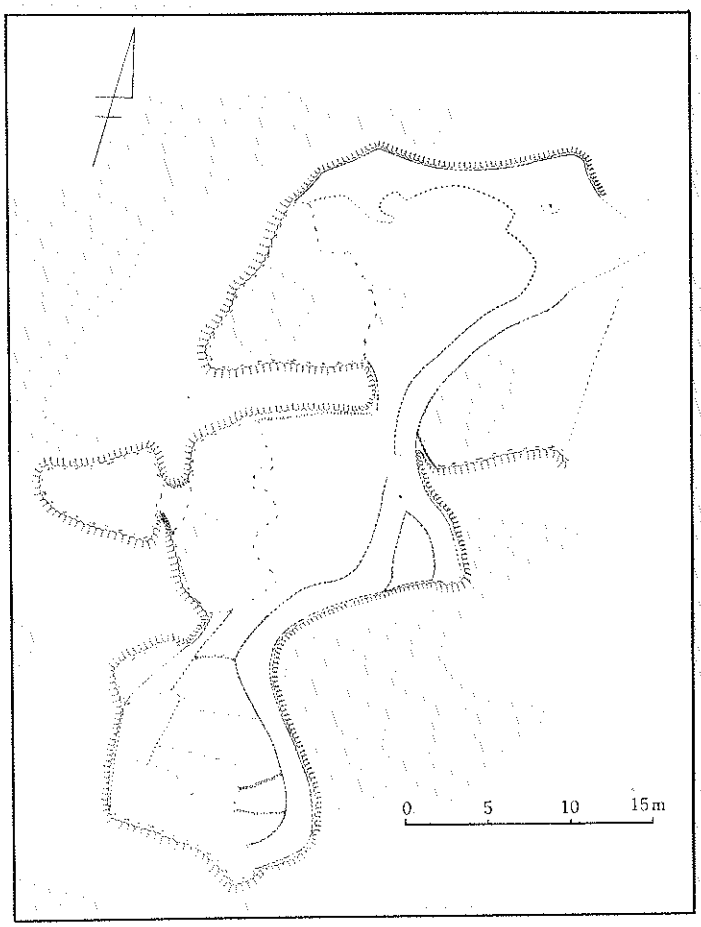
知念村字志喜屋国道329号線沿いにあり、標高60ｍの石灰岩丘陵上に築かれたグスクである。グスクの北側を幅員１ｍのカンチャ川が蛇行し、その周辺には狭い水田

が棚状に開けている。グスク内は猫の額程の広さであるが、雑木の伐開で10坪程の平場を二面確認できた。グスクをとりまく城壁の石垣は、緩傾斜をなす東側に集中してみられ、西側の断崖側には認められない。石垣は野面積みである。城外の東側には志喜屋部落の創始家と伝わる親川家の墓があり、その一部はグスクの城壁に隣接して築かれている。グスクの城門と見られるところはこの墓の南側にあってそこに緩かな斜面をなしている。グスク内とグスク外北側と東側の畑地からは少量のグスク系土器と輸入陶磁器が採集される。



PL.46　志喜屋グスク（石垣）

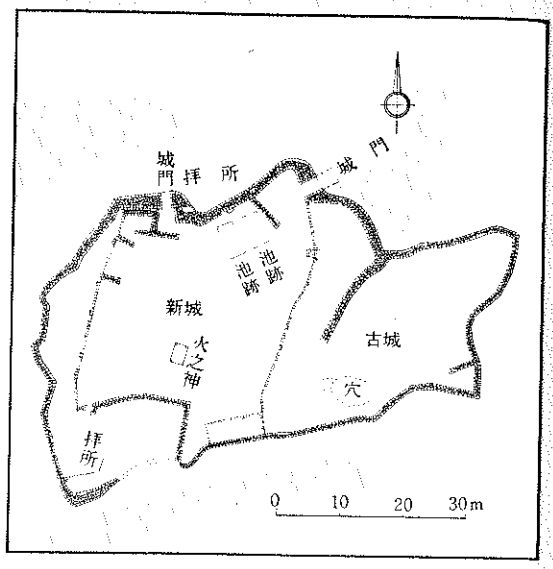
（当　真　嗣　一）



第41図　志喜屋グスク実測図（1981年）

150　知念城跡（ちねんじょうせき）

知念村知念部落の西方約 150 m、標高約 100 mの琉球石灰岩台地の南端に位置している。グスクの南側から東側にかけては断崖に面し、北側は緩傾斜を示しながらやがて旧知念部落へと続いている。



第42図　知念城跡実測図

グスクは２つの郭からなり、古城・新城といわれている。古城と呼ばれる東の郭は高さ約１～２ mの野面積みの石垣をめぐらし、郭内の南側には、約10㎡の石垣囲いの霊域を有している。また、約10m程低くなった、新城と呼ばれる西の郭は切石積みの石垣で張りめぐらされ、およそ 660 ㎡を測る。グスク内のやや南よりに赤瓦葺きの「火の神」の祠とその西側奥にかつては男子禁制の久高島遙拝所がある。

このグスクについて謡ったオモロは『おもろそうし』に数十首程みられ、その１つに、

一、知念杜ぐすく
　　神降れ初めのぐすく
又、大国杜ぐすく
　　神が降れ初めのぐすく

と謡われている。このことからこの知念グスクが「神降り初めのぐすく」として霊場となったことがわかる。知念按司代々の居城跡として伝承されている。

また、新城は内間大親なる人物が築いたとされるが、彼については次のような伝承が残っている。「知念村大屋の元祖に古根大掟という人がいた。仁義の心が厚く、村民は信頼して大掟の前と敬称していた。時の王、尚真がこれを聞き、その人を賞讃し国王が久高へ御渡島のときは常に随員を仰せつけられていた。王は彼に嫡子がないのをあわれみ、西原間切内間村の人を養子に入れさせた、この養子が内間大親である。又、内間大親は尚円王が内間村にいたとき、内間ノロとの間に出来た子で、古根大掟の妻は内間ノロの妹であった。」この新城は『球陽』（尚敬王17年）の記録によると、すでに17世紀末には瓦葺きに改築され、後に知念番所となり、明治36年に廃された。㊂『1962年文化財要覧』琉球文化財保護委員会、『日本城郭大系（北海道・沖縄）』名嘉正八郎・藤本英夫編1980年５月、『知念村の文化財』知念村教育委員会、1981年４月

（比　嘉　春　美）

151　テミィグスク

本グスクは知念村字久高にあり、久高島の北西海岸沿いの急崖をなす石灰岩上に立地している。久高島は、琉球王朝時代の知念間切、現在の知念村に属し、知念半島の東方約5.5㎞の洋上に浮かぶ小島である。当該グスクが位置するところは島のほぼ中央部にあたり、近くには神事のときにみそぎの川として用いるヤグルガーやヤグル貝塚が存在する。グスクは標高16mを測る琉球石灰岩上に築かれているが、このグスクの背後は急崖をなして海岸に接し、前方（南東側）は平地となって畑地へと続いている。グスクと前方平地との比高は僅か2mを測る程度である。この平地に接する部分には高さ1m前後の野面積みの石垣がめぐり、防衛を意識したグスク普請の痕跡をとどめている。グスク内は現在、アダンが密生してその縄張りについて詳しく知ることはできないが、表面踏査の結果では100数拾平方の小規模グスクと思われる。グスク内やグスク周辺の畑地にはグスク時代に属する遺物の散布が確認され、かつて人間の居住域だったことが知られる。㊂『郷　土ー久高・国頭村安田部落調査報告ー』第19号　沖縄学生文化協会　　（当　真　嗣　一）

玉　城　村

152　垣花城跡（かきのはなじょうせき）

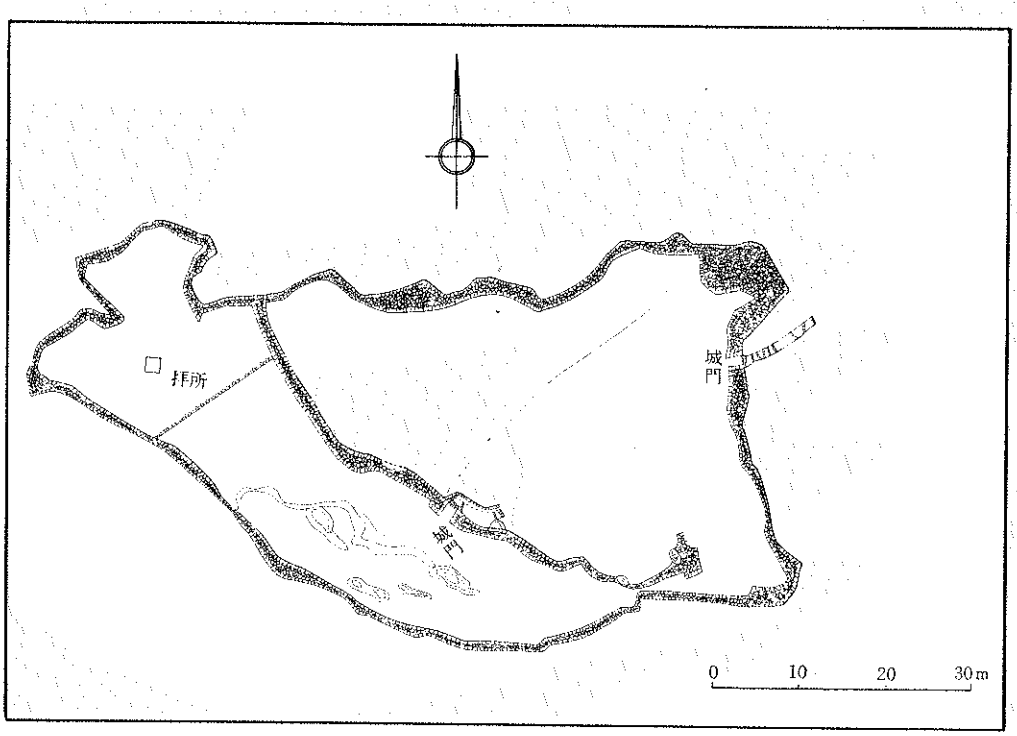
玉城村字垣花部落の南にある琉球石灰岩丘陵上（標高 120 m）に築かれた古城である。14世紀頃の築城ではないかと推定されている以外、記録や伝説もなく築城年代について今のところ不明である。範囲約60×80m、標高120m、面積150坪を測る本グスクの付近には他グスクも多く、北方に玉城城跡、南西方向にミントゥングスクが望める。

グスクの構えは本丸と二の丸からなり、城壁は野面積みでなされている。石垣は幅60センチから 1.5メートルほどであり傾斜はほとんどなく垂直に近い積み方が特徴的である。グスクの東南側は 5 ～ 6 メートルの断崖からなり、東側にゆるやかに傾斜している。入口はこの方向に存する。本丸の奥には神名「アフイハナテルツメサノ御イベ」が祀られている。

グスクの遺物は南東側の崖下一帯と畑地地域に分布している。

昭和36年 6 月15日に県指定史跡として指定されている。㊂「沖縄文化財調査報告」1956～1962版。

（上　原　　静）



第43図　垣花城跡実測図（実測1960年 2 月23日）

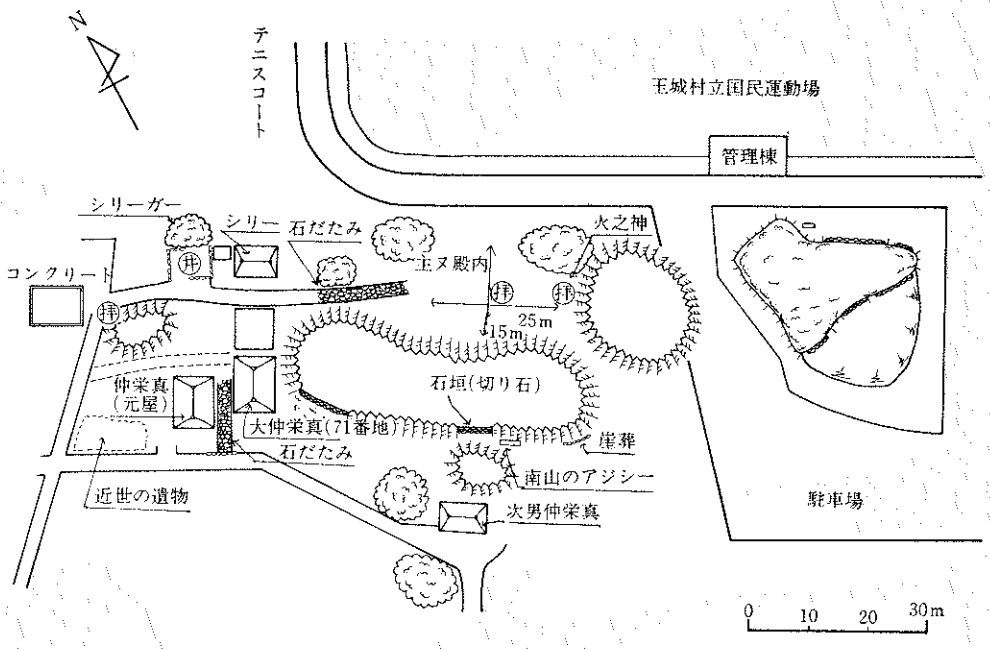
153　ミントングスク

玉城村字仲村渠にある。海に面した標高 110 mの丘陵上に位置するグスクで、現在は東御廻いの参詣地として年中参詣者の絶えない拝所である。

このグスクについての古記録や文献はなく、その性格はあきらかでないが、伝承によるとアマミキョが住んでいた城といわれる。発掘調査は未だなされておらず、石積み等の遺構も確認されていない。しかし、分布調査の際に表面採集された遺物にはグスク系土器・青磁・陶器等がある。　　（大　城　秀　子）

154　仲栄真グスク（なかえまグスク）

玉城村字富里にあり、玉城村役場の北東約 400 mの距離にある。グスクは東西に細長く、西端は富里71番地「大仲栄真」(頭主新垣正雄氏）の裏山から東端が国民運動場の管理棟近くまでおよび、その長さは80mを測る。グスクの入口は、旧家「シリー」と「富里根屋」の間を通り約15mの長さの石畳道を入ったところにある。ここは25m×15mの平場で「主ヌ前殿内」と呼ばれ、尚泰久王の子供たちが仮住居を定めた場所だとされている（後述)。その「主ヌ前殿内」と呼ばれる平場の中央部には、地上から５～10m程頂部と露出した直列遺構が確認され、周辺の岩陰には「火の神」などの拝所がみられる。直列遺構の時期・性格等については不明であるが、現在平場を中心に氏子やノロ等によって祭事がとりおこなわれている。



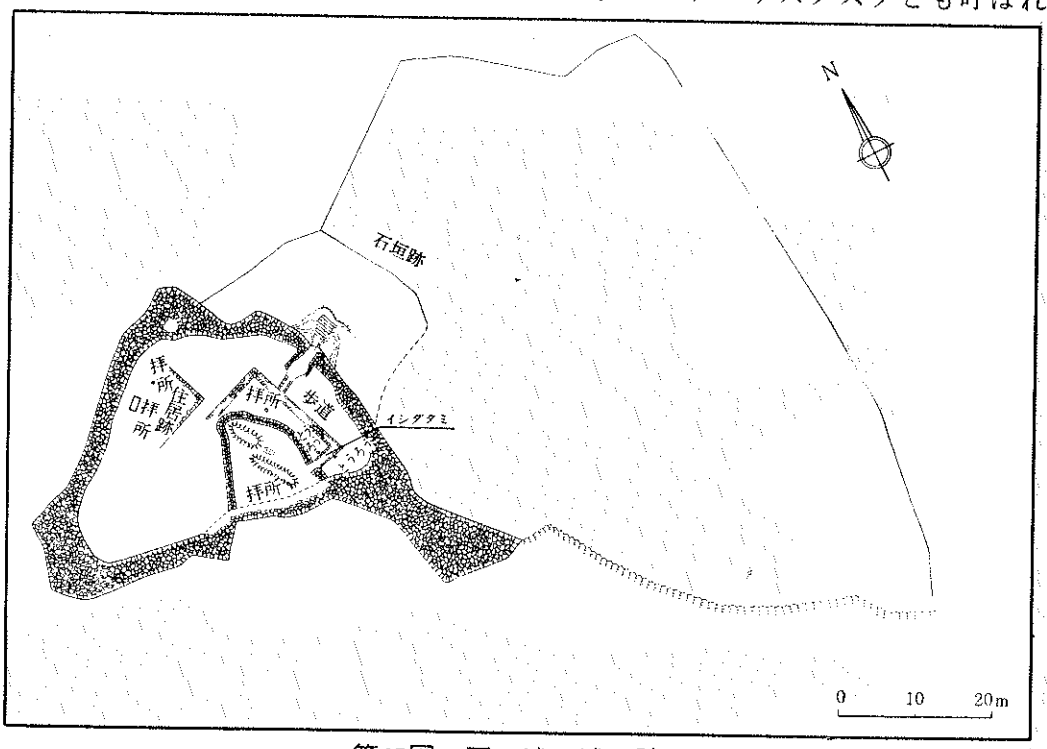
第44図　仲栄真グスク略測図（1983年２月）

「主ヌ前殿内」の周囲は岩山に囲まれた格好を呈しているが、その西端の岩山は一段と高く平場との比高約８ｍを測る。南側の岩陰にある「按司墓（アヂシー）」の横をよじ登って頂上に登れば見晴らしはよく字富里をはじめ周辺の集落が一望のもとに見おろせる位置にある。この岩山の西側の縁辺には切石積みされた石垣の根石の部分が確認された。また、「主ヌ前殿内」の東側には岩山を一つ挟んで平場があり、ここは現在国民運動場の駐車場により本体と分断されてしまったが、切石積みの石垣で囲まれた小さい平場が残されている。

『玉城村誌』によると、尚泰久王の長男（安次富金巴志）、二男（三津葉多武喜）、四男（八幡加那志）は、三男尚徳が王位を継いだことで不満をもち、叔父尚布里を頼って玉城へ避難し、「主ヌ殿内」で仮住居を定めた後、長男が安次富グスク、二男が大川グスク、四男が仲栄真グスクにそれぞれ住いを移して住んでいたという。この伝承からすると本グスクは尚泰久王の四男八幡加那志の居館跡だということになる。㊂『玉城村誌』玉城村役場　昭和52年５月　　（当　真　嗣　一）

155　玉城城跡（たまぐすくじょうせき）「アマッズグスク」

沖縄本島南部、玉城村字玉城門原443、444番地に所在する。玉城部落の北方約700ｍに位置する。アマミキョの伝承があり、またアマッズグスクとも呼ばれ

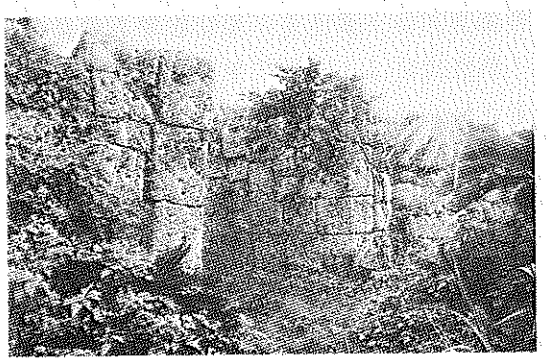


第45図　玉　城　城　跡（実測：1960年１月）

る。標高約 180 mの琉球石灰岩上につくられたグスクである。切石積みの石垣が周縁部によく残っており、城壁は広いところで約６ｍの幅、狭いところでも 1.5ｍの幅である。城内は一の郭、二の郭と呼ばれる連郭式の囲い形式をとっている。この郭では根石で石材の幅１ｍ、高さ50cmの長方形の石が地上２～３段に残っている箇所があり、布積みの工法に類似、城内には拝所が数ヶ所にあり、神名をアガル御イビ、ツレル御イビと呼んで、現在においても信仰の対象地になっている。このグスクの特徴を示すものに城門の形式があげられるが、本丸にぬける、東側に面した城門は自然の石灰岩を削り抜いてつくられたものである。城門幅は極端に狭くなっている。一説では、旧来の沖縄の神観念との結びつきで「東（あがり）テダ」を崇拝する思想がこのころに築城にも適用され修築の際、石灰岩をくり抜いて城門を造り直したとされている。本グスクの城門形式に類似するものが、本島中部、具志川市の安慶名城跡においても確認される。安慶名城跡は東南に城門が開くが石灰岩のくり抜きによるものである。採集される遺物はグスク系土器、輸入陶磁器などが城内全城において採集されるが未調査の為、詳細な性格がつかめない。採集される遺物からの概観では13～14世紀頃に形成されたと考えられる。現在は石垣の崩落や雑林等におおわれている。第二次大戦では二の丸、三の丸が確認されたとされて、米軍の建築用石材へ持ち出されたとされている。昭和36年、６月15日に県指定史跡をうける。㊂「島尻郡誌」島尻郡教育部会昭和12年７月　　（大　城　　慧）

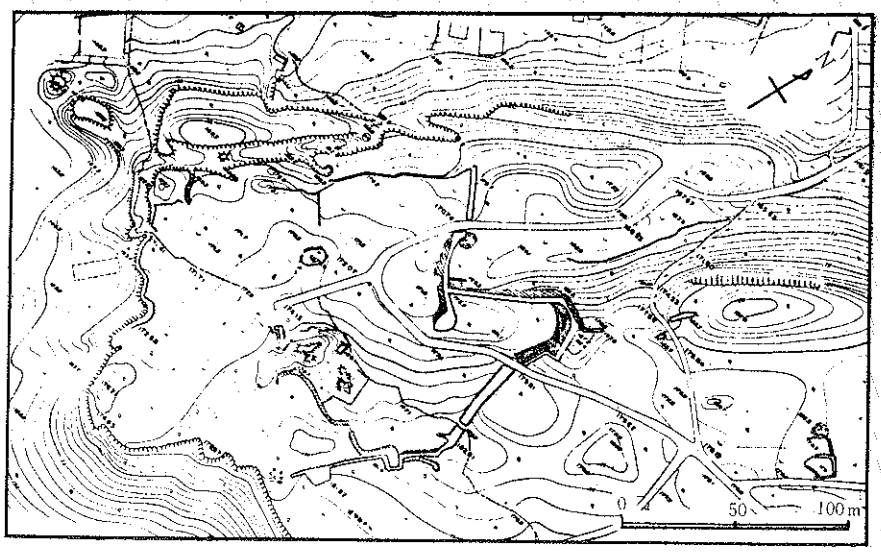
156　糸数城跡(いとかずじょうせき)

玉城村字糸数竹之口原、敷原に所在し、知念半島から西へのびる石灰岩台地の西端断崖上に築かれた古城である。築城年代については明らかでないが、伝説によると、玉城按司が二男を大城按司に、三男を糸数按司に任じたというから、恐らく三山分立時代の初期14世紀前半であろう。この年代は、城内や城外崖下の遺物包含層から出土する輸入陶磁器の時期と符号する。



PL.47　糸数城跡城門跡

城を特徴づける城壁は野面積みと切石積みの両方用いられ、その規模は切石積みのところで最も高く６ｍを測る。城の構造は比較的単純で、西側では自然の断崖を巧みに利用して天端に高さ約１ｍの野面積みの石垣を巡らし、東側に城門をひらく、城門は切石積みのりっぱなもので魯門の形式をとっている。戦火で城壁の一部が破



第46図　糸数城跡地形図

（『国指定史跡保存計画書糸数城跡』昭和52年３月玉城村教育委員会）

壊されたり、近年城内を農道が通るなど保存が完全とはいえないが、石積み方や遺構の大部分は現在でも比較的良好な状態で保存されている。

糸数城跡の本格的な発掘調査はまだ行われたことがない。近年城外の崖下部に形成された貝層の一部が試掘され多くのグスク時代遺物が出土した。それはグスク土器の破片を主に、石器、貝製品、骨製品、鉄製品、陶質土器（須恵器）、輸入陶磁器、牛の遺存骨、炭化麦・米などである。

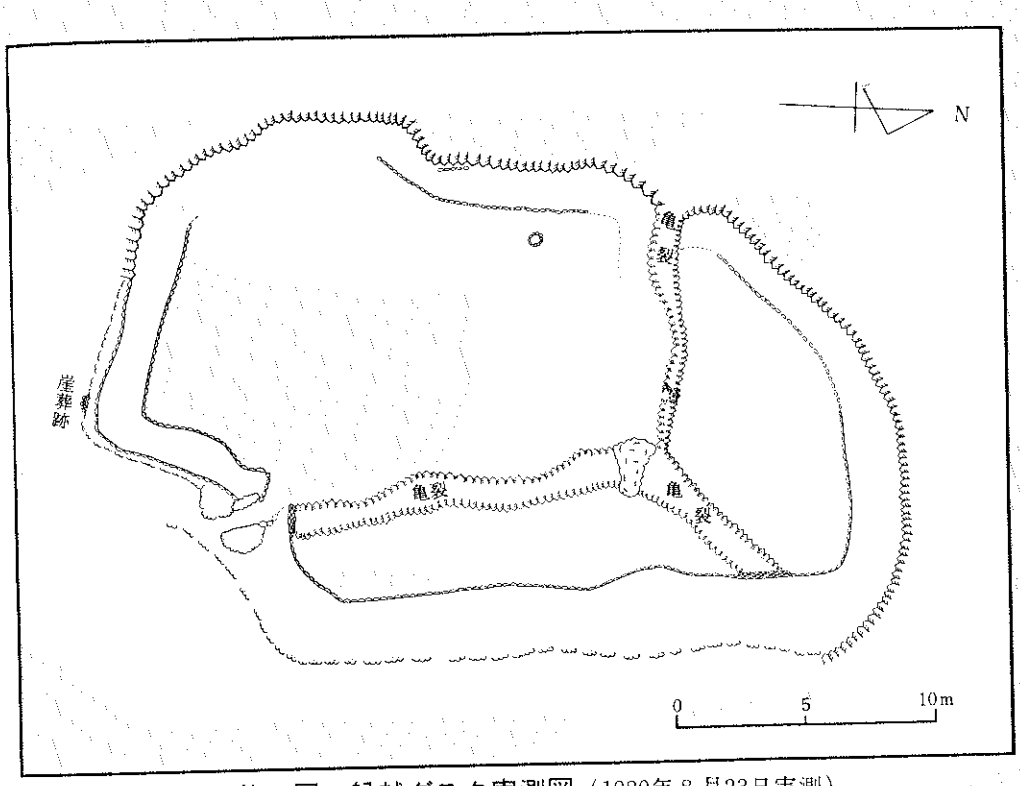
糸数城跡は、昭和47年復帰と同時に城郭を中心として約49,806m²が国の史跡に指定され、昭和50年・51年には保存管理計画が策定された。現在、土地の公有化が進められている。㊂玉城村教育委員会『糸数城跡』（国指定史跡保存管理計画報告書）1977年

（当　真　嗣　一）

157　根石グスク（ねいしグスク）

糸数無線中継所の西側にある台地縁端部に位置し、東はなだらかな台地をなし、西に急斜面を呈してその下方に糸数部落が形成されている。台地縁端部をなす本丘陵は南西方向に連なり、わずか 100 m の近距離に県指定史跡の糸数城跡が存する。グスクの最頂部は標高 170 m で西側にフラット面が認められるが明確な石垣は未発見である。また遺物もグスク内では発見されていないが、東側一帯の畑地からはフェンサ下層式土器、フェンサ上層式土器、石器類が出土している。㊂新田重清『南島考古だより』第17号1976年

（上　原　　静）



第47図　船越グスク実測図（1980年８月23日実測）

158　船越グスク（ふなこしグスク）

玉城村字船越集落に接する東方の丘陵頂部に形成されている。本グスクには同集落の南側から丘陵上にのぼる農道の脇から入るが、現道はグスクの存する崖下部の布積みの石垣をめぐらした屋敷跡に正式に通じている。グスクは巨大な石灰岩塊の上部に築成されていて、内部は東西約12ｍ×南北約25ｍのフラットな面を保持している、又内部には幅約１ｍ、深さ１～３ｍの岩の亀裂が第48図の様に三方に伸びているが南方向のものと北東方向のものはそれぞれ縁端部で石積みによりふさがれているが、西方向に伸びるものは直接崖面つながるためか縁端部にはなく途中の狭くなったフィッシャー部に礫が詰められている。この石積みはフラット面のレベルまでなされ亀裂間の橋渡しの機能をもうかがわしめる。同様に東西間に横たわる亀裂には比較的平盤な岩塊が橋状にわたされている。グスクに入るいわゆる城門は南東端部に位置し農道部分から階段様に登りになっている。門幅は約80ｍと狭く付近には石灰岩礫がくずれ落ちている。石積みは保存がよく、外壁は南側と一部西側に高さ約 1.5ｍありその他はみられず崖面のままになっているが、内壁は南西部の一部分以外を除いて全体を囲繞するように積まれていて、内部観は全体をして西向きに開放したかたちをとっている。

グスクの南側から東側にかけての崖下一帯には岩陰囲い込みの石積み墓があり、さ

らに下方に先述した船越集落の元屋と称される屋敷跡がある。南側のブロック構築物が山川殿（やまがわのとん）中央のものがフサエー（屋号)、続いてノロ殿内となっている。グスクからは西方一帯を眼下にみおろすことができる。グスクの北側は同丘陵がのびているが大小の岩塊が散在し地形も起伏が著しくある。東側は一気に谷になり当グスクの丘陵に平行してさらに高い丘陵がひかえている。同丘陵の上端部には糸数集落を擁する糸数城跡、根石グスクが存在している。船越グスク内からは現在のところ遺物は採集されていない。（上　原　　静）

159　大城グスク

玉城村字百名バスターミナルの南方約 100 m、国道 331 号線より新原集落へ下る三叉路の南側に所在する、俗にアガリメーヌ・メーヌヤマグァーと呼ばれる小高い岩山をいう。

現在、その一帯は樹木が繁茂していて、内部は起伏の著しい岩塊からなり石積み遺構やフラット面は認められない。岩塊の中央部には香炉と岩陰を利用した石積み囲い込み墓が、数基みられ、この岩山全体が拝所になっている。この森の南～東側は２～３ｍの小崖をなしその下に斜面地が広がり眺望がきく。一方、その西側～北側は平地をなし民家が立ち並んでいる。遺物はその民家（字百名 745 番地、大城真男氏）との間にある小範囲のフラット面にて黒色土層とともに近世の陶磁器、貝殻が主としてみられ、わずかにグスク系土器、青磁器が確認される。（上　原　　静）

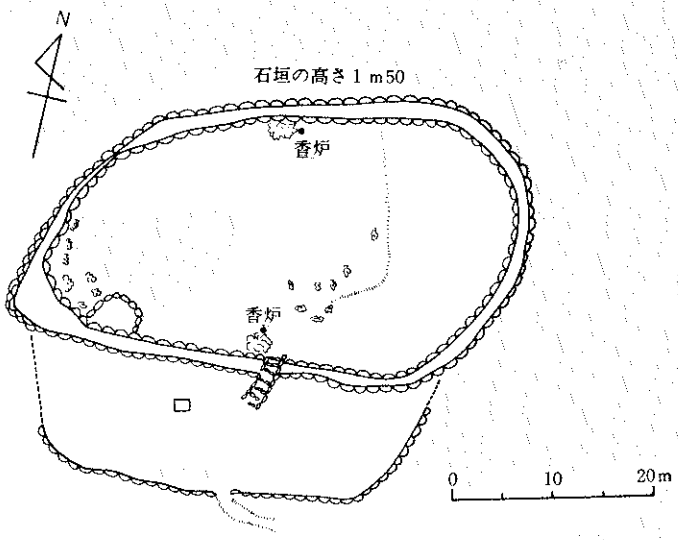
具　志　頭　村

160　具志頭上グスク（ぐしちゃんウィグスク）

具志頭村字与座にあり、標高80～85ｍの石灰岩丘陵上に築城されたグスクである。このグスクが立地する丘陵は、具志頭村の字具志頭、字玻名城、字与座、字仲座の南を略東西に走る石灰岩丘陵の一部であり、東端から多々名グスク、マーガヌ殿遺跡、与座ヌ殿遺跡、上グスクとグスクやグスク時代遺跡が密集するところとなっている。

グスクは上、下二つの郭からなり、一の郭に相当する上の郭は長径50ｍ、短径16ｍを測る略楕円形状の郭である。二の郭相当の下の郭は一の郭に付随する小さな郭で、上の郭の約半分規模の郭となっている。一の郭と二の郭の比高差は約５ｍを測

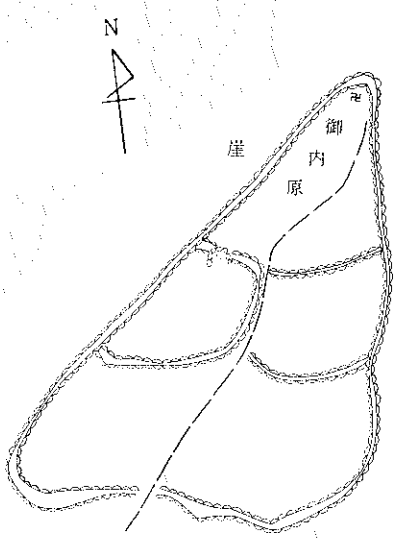
る。各郭とも平場を有し、この平場では現在一の郭に二ヵ所、二の郭に一ヵ所の拝所が見られる。石垣は野面積みで、高さは1m～2mの間におさまる。石垣の保存状態は良好である。一の郭の東に隣接してグスク時代の遺物の散布が認められる。（当　真　嗣　一）



第48図　具志頭上グスク略測図

161　多々名グスク（たたなグスク）

多々名グスクは具志頭村役場の南約400m、具志頭村字玻名城小字眼崎原地内にある。グスクは石灰岩台地の先端部近くに位置し、標高約91mの天然の要害の地に築かれている。グスクが占地するこの台地は、略東西に帯状に細長く発達しており、台地の北面は比高30～40mの絶壁を形成し、南面は緩傾斜をなして平地に接続する。台地上にはグスク時代の遺跡が多く分布し、多々名グスクの東に具志頭グスクがあり、西にはマーガヌ殿遺跡、その西隣りに上里グスクが知られている。また多々名グスクの北側崖下には玻名城の古島があってその北を白水川が流れている。



第49図
多々名グスク縄張図（『具志頭村史』1961年6月）

グスクからの展望はよく、南に太平洋を足下に、北・東・西の三面には具志頭村一円を眺望できる。グスクは北側と西側の二面が平地との比高約40mの断崖に面し、その天端部には約50～100cmの石積みが認められ、東側から南側の緩傾斜面には高さ2m～3mの

石垣障壁がめぐらされている。石垣は垂直で野面積みとなっている。城内は、開発が及んでないことから保存状況は極めて良好だと考えられる、全面草木で覆われ精査が困難となり縄張りについてはよくわからない。『具志頭村史』には図のような多々名グスクの縄張図が登載され、城内の北側に女官達の居住域「御内原（みうちばる）」、この平場の東北に「多々名城嶽」が鎮座していると書かれている。「多々名城嶽」に祀られている神名は「コバウノミサキ御イベ」（琉球国由来記）である。伝承によれば、城主は「はな城世の主」とされ、一時期具志頭一円を領するほどの勢力を有していたということである。オモロに次のように謡われている。

一　玻名城　　おわる
　　御愛しのてだの
　　苦世　甘世　為す　てだ
又　国の根に　おわる

㊂島尻郡教育部会員編『島尻郡誌』　島尻郡教育部会発行　昭和12年　具志頭村史発刊委員会編『具志頭村史』　具志頭村役場発行　1961年　（当　真　嗣　一）

162　具志頭グスク（ぐしちゃんグスク）

具志頭村字具志頭の東方須武座原にあり、石灰岩丘陵の先端部に占地している。グスクは標高 90 m の高台となっており、集落よりの西北面以外の三面は断崖に囲まれ、天然の要害となっている。グスクからの眺望は見事なもので、南の方には太平洋の大海原が足下にせまるのを見、北の方に具志頭、玉城、大里の平野部、東には雄北川の川口にひらけた漁村港川を俯瞰することができる位置にある。付近は去る沖縄戦の際に激戦地となったところであることから、グスク内に戦後も早くから慰霊碑等の建立が進められ現在では戦跡公園としての計画が進行中である。そのためグスクの中心部は公園整備工事で旧地形が著しく損なわれてしまった。

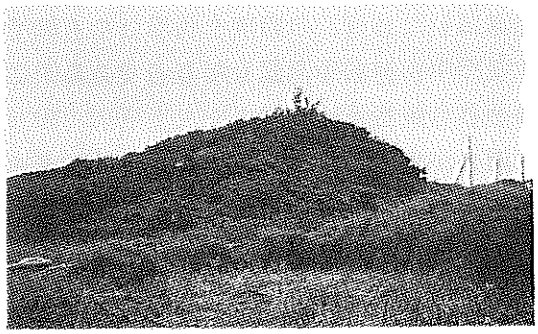
グスクの西方最上壇は「タカヤックワ」と呼ばれ物見跡と云われている。この「タカヤックワ」の周りから北側にかけては比較的緩かな斜面をなしそこには野面積みの石垣がめぐらされている。この野面積みの石垣を断ち切るように城門が西北に開いている。グスク内の中心部は前述のとおり著しい変更をうけてしまったが、注意して観察すると、幾つかの平場が確認される。城壁たる石垣は、緩斜面地域のみに限られ、三面の絶壁天端部には確認されない。グスク内の畑地には黒褐色土の遺物包含層が認められ、グスク系土器、輸入陶磁器などが出土する。なお、このグスクは、くびれ部をもつ平底の出土が知られ、多和田真淳氏の命名にかかる「具志頭城式土器」の標式遺跡となっている。

『琉球国由来記』(1713年）には、城内之嶽（神名アカズ森之御イベ）が記されて

いる。この嶽は城内の東北側本丸に相当する平場に位置している。なお、具志頭グスクは代々具志頭按司の居城であったといい伝えられている。㊥『具志頭村史』具志頭村役場　発行（1961年）384頁　（当　真　嗣　一）

163　ミドリグスク

具志頭村具志頭部落の東方にあり、熱帯樹が繁茂する標高40ｍの岩山にある。規模の小さいグスクでその実態はよく知られていない。グスク内は雑木のため踏査は困難であるが、精査してみるとグスク系土器や輸入陶磁器が若干散布していることが確認される。伝承によれば具志頭グスクの出城とも呼ばれ、北の方に占地する糸数グスクや玉城グスクに対する見張り所的性格を有するグスクとされている。



PL. 48 ミドリグスク近景

（当　真　嗣　一）

PL. 49 新城グスク近景

164　新城グスク（あらぐすくグスク）

具志頭村字新城小字北滝川原にあり、標高 50ｍの石灰岩丘陵上に形成されたグスクである。グスク付近は早くから採石が行われたため現在では旧地形が大きく損なわれている。グスクは丘陵の先端部から、中央部にかけてのびていたようであるが、東側の大部分は採石のため破壊されてしまった。グスク西側の残存部は、現在深い草木に覆われ踏査するのに困難をきわめ、内部の状況について詳しく調べることはできなかった。『具志頭村史』には「城壁は、西北の断崖上に１米位の高さに野づら積みの石垣が所々に残り、東南側は、高い所が凡そ２米、低い所で１米位の高さに野づら積みの三段の石垣が残っている」と記されている。

グスクの総面積は、 16,563 平方メートルと具志頭村で、比較的規模の大きいグスクである。城主や築城年代について定かではないが、伝承によると、築城中に中山から取りこわしを命ぜられたと云われている。グスク内やグスク周辺の畑地からグスク系土器、輸入陶磁器等が採集される。㊥『具志頭村史』具志頭村役場発行1961年６月15日　（当　真　嗣　一）

糸　満　市

165　武富グスク（たけとみグスク）

糸満市字武富小字仲間田原・後原にあり武富集落の北側石灰岩丘陵（標高85m）及び緩やかな斜面に立地する。グスクの東側は開削され小道が通っている。グスクには城壁はなく、殿と遙拝所（御通し）が広間にみられる。この広間の中心には数基の古墓や風葬墓跡がみられる。いずれも露頭した石灰岩の岩陰を利用したものである。古墓の大半は字武富の集落と関係する門中の神名等を記したものである。これらの古墓・風葬墓跡と殿との関係は今のところ判然としない。

同グスクは1980年に市教育委員会の分布調査が実施され、前記の古墓付近でグスク系土器や海産貝、民家近くの岩陰で近世の陶磁片、骨壺などが報告されている。

武富グスクに関して、琉球国由来記で「城之殿」と記録され、現在は武富ヌ殿（ダキドゥンヌトゥン）と呼称されている。㊂糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』1981年３月。『琉球国由来記』12巻　1713年。　（金　城　亀　信）

166　阿波根グスク（あはごんグスク）

糸満市字阿波根部落の南側丘陵上に形成されたグスクである。丘陵最頂部の標高は約57mを測る。城壁は野面積みで最高部で２mを測るところがあり、グスクの頂上附近の平坦地や緩傾面に良く保存されているが、頂上附近では部落の貯水タンク設置に伴う工事で破壊されてしまっている。

現在、グスクへ登る入口には瓦葺の殿、その後方には約１m四方の石囲いの枯渇した古井戸が見られる。

グスク内での遺物の採集はできなかったが、周辺の畑地よりグスク系土器、青磁片、石器等が得られた。　（玉　城　朝　健）

167　賀数グスク（かかずグスク）

糸満市字賀数にあり賀数部落の北側丘陵上に立地する。

丘陵の頂上附近（標高約77m）には南北の方向に７m、東西の方向に15m程の平坦地がありその中には２、３の遺構がある。一部は拝所に使用されている。その周囲には高さ２m前後の野面積みの石垣が周らされている。また、入口の拝所附近にも城壁の一部かと思われる野面の石積みが見られる。

遺物はグスク内や周辺の畑地からグスク系土器、須恵器、青磁、染付、石器片等が

採集されるが、量的にはグスク内よりグスク周辺の畑地からの方が多い。

（玉　城　朝　健）

168　潮平グスク（しおひらグスク）

糸満市字潮平の東側の石灰岩丘陵上（標高65m前後）に形成されたグスクで、南側約 100 mの箇所には、十角毛遺跡（グスク時代）が近接する。

同グスクは採石のため壊滅してしまった。採石前のグスクは高さ1m前後の石積みが廻らされていたという。現在、採石場跡にはコンクリート製の墓がある。

同グスクと関係する門中は百次（モンナン）・大殿内（ウフドゥンチ）・嶽元（タキモト）などがあり、百次門中の口碑に拠れば、潮平グスクの築城が北山滅亡後から始まり南山滅亡直後に中途で終了したとある。しかし、同グスクを考古学的見地から裏付けることは困難である。㊂糸満市教育委員会　『糸満市の遺跡』1981年3月　（金　城　亀　信）

169　大城森グスク（うふぐすくもいグスク）「二又グスク」

糸満市字大里小字後原に所在し、大里集落の北側約 500 mを東西に走る石灰岩丘陵上（標高65m前後）に形成されている。グスクの北側 200 mの距離には、報得川が流れている。同グスクを遠くから見た姿は2つの小山が並列した形となっていて「二又グスク」とも呼称されている。地元では東側の頂部をオトー山（父山）、西側の頂部をオカー山（母山）といっている。東側のオトー山には古墓が多く存在し、オカー山ではグスクの石積みが部分的に残存している。西側のオカー山の中央部付近には比較的平坦な面があり平場をつくっている。この平場の北側の崖下にはグスク時代に属すると推定される貝層もみられることから、生活面はこの平場にあった可能性がある。市が実施した分布調査（註1）ではグスク内から、青磁・染付・グスク系土器などが採集されている。同グスクの別名を二又グスクと呼ぶということは前述したとおりであるが、その他に地元では同グスクのことを「ウンチュウグスク」と称している。この名称の由来については市史編纂係の金城善氏は「城主である汪英紫（？）が南山王承察度の伯父か叔父にあたる人であったことから、伯父、叔父の方言であるウンチュウがグスクの名称になったのではないか」といっている。

㊂（註1）糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』1981年3月。　（金　城　亀　信）

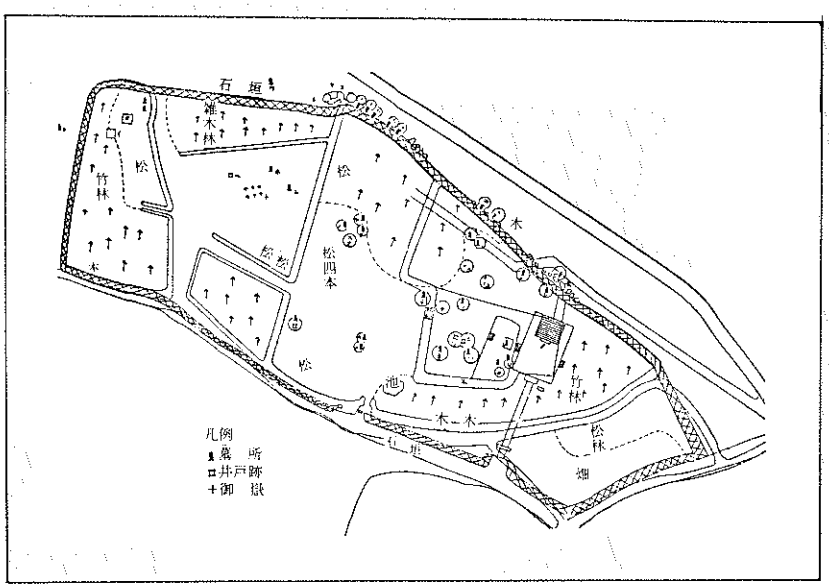
170　南山城跡（なんざんじょうせき）「高嶺グスク」「島添大里グスク」

糸満市字大里にあり、微高地を占めているものの標高約50mと低く、麓部との比高も10m余にすぎない。高嶺グスクとも称される。

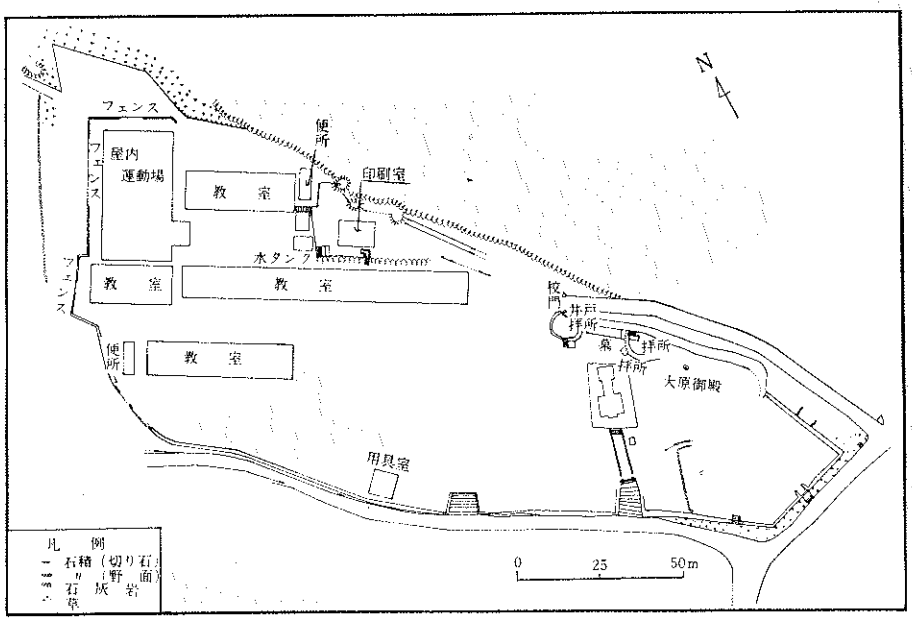
14～15世紀初頭のいわゆる三山分立時代の山南王の居城とも伝えられる。

この地は大正年間に小学校がつくられ、このときに城郭遺構の大部分が破壊されたといわれる。北～北東側の石垣は城の時代の城壁と考えられるが、学校建設後石垣の改変があったようであり、他の地域の石垣は現代のものとみられる。

考古学的な調査はあまり行われていない。グスク系土器や、中国製青磁などが採集される。　　（安　里　嗣　淳）

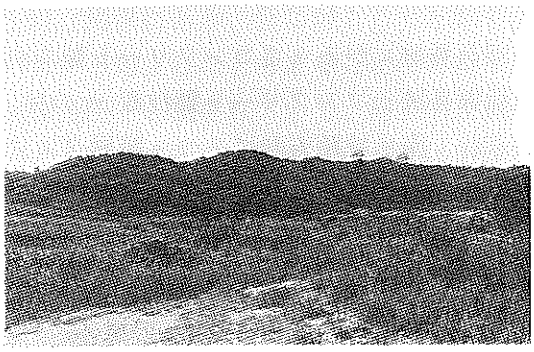


第50図　南山城跡実測図― 大正４年頃(『郷土史』新垣孫一……大正９年より)



第51図　南山城跡現況図（糸満市教育委員会1978年３月）

171　与座グスク（よざグスク）「ハジングスク」



PL. 50 与座グスク近景

糸満市字与座小字東原、小字上原に所在し、与座集落の東方を東西に細長くのびる石灰岩丘陵上（標高約90m）に形成されたグスクである。別名「ハジングスク」とも称されている。グスク北西側の近距離には、与座の風水（北西）があり、南西側には上座グスク（註１）・伊田慶名原遺跡（註２）が知られている。グスクが立地する地形は北側が急傾斜面であるのに対して、南側は比較的緩やかな平地となって開けていて、その延長線は与座岳（標高168.4m）の麓に伸びている。伝承によれば、与座グスクの城主は与座ヌ大主といわれ、南山城の築城以前にここに城を築き城主におさまったということである。グスクの北側崖下には岩陰や洞穴を利用した古墓群がみられ、これらの墓の一部には仕切りの石積みをもったものがみられる。グスクの城壁は緩傾斜面の南側で発達し、ここでは高さ３m、幅80cmの野面積みの石積みが築かれている。この石積みは、露頭した石灰岩の縁辺部に「ー」・「L」字状に積まれているが、規模が小さく「ー」字状の石積みが約２mの長さであり、「L」字状の遺構が短い所で約２m、長い所で約４m、高さ約50cmを測るのみである。いずれの石積みも露頭した基盤石灰岩の上に築かれている。また城内には、四方１mの方形状の遺構が認められるが、その性格については不明である。

最近、グスク内にブルドーザーが入り石積みなどの遺構の一部を崩してしまった。

㊂（註１）『沖縄アルマナック』第２号1980年。（註２）沖縄タイムス1982年９月２日・10月９日。糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』1982年３月

（金　城　亀　信）

172　上座グスク（ウィザグスク）「与座東グスク」

糸満市字与座小字上座原に所在するグスクである。字与座は上与座（イイヨザ）・下与座（シチャヨザ）に２分される。同グスクは、前者の上与座後方（南側）石灰岩丘陵にあり、標高は85m前後である。グスクの西側の約300mの地点にはグスク時代に属する伊田慶名原遺跡がある。　グスクの表面踏査の結果では城壁に相当する石積みは確認されてないが、城内には「コ」字状石塁２基と長方形状の石塁１基が確認された。前者の石塁の高さは、最も高い所で現高30cm、低い所で20cmを測り、その規模は４m²程で

ある。後者は二辺の長さが1.70mと1mの規模で石塁の幅が80cm、高さ50cmを測るものである。

グスク内のほぼ中央にはイートクヌ殿（1374番地）があってコンクリート製の祠が建立されている。またグスクの周辺には風葬墓跡、コンクリート製拝殿、火の神、遙拝所等がある。遙拝所の石灰岩礫はそれぞれ、南山城跡方向に2つ、照屋グスク方向に1つ向かっている様である。遺物が出土する所は、イートクヌ殿があるところで、そこでは遺物包含層が確認される。出土遺物は、グスク系土器、輸入陶磁器、須恵器などである。

なお、南山の王城たる南山城の周辺には、この上座グスクをはじめ、照屋グスク、大城森グスク、国吉グスクの諸グスクが馬蹄形状に配置されている。㊂高嶺間切与座村誌『与座泉水』生活誌編纂委員会　南部農林普及所1982年。（金　城　亀　信）

173　奥間グスク（おくまグスク）

糸満市字兼城小字門原、上原に所在し、標高45m前後の石灰岩丘陵上に立地する。兼城集落の北側に位置する。同グスクは、古くは「奥間城里主所」と記録され、現在は「兼城上之殿」と記されている。グスク内には香炉などの施設が7・8ヵ所みられ、そのひとつは潮平への御通しと称するものである。同グスクも市教育委員会で調査が実施されている。

グスク内の城壁は野面積みで、丘陵の平坦面から斜面に移行する箇所に石積みされ、最高は2m前後である。一部は低く石積みを平面に敷いた様な箇所もある。同グスクの石積みと兼城グスクの城壁の残存状況を比較した場合、同グスクのものは小規模でかなり悪い感じを受ける。遺物は北側の畑地及びグスク内で散見される。㊂『琉球国由来記』12巻　1713年、糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』1981年3月。

（金　城　亀　信）

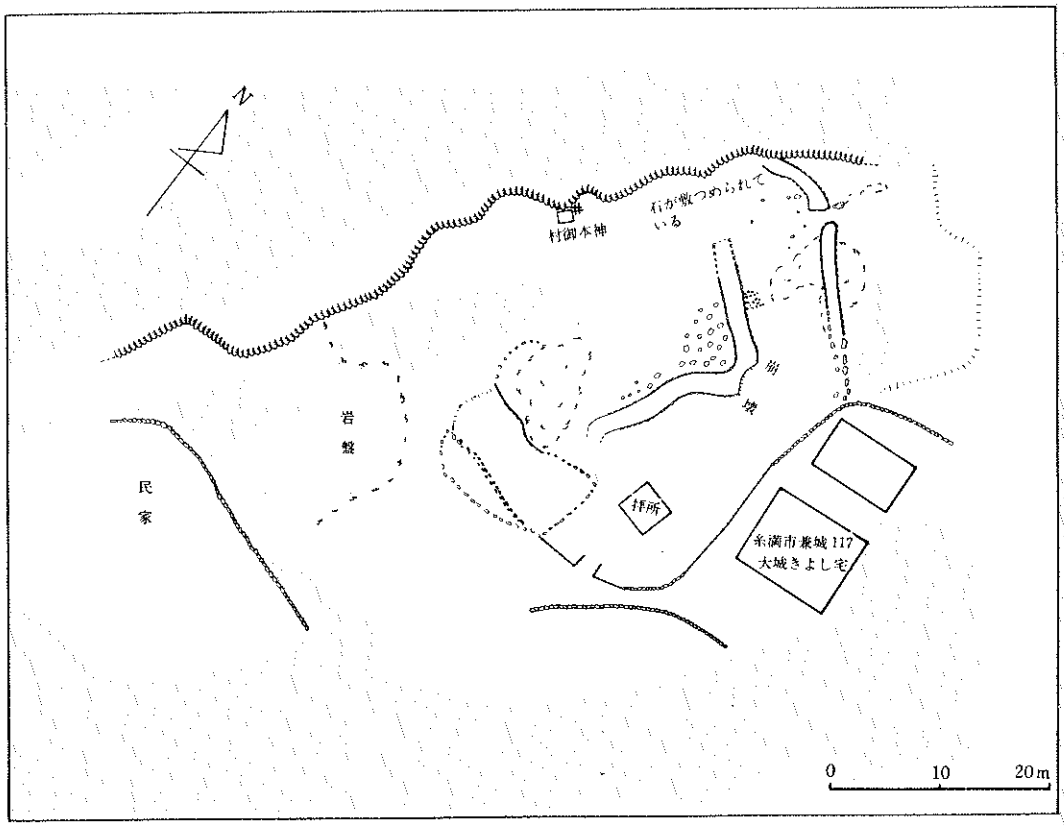
174　兼城グスク（かねぐすくグスク）

糸満市字兼城集落の西側丘陵上（標高30m）の端部に形成されたグスクで、同グスクの下には兼城貝塚がある。グスク入口には火の神・香炉などが設けられた拝所がある。この拝所から広場を隔てた崖縁に「村御本神」と記した碑文があり、香炉も設置されている。香炉は伊保島の方向に向いていることなどからその島への御通しかと考えられる。

市教育委員会の報告によると城壁は、最高2m、幅1.5～2mである。この城壁は北側から東側に見られ、西側つまり崖沿いでの石積みは確認できない。北側の石積

みはこの崖で切れ、二重に外郭したようである。口碑に拠れば同グスクは照屋グスと対立関係にある。仮に対立したとしても同グスク以外に奥間グスクも同時に照屋グスクと対立したと考えることも可能である。琉球国由来記には「城之殿」、「奥間城里主所」と記されていて、前者が兼城グスク、後者は奥間グスクであるが、距離的にも隣接するので、両グスク間は密接な関係にあったものではないかと推察される。㊂糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』1981年3月、『琉球国由来記』12巻。

（金　城　亀　信）



第52図　兼城グスク実測図（実測：1981年3月20日）

175　照屋グスク（てるやグスク）「ウチバルグスク」「ティラグスク」

糸満市字照屋小字内原と御嶽原に所在し、照屋集落の北側を走る石灰岩丘陵上（標高59m）に立地する。別名「ウチバルグスク」・「ティラグスク」とも称されている。

グスクが立地する丘陵上には現在、浄水場・採石場・貯水タンク・墓・拝所などがある。グスク時代の遺物は主に東側の採石場周辺から西側の浄水場にかけて広く散布し、一部は集落内まで分布している。

また、黒色土の遺物包含層はグスクの東側にある。拝所や墓地付近と、採石場近くで確認できる。同グスクは1936年に伊東忠太・鎌倉芳太郎の両氏によって試掘調

査が実施されている。(註１)

グスクの城壁は野面積みで、両側の浄水場敷地内で観察される。残存部から平面観を考えると「L」字状に近似するが、過去に破壊を受けていて保存状態は極めて悪い。この「L」字状の石積みは北側（丘陵郭斜面）にさらに伸びていたと地元の人は証言しており、そのことから南北に長く、西側に短い城壁が推定される。この城壁の近くに深く掘り込んだ円形状（直径30cm前後）の遺構が認められる。城壁との関係については不明で、時代もはっきりしない。

同グスクの崖下直下には報得川が蛇行しながら流れており、地元ではこの河川内の窪地を唐船小掘と称し、近くに唐船嶽と称す信仰地がある。

この類の名称は、交易時代の産物としてみる向きがあり、仲松弥秀氏はここのほかに、市内真栄里にある真栄里グスク先端部の「帆ヶ先」もこの種のものとして指摘している。(註２) 照屋グスクは、その直下にある「唐船小掘」の存在などから南山王代の貿易公庫であったとする説やあるいはまた南山城の出城であったとする考えもあり、その性格については未確認要素が多い。㊂(註１) 宝雲社『南海古陶瓷』1937年（註２）仲松弥秀『古層の村』1977年　　（金　城　亀　信）

176　国吉グスク（くによしグスク）

糸満市国吉部落の北側にある石灰岩丘陵上に形成された単郭のグスクである。丘陵は東西に長く南北に狭い。最頂部は南側に有り標高72ｍを測る。頂上の中央部より北側にかけては東西に約30ｍ、南北に約15ｍの平地になっており、周縁には高さが 1.5～２ｍの野面積みの石垣が築かれていて保存状態は良好。グスク内の北側および東側には上大城の御嶽、タケ城の御嶽と呼ばれる御嶽が祭られている。遺物は多量に採集されており、種類は青磁、須恵器、高麗瓦、グスク系土器、石斧等がある。

（玉　城　朝　健）

177　真栄里グスク（まえざとグスク)「先中グスク」

糸満市真栄里部落の西側丘陵の先端部に形成されたグスクである。丘陵の先端部は標高約20ｍを測る舌状の台地となり、三方は崖となっている。現在、南側の崖沿いに老人ホーム「沖縄偕生園」の施設が建設され、その一部はグスクの入口附近までおよんでいる。グスクの入口は丘陵東側に有り、そこには逆「L」字状の野面積みの石垣が残っている。石積みより北側10ｍの畑地には貝を主体とする遺物包含層が確認される。遺物はグスク系土器、青磁器片等が若干採集される。また、グスク内には12箇所ほどの御嶽や按司墓が有るが、それについては村武精一氏の詳しい

調査報告がある。

本グスクは別名「先中グスク」と称されるが、その由来については新城徳祐氏の調査が有り要約すると次のとおりである。「中山系の伊波按司の子供が伊波城から分家したとき、中城間切の泊部落に「台城（デーグシク）」を居城としたが、その二代目は中城城を築いて移ったという。……四代目の按司は南部の真栄里部落に城を築き居城とした。そこでその按司のことを人々は先中城按司と呼び、その居城である真栄里グスクを先中グスクと呼ぶようになったという。」㊂糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』 1981年３月、新城徳祐『沖縄の城跡』 1982年12月（玉　城　朝　健）

178　フェンサグスク「名城グスク」

糸満市字名城集落の北側に接し、陸から西方の海岸側へ長く続く丘陵の西端部に築城されている。標高25ｍで南側は丘陵の一部のためややなだらかな地形をとるが、北側は崖を形成している。頂部からは西の海及び北の平地一帯をみおろすことができる。

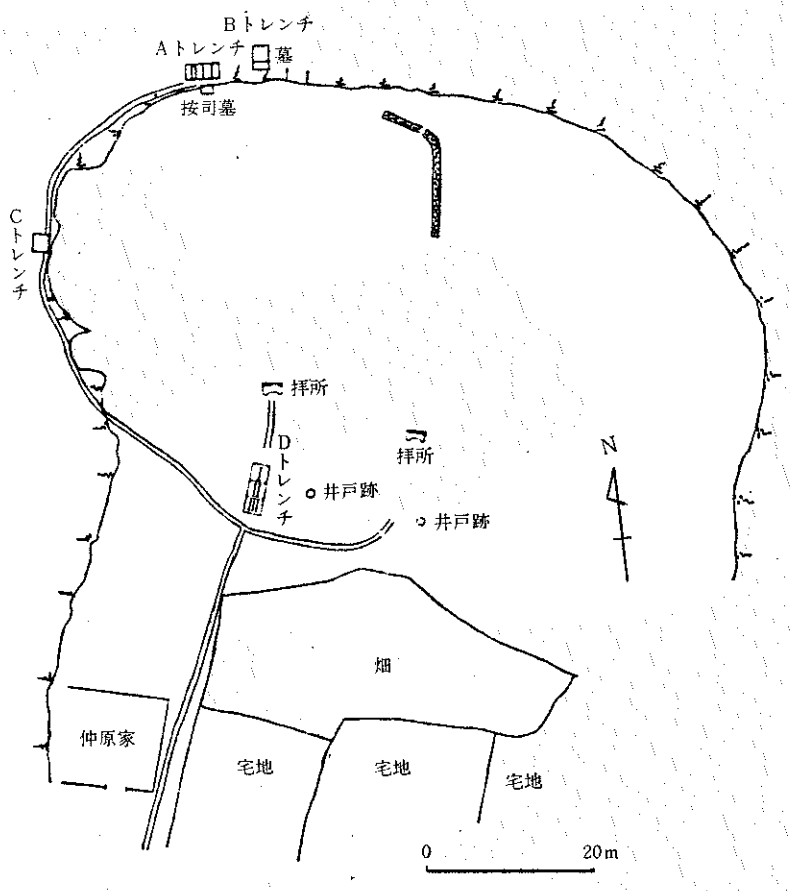
本グスクの築城年代については不明であるが、城主のことについては口碑伝承が残されている「南山グスクから来たタルサマ王が名城村の草分け宗家である仲原家の始祖で、グスクの北崖下にあるアジ墓はタルサマ王と孫四郎タルガニーの墓だといわれる。タルサマ王の息子トウビベンサは名城村の発展に尽力した按司で、若い頃、隣村の按司喜屋武クガニーの妹に恋をし、喜屋武クガニーから石投げ勝負の難題を課されたが、敗れた。トウビベンサの嫡子四郎タルガニーは美男子であった。彼は遠く勝連グスクの浜川按司の姫君、絶世の美女と評判の高い真鍋樽（まなんだる）を嫁に迎え、国中の話題となった。」とある。

グスクの構造は、西側から北側をめぐる崖縁部には石積はみられず、北東端部から東側から内部を囲む様にめぐらされている。内部は北側がやや凹凸のある岩塊があるが、南側（拝所の北側面）にはフラット面が二ヵ所に認められる。なお、この一帯には石積み遺構はみられない。

グスクの中心部の発掘調査はなされていないが、グスクの崖下や周辺部で昭和42年（1969年）に友寄英一郎、嵩元政秀両氏により発掘調査がなされている。崖下部は貝塚を構成していることが明らかになり「フェンサ城貝塚」と称されている。堆積土は３枚の層からなり、貝殻、獣魚骨をはじめとして須恵器、フェンサ下層式土器、石斧、叩き石等が下位に青磁器、陶器、フェンサ上層式土器、刀子などの鉄製品が上位に検出され、グスクの発生期を考える重要な遺跡のひとつとして特筆されている。

フェンサグスクは現在、全域が名城村の聖域となり、グスク入口に２基の拝所と

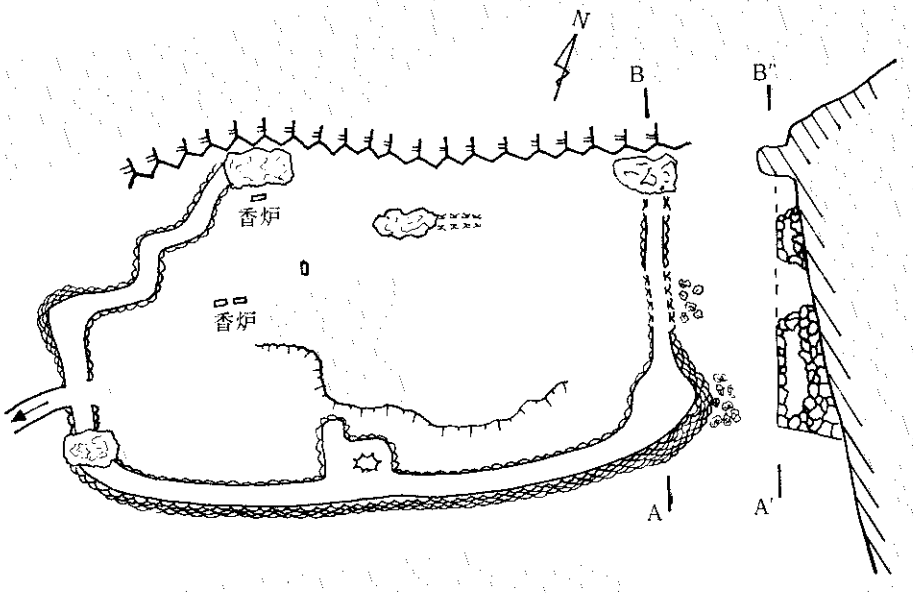
石積みの浅い井戸があり、北の崖下には「アジ墓」を中心に岩陰の古い墓が存在する。南側のものに「大殿内トノ」と呼称される拝所があり、この一帯は昼でも静寂としている。㊂名嘉正八郎、藤本英夫編『日本城郭大系』第1巻　1980年5月、「フェンサグスク貝塚調査概報」琉大法文学部1969年3月　　（上　原　　静）



第53図　フェンサグスク概況図

（「フェンサ城貝塚」琉大法文学部紀要1969年3月）

179　伊敷グスク（いしきグスク）



第54図　伊敷グスク略図

糸満市字伊敷に所在するこのグスクは、伊敷集落から北側に約200ｍの地点に位置する石灰岩丘陵上（標高約60ｍ）に形成される。グスクは丘陵東側の先端部にあり、城内外の観察から単郭と推定される。グスクの平面観を想定したところ、東西方向に長い隅丸の長方形状に近い（略図参照）。城門と考えられた箇所は南西側にある。城壁は30cm前後の石灰岩礫を利用した野面積づみで、北側の上端には石積みはなく、主に東、南、西側に廻らす。とくに緩斜面の南側では最も高く、最高位は約４ｍとなっている。城壁の一部分は崩れ落ちている。グスク内には広場が２箇所ある。ひとつは城門を入った右脇にあり、約60m²である。他のひとつは中央付近にあり、約600m²である。両広場は微弱な石灰岩露頭部で区別されるものかと考えられ、後者の広場、後方には長さ３～４ｍの崩れた石積みがあることなどから建物等の施設があったと推測された。南側の城壁に連結したところが井戸等の跡と考えられる。この遺構の平面観は楕円形を呈し、長径約１ｍ、短径約80cm、深さ約50cmである。なお、同グスクについて、多和田真淳氏は「城門、城壁などかなり完全に残っているよい城跡である。」と報告している（註１）が、氏の報告のとおりこのグスクは比較的保存状態の良いグスクである。島尻郡誌によれば、次のオモロはこの伊敷グスクについて謡ったものとされている。「伊敷下　世果報　寄せ着ける　泊…中略…又　楠は　このて　又　大和船　このて　又　大和旅　上て　又　山城旅

上て…後略…」（外間守善・西郷信綱　1972年）。遺物はグスクの立地する石灰岩丘陵上にかなり広範囲に散布し、フェンサ上層式（註２）の底部破片もみられた。㊂（註１）、沖縄開発庁沖縄総合事務局『文化財実態調査報告書』1973年。（註２）琉球大学法文学部紀要　社会篇　13号「フェンサ城貝塚調査概報」1969年、島尻郡教育部会『島尻郡誌』P368参照　1937年、日本思想大系18『おもろさうし』P196参照。1972年。

（金　城　亀　信）

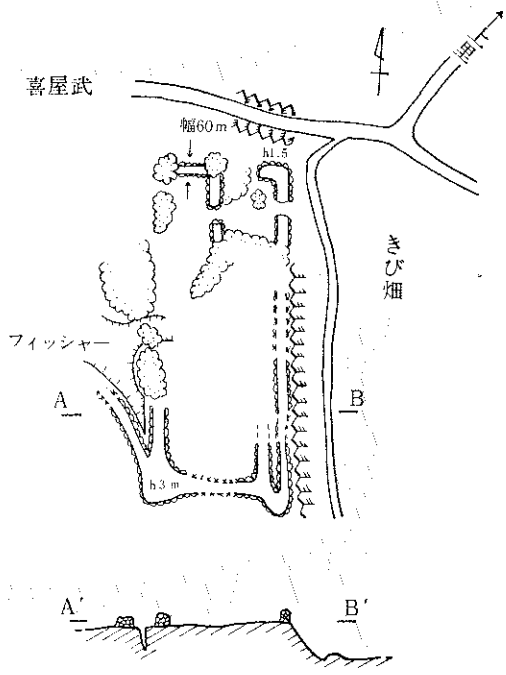
180　チチャマグスク

糸満市名城部落の上方小波蔵側にある標高約45ｍの琉球石灰岩丘陵上に位置するこの琉球石灰岩丘陵は小波蔵部落の北方を東西に延びるもので、本グスクはその西端にある。

石積み等の遺構はみられない。大きさとしては市内のグスクの中では特に小範囲のもので、岩陰を利用した石積墓が見られる。㊂糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』1981年３月。

（島　袋　　洋）

181　当間グスク（とうまグスク）



第55図　当間グスク略図

本グスクは糸満市字喜屋武小字大石原に所在し、東辺名集落の南側約500ｍに位置する石炭岩丘陵上（標高約50ｍ）にあり、上里集落からは西側に700ｍの距離にある。

本グスクが立地する丘陵上には、西側から東辺名・上里・山城・佐慶の各グスクが占地し、略東西に走る一連の丘陵上にグスクが密集する形となっている。本グスクを含めたこれら５グスクの相互の関係については現在のところよくわかっていないが、グスクが集落跡であったのであれば各グスク間に共同体的な関係があったことも予想される。またグスクが城だと考えれば、本城に対する支城あるいは見張りの城等、機能上

からの分類も可能であろう。

今回の調査の結果ではグスク内に残存する野面積みの城壁には、地形により高低差があるように思われた。例えばグスクの南側から西側にかけての平坦な地域には高い石積みが築かれ（高い所で3.5m、低い所で50cm）ており、この箇所はフイッシャーに沿って城壁が、二重の構造をとっているのである。この構造は明らかにグスクが自然の地形を巧みに利用して城内への敵の侵入を防ごうとする軍事上の結果から普請されたものであろう。東側は比高差2～3mを測る断崖で、ここからの侵入は容易でないため崖の天端には僅か1m前後の低い石積みが施されているにすぎない。グスクの規模は、南北約50m、東西に20～30m程度で、グスク内の郭数は1ないし2が考えられる。遺物についてはグスク内の場合には、ソテツなどの雑木が密集しているため、採集が困難となっているがグスク外側の東側畑地では土器、須恵器、輸入陶磁器等が採集されている。㊂糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』1981年3月。

（金　城　亀　信）

182　喜屋武古グスク（きゃんふるグスク）

糸満市喜屋武集落の西側海岸からの直線距離約20m。漁港へ抜ける左側の標高約5mを測る林内に形成されたグスクである。林内には本島周辺の海岸にみられるノッチ状の石灰岩露頭部の周縁部に「く」の字状の野面の石積みが築かれているが、大半が周辺に崩れ落ち、現在では高さ約2m、長さ約7mの石積みが残っている。近くには石灰岩の岩陰を利用した古墓が幾つか見られる。グスク内での遺物の採集は困難である。㊂糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』1981年3月

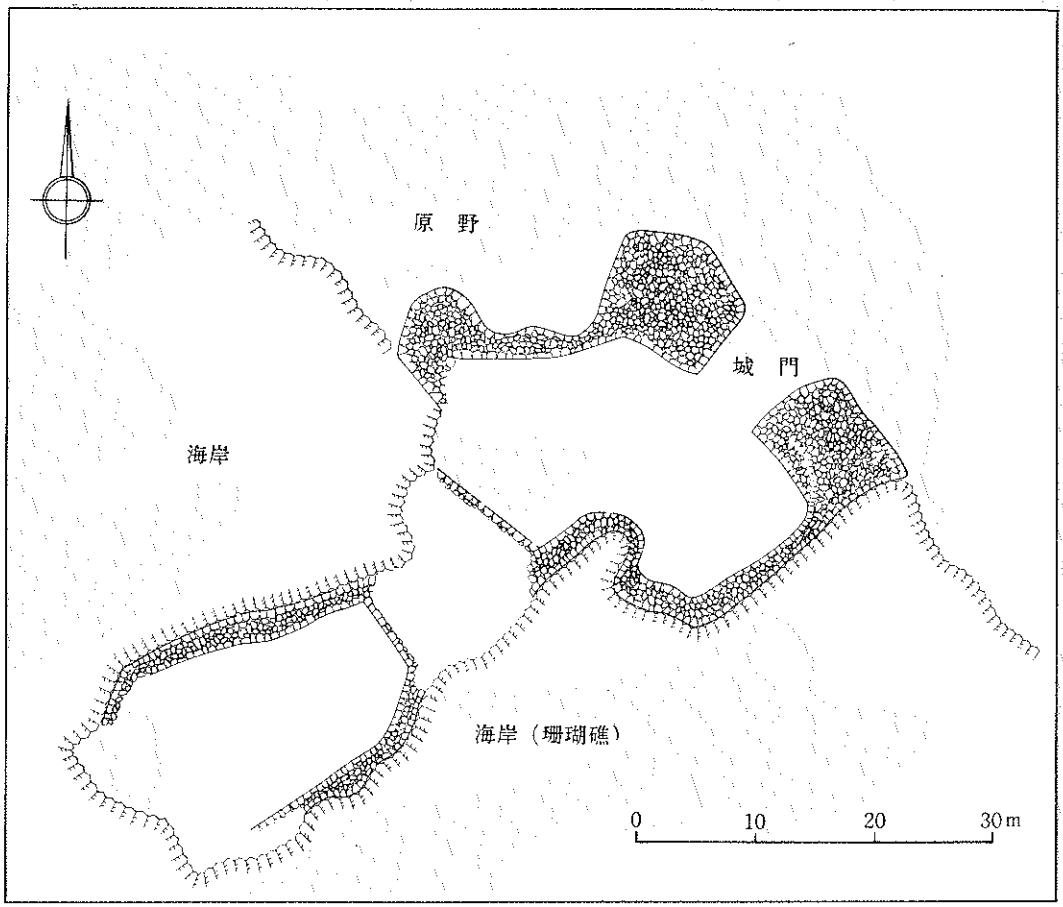
（玉　城　朝　健）

183　具志川城跡（ぐしかわじょうせき）

糸満市字喜屋武の海岸に切り立った石灰岩上にある。その内陸部は広い台地であり、下方の海はあまり砂浜を形成しない岩礁地帯である。

グスクは二つの郭から成り、東側に切石積の城門跡がある。城門以外はすべて野面積みである。石垣は上端部で崩れがみられるものの、よく平面形の観察できる状態で残っている。城内に自然地形による大きな穴があり、その下方に海水がみえる。すなわちこのグスクは下方の一郭で岩盤が大きな抉りを有している。この穴は「火吹き穴」と称されるが、海岸へ下りる「抜け穴」としての機能をもつと考えるものもある。

城内外から遺物を採集することはできない。この城の使われ方や時間幅を反映し



第56図　糸満市具志川城跡（実測：1959年８月17～22日）

ているかとも考えられる。

なお、「具志川グスク」の名はこのグスクを含めて県内に３ヶ所あり、（中部具志川市、久米島具志川村）、いずれもその立地が海岸へ突出する地形であることがよく共通していることが興味深い。　（安　里　嗣　淳）

184　カタハラグスク

糸満市字喜屋武の喜屋武岬燈台南側崖下にある琉球石灰岩の大岩をグスクと呼称されている。大岩は約30ｍ四方、高さは約30ｍである。グスクと称される大岩の位置から考えられること元来は岬の突端にあったものが何らかの作用によって海岸へ転落したものかと想定される。

同グスクの遺物・遺構等については未だ報告がなされてなく、これはグスクと称

する大岩が険悪なためである。喜屋武集落での口碑から本グスクは倉庫であった要素も十分に考えられるが、これもグスク内を調査すれば明確になるかと思われる。

㊂糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』1981年3月。　　（金　城　亀　信）

185　東辺名グスク（つかへなグスク）「ミーガーグスク」

糸満市字東辺名の南約100ｍにあり、標高60ｍの石灰岩丘陵上にある。別名ミーガーグスクとも呼ばれている。グスク内にはいくつかの拝所が見られ、北側崖に沿って野面積みの石垣遺構が確認される。本グスクが立地する石灰岩丘陵上には若干のグスクが近接しており、その東に上里グスク、南に当間グスクが存在する。伝承によれば東辺名按司の居城だといい伝えられている。グスクの南側緩斜面部では若干のグスク系土器や輸入陶磁器が採集される。　　（当　真　嗣　一）

186　山城グスク

このグスクは糸満市字山城の南約150ｍのところにあり、石灰岩からなる岩山の上に築かれている。地元山城部落では、集落の上方に位置することから別名「上（イー）グスク」とも呼ばれている。このグスクの南側約100ｍのところには上里グスク、東側300ｍのところにはサキグスクがそれぞれ立地し、ちょうど両グスクの中間程に占地した形をとっている。グスクの面積は約50㎡で、小規模となっているが、石垣は堅固に築かれ高さ10ｍを測るところがある。この山城グスク周辺には「カニマン」と呼ばれる拝所をはじめとして、古くから信仰されている拝所や聖域が分布する。またグスク下方にあたる岩山の下には井戸跡も知られている。城内には草木に覆われているため中に入るのが困難である。現在のところ遺物は未確認である。

（当　真　嗣　一）

187　上里グスク（うえざとグスク）

糸満市字東里、旧上里部落の北方、標高約70ｍの琉球石灰岩丘陵上に形成されている。グスクの北側は、断崖絶壁となっている。

本グスクは、今次大戦の激戦地だったにもかかわらず、保存状態の良いグスクで、中心部は、比較的平坦地となり、一の郭と二の郭で構成されている。

一の郭には、１ｍ前後の丈の低い野面積みの石垣が廻らされ、その遺構内に石塁遺構を思わせる石灰岩小礫の敷石が見られる。その他には板状石灰岩を３枚組み合せた殿が２基設けられている。

二の郭の石垣は一の郭の石垣より、7～15mほど離れて廻らされ、最大高4.5mを西側で測っている。この石垣から、グスク入口の殿近くまでに何軒かの旧宅地跡が見られる。

伊波普猷説によると本グスクの城主は温沙道で、彼は、南山王承察度をおさえ、南山に君臨した。が、わずかに2、3年で中山王武寧に攻められ、上里グスクに逃げのび、4年後の洪武31年に中山と南山の連合軍に攻められて落城したという。

遺物は、グスク入口にある殿横の畑地より、グスク系土器片や青磁片が採集された。㊂「南山の朝鮮亡命」伊波普猷全集　第七巻　昭和5年6月。

（湖　城　　清）

188　佐慶グスク（さちグスク）

糸満市字山城の南東約300mの坂東原にある。グスクは琉球石灰岩上に形成され、北側は断崖絶壁で南側はゆるやかな傾斜面となっている。

野面積みの石垣が北側崖の頂部石灰岩基盤を基礎に積まれているのが観察できる。最大高は約4mで幅は0.7～1mほどある。この石垣はほぼ崖に沿って積まれており、外側が崖縁になっている箇所もある。詳細については城跡内が低い木々、サルカケミカンのつる、野アサガオのつるなどで覆われているため、遺跡全形を把握できなかった。

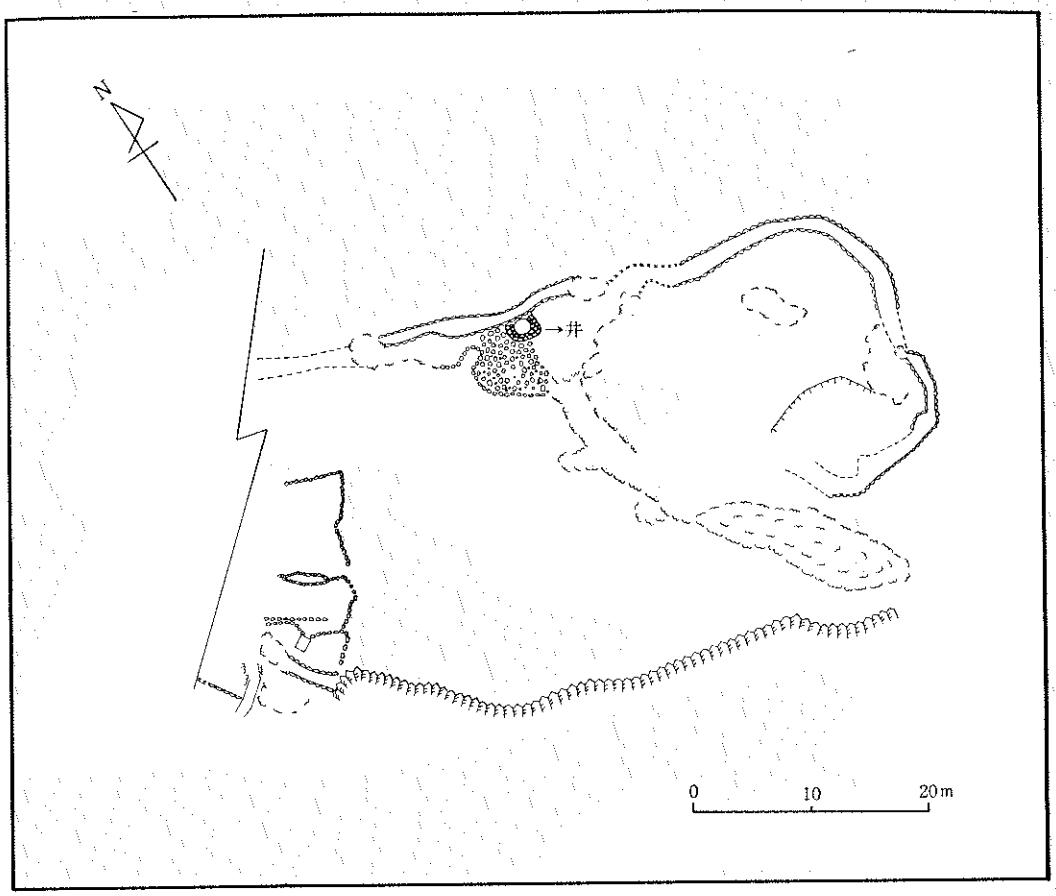
遺物として南蛮陶器片、青磁片、グスク系土器片が若干採集されている。

本グスク周辺には井戸はなく、文献によると本グスクと上里グスク、山城グスクが共同で現在山城部落にあるアシカー、フシチャーの両井戸を使用していたとある。㊂『沖縄風土記』糸満町編1967年11月

（湖　城　　清）

189　糸洲グスク（いとすグスク）

糸満市字糸洲小字前原を中心とした一帯にあり、糸洲集落の東側を走る石灰岩丘陵（標高55m）の先端部近くに形成されている。丘陵南側の緩傾斜面の畑地（集落側）には糸洲ヌ殿遺跡が立地している。この糸洲ヌ殿遺跡は、遺物からみてグスク時代に比定される遺跡であり、糸洲グスクの南側に展開した集落跡として理解されるものである。グスク内には、現在公園の設備が設置されている。広場の北東側へかけて野面積みの石積み（内側からの高さ50cm前後）が残存し、この城壁たる石積みに隣接して方形状の石組遺構（高さ30cm前後、内径は約1m内外）が観察される。この種の方形状石組遺構は他に伊敷グスクにも類例が見られるがどのような機能を有していたのか判然としない。グスクの縄張りは、今のところ公園広場の東側に露



第57図糸洲グスク実測図

呈した石灰岩の高い平坦面が1の郭、現在の公園広場となっている所が2の郭として理解される。市の分布調査の結果では2の郭に相当する広場で多量の遺物が採集されている。

本グスクから採集される遺物は土器を中心として輸入陶磁器などである。なお、この糸洲グスクが形成されている丘陵上には東側から糸洲グスク、安里グスク、仲間グスク、チチャマグスクの4つのグスクが近距離にひしめき合い、グスクの密集地域となっている。（金　城　亀　信）

190　波平グスク（なみひらグスク）

糸満市字南波平の集落から南方約200mほどいった所に波平グスクはある。

グスクはほぼ東西にのびる琉球石灰岩丘陵頂部（標高約50m）のフラット面に形成されている。面積は約900～1,000m²であり、平面観は東西へ長く、長方形状になっている。城壁は露頭した石灰岩を巧みに利用しながら天端部に野面積みに廻らし、

その一部はフラット面を南北に仕切った状態となっている。

グスク内には円形状に窪んだ石積み遺構が城壁に付随してみられる。類例は伊敷・糸洲のグスクにも存在するが今のところこれらの遺構の性格については不明である。

遺物はグスク内では未発見であるが、グスクから集落へ抜ける小道の両側にある畑地や原野一帯にグスクから近世の遺物（土器片、陶磁片など）が散布している。また、丘陵西端付近の南側畑地内でもグスク系土器、須恵器、青磁など散布する。また、このグスクの城壁外の周辺部には風葬跡なども観察できる。

以上の状況から理解すると丘陵頂部に波平グスクが立地して、その斜面にはグスク・近世の集落跡（仮称して波平の古島）が展開していたことを予想させるが、しかし確証は発掘調査の成果で判断するしか方法はない。ただ現在では波平の集落はグスクの北に位置しているけれども『球陽』ではかつての波平集落はグスクの南にあったと記している。

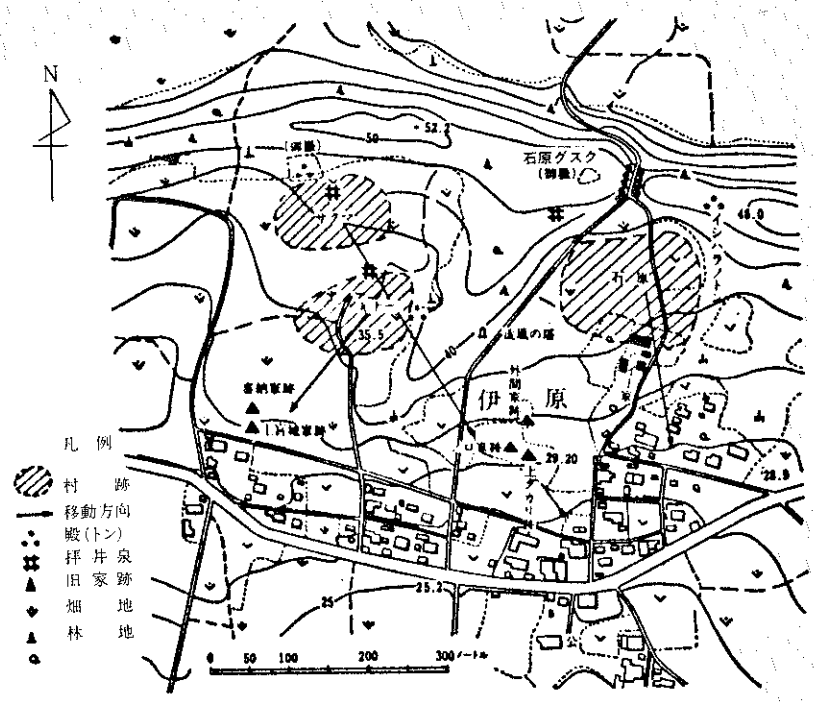
なお、波平グスクに按司に相当する領主がいたことは次のオモロからも推察できる。「波平良（なみひら）　在（あ）つる御腰（みこし）　根国（ねくに）　在（あ）つる剣（つるぎ）　世添（よそ）いの御腰（みこし）　ゑ　真玉（まだま）ど　照（て）り居（よ）る　又　福地（ふくじ）　在（あ）つる御腰（みこし）　根国（ねくに）　在（あ）つる剣（つるぎ）」（外間守善・西郷信綱　1972）。このオモロから波平グスクの領主以外に福地にも領主クラスの人物が存在していたと思われる。

波平グスクの立地する丘陵東側には同時代相当とみられる鉄滓を出土する伊原遺跡や石原グスク等があり、この一帯の石灰岩丘陵は同グスクを含め、かなり興味深い地域のひとつとなっている。㊂『球陽』沖縄文化史料集成5　球陽研究会　1974年角川書店。『おもろそうし』日本思想大系18　岩波書店　1972年『琉球国由来記』琉球史料叢書1伊波普猷・東恩納寛淳・横山重　編　井上書房1962年『糸満市の遺跡』糸満市教育委員会　1981年。　（金　城　亀　信）

191 石原グスク（イシャラグスク）「伊原グスク」「伊舎良グスク」

糸満市字伊原部落の北北東250ｍ、標高45ｍの東西に走る琉球石灰岩丘陵の東端に位置する。グスクは西側以外、穏やかに傾斜し、平地につながる。グスク内には約10ｍ×20ｍ程の平場があり、それを取り囲むように幅３ｍ、高さ２ｍの野面積みの石垣がめぐらされているが南西部は雑木の繁茂により、石積みの形を保っている。また、その途中の東端部には「コ」の字状をした切石積みの石垣が確認できる。さらに、北西側には幅４ｍ、高さ５ｍ前後の石灰岩の割れ目が南北に20ｍ程走る。

グスク入口の東側に「コ」の字状の野面積みの拝所（高さ40ｍ、幅50ｍ）があり、さらに南西に下ったところに井戸がある。遺物についてはグスク内では、現在のところ確認されないが、グスクの前面に相当する南側の畑地ではグスク系土器、青磁が採



第58図　石原グスク付近（仲松弥秀『神と村』1975年より）

取された。

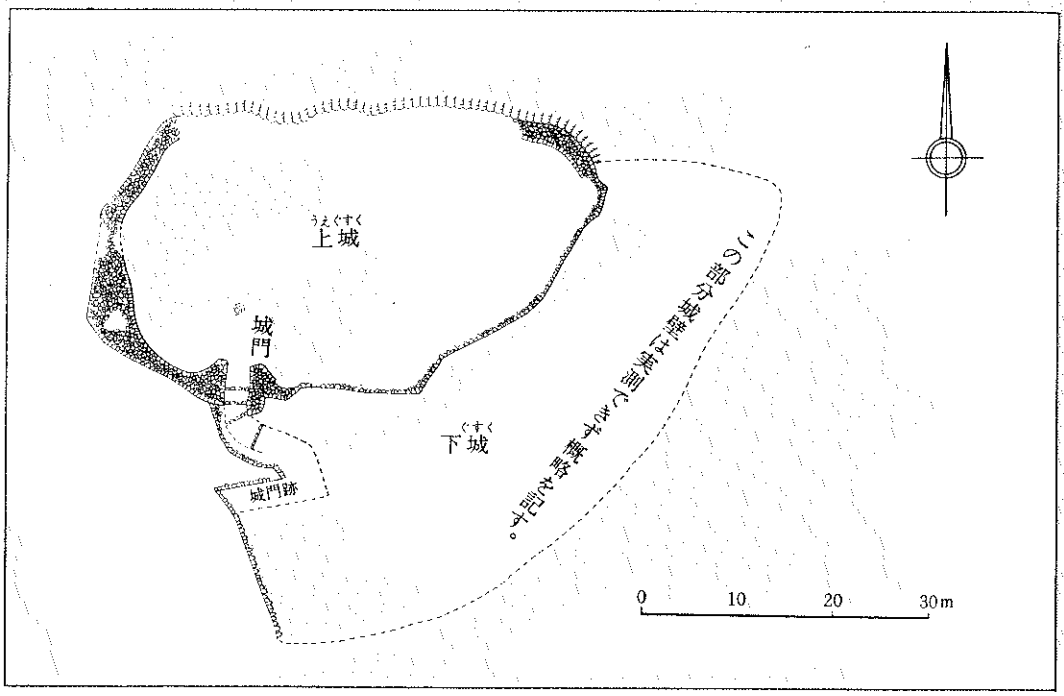
本グスクは、『糸満市の遺跡』で「伊原グスク」と報告されており、仲松弥秀氏の報告（第59図）や『琉球国由来記』（第５表）には「石原グスク」と記されている。ここでは後者に従った。㊂仲松弥秀『神と村』1975年４月（再版）、『糸満市の遺跡』糸満市教育委員会　1981年３月　（比　嘉　春　美）

192　米須グスク（こめすグスク）

糸満市字米須の通称、東田原にまたがる標高約50ｍのグスクである。

本グスクは、一の郭（上グスク）と二の郭（下グスク）からなり、側防のあるグスクとしては沖縄でも数少ない部類に入る。総面積は5,300㎡。

約1,000㎡からなる一の郭には高さ約２ｍ、幅1.5～２ｍの野面積み石垣が周囲に廻らされている。その他、高さ約１ｍ前後の平面円形の石積御嶽が３つと古井戸、巨石石灰岩の御願所がある。また、人頭大の石灰岩が至るところで組をつくって散見される。この石組も何らかの遺構跡だと思われる。



第59図　米須グスク実測図（実測：1960年２月16日）

二の郭の石垣は、本グスクへ登る石積石段から東へ延びているが、丈の低い石積みを入口近くで確認しただけで、それ以上は木々がおい茂り、その延長部を確認するまでには至っていない。

遺物は、一の郭内より青磁片、白磁片、グスク系土器片が若干採取されている。

本グスクについては、おもろ双紙に「米須世の主の君くらよ　君くらす按司はやせ　真物世の主よ」と書かれ、城主の善政をうたっている。

また、口碑によると、

「米須按司の奥方に我瀬という家来が横恋慕をした。我瀬は月見といつわって按司を海にさそい出し、切り殺してしまった。

のちに按司の犬が海中で死体の入った壺を見つけ、そのことを奥方に知らせた。奥方は一計を案じ、我瀬を山へさそった。そして大木を見つけ『この木は建築の材料に使えそうなので太さを両手で計ってみて下さい。』とたのんだ。我瀬は喜んで両手でその木を計っていた。そのすきに奥方は隠し持っていたノミを我瀬の両手に打ち込み、按司の仇をうちとったという。

その後、後継ぎを宜野湾真志喜村の金満按司の六男を養子にし、城は栄えたという。」

㊂『沖縄風土記』糸満町編　1967年11月　　（湖　城　　清）

193　ガーラグスク

糸満市字大渡の東方約500ｍの琉球石灰岩にあったグスクで、現在はそのほとんどが破壊され、分譲住宅地（さつきの城）となっている。標高約45ｍ。

本グスクは前記したとおり、地形そのものが大きく変化したため、遺物の採集はない。グスク西側の畑にグスク系土器がわずかに散見されるようである。

（湖　城　　清）

194　オドサトグスク

糸満市字大渡南東約800ｍの琉球石灰岩丘陵上（標高約50ｍ）に所在する。同丘陵の西側直下には、ガーラグスクがあった。

グスクとみられる箇所には露出した石灰岩の上に人頭大の石が敷かれ、屋敷跡の石敷遺構かと考えられるが、グスクとの直接的関係については断定しがたいところである。

遺物は未発見であるが、字大渡での聞き取りにオドサトグスクは今のところ大渡集落の発祥等と関連するようだ。㊂糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』1981年３月

（金　城　亀　信）

195　摩文仁グスク（まぶにグスク）

糸満市の摩文仁部落にある国立平和記念公園内の琉球石灰岩丘陵上に位置するグスクで、標高は約89ｍである。南側は断崖絶壁で北側は急斜面になっている。

戦時中の戦禍および戦跡国定公園整備に伴う破壊でほとんど壊され、現在では、鹿児島之塔後方に切石積みの石垣がわずかにみられるだけである。

本グスクは昭和55年（1980）10月に現参道拡張工事に伴う試掘調査が行なわれており、その結果、参道下に切石積みの石垣が石灰岩の基盤に沿って北側で低くなっていることが確認されている。

遺物はグスク系土器・近世陶磁片などが採取されているが、遺物包含層は確認されていない。㊂糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』1981年３月。

（島　袋　　洋）

196　真壁グスク（まかべグスク）

糸満市真壁部落の北方約200ｍの石灰岩丘陵上に位置しており、標高は約82ｍである。その丘陵は東西に延びており、本グスクの他にもグスクが分布し近い所では約700ｍ東方に宇江城グスクがある。

本グスクのある丘陵には真壁神宮寺と万葺の塔があり、真壁神宮寺については次のような伝説がある。「真壁寺の本尊を調べてみると、昔琉球八社の1つに数えられた名所で、梵鐘には応永元年とあるそうだが戦後行方がわからないということである。」

この他に白馬の伝説がある。「真壁城内に純白の駿馬がいて真壁按司は非常に愛して手ばなそうとしなかったので、国頭按司は兵を従え真壁城を攻めた。真壁按司はひそかに弟の垣花按司に請い、兄弟で防戦したが弟は城外で駿馬とともに傷ついて倒れ、真壁按司は古波蔵森へ逃げて自殺した。それ以後、真壁城下では白馬を産しなくなり、村人も白馬を飼わぬ習わしになったという。」

グスク内の石垣は丘陵の高くなった所に野面積みでL字状に築かれている。石垣の長さは約20m前後である。

遺物はグスク系土器、青磁片等が真壁神宮に向かう道沿いと神宮の周辺で採集できる。

また、島尻層からも得られている。㊂糸満市教育委員会「糸満市の遺跡」1981年3月。新城徳祐『沖縄の城跡』1982年　　（島　袋　　洋）

197　宇江城グスク（うえしろグスク）

糸満市宇江城部落の南方にある東西方向にのびた丘陵上に所在する。グスクの位置する丘陵は標高約56mと比較的低く、北側に約5mの崖を形成し、南側にゆるやかな傾斜をなして続いている。南側は現在丘陵に沿って県道が通り、グスク内には当該路の脇から出入するかたちをとっている。グスクの構造として北側崖縁部に石積が残るが、石灰岩礫を集め列をつくる程度で高さを伴っていない。南側は石積の状況はあいまいで明瞭ではないがグスク内部のフラット面の南側縁端部に30～40cmの基段様の石積が認められ、それを一連の石積と考えると一つの郭をつくることになる。グスク内部には、直径約2mの凹をなし円状に石灰岩礫で囲んだ井戸状の遺構が3カ所認められた。拝所は、グスクの南側部分に位置し、コの字状の石積ほこらがある。

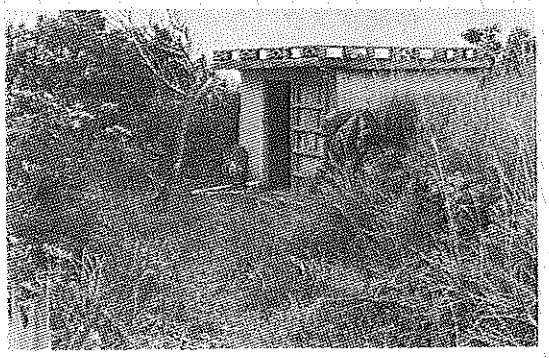
遺物は丘陵上西側の畑地に最も多くみられ、青磁器（玉縁口縁、片刻り連弁）・須恵器、フェンサ上層式土器等が採集されている。本畑地は真黒色土が広がり、現在キビ畑と野菜畑に使用されている。　　（上　原　　靜）

198　新垣グスク（あらかきグスク）

糸満市字新垣の小字新垣原・後原・野山原にあり、現在の新垣集落がある北側石

灰岩丘陵上（標高約100 m）に位置する。最近、分布調査により同グスクの東側600 mの地点でグスク時代の遺物散布地、及び北側300 mの所で近世の遺物散布地が確認された。

グスクの周辺には墓地等が見られ、グスクへ登る小道脇に古井戸跡がある。グスク内の崖の天端部にはU字状の石積みがみられ、内側に祠があって拝所となっている。同グスクは比較的高い所に築かれているため眺望がよく、もともとグスクの性格と、見張所的な要素も兼ねていたのではないかと考えられる。遺物はグスク内からの採集は困難であるがグスク南側の畑地ではかなり採集される。（金　城　亀　信）



PL.51　新垣グスク内

199　真栄平グスク（まえひらグスク）

糸満市字真栄平の北方、通称後原にあるグスクで標高は約100 m。口碑によれば、謝花親方が南山滅亡後に逃げ隠れたグスクだという。

南山の本グスクは、拝所と古墓からなる聖域的な性格を持つグスクで石垣が築かれていない。

古墓は「アジ墓」と呼称され、その傍には「第一代目祖先、尚徳王元子孫頭門中祖先代々之墓」と刻まれた石碑が建られている。尚思紹王統時代の七代目の王、尚徳（1461～1469）と関連する墓かどうかは不明である。

遺物は、青磁片、グスク系土器片がグスク南側の畑から若干採集される。

この地域は現在、綱引きなどの村行事には欠かせない拝所として拝む習わしがある。㊂沖縄風土記刊行会編『那覇の今昔』沖縄図書教材1969年。（湖　城　　清）

200　ブリ原グスク（ぶりばるグスク）

糸満市真栄平部落の東側にある石灰岩丘陵上に形成されたグスクで、標高は約84 mである。野面積みの石垣が3～4箇所に分断されたような状態でみられる。

遺物はグスク系の土器や陶磁片等がグスク周辺の畑地で採集できる。

グスク内には拝所跡とみられる遺構が残っている。㊂糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』 1981年3月　（島　袋　　洋）

201　仲間グスク（なかまグスク）

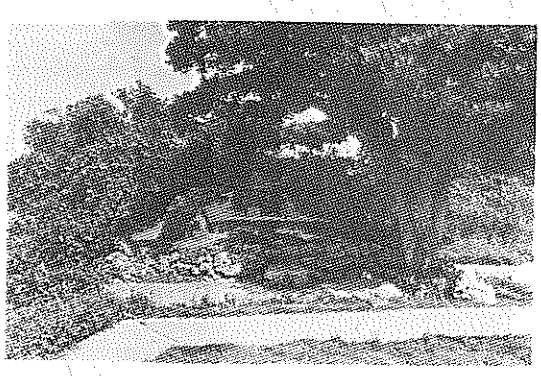
糸満市小波蔵部落の北側にある琉球石灰岩丘陵部にあるグスクで、標高は約60mである

グスクのある丘陵部の頂上には灌漑用貯水タンクなどが造られ、また下方には採石場跡があり破壊をうけている。

グスクの西端に亀甲墓や石灰岩の岩陰を利用した按司墓があり、亀甲墓の入口近くにグスク土器や貝殻を含む遺物包含層が確認された。㊂糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』 1981年３月

（島　袋　　洋）

202　チングスク



PL.52　チングスク内

糸満市字真栄里小字ウテル原に所在し、真栄里集落から国吉集落へ通り抜ける道路の右側、石灰岩丘陵上（標高50ｍ）にある按司墓のひとつを称している。遺物は墓の周辺およびキビ畑でグスクから近世に属する遺物が散布するが、特に墓の南側に集落へ抜ける小道沿いのキビ畑が多い様である。

この墓に関係する門中はヌールン・クィージ・メーバラ・メームィバラである。㊂仲松弥秀『神と村』1975年再版。

（金　城　亀　信）

203　安里グスク（あさとグスク）

糸満市字糸洲小字奥原に所在し、糸洲集落北東側丘陵上にある。グスクが形成されている所は標高50ｍ前後を測る。

同グスクは1960年に新城徳祐氏らが調査を実施し、氏の著である『沖縄の城跡』に紹介されている。伝承によれば同グスクの城壁は戦前、土木工事や字糸満の海岸埋立などに使用されたといわれている。グスク内では、屋敷跡らしい石塁遺構や古墓などが確認された。また、グスク入口には古川と称される泉があって、その周辺に「奉寄進」と記された香炉が二基置かれていた。古老の言伝えによると泉の前面畑地から北側方向に安里村があったといわれている。ところでこの安里村は、現在では糸洲集落に吸収された格好になっているが、もともとは国吉遺跡が所在する付近にあったといわれ、何らかの都合で、糸洲近くに移動させられたという。㊂糸満市教育委員会『糸満市の遺跡』1981年３月

（金　城　亀　信）

座　間　味　村

204　メーグスク

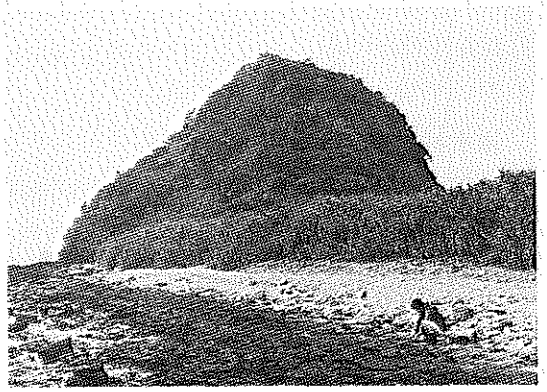
座間味村の座間味から阿真に通ずる旧道脇にある。両部落の境界付近に海に突出する舌状台地があり、その丘陵先端部に本グスクは占地している。一帯は雑木林になっており、遺構、遺物とも確認されてなく詳細は不明である。(岸　本　義　彦)

205　シルグスク

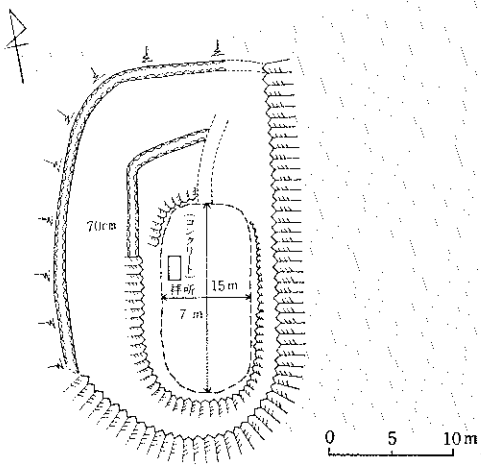
座間味村字阿真の西方に位置する深城の崎にあり、海に突出する岩山の頂上を占地して築かれている。頂部で標高36mを測り、33m付近に岩山をとり囲む形で石積み遺構がみられるが、主として傾斜の緩い南側に限られる。積石には人頭大の円礫や板状の石があり多くは後者が用いられている。周囲は断崖になっているが、僅かに南側の傾斜が緩いことから、そこが出入口であったと考えられる。グスク内には石壇があり拝所となっている。

遺物を確認することができず、築城年代や性格等の詳細は不明である。ただ、何頃か渡名喜の軍勢が攻めてきたとき、城主のシマヌ比屋等が上から石を投げ落して交戦し、遂に敵軍を撃退したという伝承が残っている。

(岸　本　義　彦)



PL.53　シルグスク近景



第60図　シルグスク略測図

206　グスク山（グスクやま）

グスク山は座間味村阿嘉島、阿嘉集落の背後（北側）に控える山をいうのであるが、この山の頂上には幾つかの平場が形成されており、グスク様の姿をとどめてい

PL.54　グスク山内部

ることからグスクとして取り扱うことにした。

この山は標高84mを測り、遠くから見る景観は、あたかも碗をふせたような形をとり、この南斜面には阿嘉の旧家群が展開している。阿嘉小中学校の体育館脇の林道を登っていくと頂上にいたる。頂上は平坦な広場となっており、その一角には拝所の祠が建立されている。この祠の周辺には人為的と見られる平場がつくられ、この平場は浅い小さな溝によって区画され幾つかのさらに小さい平場に区分けされていた。

雑木林を踏み分けて表面踏査を試みたが、遺物は採集することが出来なかった。

なお、この阿嘉島には「積城」という石垣遺構をもつグスクが存在することを地元の人びとから教えてもらった。このグスクは阿嘉集落の南西約1.2 kmの岬状の岩山にある。古老のはなしによれば標高約50mの孤島化した岩山の頂上に石垣を周らしているとのことであったが、満潮時とかちあって渡ることができず調査は出来なかった。

（当　真　嗣　一）

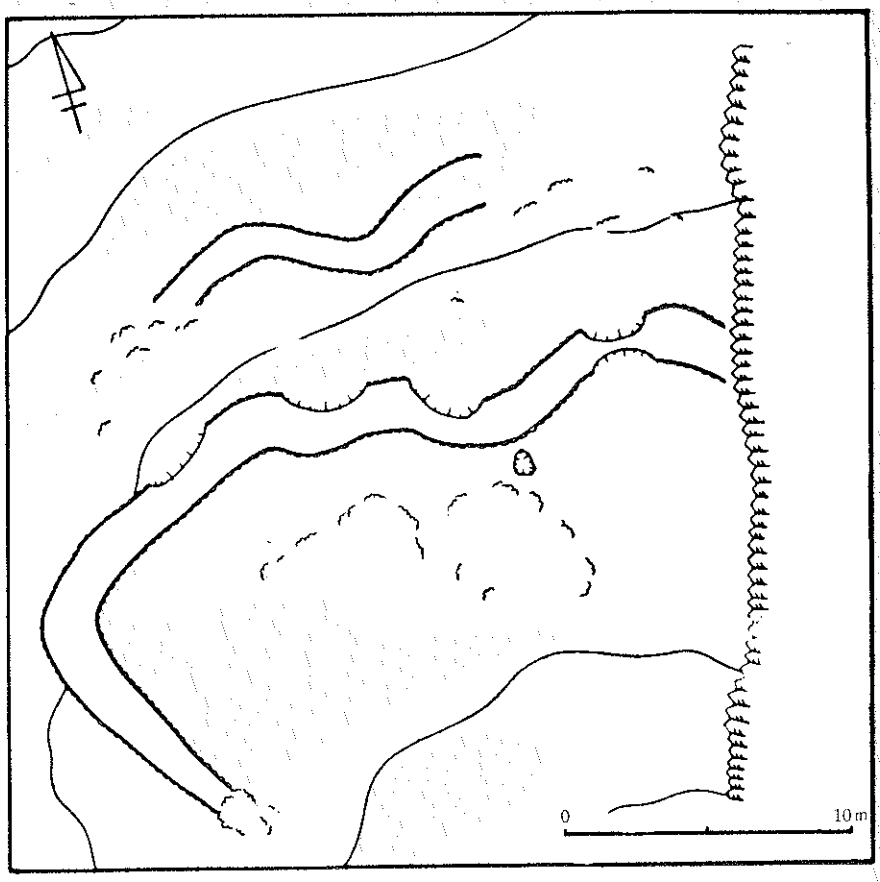
渡　名　喜　村

207　スンジャグスク

PL.55 スンジャグスク石垣

渡名喜島の東海岸側にあり、古生期石灰岩からできた山の中腹標高60～70mに占地する。グスク内は、古生期石灰岩の露頭が起伏して平坦地がなく人間の居住区としては不可能であり、水場も確認できない。

調査によって等高線に平行して野面の石積みが二重にめぐっていることが確認された。石垣の素材には、古生期石灰岩を荒く割って使用し、およそ1～2m前後積みあげてある。石垣の上端での厚さは1.5mを側る。その平面形態



第61図　スンジャグスク実測図

は、山の頂上を取り囲むように半円形状をとっている。石垣の築造は、山の緩傾斜面のみに集中し、そこでは二重の構造をとっているのに対して断崖に面する場所では石垣を確認することはできない。このグスクの構造を概観すると自然の地形を巧みに利用して、険阻なところはそのまま生かし、そうでない所に石垣を一重か二重に築くというグスク普請の痕跡を強くとどめている。伝承によれば、海賊が攻め入った時に、グスクに登って難を逃れたといい伝えられている。　（当　真　嗣　一）

208　アマグスク

渡名喜村の西海岸側にあり、タカタンシと呼ばれる岩山（標高637ｍ）から直線距離にして約200ｍ南に位置している。グスクの北、南、西側の三面は急傾斜をつくっているが、東側の一面のみは一段高くなった尾根へと続き、やがてその尾根は標高137ｍの義中山にいたる。このグスクは、集落を遠く離れた厳しい岩山の頂上

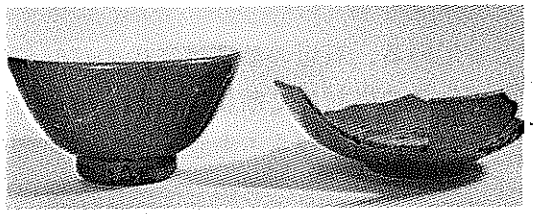
に立地しているためにいつしか村びとたちからも忘れられ、現在ではグスクの存在について知る人は極めて少ない。グスクが立地しているところは標高55m、集落との比高50mを測り平坦面を形成している。古老のはなしによれば、かつてこの平坦面を中心に長方形の石塁が張りめぐらされていたということであるが、段々畑築成の際に大部分の石塁が土どめ用の石材として取り壊されてしまったということである。

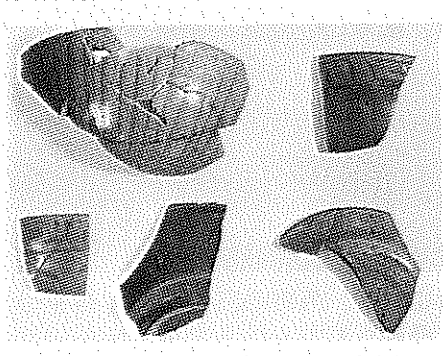
このグスクの北北東約150mの距離には、近世の火番森跡だと云われる標高70mの「ヒータティヤー」の丘が存在する。

このグスクはスンジャグスクと共に「海賊の襲撃に対する逃げ城であった」という伝承を有している。　（当　真　嗣　一）

209　里　遺跡（さといせき）

PL.56　里遺跡遺構





PL.57　里遺跡出土遺物

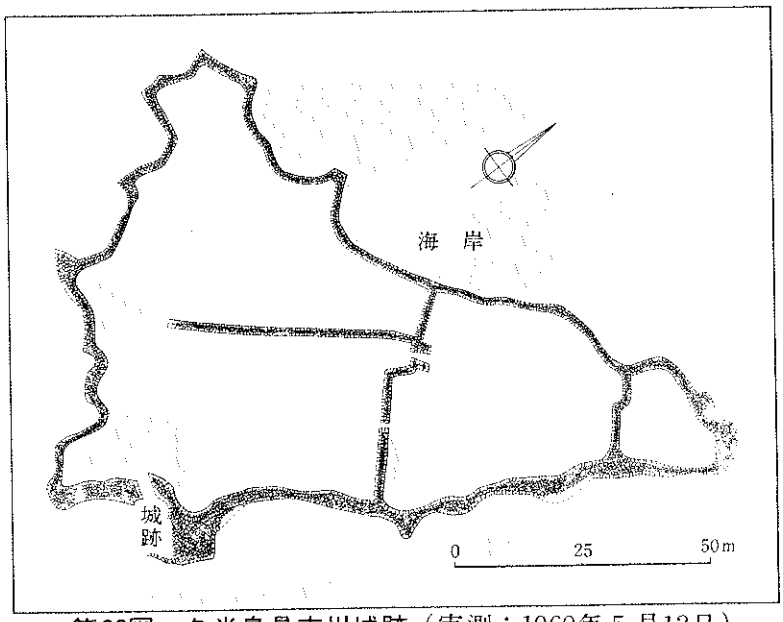
渡名喜島にある。渡名喜島は那覇の北西約55kmの海上北緯26度22分、東経127度08分にあり、黒潮の海流する久米島の北方に位置する。島の周囲8km、総面積3.77km²の小島でその平面形態は略三日月形をなしている。地形は、島の中央部よりやや北よりに位置する集落を挟んで北部と南部の二つのブロックに分けられる。北部は標高146mの西森を中心にしてなだらかな丘陵となっており、南部は大岳やオモ岳の山地が起伏し、南東部は絶壁をなして海にせまっている。グスク様の遺跡である里遺跡は島の北部に屹立する西森に連続する山の尾根のところにあたり、現在の村落からはちようど仰ぎみるような場所に占地した格好となっている。標高80mの丘に立地しているために展望は180度展開し景勝の地となっている。1978年（昭和53）の調査によって里殿とヌン殿内と呼ばれる二つの拝殿を中心に棚状の平場が人為的に築成されていてそれぞれの平場に掘立柱建物

跡の存在が確認された。ここから出土する遺物は、グスク系土器、輸入陶磁器、鉄製品、古銭などである。輸入陶磁器は13世紀から16世紀頃までのものを含み、長期的に人間の居住域として使用されていたことがわかる。　（当　真　嗣　一）

具　志　川　村

210　具志川城跡（ぐしかわじょうせき）

久米島具志川村字仲村渠にあり、現在の仲村渠集落の北約500mの位置にある。城跡は東シナ海に突出する石灰岩の独立丘陵上に占地し、三方を断崖に面す天険要害の地に築かれている。この城跡が陸に接続する部分は南側のみであり、そこに城門はあけられている。城門の下方は一段低くなって緩斜面へと続いていくが、古くはここに具志川集落が立地していたとのことである。そこは現在山林・畑地となっている。城跡の石垣は良く保存されており、城門跡などもよく残っている。城壁の石は、久米島産の輝石安山岩と海の珊瑚石灰岩を取りまぜて築かれており、緩傾斜を示す東南側は高く、幅広く、断崖の天端部には低く細く積み上げてある。城内は雑木林となっているが、村民の管理により清掃がおこなわれ城内の遺構が容易に観察出来る。実測図のとおり城内は連郭武をとり4つの郭からなっている。二の郭とされる所は、基壇築成部とその前庭部という組み合わせとして理解される。考古学的な調査は実施されたことがないので、各郭内における遺構については詳細でない。なお、城内からは輸入陶磁器をはじめとしてグスク時代の遺物が採集される。築城の由来については、『琉球国由来記』の具志川間切の条に、



第62図　久米島具志川城跡（実測：1960年5月12日）

「往昔、仲地村の仲地にやと云うもの、具志川嶽に上り木を伐り船を造らんとす、要害にして地の利を得たるを思う。マダフツ按司、青名崎に城を築きかけたるに、仲地往きて按司に告げしにより、按司は具志川嶽に城を築く」とあり、これによれば、この具志川城はマダフツ按司の築城ということになる。築城の年代については不明である。しかし、郷土史家たちによれば15世紀頃と推定されている。

具志川城の二代目真金声按司のとき、伊敷索按司の三男真仁古樽按司に討たれたので、城主真金声按司は本島の喜屋武に逃れて来て、そこに久米島具志川城と同名の城を築いたと伝えられている。そこが現在の糸満市字喜屋武在の具志川城跡であると云う。

この城跡（久米島具志川城跡）の廃城については、尚真王による中央集権化事業の一環として伊敷索城と共に滅ぼされ、やがて廃城になったといわれている。

具志川城のことについて謡ったオモロは多いが（オモロに見るグスクの項参照）、次の一首をあげておく。

1　具志川の真玉内は　げらへて
　　良く　げらへて
　　勝りゆわる精高子

又　金福の真玉内は
　　げらへて

又　唐の船　せに　金
　　持ち寄せるぐすく
　　良く　げらへて

又　大和船　せに　こがね
　　持ち寄せるぐすく

（外間守善・西郷信綱校注『おもろさうし』日本思想大系18　岩波書店刊より）

この具志川城跡は、昭和47年５月15日　国の史跡に指定された。行政上の位置は、沖縄県島尻郡具志川村字仲村渠クメシ原432番地。地目及び面積は原野、12,904坪となっている。

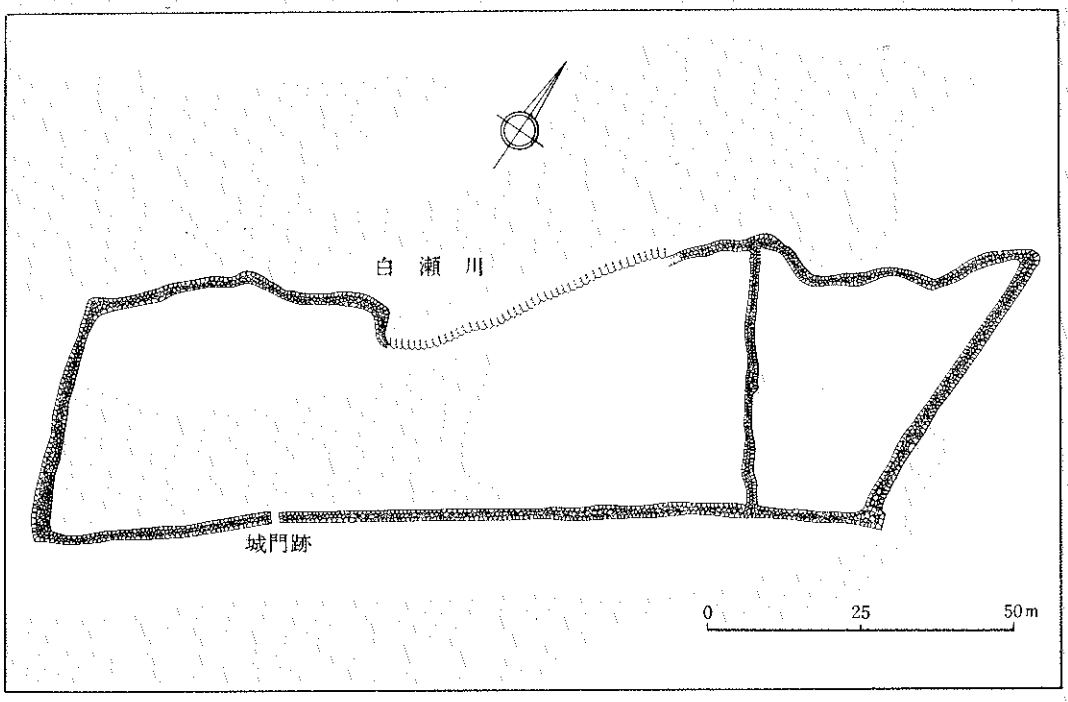
㊂具志川村史編集委員会『具志川村史』　具志川村役場　昭和51年４月１日
鳥羽正雄『日本城郭辞典』　東京堂出版　昭和46年

（当　真　嗣　一）

211　伊敷索城跡（チナハじょうせき）

久米島の最高峰、宇江城に源を発する島第一の長流、白瀬川の河口には、隆起珊瑚礁の崖が切り立っている。標高20ｍのその断崖上に東西に細長く伸びる城跡がチナハ城である。

断崖に面する部分は、西面のごく一部から北方まで、この辺りはごく僅かな石垣を積み重ねただけで、石垣のほとんどが西南部から東部にかけて積まれている。この辺の石垣は高さ1.5ｍ平均で、外側に傾斜し、この傾斜面は約６ｍほどある。石質は珊瑚石灰岩（ハマ石）がほとんどで野面積みにされている。石垣内は竹林になっているが、石垣にそってところどころ大木が生い繁り、その根などによって石垣



第63図　伊敷索城跡実測図（実測：1960年５月31日）

の崩壊もすすんでいる。そのため、斜面づたいに積み石がころがっている所もあるが、石垣外面傾斜は自然崩壊が原因ではなく、もともと、このような積み方をしてあったらしいことに残存する石垣の姿から窺える。
第１図Ｅ点より、青磁片、褐釉陶器、グスク系土器片が出土した。このチナハ城は、後述する中城、具志川城、トンナハ城の城主（いずれも兄弟）の父親の居城であるとされている。　（中　村　昌　尚）

212　マカイグスク

兼城部落内にもと浜川という集落があったようで、この集落の前方は浜川前と俗称されている。この場所に周囲およそ100ｍ、高さ５ｍほどの丘がありここの波打ちぎわの当る所に海蝕洞がある。この小高い岩山を地元の人々はマカイグシクと呼んでいる。丘は樹木が生い繁っている。

明治27年生まれの玉城ウタさんにマカイグスクの由来について訊ねてみたがただ彼女が幼少の頃、老人達に聞いたところによると、マカイグシクのある場所は昔、兼城泊と呼ばれたところで、波打ち際にある海蝕洞そのものをグスクと呼ぶ場合もあり、ここは聖城として、神々の宿るところといわれていたということであった。しかし、このグスクに関しては近年礼拝する人もなく、玉城さん自身そういう祭り

事等、見たことがないという。

渡唐船は、島の南海上を通って渡り、帰唐船は北海上を通ったといわれている。

マカイグスクの名称の由来については、「マカイ」とは飯碗の意味もあり、その辺からの追求も必要かと思われる。今日ではこのマカイグスクのことは、近隣の人々さえ忘れ去ろうとしている。　（中　村　昌　尚）

213　クィングワグスク

仲地部落の西方、およそ3㎞の地点にタンジュ原という地名があって、広々とした農耕地が開けている。その西海岸にほとんど接近するところにクィングワグスクがあり、字仲地の古老の喜世盛さん（現在92才）の話によると、ややコの字形に石垣遺構があったという。現在ではその石垣が取り壊され、場所の確認さえ困難となっている。

石垣はサンゴ石灰岩の野面積み方式であったと記憶されているが、その広さや石垣の大きさなどについてはおぼえていないようであった。喜世盛さんは自分の親や祖父が語っていたという話をそのまま話してくれた。その中でクィングワグシクについては文章にしてほんの1行程度ではあったが、聞き捨てならない貴重な内容だったので記述しておきたい。

「昔の人は西海岸でシャコ貝や夜光貝を採ってこのクィングワグシクの石囲いの中に保管し、中身は間切役場に税として納め、殻は首里王府に納めていた。」

（中　村　昌　尚）

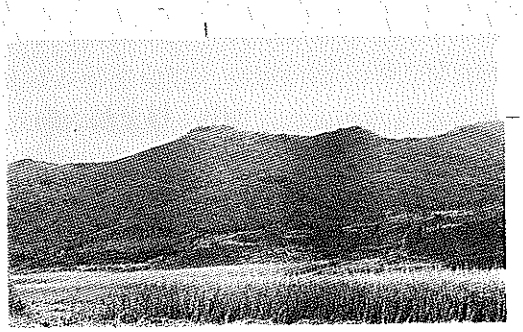
仲　里　村

214　宇江城城跡（うえぐすくじょうせき）

宇江城は、方言「ウィーグスク」と呼ばれ、宇江城の3字を当てている。

宇江城城を築城したのは、チナハ按司の長男と伝えられている。「球陽」が編集されたのは延享2年頃（1741年）でその中にすでに宇江城という村名が出ている。『球陽』が編集されたの堂村、中城村、仲里村が合併して、出た名称である。この城の呼び方は、中城→仲里城→宇江城→と変化しており、島の人達は、通常、宇江城城と呼んでいる。

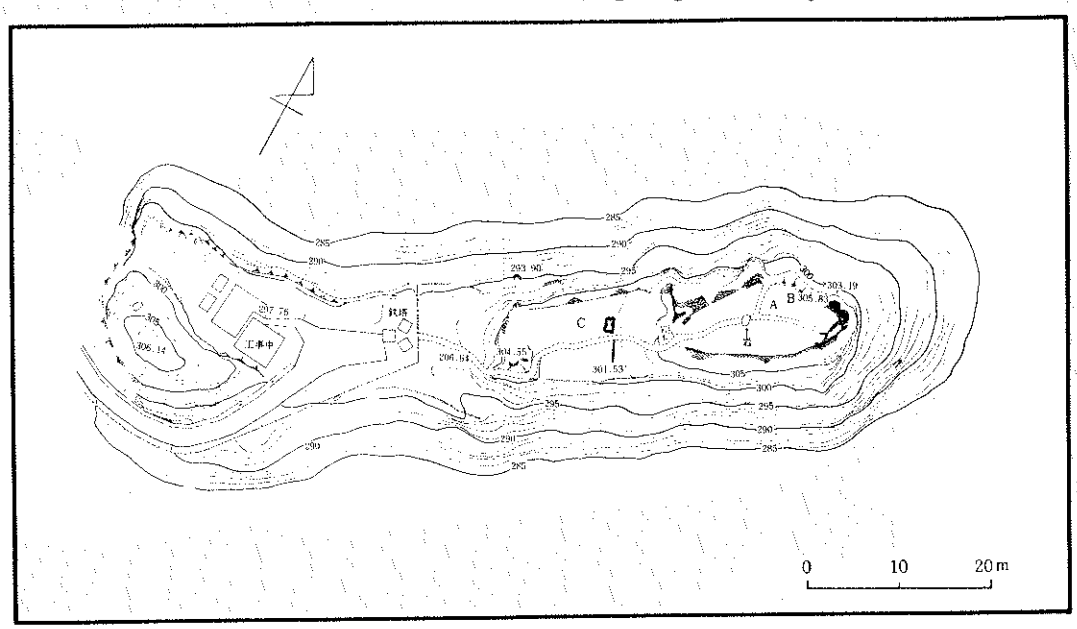
この宇江城城は標高310ｍの高台に立地している。古老のはなしでは南方に幅



PL.58 宇江城城跡遠景

2m、奥行約2.5m、高さ約2mほどの石門が戦後まで、その原形を保っていたと云うが、米軍基地造成の時、石垣とともに破壊され今日は自衛隊基地となってその面影さえもない。

東方最上壇は俗に物見といわれるが、現在はこの場所だけが、わずかながら石垣の面目を保っているにすぎない。石垣は、安山岩（平板形）を野面積みにしたものである。下図のA地点に拝



第64図　久米島仲里村宇江城城跡地形図（1983年1月実測）

所があり、B地点に井戸らしきものがある。C地点も1.5mほどの深さの井戸跡と思われる。郭内からは多量の青磁片、褐釉陶器片が出土する。

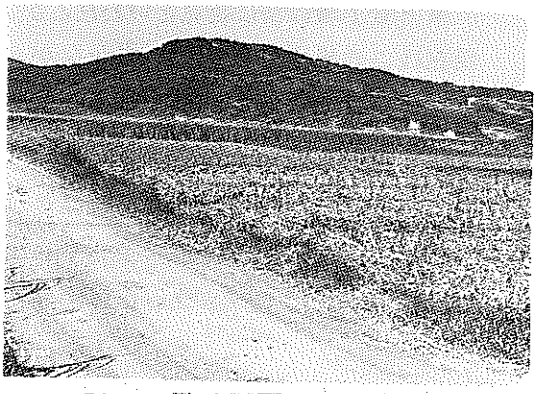
火災が原因なのか、火を受けた遺物が大部分を占めている。口承によればこの城の落城については火攻めであったとも云われており、そのためかも知れない。郭内には水を溜めるための井戸（深さ1.2m／幅1.5m四方）跡も確認される。

この「久米島久志川間切」によればこのグスクの築城は無口樽金と云う人が請負い、ティーヤントールー（具志堅三兄弟）という石細工の協力を得て完成させたと記載されている。また、城の落城については、1510年ごろ、尚真王の討伐を受けたためといわれ、その際、按司は嗣子を家老格の堂のひやに託して白瀬嶽へ身をかくし行方相知れずと伝えられる。その後首里より按司の遺児取り立ての噂を聞いた堂

のひやは遺児を殺害し、自ら新時代の担当者になろうと画策したが、城門近くで落馬し不慮の死によって生涯の幕をとじたとされている。

（中　村　昌　尚）

215　登武那覇グスク（とんなはグスク）「宇根グスク」



PL.59 登武那覇グスク遠景

仲里村役場の北方およそ500mの地点に標高120mのトンナハ岳がある。ここにトンナハ城祉があるが、城主は笠末若茶良でチナハ按司の三男という。彼は、仲城、具志川城の兄達とは異母兄弟で具志川間切山里村に誕生し、そこに臍の緒が埋められていると伝えられる。そこには、大きな蘇鉄が植えられ、今日も山里の人々は旧暦の9月に健康祈願祭を行なう。この城跡は、山の南斜面を利用している。また安山岩の自然巨石を利用しその合間を山形の安山岩を使って野面積みにしている。城内はいくつかの郭に分けられるが、土地の境界を示す程度であり、廃城後、後世の人々によって畑が開かれていた様子が十分うかがえる。城内からは、グスク系土器片、類須恵器、青磁が発見されたが少量である。

城主の若茶良は久米島の諸按司の中でも一番多くオモロに謡われた按司であった

次のオモロは彼と彼の側近であった「ふくじぎましゅ」について謡ったものとされている。

1.　ふくじぎましゅ　人のうらのかないかきよせて　あざおそいにみおやせ
　　又、かさすわかてだに　人のうらのかない　又、まもんわかてだに

（巻11の42）

（中　村　昌　尚）

216　久根グスク（くにグスク）

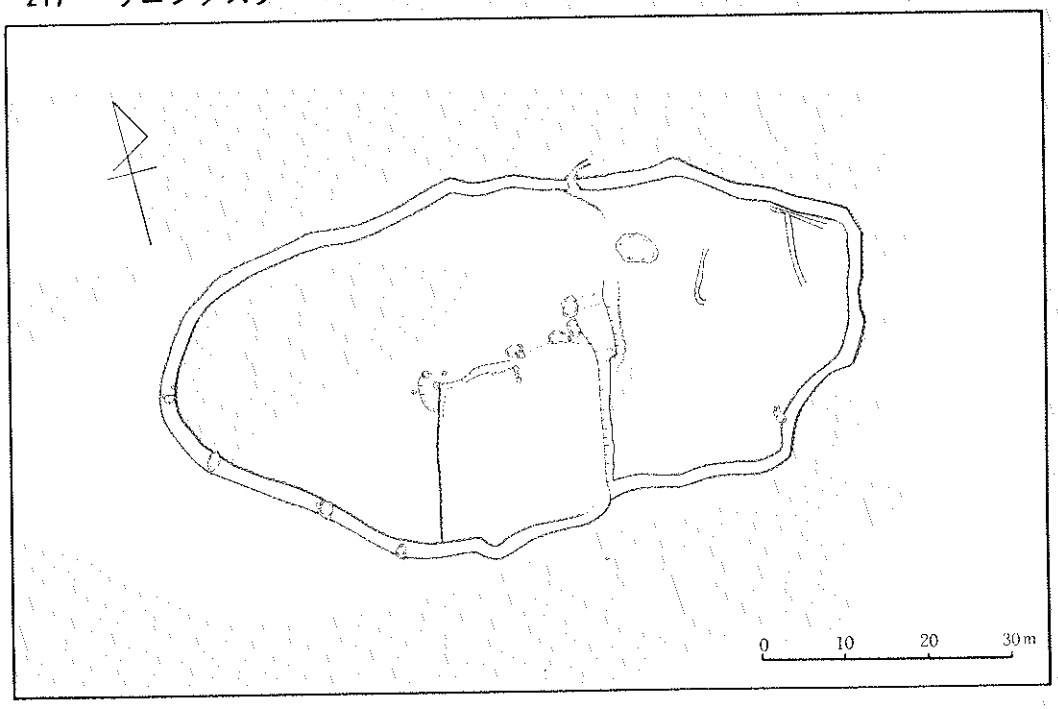
仲里村字山城にあり、現在の山城部落から県道をへだてて約300mの距離にある。このグスクは、ウニシグスクの西南西方向にあって標高151.4mの頂上をもつ山から東に張り出してきた舌状台地に立地している。ちょうどウニシグスクとは上・下の位置関係にあり、ウニシグスクの東下方に占地する格好をとる。グスクの周辺は平坦地となって広がっているために見晴らしはよく、東側に真我里、銭田、比嘉などの低地を足下に、右側にスハラグスク、左側に登武那覇グスクが一望できる位置にある。

このグスクは、現在畑として開墾され旧地形を失っているが、古老のはなしによればかつて城壁の石垣が残っていたとのことである。新城徳祐氏や又吉真三氏らが1966年頃調査した際、グスク内にある「クニ御嶽」から青磁破片や土器破片などを採集し、さらに城壁の根石らしきものを確認したと報告している（注１）。今回の調査では、凹石などの石器類を若干採集しただけで、グスクの存在をあとづけるものは確認されなかった。

このグスクについては、地元の人びとの間でもよく知られてない。したがって何頃の時代に誰が築城したか定かでない。㊂（注１）新城徳祐『沖縄の城跡』昭和57年８月20日

（当　真　嗣　一）

217　ウニシグスク



第65図　ウニシグスク実測図（1981年５月）

久米島仲里村字山城にあり、現山城村落の南西、県道　号線を挟んで約400ｍの距離に位置している。築城者や歴代城主などについては全く不明となっている。

グスクはウニシ岳から峰続きのところにあり、標高100ｍの山の頂部付近から標高70ｍの麓に近い平坦面におよぶ所までを含む全長90ｍの範囲で石垣をめぐらし、一応その範囲をグスク跡として把える。グスクの縄張りを仔細に観察すると、麓に近い平坦面を平場として取り込むために、わざわざその高位に位置する頂上近くま

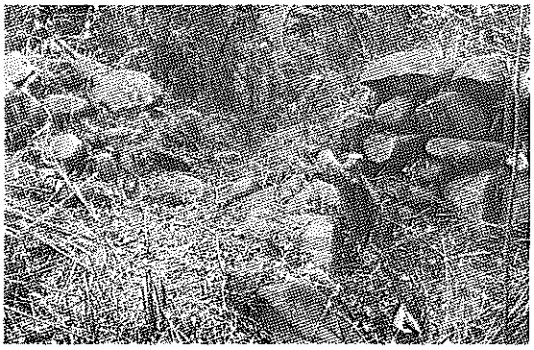
で石垣をのばし郭内に取り込んでいることがわかる。したがって、このグスクで遺構の立地する場所は下方の平坦面に限られる（実測図参照）。事実、低位置の平坦面には人為的に築成された二つの平場や、小溝が地上からまだ僅かに観察される。グスク内の最も高い位置に登ると眺望はよく、クニグスクをすぐ下に見て、北に山城部落、東に銭田平野、南東方向にスハラグスクを一望のもとに見わたせる。伝承によれば「このグスクには鬼が住みつき村人を苦しめていたのを、ある年の盆の頃、一計を案じた村の姉妹の一人によって、その鬼は退治された」と云われている。

㊂中村昌尚「久米島のグスクについて」『沖縄久米島』沖縄久米島調査委員会編弘文堂　1982年　（当　真　嗣　一）

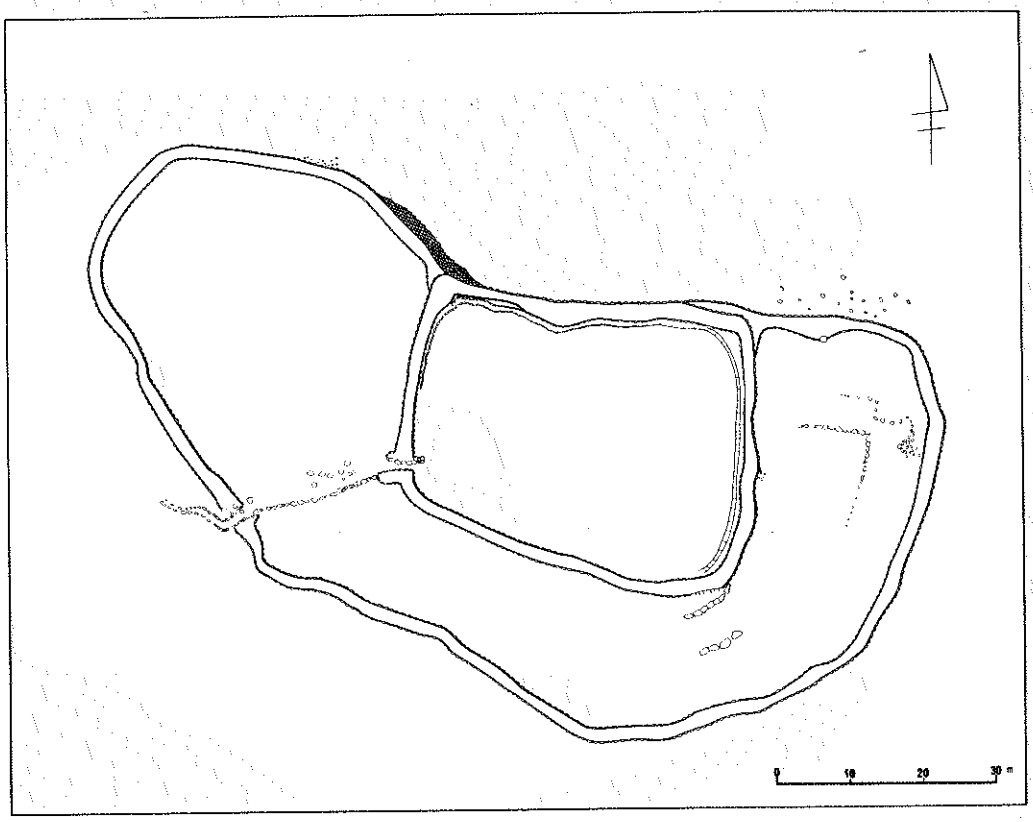
218　塩原城跡（すはらじょうせき）「銭田グスク」

仲里村字銭田の南南東約400ｍの台形状の山頂に占地するこのグスクは、平地との比高約120ｍを測り、銭田部落から見るその姿はひときわ高く、目立つ存在となっている。グスクの行政的所在地は、新城徳祐氏の調査によれば仲里村字山城津波良原2773番地、地目は原野で、面積1814坪となっている。銭田部落の後方から林道を通り、雑木林をふみわけてグスクに立てば視界は広く、北は比嘉・謝名堂などの沖積低地を一望し、東は太平洋の白波が足下にせまるのを望み、南はスハラ川を経て島尻元島を眼下に見下ろしている。

グスクの石垣は安山岩の丸い河原石を自然のままに利用しているが、個々の石の大きさは重量500kgをゆうにこすものから人頭大のものまであり千差万別である。この石積障壁は山の頂部をとり込み二重の構造をとっている。内郭は45ｍ×30ｍの長方形状の平場をなし、西南西の隅には門が開けられている。また郭内の周縁部には幅20～30cmの浅い溝がまわっていて、それは北西隅の暗渠へとつながっている。外郭は、長方形状の内郭を取り囲むように長楕円形状を呈しているが長軸は西北西に向き、内部の長軸は西向きであり若干のずれが認められる。この外部にも内部と同じ方向に門があり、外部とつながっている。恐らく城門であろう。このグスクの縄張りで注目されることは、北側の比較的傾斜の厳しいところを背にしてそこでは２重の石垣がめぐらされていないのにかかわらず、東・西・南の三方の緩傾斜面では２重の構造がみられることである。この種の石



PL.60　塩原（スハラ）城跡城門



第66図　塩原城跡実測図（1981年５月）

垣の形態は、明らかに外敵を意識してのことであり、石垣の形態そのものが防禦の機能を十分考慮して積まれたものであることを知ることができるのである。

このスハラグスクにまつわる伝説は二つ知られている。一つはスハラグスクの城主たる美人女按司と宇江城城主との恋物語の伝説であり、他は間抜けなスハラ按司のはなしである。

グスク内は、現在雑木林となって足の踏場もないが、掲載してある平面図は数日間を費して伐間の末苦労して実測したものである。石垣の保存状況はよく、とくに外部の城門付近はよく残っていて昔日のおもかげを忍ぶのに十分である。㊂注１新城徳祐著『沖縄の城跡』　昭和57年８月20日　　（当　真　嗣　一）

219　与那嶺グスク（よなみねグスク）

仲里村字島尻の南東約300ｍの方向に、標高約30ｍの小高い山の頂上を与那嶺城と呼んでいる。再三調査に出かけたが、石垣らしきものは発見できなかった。傾斜面は畑に利用された痕跡があり、頂上には自然の巨石が３～４個あるだけで、何故

ここを城＝グシクと呼んでいるのかわからない。島尻部落の古老を訊ねてみたが期待する口承は得られなかった。

仲原善忠著『久米島史話』には、「沖縄本島の島尻という語は『島を治める』意味だというから、久米島では金も出るので1時ヨナミネ城が出来て、その方面が中心となったのかも知れないが詳しい事はわからぬ」としている。

（中　村　昌　尚）

220　天宮グスク（アンマーグスク）

宇江城部落の北方、北風の吹きあれる断崖に屹立する安山岩の岩山がある。幅約2m、高さ10mほどのものである。宇江城部落の住民はここを、アンマーグスクと呼んでいる。岩壁の付け根あたりは、人骨が散乱していたようだが、現在では見あたらない。この岩は風化作用によって少量ずつ崩壊し、上方からの岩片がくずれ落ち、下方に積もっている。それと同時に断崖、上方一帯の土砂くずれも重なり合っているため、人骨は、崩れた土砂や岩石などによって埋れてしまった可能性も強い。

（中　村　昌　尚）

221　ミンチャブナーグスク

伝承によれば、宇江城城跡の近く、美地原という所に小さい石垣囲があったようで俗に此々をミンチャブナーグスクといっていたということである。

ミンチャブナーとは、目に入った小さなゴミのことで、石垣囲いがあまりにも小さいのでそのような呼び方をしたのだろうかと思われる。

現在では、パイン畑の造成等で地形が変貌し、見る影もない。特別な言い伝えもない。

（中　村　昌　尚）

222　小グスク（こグスク）

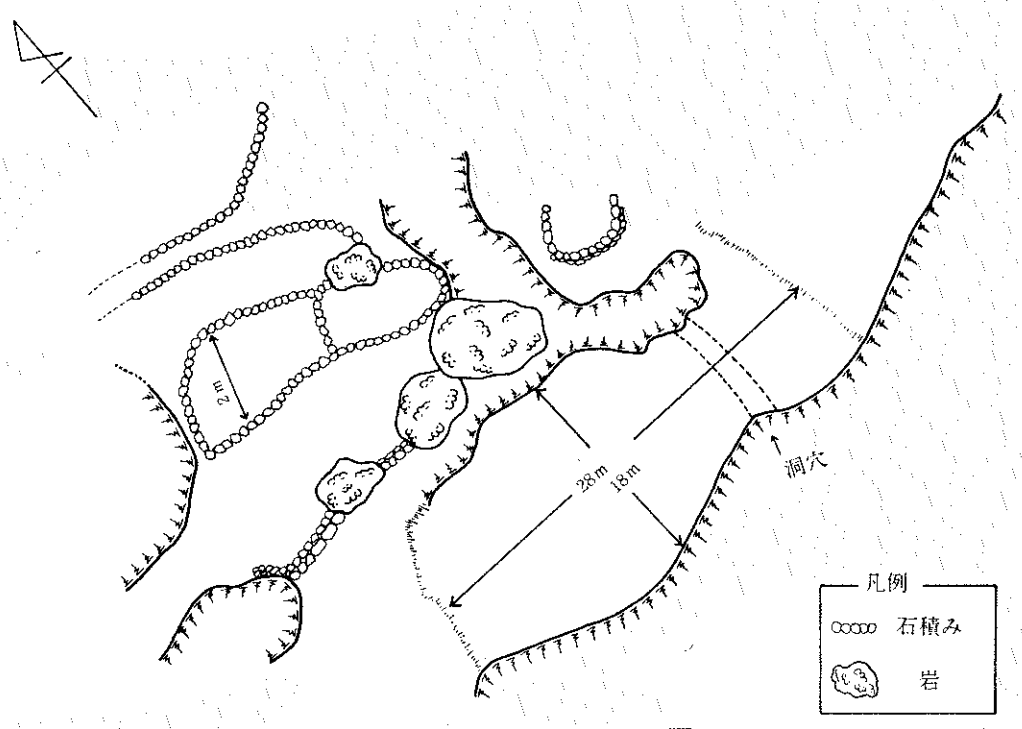
字仲地に所在するチンベ殿内の後方に神道があり、曲りくねって300mほど北東に進むとちょっとした広場につきあたる。この広場に石灰岩を切り取って造った香炉が70個ばかり集積されている。地元民はここをメデヤウキタと呼び遙拝所となっている。この場所でノロ一行、下級神女達が揃って、祭祀が取り行なわれていたという。このメデヤウタキから北方150mほど、山中をよじ登ると、小グスクの頂上に達する。ここはまさしく聖域で今日の人々も容易に立入ることがない。ここで伐木したり、立入ったりすると神罰を受ける。要するにたたりがあると伝えられ、人

々から敬虔な場所として畏れられている。

頂上に登ると宇仲地の集落が眼下に見おろせる。頂上にいつの物か知らないが標柱がある。石灰岩を15cm 4 方程度切り抜いて埋められている。長さ 1 m程である。その周辺を石で囲い、雑に積み上げられている。他に人為のものと思える石山を発見した。石垣いとは明らかに違う。ここも石を雑に積んだだけである。頂には大きな安山岩が断崖状になっている部分もあり、この一帯には人骨があったと聞いていたが、確認することは出来なかった。　　（中　村　昌　尚）

粟　国　村

223　八重川グスク（ヤエガーグスク）



第67図　八重川グスク略測図

粟国村東集落の西方にあり、標高50.3mの土倉原丘陵縁端部に位置する。丘陵上からは島の東半部を見下すことが出来る恰好の地にある。グスク内部には南北18m×東西28mのフラット面が存在し、その北側は、巨大な岩塊と崖状のフィッシャーがめ

ぐり、南側を屏風状の垂直な崖が東西に位置し、グスクを区切るようにある。石積は崖縁部やフィッシャー部には認められず、わずかに岩塊との間をうめるようになだらかな斜面部に構築されている。特徴的な石積遺構として、南側の崖下部からグスク内部のフィッシャーに通じる洞穴の直上部に、半円形状に石灰岩塊を積み上げたもので、のぞき穴様な箇所もつくられている。大きさが2～3m程のもので、何らかの要害施設を思わしめる。グスク内部では遺物は確認されず、南側の崖下部分にて石器（凹石）、焼土がわずかに採集されているのみである。　（上　原　　静）

第四章　古文献にみるグスク

第1節　『おもろさうし』のなかの「――ぐすく」「――城」

おもろは沖縄、奄美大島に伝わっていた古謡であり、これを王府の手によって記録編集したのが「おもろさうし廿二巻」である。歌の数は1552首あり（重複を除けば実数は1144首である）。その内容は、祭礼、天体讃美、航海、築城、武器、造船、交易、貢納、按司礼讃、王の長寿繁栄、戦い、建寺、植樹等を謡ったものとなっている。ここに収録した「ぐすく」は『おもろさうし』の中で「……のぐすく」として謡われているぐすく名を日本思想大系18巻の『おもろさうし』（佐々木信綱・外間守善校注　岩波書店　1977年12月）の中から収録巻及び番号のみを抜き出して掲載した。なお、場所の明確なぐすくとは現在までに所在が判明しているぐすく、場所の明確でないぐすくとは所在が判明していないぐすくをいう。別称、美称については(　)として表記してある。

第4表a　　☆場所の明確な「――ぐすく」

項目	「――ぐすく」名	収録巻及び番号	注釈
(ア)	新垣の根高ぐすく	2巻－62	中城村新垣
(イ)	伊計杜ぐすく	9巻－499	伊計島の杜ぐすく
		17巻－1150、1187	
	石原（いしやら）たうぐすく	20巻－1332	島尻郡摩文仁村石原
(ウ)	大城	17巻－1223、1224、1225	島尻郡大里村大城
		18巻－1253、1254、1255	
(エ)	江洲の杜ぐすく	16巻－1160、1161、1162	具志川村江洲の杜ぐすく
	(江洲の頂ぐすく)		
	伊祖伊祖の石ぐすく	15－1066、1067、1068、1069	
	(伊祖伊祖の金ぐすく)		
(オ)	大里の鳴響み杜ぐすく	20巻－1362	大里の名高き杜ぐすく
(カ)	嘉数杜ぐすく	15巻－1094	中頭郡宜野湾村嘉数
	(根立て杜ぐすく)		
	兼城	20巻－1343、1364	島尻郡兼城
	兼城	21巻－1418、1419、1475、1476、1481	久米島の兼城
	兼城杜ぐすく	9巻－478	久米島の兼城
		11巻－588、589、600、601	
	我那覇杜鳴響み杜ぐすく	20巻－1366	島尻郡豊見城村我那覇
	珈玻羅寄せぐすく	13巻－870	国頭郡今帰仁村
(コ)	越来杜ぐすく	2巻－71、73	沖縄中部越来村の杜ぐすく
		14巻－1001	
(サ)	崎ぎや杜ぐすく	13巻－917	古宇利島の御嶽名
(シ)	首里杜ぐすく	1巻－1、2、3、6、7、8、9、11、13、14、26、27、32	
	(真玉杜ぐすく)		
	(玉金持ち満ちへるぐすく)	3巻－111	
	(ぐすく御殿)	4巻－175、178、181、182、186、189、190、195、197、	
	(杜ぐすく)		
	(ぐすく)	5巻－217、224、234、239、246、248、	
		6巻－298、312、321、325、328、335、338、340	

		7巻－355、358、361、364、373、376、386、409	
		9巻－476、477、496	
		11巻－621、622	
		12巻－652、657、679、681、682、684、701、709	
		13巻－756、757	
		21巻－1437、1494、1495	
		22巻－1516、1548	
(セ)	せしきょ金ぐすく (良かる金ぐすく) (思揚げのぐすく)	18巻－1279、1280	糸数の美称
	世玉の留まりぐすく	12巻－693	糸数の美称
(タ)	玉城	9巻－481、482	
		17巻－1232、1233、1235	
		18巻－1262、1263、1265、1273、1279、1280	
(チ)	知花金城 (知花石城)	2巻－85	知花城の美称
	知念杜ぐすく (大国杜ぐすく)	7巻－346 14巻－1022、1023	沖縄南部知念村にある杜ぐすく
		19巻－1302、1303、1304、1305、1306、1307、1308、1310、1311、1312、1313	
		22巻－1539	
(ツ)	津堅伊波ぐすく	14巻－1010	沖縄本島の東海岸にある小島
(ナ)	中ぐすく	17巻－1207	伊是名島
	聞え中城	巻－42、43、44、45、46、47、48、49、51、52、53、54、55、61	名高い中城
		14巻－1006	
	中城	17巻－575、611、630、634、643	久米島の中城（のちの仲里城→宇江城）
		13巻－952	
		21巻－1467、1488、1490、1497	
(ハ)	端(はな)ぐすく	10巻－527	波之上神社
	玻名城	14巻－983、1050	
		19巻－1318、1319、1320、1321、1322、1323、1324、1325、1326、1327、1328、1330	
		20巻－1381、1382、1383、1384、1385、1386、1387、1388、1389、1390、1391、1393	
	玻比良杜ぐすく	20巻－1336	島尻郡兼城村波平波比良城嶽の神
(マ)	真宇根ぐすく	9巻－491	久米島仲里村
	真玉杜ぐすく (雲子玉ぐすく)	17巻－1236、1238、1239 18巻－1268、1266、1269	

	摩文仁石ぐすく	20巻－1334	島尻郡摩文仁村にある立ぱなぐすく
	(摩文仁金ぐすく)		
(ミ)	宮　　城	16巻－1151、1152、1153	中頭郡東部海岸上の宮城
(ヤ)	山　　城	8巻－463	島尻郡喜屋武の山城
		17巻番外	
		20巻－1337、1341、1346、1348、1349	
	山　　城	13巻－774	久米島の山城部落

第4表b　　☆場所の明確でない「――――ぐすく」

(ア)	新　　城	12巻－704	渡名喜か粟国か不明
(オ)	大神酒の満ち上がるぐすく	17巻－1198	今帰仁？
	御ぐすく	8巻－439	？
(カ)	金ぐすく	14巻－1005	
(キ)	聞ゑ鬼ぐすく	6巻－332	
	(鳴響鬼ぐすく)	8巻－424、427	
		9巻－495	
(ク)	国手持ちぐすく	16巻－1164	羽地？
	ぐすく親樋川	8巻－436	
(セ)	せぢ玉ぐすく	17巻－1185	
(ナ)	中　　城	21巻－1488	
(ホ)	報国寄せぐすく	17巻－1237	
		18巻－1267	
(マ)	真玉金持ち満ちろぐすく	4巻－156	

第2節『琉球国由来記』のなかの「――――城」

琉球国由来記は、首里王府が①城と城主の変遷、②祀る嶽、川（井戸）の由来、③古くからの諸行事の由来、④土地で勲功のあった人の事蹟、⑤昔からの珍しい出来事等を古老たちにも尋ね聞き報告するよう各間切や番所に命じ、その結果、集まった資料を1713年編集したものである。ここに集録したぐすくは、琉球国由来記の巻12～19の「各處祭祀一～ハ」に収録された「御嶽」「――殿」等の名について「――城」として表記されているものを収録してある。

なお、琉球国由来記については伊波普猷、東恩納寛惇、横山重編纂『琉球史料叢書』第1巻、第2巻（名取書房　昭和15年12月）を使用した。

第5表『琉球国由来記』の中の「――城」一覧

番号	間切・村	巻	番号	御嶽及び殿名
1	真和志間切　国場村	12	16	登野城ノ嶽
2	〃　與儀村	〃	17	宮城ノ嶽
3	〃　古波蔵村	〃	21	城嶽
4	〃　茶湯崎村	〃	36	内金城之大嶽
5	〃　謝名村	〃	43	城アタリ之殿
6	〃　茶湯崎村	〃	73	内金城殿
7	〃　安里村	〃	78	宮城之殿
8	〃　〃	〃	81	天久城之殿
9	豊見城間切　豊見城村	〃	82	城内豊見瀬嶽
10	〃　〃	〃	110	城之内包川
11	〃　〃	〃	112	豊見城之殿
12	〃　我那覇村	〃	114	中城根屋
13	〃　〃	〃	115	中城之川
14	〃　名嘉地村	〃	121	池城川
15	〃　保栄茂村	〃	138	保栄茂城殿
16	〃　翁長村	〃	141	玉城ノ殿
17	〃　饒波村	〃	153	金城ノ殿
18	〃　長堂村	〃	155	長嶺城之殿
19	小禄間切　金城村	〃	169	金城ノ嶽
20	〃　湖城村	〃	176	湖城ノ嶽
21	〃　金城村	〃	186	金城之殿
22	〃　兼城村	〃	227	城之殿
23	〃　〃	〃	228	奥間城里主所
24	〃　武富村	〃	244	城之殿
25	高嶺間切　島尻大里巫崇所	〃	250	小嶽（山南王城）
26	〃　與座村	〃	256	大城之嶽
27	〃　中城村	〃	264	城内之嶽
28	〃　国吉村	〃	265	上大城嶽
29	〃　〃	〃	269	タケ城ノ嶽
30	〃　屋古村	〃	276	島尻大里城内殿貳
31	〃　〃	〃	280	屋城之殿
32	〃　真栄里村	〃	284	島尻中城巫火神
33	〃　〃	〃	287	島尻中城西表之殿
34	〃　〃	〃	288	島尻中城東表之殿
35	〃　與座村	〃	297	大城之火神
36	〃　〃	〃	299	大城之殿
37	〃　〃	〃	305	湖城之殿
38	〃　国吉村	〃	312	國吉城之城
39	真壁間切　真壁村	〃	315	城内ノ嶽
40	〃　〃	〃	316	城下ノ嶽
41	〃　東江村	〃	324	カナ城ノ嶽
42	〃　真壁村	〃	334	城火神
43	〃　〃	〃	336	城之殿

44	真壁間切	名嘉真村	12	341	宮城之殿
45	摩文仁間切	摩文仁村	〃	371	上城ノ嶽
46	〃	米次村	〃	378	米次城ノ嶽
47	〃	石原村	〃	379	石原城ノ嶽
48	〃	波比良村	〃	385	波比良城ノ嶽
49	〃	波平村	〃	402	波平城之殿
50	喜屋武間切	山城村	〃	410	サケ城ノ御イベ
51	〃	上里村	〃	413	内城モリ城ノ嶽
52	〃	山城村	〃	426	山城巫火神
53	南風原間切	兼城村	13	3	兼城巫
54	〃	〃	〃	25	大城之殿
55	大里間切	西原村	〃	47	城内島添アザナノ御イベ
56	〃	宮城村	〃	66	宮城之嶽
57	〃	與那覇村	〃	69	城之森
58	〃	大城村	〃	88	城内ノヤラザ嶽
59	〃	〃	〃	90	大城之嶽
60	〃	稲福村	〃	94	山城之嶽
61	〃	西原村	〃	101	大里城之殿
62	〃	宮城村	〃	118	宮城之殿
63	〃	高宮城村	〃	125	高宮城巫火神
64	〃	〃	〃	126	高宮城之殿
65	〃	大城村	〃	130	大城之殿
66	東風平間切	高郎村	〃	161	世名城之嶽之御前
67	〃	東風平村	〃	179	金城之殿
68	〃	富盛村	〃	186	富盛城之殿
69	〃	宜壽次村	〃	205	頂城之殿
70	〃	世名城村	〃	206	世名城之殿
71	具志頭間切	具志頭村	〃	226	城之内嶽
72	〃	玻名城村	〃	232	タタナ城嶽
73	〃	中座村	〃	234	上城之嶽
74	〃	玻名城村	〃	237	玻名城之殿
75	〃	具志頭村	〃	240	具志頭城之殿
76	〃	新城村	〃	246	城間グワノ殿
77	〃	〃	〃	251	新城之殿
78	〃	中座村	〃	258	上江城之殿
79	佐敷間切	佐敷村	〃	260	上城之嶽ニ御前
80	〃	屋比久村	〃	275	キヤ城ノ嶽
81	〃	佐敷村	〃	279	殿（城御嶽内ニ有）
82	〃	〃	〃	280	殿（有ニ城内。往昔佐敷按司蔵敷世）
83	〃	屋比久村	〃	296	殿（有ニ城内一）
84	〃	新里村	〃	300	宮城之殿
85	知念間切	知念村	〃	310	城内友利之嶽
86	〃	〃	〃	322	知念城御殿
87	〃	〃	〃	323	知念城内之殿
88	玉城間切	垣花村	〃	360	照城之嶽
89	〃	富里村	〃	373	中間城嶽
90	〃	糸数村	〃	379	糸数城之嶽

91	玉城間切	糸数村	13	380	根石城之嶽
92	〃	玉城村	〃	394	玉城巫火神
93	〃	〃	〃	395	中之城殿
94	〃	糸数村	〃	429	糸数城之殿
95	西原間切	幸地村	14	3	城之火神
96	〃	與那城村	〃	33	與那城火神
97	〃	幸地村	〃	38	幸地城之殿
98	〃	棚原村	〃	45	棚原城之殿
99	浦添間切	中間村	〃	71	大城嶽　兩御前
100	〃	〃	〃	72	小城
101	〃	澤岻村	〃	79	金城ヨリノハ森
102	〃	中間村	〃	97	浦添城内殿
103	〃	澤岻村	〃	104	金城之殿
104	〃	宮城村	〃	117	宮城之殿
105	宜野湾間切	喜友名村	〃	134	城内西ノヤラズ嶽
106	〃	安仁屋村	〃	135	金城森
107	〃	喜友名村	〃	144	喜友名城之殿
108	〃	〃	〃	145	喜友名城火神
109	〃	普天間村	〃	153	宮城之殿
110	中城間切	添石村	〃	170	小城ノ御イベ
111	〃	伊舎堂村	〃	178	ダイ城御前
112	〃	渡口村	〃	197	宮城ノ嶽
113	〃	大城村	〃	202	大城ノ嶽　ニ御前
114	〃	〃	〃	204	大城巫火神
115	〃	安仁屋村	〃	205	安仁屋城嶽
116	〃	添石・泊村	〃	213	中城城内之殿
117	〃	安谷屋村	〃	231	安谷屋城之殿
118	〃	渡口村	〃	235	宮城之殿
119	〃	〃	〃	236	宮城上門根所
120	〃	屋宜・当間村	〃	238	玉城之殿
121	越来間切	中宗根村	〃	261	内城アマミヤ嶽
122	〃	越来村	〃	271	越来城殿
123	美里間切	大里村	〃	288	アマ城之嶽
124	〃	東恩納村	〃	296	嵩城嶽
125	〃	伊波村	〃	301	森城嶽
126	〃	〃	〃	302	中森城嶽
127	〃	知花村	〃	317	石城之殿
128	〃	伊波村	〃	324	伊波城内之殿
129	〃	山城村	〃	327	山城之殿
130	北谷間切	北谷村	〃	330	城内安室崎之嶽
131	〃	野國村	〃	340	大城ゲライ森
132	〃	屋良村	〃	343	屋良城之嶽
133	〃	玉代勢村	〃	348	北谷城之内殿
134	〃	野國村	〃	358	大城嶽前之殿
135	具志川間切	具志川村	〃	362	城嶽
136	〃	江洲村	〃	370	土城嶽
137	〃	安慶名村	〃	378	グスク嶽

138	具志川間切	具志川村	14	390	グスク嶽之殿
139	〃	安慶名村	〃	394	グスク嶽ノ殿
140	〃	江洲村	〃	398	グスク嶽ノ殿
141	勝連間切	南風原村	〃	406	城内玉ノミウヂ嶽
142	〃	濱比嘉村	〃	421	比嘉城嶽
143	〃	南風原村	〃	429	殿（勝連城之内）
144	與那城間切	平安座村	〃	449	森城
145	〃	宮城村	〃	452	城内之嶽ニ御前
146	〃	伊計村	〃	455	城内之イベ
147	讀谷山間切	座喜味村	〃	466	城内嶽
148	〃	〃	〃	466	城内火神
149	〃	〃	〃	468	城内アザナイシノ御イベ
150	〃	〃	〃	480	讀谷山城内之殿
151	恩納間切	安富祖村	15	7	森城嶽
152	〃	恩納村	〃	13	城内之殿
153	名護間切	名護村	〃	66	名護城神アシアゲ
154	本部間切	謝花村	〃	89	ミタテ森城
155	今帰仁間切	今帰仁村	〃	127	城内上之嶽
156	〃	〃	〃	143	今帰仁城内神アミアゲ
157	〃	玉城村	〃	157	玉城巫火神
158	〃	〃	〃	159	玉城巫火神
159	〃	源河村	〃	170	上城嶽
160	羽地間切	田井等村	〃	189	池城里主所神
161	〃	〃	〃	191	池城神アミアゲ
162	久志間切	嘉陽村	〃	228	嘉陽城
163	大宜味間切	城村	〃	250	小城嶽
164	〃	津波村	〃	257	津波城嶽
165	〃	〃	〃	258	石城嶽
166	〃	城村	〃	262	城巫火神
167	国頭間切	見里村	〃	278	中城之嶽
168	伊江島	〃	16	12	玉城地根所火神
169	〃	〃	〃	28	大城地根所火神
170	伊平屋島	〃	〃	36	高城ミヤ御イベ
171	〃	〃	〃	37	大城ミヤ御イベ
172	〃	田名村	〃	62	城嶽御イベ
173	渡嘉敷間切	渡嘉敷村	18	28	安禰宜城御嶽
174	具志川間切	具志川村	19	1	具志川城内御イベ
175	〃	兼城村	〃	19	兼城御嶽
176	〃	〃	〃	21	兼城ノロ
177	〃	〃	〃	22	兼城ヲヒヤ
178	〃	山城村	〃	24	山城ノロ
179	〃	〃	〃	25	山城ヲヒヤ
180	〃	〃	〃	26	久根城ヲヒヤ
181	久仲里間切	儀間村	〃	48	イシキナハ御嶽
182	〃	宇江城村	〃	50	仲里城御嶽

グスク時代の遺跡

沖縄の考古学編年の上で、沖縄各地にグスクと呼ばれる遺跡が形成される時期をグスク（城）時代と呼んでいる。研究者によって多少の意見の相違はあるが、この時代の絶対年代はおおむね12年紀前後から16世紀の初期までが視座に入っている。今回のグスク分布調査の過程で、グスクと称されている地域以外でもグスク時代遺物が表採される遺跡を多数確認することが出来た。これらの遺跡はグスクに対比される当時の集落跡、あるいは祭祀遺跡の可能性があり、参考のためにここに掲載することにした。

北　部　地　区

No.	遺跡名	所在地	備考	註
1	上里遺跡	伊平屋村字我喜屋		①
2	伊是名古島遺跡	伊是名村字伊是名		〃
3	西江上遺跡	伊江村字西江上		〃
4	安田遺跡	国頭村安田		〃
5	平敷ウガン遺跡	今帰仁村字平敷		②
6	ウンジョウヘイ遺跡	〃　字前原		〃
7	大泊遺跡	〃　字古宇利		〃
8	兼久古島遺跡	〃　字兼久		〃
9	謝名遺跡	〃　字謝名		〃
10	山川垣内権現洞穴	本部町山川港原		①
11	辺名地遺跡	〃　字辺名地		〃
12	住賀洞遺跡	〃　字新里		〃
13	ハンタンジー遺跡	名護市字済井出		⑦⑧
14	島之川御嶽遺跡	〃　字　〃		〃 〃
15	瀬洲村跡遺跡	〃　字源河		〃 〃
16	仲尾古村遺跡	〃　字仲尾		〃 〃
17	屋部川口古瓦出土地	〃　字宇茂佐		〃 〃
18	宇茂佐古島遺跡	〃　字　〃		〃 〃
19	東兼久原貝塚	〃　字　〃		〃 〃
20	宮里古島遺跡	〃　字為又		〃 〃
21	溝原貝塚	〃　字東江		〃 〃
22	天仁屋原遺跡	〃　字天仁屋		〃 〃
23	嘉陽貝塚	〃　字嘉陽		〃 〃
24	嘉手苅村跡遺跡	〃　字汀間		〃 〃
25	久志古島遺跡	〃　字久志		〃 〃
26	久志貝塚	〃　字　〃		〃 〃

27	前田原水田遺跡	名護市字久志		⑦⑧
28	タキギター河口遺物散布地	〃　市運天原		〃　〃
29	饒平名シマヌハー御嶽遺跡群	〃　字饒平名	A～G地点	〃　〃
30	上之御嶽遺跡	〃　字真喜屋		〃　〃
31	川之上遺跡	〃　字仲尾次		〃　〃
32	ウフ御嶽土器出土地	〃　字茂久地原		〃　〃
33	羽地間切番所跡	〃　字親川		〃　〃
34	仲間遺跡	〃　字田井等		〃　〃
35	田井等遺跡	〃　字　〃		〃　〃
36	フガヤ遺跡	〃　字　〃		〃　〃
37	ヤドバラ殿遺跡	〃　字　〃		〃　〃
38	古我知焼窯跡	〃　字古我地		〃　〃
39	谷田遺跡	〃　字川上		〃　〃
40	川上遺跡	〃　字　〃		〃　〃
41	振慶名遺物散布地	〃　字振慶名		〃　〃
42	伊差川古島遺跡	〃　字伊差川		〃　〃
43	安和貝塚	〃　字安和		〃　〃
44	部間権現青磁出土地	〃　字　〃		〃　〃
45	大堂原西遺跡	〃　字大中区		〃　〃
46	大堂原東遺跡	〃　字　〃		〃　〃
47	城古銭出土地	〃　字城		〃　〃
48	嘉陽原遺跡	〃　字嘉陽		〃　〃
49	安部貝塚	〃　字安部		〃　〃
50	北上原遺跡	〃　字　〃		〃　〃
51	グシク原陶磁器出土地	宜野座村字漢那		⑨⑩
52	ウエヌアタイ貝塚	〃　字　〃		〃　〃
53	明紀原第一遺跡	〃　字　〃		〃　〃
54	カータ原遺跡A	〃　字惣慶		〃　〃
55	カータ原遺跡B	〃　字　〃		〃　〃
56	カータ原遺跡C	〃　字　〃		〃　〃
57	シドゥフチ森	〃　字　〃		〃　〃
58	宜野座又古島	〃　字宜野座		〃　〃
59	シィシィロー洞穴貝塚	〃　字宜野座		〃　〃
60	松田鉄滓出土地	〃　字松田		〃　〃
61	漢那遺跡	〃　字漢那		〃　〃
62	明紀原第二遺跡	〃　字　〃		〃　〃

63	カラクリブリ一号洞穴遺跡	〃　字漢那		⑨⑩
64	カラクリブリ二号洞穴遺跡	〃　字〃		〃〃
65	シドウフチ森南側のガマ遺跡岩陰遺物	〃　字惣慶		〃〃
66	宜野座の村ガマ遺跡岩陰遺物出土地点	〃　字宜野座		〃〃
67	村ヌメーガー遺跡	〃　字松田		〃〃
68	金武鐘乳洞遺跡	金武町字金武		①
69	屋嘉村金段治跡	〃　字屋嘉		〃
70	熱田貝塚	〃　字安富祖		⑨⑨

中部地区

71	与那部原貝塚A	読谷村字渡具知		⑪
72	善浜原貝塚	読谷村字楚辺		〃
73	波平洞穴遺跡	〃　字波平		〃
74	川平原貝塚	〃　字瀬名波		〃
75	青磁片の散布Ⓐ	〃　字都屋		⑱
76	青磁片の散布Ⓑ	〃　字渡具地		〃
77	グスクヌウチ	〃　字長浜		〃
78	伊波後原遺跡	石川市字伊波		①
79	美原遺跡	〃　字美原		〃
80	田場遺跡A	具志川市字田場		⑮
81	田場遺跡B	〃　字〃		〃
82	長佐久原貝塚	〃　字具志川		〃
83	伊計神山遺跡	与那城村字伊計		⑰
84	内間部落内遺跡	勝連町字内間		①
85	仲宗根貝塚	沖縄市仲宗根		㉒
86	胡屋御願遺跡	〃　字胡屋		〃
87	竹下遺跡	〃　字池武当		〃
88	知花遺跡群	〃　字知花		〃
89	与儀遺跡	〃　字与儀		〃
90	比屋根遺跡	〃　字比屋根		〃
91	満喜世遺跡	〃　字高原		〃
92	大里エーシマ遺跡	〃　字大里		〃
93	津嘉山森遺跡	〃　字古堅		〃
94	センター公園内遺物散布地	〃　字仲宗根		〃 〃
95	天之岩戸洞穴遺跡	〃　字八重島		〃
96	普天間宮洞穴遺跡	宜野湾市字普天間		〃
97	新町洞穴遺跡	〃　字真栄原		〃
98	喜舎場御嶽遺跡	北中城村字喜舎場		①

99	甲斐川原遺跡	北中城村字喜舎場		①
100	仲順御嶽遺跡	〃 字仲順		〃
101	上津覇遺跡	中城村字津覇		〃
102	伊集散布地	〃 字伊集		〃
103	翁長散布地 No. 1	西原町字翁長		㉘
104	内間散布地 No. 1	〃 字内間		〃
105	内間散布地 No. 2	〃 字 〃		〃
106	内間御殿	〃 字嘉手苅		〃
107	小橋川貝塚	〃 字小橋川		〃
108	津花波散布地	〃 字津花波		〃
109	津花波古島	〃 字 〃		〃
110	呉屋散布地	〃 字呉屋		〃
111	上呉屋散布地	〃 字 〃		〃
112	翁長喜納又御殿散布地	〃 字 〃		〃
113	小波津散布地 No. 1	〃 字小波津		〃
114	小波津散布地 No. 2	〃 字 〃		〃
115	佐久間原散布地	〃 字安里		〃
116	桃原古島	〃 字桃原		〃
117	安室散布地 No. 1	〃 字安室		〃
118	安室散布地 No. 2	〃 字 〃		〃
119	我謝散布地	〃 字我謝		〃
120	与那城散布地	〃 字与那城		〃
121	与那城貝塚	〃 字 〃		〃
122	グスクの頂	〃 字津花波		〃
123	掛保久貝塚	〃 字掛保久		〃
124	嘉手苅散布地	〃 字嘉手苅		〃
125	牧港第二貝塚	浦添市字牧港		㉙
126	浦添原遺跡	〃 字仲間		〃
127	嘉門貝塚	浦添市字城間		〃
128	第二親富祖遺跡	〃 字屋富祖		〃
129	ようどれ北方散布地	〃 字当山		〃
130	真久原遺跡	〃 字伊祖		〃
131	拝山西方散布地	〃 字西原		〃
132	グシクジョー	〃 字勢理客		〃
133	浦添城跡東方散布地	〃 字前田		〃
134	宮城ノロ殿一帯	〃 字宮城		〃
135	城間洞穴遺跡群	〃 字城間		〃

南　部　地　区

136	首里西森遺物	那覇市字儀保4丁目		㉛
137	石田遺跡	〃 字繁多川		〃

138	崎山御嶽遺跡	〃 崎山町1丁目	
139	謝名原遺跡A	〃 字謝名上間	
140	謝名原遺跡B	〃 字謝名	
141	魚下原遺跡	〃 字繁多川	
142	玉陵南側洞穴遺跡	〃 字金城町1丁目	
143	鳥掘古瓦窯跡	〃 字鳥掘町5丁目14番地	
144	シーマ御嶽遺跡	〃 字真地謝名	
145	カニマン御嶽遺物	〃 字小禄	
146	トゥムイ古墓遺跡	〃 字	
147	石田古墓遺跡	〃 繁多川	
148	壺川貝塚	〃 字壺川	
149	兼城殿遺跡	南風原町字兼城	
150	前本之殿遺跡	〃 字宮平	
151	宮平之殿遺跡	〃 字宮平	
152	カニマン御嶽遺跡	東風平町東風平	
153	真境名又殿遺跡	大里村字真境名	
154	稲福中森御嶽遺跡	〃 字稲福	
155	久手堅当間殿遺跡	知念村字久手堅	
156	知名遺跡	〃 字知名	
157	御殿庭遺跡	〃 字久高	
158	カンチャ遺跡	〃 字上志喜屋	
159	山里遺跡	〃 字山里	
160	垣花遺跡	玉城村垣花	
161	垣花川原貝塚	〃 〃	
162	垣花製鉄遺跡	〃 〃	
163	蔵家敷遺跡	〃 〃	
164	糸数部落内遺跡	〃 字糸数	
165	屋嘉部殿遺跡	〃 〃	
166	船越A遺跡	〃 字船越	
167	船越部落内遺跡	〃 〃	
168	フルティラ遺跡	〃	
169	与座又殿遺跡	具志頭村字与座	
170	マーガヌ殿遺跡	〃 字玻名城	
171	玻名城古島遺跡	〃 〃	
172	仲間渠遺跡	〃 字	
173	ユッタジョウ	〃	
174	赤頭原遺跡	〃	
175	新城A遺跡	〃 字新城	
176	新城B遺跡	〃 〃	
177	大道遺跡	〃 字大道	
178	ガラビ濠	〃 字具志頭	
179	武富古島遺跡	糸満市字武富古島原	

180	座波遺跡	糸満市字座波		㊲
181	潮平遺跡	〃 字潮平潮平原		〃
182	十角毛遺跡	〃 字潮平東原		〃
183	座波古島遺跡	〃 字座波古島原		〃
184	大里古島遺跡	〃 字大里古島原		〃
185	与座前原遺跡	〃 字与座前原		〃
186	与座祭祀遺跡	〃 字与座		〃
187	タカザキヤマ遺跡	〃 字糸満		〃
188	照屋西原遺跡	〃 字照屋		〃
189	国吉坂石器片散布地	〃 字国吉		〃
190	国吉遺跡	〃 字国吉安里門原		〃
191	シマタイヌ殿遺跡	〃 字真栄里		〃
192	名城遺跡	〃 字名城		〃
193	シリーヌ殿遺跡	〃 字喜屋武		〃
194	並里又殿遺跡	〃 字喜屋武並里原		〃
195	東辺名古島遺跡	〃 字東辺原東東原		〃
196	糸洲又殿遺跡	〃 字糸洲		〃
197	伊原遺跡	〃 字伊原		〃
198	大度遺跡	〃 字大度		〃
199	摩文仁遺跡	〃 字摩文仁		〃
200	仲間遺跡	〃 字真壁		〃
201	宇江城古島遺跡	〃 字宇江城		〃
202	新垣遺跡	〃 字新垣		〃
203	東上原遺跡	渡嘉敷村		①
204	城島	〃		〃
205	阿波連後嶽遺跡	〃		〃
206	阿嘉貝塚	座間味村字阿嘉		〃
207	座間味貝塚	〃 字座間味		〃
208	里遺跡	渡名喜村		〃
209	下地原洞穴遺跡	具志川村字具志川		〃
210	ヤジヤーガマ洞穴遺跡	〃 字北原		〃
211	島尻古島遺跡	仲里村字島尻		〃

〈参　考　文　献〉

――県・市町村教育委員会――

① 沖縄県教育委員会「沖縄県の遺跡分布」『沖縄県文化財調査報告書第10集』1977年３月。

② 渡喜仁浜原貝塚調査団『渡喜仁浜原貝塚』今帰仁村教育委員会　1977年３月

③ 今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡―国指定史跡保存管理計画書』1979年３月

④ 〃　「史跡今帰仁城跡―第一次調査概報―」『今帰仁村文化財調査報告書第５集』1981年３月

⑤ 〃　「史跡今帰仁城跡―第二次調査報告―」『今帰仁村文化財調査報告第６集』1982年３月

⑥ 文化庁文化財保護部『全国遺跡地図―沖縄県―』1979年11月

⑦ 名護市教育委員会『名護市の遺跡(1)分布調査中間報告』1981年３月

⑧ 〃　『　〃　(2)分布調査報告書』1982年３月

⑨ 宜野座村教育委員会『宜野座村乃文化財（Ⅰ）』1981年３月

⑩ 〃　『　〃　（Ⅱ）』1982年３月

⑪ 読谷村教育委員会『読谷村の埋蔵文化財―遺跡・分布調査報告書』1979年3月

⑫ 〃　『座喜味城跡遺構調査報告書』1975年３月

⑬ 〃　『座喜味城跡第３・４次調査』1978年３月

⑭ 〃　『　〃　第５・６次調査』1980年３月

⑮ 具志川市教育委員『具志川市遺跡分布調査概報』1978年３月

⑯ 多和田真淳・高宮廣衛・新田重清・玉城盛勝「勝連城跡第一次発掘調査報告書」『琉球文化財調査報告書』琉球政府、1965年６月

⑰ 高宮廣衛・新田重清・嵩元政秀・玉城盛勝「勝連城跡第二次発掘調査報告書」『琉球文化財調査報告書』琉球政府　1966年11月

⑱ 勝連町教育委員会『国指定史跡保存管理計画書勝連城跡』（昭和51年策定）1977年３月

⑲ 〃　「写真集勝連城跡の発掘調査概報」『勝連町の文化財第４集』1982年３月

⑳ 沖縄県教育委員会「津堅島地割調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書第６集』1977年３月

㉑ 沖縄総合事務局『文化財実態調査報告書』1973年３月

㉒ 沖縄市教育委員会『沖縄市の埋蔵文化財―遺跡分布調査報告書』1982年３月

㉓ 沖縄県教育委員会「知花遺跡群」『沖縄県文化財調査報告書第16集』1978年３月

㉔ 沖縄県教育委員会「仲宗根貝塚」『沖縄県文化財調査報告書第33集』1980年３月

㉕ 沖縄県教育委員会「沖縄自動車道埋蔵文化財調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書第31集』1980年３月
㉖ 嵩元政秀「ヒニ城の調査報告」『琉球文化財調査報告書』琉球政府 1966年11月
㉗ 西原町教育委員会『西原町の遺跡分布』1981年３月
㉘ 浦添市教育委員会「うらそえの文化財―遺跡分布調査報告書」『浦添市文化財調査報告書第１集』1980年３月
㉙ 浦添市教育委員会『今姿を見せる古琉球の浦添城跡』1983年１月
㉚ 那覇市教育委員会『那覇市の遺跡』1982年３月
㉛ 東風平町教育委員会『八重瀬グスク調査略報』1979年３月
㉜ 佐敷村教育委員会『佐敷グスク』1980年３月
㉝ 知念村教育委員会『知念村の文化財』1981年４月
㉞ 玉城村教育委員会『玉城村の遺跡―第一次分布調査概報―』1979年３月
㉟ 〃 『糸数城跡』（国指定史跡保存管理計画報告書）1977年３月
㊱ 糸満市教育委員会「糸満市の遺跡」『糸満市文化財調査報告書第一集』1981年３月
㊲ 渡名喜村教育委員会『渡名喜村の遺跡（Ⅰ）』1979年３月
㊳ 中城村教育委員会『中城城跡』1982年３月
㊴ 琉球文化財保護委員会『文化財要覧』1956年～1962年版

――市・町・村史――

㊵ 羽地村誌編集委員会『羽地村誌』羽地村役場　1962年７月
㊶ 今帰仁村史編纂委員会『今帰仁村史』今帰仁村役場　1975年７月
㊷ 玉城定喜著『久志村誌』久志村役場　1967年10月
㊸ 仲松弥秀編『恩納村誌』恩納村役場　1980年３月
㊹ 『残波の里（宇座誌）』宇座区公民館　1974年
㊺ 具志川市誌編集委員会『具志川市誌』具志川市　1970年
㊻ 安里永太郎編『北中城村史』北中城村　1970年　月
㊼ 豊見城村史編纂委員会『豊見城村史』豊見城村役場　1964年12月
㊽ 南風原村史編集委員会『南風原村史』南風原町役場　1971年９月
㊾ 知念善栄編集『東風平村史』東風平村役場　1976年１月
㊿ 大里村史編集委員会『大里村史―通史編―』大里村役場　1982年３月
51 〃 『　〃　―資料編―』　〃　〃
52 金城繁正編『玉城村史』玉城村役場　1977年５月
53 具志頭村史発刊委員会『具志頭村史』具志頭村役場　1961年６月
54 生活誌編纂委員会『高嶺間切与座村誌―与座泉水―』南部農林普及所 1982年

㊺ 具志川村史編集委員会『久米島具志川村史』具志川村役場　1976年４月
㊻ 仲里村誌編集委員会『仲里村誌』仲里村役場　1975年３月

――風土記・古文献・論文・その他――

㊼ 沖縄風土記刊行会編『那覇の今昔』沖縄図書教材　1969年
㊽ 『沖縄風土記―糸満町編―』1967年11月
㊾ 東恩納寛惇『南島風土記』沖縄文化協会　1950年
㊿ 鳥羽正雄「沖縄の城郭」『日本城郭史の再検討』名著出版　1980年10月(再版)
(61) 比嘉春潮『沖縄の歴史』沖縄タイムス社　1965年11月
(62) 伊藤忠太・鎌倉芳太郎『南海古陶瓦』宝雲舎　1937年
(63) 国頭郡教育会『沖縄県国頭郡誌』沖縄出版会　1919年
(64) 比嘉　徳著『中頭郡誌』中頭郡教育部会　1913年
(65) 島尻郡教育部会『島尻郡誌』　1937年
(66) 外間守善・西郷信綱『おもろさうし』岩波書店　1972年12月
(67) 『琉球国由来記』1713年
(68) 安谷屋栄「久米島グシク概観」『沖縄アルマナック』No.２　社会経済研究所出版部1980年
(69) 安里　進・池宮正治・嵩元政秀・知念　勇・比嘉政夫「沖縄史の画期〝グシク時代〟をどうみるか」『沖縄アルマナック』No.２　社会経済研究所出版部 1980年
(70) 伊波普猷「南山の朝鮮亡命」『伊波普猷全集』第七巻　1930年６月
(71) 稲村賢敷『沖縄の古代部落マキョの研究』至言社　1977年７月（再版）
(72) 大川　清「琉球古瓦調査概報」『沖縄文化財調査報告書1962年度版』琉球文化財保護委員会
(73) 沖縄大学学生文化協会『郷土』第２号　1965年
(74) 〃　『〃』第15号　1976年
(75) 〃　『〃』第17号　1979年
(76) 〃　『〃』第19号　1981年
(77) 新城徳祐『沖縄の城跡』　1982年
(78) 高宮廣衛「沖縄」『日本の考古学―古墳時代(上)―』河出書房　1966年
(79) 嵩元政秀「〝グシク〟についての議論」『琉大史学』創刊号　1969年
(80) 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布とその編年の概年」『文化財要覧―1956年度版―』琉球文化財保護委員会
(81) 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布とその編年の概念」『文化財要覧―1960年度版―』琉球文化財保護委員会
(82) 当真嗣一「沖縄のグシク」『考古資料の見方〈遺跡編〉』柏書房1979年

㊸ 友寄英一郎・嵩元政秀「フェンサ城貝塚調査概報」『琉大法文学部紀要　社会篇』13号　1969年３月
㊹ 名嘉正八郎・藤本英夫編『日本城郭大系―北海道・沖縄編―』新人物往来社　1980年５月
㊺ 名嘉真宜勝「読谷村のグスクについて」『読谷村立歴史民俗資料館々報』創刊号　1976年
㊻ 仲松弥秀「グシク考」『沖縄文化』No.５　沖縄文化協会　1961年
㊼ 仲松弥秀『神と村』伝統と現代社　1975年４月（再版）
㊽ 仲松弥秀『古層の村』沖縄タイムス社　1977年
㊾ 中村昌尚「久米島のグシクについて」『沖縄久米島』沖縄久米島調査委員会編　弘文堂　1982年
㊿ 又吉真三「沖縄の築城技術」『沖縄アルマナック』No.２　経済研究所出版部　1980年
(91) 村武精一「沖縄村落社会の祭祀的世界―沖縄本島南部・真栄里の調査から」名著出版『歴史手帖（特集・沖縄の歴史とグスク）』９巻４号　1981年
(92) 口碑伝承による
(93) 沖縄県教育委員会『熱田貝塚発掘ニュース』
(94) 田辺　泰著『琉球建築』座右宝刊行会　1937年。

さ く い ん

〈ア〉

アガリグスク(比嘉グスク)……66
安慶名城跡(大川グスク)……56
安座真グスク……115
安谷屋グスク……74
阿波根グスク……130
アマグスク 伊是名……24
〃 名護……35
〃 沖縄……69
〃 渡名喜……155
アマツスグスク(玉城グスク)……32
アマングスク(辺土グスク)……24
天久グスク……96
アメラグスク……34
新垣グスク 中城……79
〃 糸満……150
新川グスク……67
新城グスク……129
アンナーグスク(ナーグスク)……43
天宮グスク……166

〈イ〉

イーグスク(山城グスク)……143
伊江城跡(城山)……24
硫黄グスク……97
池グスク(北谷グスク)(大川グスク)…72
伊計グスク……60
イシグスク 大宜味……27
〃 西原……80
石田グスク……93
石原グスク 豊見城……101
〃 (伊原グスク)糸満……146
伊敷グスク……139
伊敷索城跡(チナハグスク)……158
伊是名城跡……22
伊祖城跡……85
イチグスク……41
イットカグスク……51
糸数城跡……123
糸洲グスク……144
稲福遺跡(山グスク)……109
キングナーワンダー遺跡……113
伊波城跡(美里グスク)……54
伊原グスク(石原グスク)……146
イリグスク(浜グスク)……65
インジングスク……69

〈ウ〉

ウイグスク(根謝銘グスク)……25
上グスク(仲尾次グスク)……36
〃 (平安名グスク)……62
〃 (佐敷グスク)……111
〃 (具志頭グスク)……128
上座グスク……133
上里グスク(久志グスク)……39
〃 糸満……143
宇江城グスク 〃……150
宇江城城跡(仲里グスク)久米島……160
宇座グスク……47
ウチグスク(玉城グスク)今帰仁……27
〃 (瀬底グスク)……32
〃 名護……35
〃 (仲宗根グスク)沖縄……69
〃 (嘉数グスク)……73
内間グスク……86
宇地原グスク)(照屋グスク)……135
ウチミグスク(内嶺グスク)……102
ウフグスク 読谷……52
〃 知念……116
大グスク(源河グスク)……35
大城グスク 大里……108
〃 玉城……126
〃 (ミーグスク)北中城……75
大城森グスク(ニヌグスク)……131
宇根グスク(登武那覇城跡)……162
ウニシグスク……163
浦添グスク……83

〈エ〉

江洲グスク(土グスク)……58

〈オ〉

大川グスク(安慶名城跡)……56
〃 (北谷グスク)……70
大田グスク(恩納グスク)……40
奥間グスク(見里森グスク)国頭……25
〃 糸満……134
大里グスク(島添大里グスク)……108
オドサトグスク……149
御物城跡(春見グスク)……95
親グスク……36
親川グスク(羽地グスク)……37
親富祖グスク……86
小禄グスク……97
恩納グスク(大田グスク)……40

〈カ〉

嘉数グスク（ウチグスク）宜野湾……73
賀数グスク糸満……130
垣花城跡……120
カクレグスク（瀬名波グスク）……47
我謝遺跡（ヨナグスク）……81
ガジャグスク……42
カタハラグスク……142
勝連城跡……63
嘉手納グスク……53
カナグスク……47
兼城グスク……134
我如古グスク……72
嘉陽上グスク……39
ガーラグスク……149
漢那グスク……39
カンチャーグスク（古間グスク）……116

〈キ〉

喜如嘉グスク……26
喜屋武グスク……59
喜屋武グスク（具志川城跡）糸満……141
喜屋武古グスク……141
喜友名グスク……72
金武グスク……40

〈ク〉

クーグスク……59
久志グスク（上里グスク）……39
クイングワグスク……160
具志グスク……96
具志川グスク 具志川……59
〃 （喜屋武グスク）糸満……141
〃 久米島……157
具志頭グスク……128
具志頭上グスク……126
グスク山……153
城山（伊江城跡）……24
久根グスク……162
国吉グスク……136
国直グスク……54
クボウグスク……66
クマイグスク（トマイ）（トグチ）……51
クンダグスク……93

〈ケ〉

源河グスク（大グスク）……34
兼ヶ段グスク……57

〈コ〉

小グスク……166
臭グスク……87
幸地グスク……81
古宇利グスク（今帰仁グスク）……31
越来グスク……68
黄金森グスク……72
米須グスク……147

〈サ〉

佐慶グスク……144
座喜味城跡（読谷山グスク）……48
サキハラグスク……98
先中グスク……136
佐敷グスク……111
里遺跡……156

〈シ〉

シイナグスク……30
潮平グスク……131
志喜屋グスク……116
ジリグスク……106
シルグスク……153
陣グスク 本部……33
ジングスク 浦添……87

〈ス〉

塩原城跡……164
スンジャグスク……154

〈セ〉

瀬長グスク……99
瀬名波グスク……47
瀬底グスク……32

〈ソ〉

寒水グスク……119

〈タ〉

平良グスク……100
高嶺グスク（南山城跡）……131
タカヤマグスク……50
沢岻グスク……86
武富グスク……130
多々名グスク……127
田名城跡……21
棚原グスク……80
玉城グスク（ウチグスク）今帰仁……27
〃 （アマッズスグスク）……32
ニ又グスク（大城森グスク）……131
ターラグスク……31

〈チ〉

津喜武多グスク(小波蔵グスク)……81
チチャマグスク……140
知名グスク(伊敷素グスク)……113
チナハグスク……158
知念城跡……118
知花グスク……67
北谷グスク(大川グスク)(池グスク)…70
チングスク……152

〈ツ〉

東辺名グスク(ミーガーグスク)……143
土グスク(江洲グスク)……58
津波グスク……26

〈テ〉

台グスク……79
デーグスク……37
テミィグスク……119
ティラグスク(照屋グスク)……135
ティミグラグスク……106
照屋グスク……135
天願グスク……55
天妃グスク……97

〈ト〉

当間グスク……140
渡具知グスク(トマイグスク)……51
渡橋名グスク……101
トマイグスク(渡具知グスク)……51
泊グスク……60
豊見城グスク……98
富盛グスク本部……34
〃 (八重瀬グスク)東風平…103
トーヤマグスク……48
登武那覇城跡(宇根グスク)……162

〈ナ〉

ナーグスク(アンナーグスク)……43
仲栄真グスク……121
中城城跡……77
仲里グスク(宇江城城跡)……160
仲宗根グスク(ウチグスク)……69
仲間グスク南風原……102
〃 糸満……152
長嶺グスク……99
今帰仁城跡(北山城跡)今帰仁……27
グスク(古宇利グスク)……31
〃 与那城……62
名城グスク(フェンサグスク)……137
波平グスク……145
仲尾次上グスク(上グスク)……36
名護グスク(ナングスク)……38
南山城跡(タカミネグスク)(島尻大里グスク)131

〈ネ〉

根石グスク……124
根謝銘グスク(ウィグスク)……25

〈ハ〉

ハジングスク(与座グスク)……133
ハナグスク……31
羽地グスク(親川グスク)……37
浜グスク(イリグスク)……65

〈ヒ〉

火打嶺(喜屋武グスク)……59
比嘉グスク(アガリグスク)……66
備瀬グスク……32
ヒニグスク……74
保栄茂グスク……100

〈フ〉

フェンサグスク(名城グスク)……137
フニグスク……63
ブリ原グスク……151
船越グスク……125
古間グスク(カンチャーグスク)……116

〈ヘ〉

平安座西グスク(西グスク)……61
平安座東グスク……61
平安名上グスク……62
辺土グスク(アマングスク)……24

〈マ〉

真栄里グスク(先中グスク)……136
真栄平グスク……151
真壁グスク……149
マカイグスク……159
真喜屋グスク……36
マーシリグスク……76
マテージグスク……48
摩文仁グスク……149

〈ミ〉

ミーグスク(大城グスク)……75
三重グスク(新グスク)那覇……93
〃 大里……109
ミーガーグスク(東辺名グスク)……143
美里グスク(伊波グスク)……54
見里森グスク(奥間グスク)……25
ミドリグスク……129

ミームングスク……31
ミンチャブナーグスク……166
ミントングスク……121

〈メ〉

〃　座間味……153
前田グスク……52
メーダグスク……38

〈モ〉

本部具志川森グスク……33
看見グスク(御物グスク)……95

〈ヤ〉

八重瀬グスク(富盛グスク)……103
八重川グスク……167
屋我グスク……34
ヤクミーグスク……51
屋比久グスク……112
山川チヂグスク……33
山グスク(稲福遺跡)……109
山城グスク(イーグスク)……143
山田グスク……41
ヤヘーグスク……22
屋良グスク……53
屋良座森城跡……94

〈ユ〉

ユダマグスク……102

〈ヨ〉

与座グスク(ハジングスク)……133
与座東グスク(上座グスク)……133
ヨナグスク(我謝遺跡)……81
世名城グスク……105
与那嶺グスク……165
読谷山グスク……48

H24 3月12日
大城 聡

沖縄県立埋蔵文化財センター
H 24.3.12
210,0254

沖縄県文化財調査報告書第53集

ぐすく

グスク分布調査報告（Ⅰ）
——沖縄本島及び周辺離島——

印刷　昭和58年3月28日
発行　昭和58年3月31日

発行　**沖縄県教育委員会**
編集　**沖縄県教育庁文化課**

〒900　那覇市旭町1番地（沖配ビル6F）
TEL（0988）66－2731～3

印刷　**松本タイプ印刷所**
TEL（0988）62－8125・8126

The Archaeological Survey of *GUSUKU* (feudal castle) in Okinawa Islands

GUSUKU are the vestiges of ancient civilization found on the Island of Okinawa as well as its surrounding islands. A majority of these ruins are surrounded by stone-made-walls which are located on slightly elevated lands.

Inside the *GUSUKU*, discovery of ancient remains included some pottery, and remains of food such as clams, rice, wheat, and so on. Objects such as luxury goods, steal goods including armory, weapons, and tools were brought forth from foreign imports. Considerably large amounts of ammunition were also found greatly preserved.

Many holes dug directly into the ground were also found in the *GUSUKU*. There has been proven evidence that these holes were utilized as dwelling places and stage areas. Some of the large scale *GUSUKU* ruins are made by layers of cut stone and its castle gates are supported by stone areas.

Brick construction found within are known to be the quarters of the rulers.

According to texts of archaeological references this is called the *GUSUKU* Period. In the prehistory, which came immediately before the *GUSUKU* Period, a great change occured concerning Okinawa. In different regions of Okinawa, culture structured into a society of integrated ladderings. A productive economy became more and more well defined as did the general method of profits.

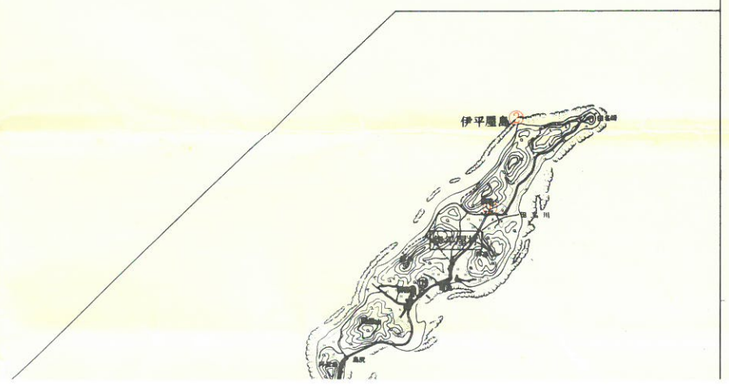
The rulers, in order to insure adequate protection for their citadels, had the *GUSUKU* built on slightly elevated lands and defensive armories were built into the stone walls.

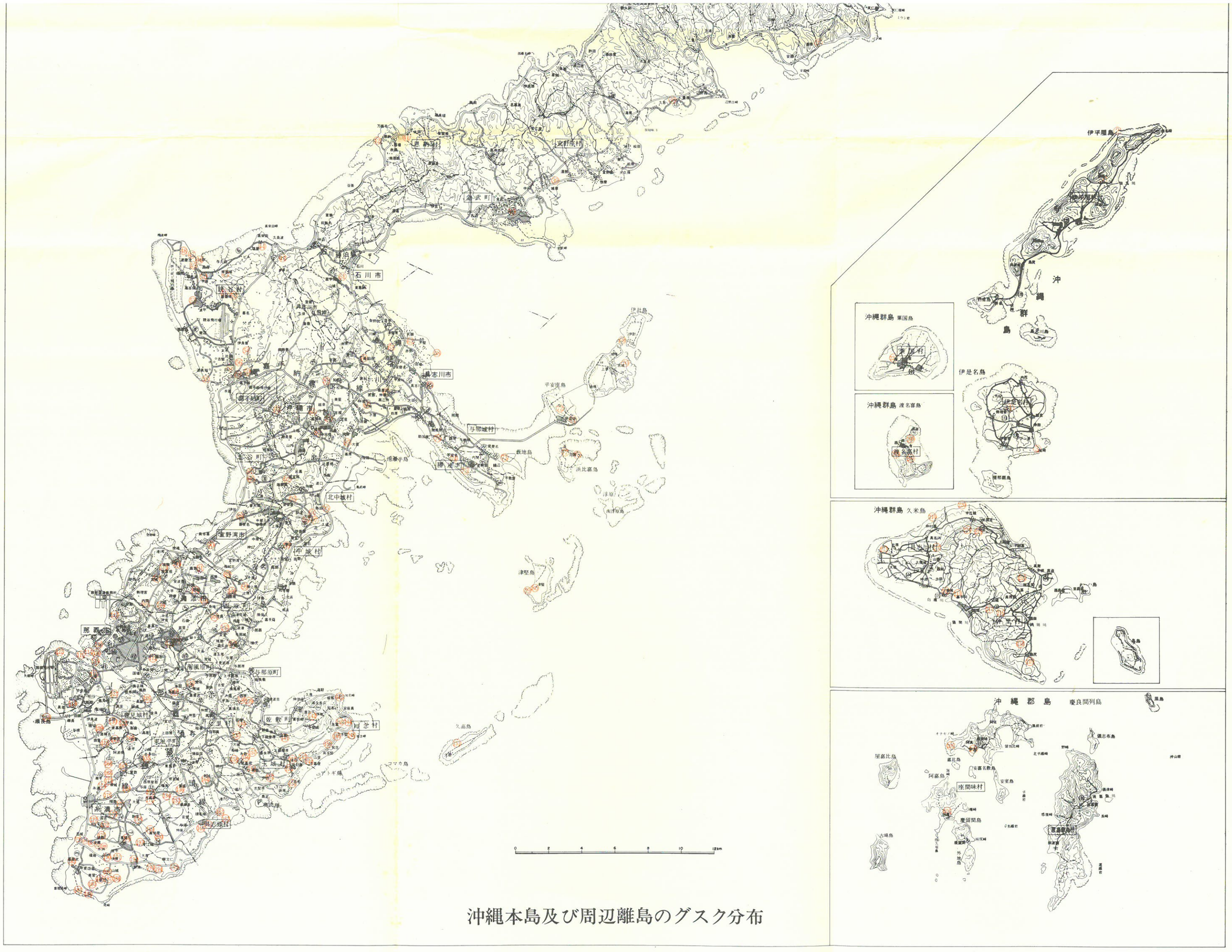
Through this, stronger and stronger rulers were born and Okinawa became unified. The result of this unification was the Shuri Castle of Okinawa. During this peiod, large trade had occured with China and mainland Japan.

We hope many people read this report and find its contents useful for studying and/or sightseeing.

沖縄本島及び周辺離島のグスク一覧表

〈北部〉	
地図番号	グスク名
1	田名城跡
2	ヤヘーグスク
3	伊是名城跡
4	アマグスク
5	伊江城跡
6	アマングスク
7	奥間グスク
8	根謝銘グスク
9	喜如嘉グスク
10	津波グスク
11	石グスク
12	内グスク
13	今帰仁城跡
14	シイナグスク
15	ハナグスク
16	ターラグスク
17	ミームングスク
18	古宇利グスク
19	瀬底グスク
20	備瀬グスク
21	本部具志川森グスク
22	山川チヂグスク
23	陣グスク
24	アメラグスク
25	富盛グスク
26	屋我グスク
27	アマグスク
28	ウチグスク
29	大グスク
30	上グスク
31	真喜屋グスク
32	親グスク
33	親川グスク
34	デーグスク
35	前田グスク
36	名護グスク
37	上里グスク
38	嘉陽上グスク
39	漢那グスク
40	金武グスク
41	恩納グスク
42	イチグスク
43	山田グスク
44	ガヂャグスク
45	アンナーグスク
	〈中部〉
46	カナグスク
47	瀬名波グスク
48	宇座グスク
49	トウヤマグスク
50	マテージグスク
51	座喜味城跡
52	タカヤマグスク
53	イットカグスク
54	ヤクミーグスク
55	トマイグスク
56	ウフグスク
57	メーダグスク
58	嘉手納グスク
59	屋良グスク
60	国直グスク
61	伊波城跡
62	天願グスク
63	安慶名城跡
64	兼箇段グスク
65	具志川グスク
66	江洲グスク
67	喜屋武グスク
68	クーグスク
69	伊計グスク
70	治グスク
71	平安座東グスク
72	平安座西グスク
73	ナチジングスク
74	平安名上グスク
75	フニグスク
76	勝連城跡
77	浜グスク
78	比嘉グスク
79	クボウグスク
80	新川グスク
81	知花グスク
82	越来グスク
83	仲宗根グスク
84	インジングスク
85	アマグスク
86	北谷グスク
87	イチグスク
88	喜友名グスク
89	我如古グスク
90	黄金森グスク
91	嘉数グスク
92	ヒニグスク
93	安谷屋グスク
94	大城グスク
95	マーシリグスク
96	中城城跡
97	台グスク
98	新垣グスク
99	イシグスク
100	棚原グスク
101	幸地グスク
102	津喜武多グスク
103	我謝遺跡
104	浦添城跡
105	伊祖城跡
106	親富祖グスク
107	内間グスク
108	沢岻グスク
109	ジングスク
110	皇グスク
	〈南部〉
111	首里城跡
112	クンダグスク
113	石田グスク
114	三重グスク
115	屋良座森グスク
116	御物グスク
117	天久グスク
118	具志グスク
119	小禄グスク
120	硫黄グスク
121	天妃グスク
122	サキハラグスク
123	豊見城グスク
124	瀬長グスク
125	長嶺グスク
126	平良グスク
127	保栄茂グスク
128	石原グスク
129	渡橋名グスク
130	ユダマグスク
131	ウチミグスク
132	仲間グスク
133	八重瀬グスク
134	世名城グスク
135	テミグラグスク
136	ジリグスク
137	大城グスク
138	大里城跡
139	ミーグスク
140	稲福遺跡
141	佐敷グスク
142	屋比久グスク
143	知名グスク
144	ヰナグワンダー遺跡
145	安座真グスク
146	寒水グスク
147	古間グスク
148	ウフグスク
149	志喜屋グスク
150	知念城跡
151	テミィグスク
152	垣花城跡
153	ミントン城跡
154	仲栄真グスク
155	玉城城跡
156	糸数城跡
157	根石グスク
158	船越グスク
159	大城グスク
160	上グスク
161	多々名グスク
162	具志頭グスク
163	ミドリグスク
164	新城グスク
165	武富グスク
166	阿波根グスク
167	賀数グスク
168	潮平グスク
169	大城森グスク
170	南山城跡
171	与座グスク
172	上座グスク
173	奥間グスク
174	兼城グスク
175	照屋グスク
176	国吉グスク
177	真栄里グスク
178	フェンサグスク
179	伊敷グスク
180	当間グスク
181	チチャマグスク
182	喜屋武古グスク
183	具志川城跡
184	カタハラグスク
185	東辺名グスク
186	山城グスク
187	上里グスク
188	佐慶グスク
189	糸洲グスク
190	波平グスク
191	石原グスク
192	米須グスク
193	ガーラグスク
194	オドサトグスク
195	摩文仁グスク
196	真壁グスク
197	宇江城グスク
198	新垣グスク
199	真栄平グスク
200	ブリ原グスク
201	仲間グスク
202	チングスク
203	安里グスク
204	メーグスク
205	シルグスク
206	グスク山
207	スンジャグスク
208	アマグスク
209	里遺跡
210	具志川城跡
211	伊敷索城跡
212	マカイグスク
213	クィングワグスク
214	宇江城城跡
215	登武那覇城跡
216	久根グスク
217	ウニシグスク
218	塩原城跡
219	与那嶺グスク
220	天宮グスク
221	ミンチブナーグスク
222	小グスク
223	八重川グスク





沖縄本島及び周辺離島のグスク分布